庄（庄・蔵本）遺跡

－徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書－

徳 島 県 教 育 委 員 会
徳島大学埋蔵文化財調査室
2005年

庄（庄・蔵本）遺跡

－徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書－

徳 島 県 教 育 委 員 会
徳島大学埋蔵文化財調査室
2005年

序　　文

本報告書は、徳島大学蔵本団地の体育館建設に伴い、実施された徳島市庄町所在の庄（庄・蔵本）遺跡の発掘調査報告書であります。

当地点の発掘調査は徳島県教育委員会により昭和57年度、昭和58年度の２カ年にわたって実施されましたが、発掘終了後、諸般の事情により整理作業に着手できない状況が続きました。その後、平成４年度に徳島大学埋蔵文化財調査室が発足し、大学独自で調査研究ができる体制が整いました。このような状況の変化を受け、平成12年度に徳島県教育委員会と徳島大学とで出土品資料整理と報告書刊行に関する合意書が交わされ、両者の共同事業として報告書が刊行されることとなった次第です。

当遺跡は眉山西方を流れる鮎喰川によって形成された沖積低地上に位置しており、縄文時代から近世にいたる、県下屈指の複合遺跡であります。今回の調査では、特に弥生時代前期の遺物が大量に出土しました。また平安時代の流路からは、斎串、人形など貴重な資料が出土しており、当遺跡が弥生時代から古代にかけての阿波の拠点的地域であったことをうかがい知ることができます。

こうした成果をまとめた本報告書が、広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と地域史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査、整理業務にあたって御指導、御協力をいただきました関係各位ならびに関係諸機関にたいし、厚く御礼申し上げるとともに、今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年３月28日

徳島県教育委員会
教育長　松村　通治

序　　文

このたび徳島大学蔵本キャンパスの体育館建設に際して実施された埋蔵文化財発掘調査の報告書が、徳島大学埋蔵文化財調査室と徳島県教育委員会によって共同刊行されることになった。徳島県内の埋蔵文化財調査、考古学研究を主導する両者による共同事業は画期的なできごとである。

今回報告されるのは、医学部体育館建設地点における調査成果である。本調査では弥生時代前期末の多量の遺物が出土した。その数1,000点にもおよぶ初期の弥生式土器が、本キャンパスの地下に眠っていたことは驚嘆に値する。とりわけ炭化米の出土は、水稲農耕文化が県下でもいち早く定着したことを示している。また、平安時代の流路からは、帯金具、墨書土器、斎串、人形など当時の地方官庁の存在をうかがわせる資料が出土した。さらに、同時代の木棺墓から出土した人骨は本学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部神経情報医学部門情報統合医学講座形態情報医学分野（旧医学部解剖学第１講座）に標本として保管・活用されている。これらの報告内容をみると、蔵本キャンパスが、弥生時代から古代にいたる、県下屈指の貴重な遺跡であることと、古来県域の活動の最先端を担う地区であった事実をあらためて実感できる。今後も、学生の教材や市民への普及活動などの資料として、地域貢献に有効活用できる可能性を持つものであると考えられる。

体育館建設地点の本発掘調査がおこなわれたのは、昭和57年から58年にかけてであり、諸般の事情によって報告書刊行迄に20余年の歳月を要した。この実現にご尽力いただいた、発掘調査担当の徳島県教育委員会文化財課（旧文化課）、遺物の保管・展示にあたられた財団法人徳島県埋蔵文化財センター、報告書作成業務を担当した本学施設マネジメント部（旧施設部）ならびに同埋蔵文化財調査室をはじめ、様々な形でこれらの調査および報告書作成に貢献された諸氏に心から御礼申しあげる。

平成17年１月27日

徳島大学長
青野　敏博

例言・凡例

1　本報告書は徳島市庄遺跡の徳島大学構内地区体育館地点（徳島市庄町１丁目78番地の１）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。本報告書は、調査担当の徳島県教育委員会文化財課（旧文化課）と整理担当の徳島大学埋蔵文化財調査室の合意に基づく共同刊行物の第１冊目である。したがって、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが刊行している庄遺跡、徳島大学埋蔵文化財調査室が刊行している庄・蔵本遺跡の発掘調査報告書とは別冊となる。詳しい経緯は本文を参照されたい。

2　本報告書は上記両者の協議のもと、早期の資料公開を目的とするため、つとめて事実報告に徹している。考察編は、後年改めて刊行される予定である。

3　遺跡名について、徳島大学埋蔵文化財調査室発足後は地籍上徳島市庄町および蔵本町にまたがることから「庄・蔵本遺跡」と呼称し、すでに報告書１冊を刊行している。しかし、徳島県教育委員会文化財課（旧文化課）調査当時の「庄遺跡」の名称は広く普及しており、混乱をさける目的で、本書では表題を「庄（庄・蔵本）遺跡」とし、本文中では「庄遺跡」の呼称に統一した。

4　調査の担当者は、昭和57年度が島巡賢二（当時徳島県教育委員会文化課主事、現財団法人徳島県埋蔵文化財センター事業第Ⅱ課長）、秋山浩一（当時徳島県教育委員会文化課文化財調査員、現徳島県教育委員会学校政策課指導主事）、野々村拓也（当時同前、現徳島県立総合教育センター学校支援課指導主事）、昭和58年度が福家清司（当時徳島県教育委員会文化課社会教育主事、現徳島県教育委員会文化財課長）、久保脇美朗（当時徳島県教育委員会文化課文化財調査員、現財団法人徳島県埋蔵文化財センター研究員）、野々村拓也（前掲）である。

5　遺物の整理作業は、徳島県教育委員会文化財課（旧文化課）、財団法人徳島県埋蔵文化財センターならびに徳島大学埋蔵文化財調査室にて実施し、調査担当者のほか定森秀夫（徳島大学総合科学部助教授・同埋蔵文化財調査室長）、北條芳隆（当時徳島大学総合科学部助教授・同埋蔵文化財調査室長、現東海大学文学部助教授）、中村　豊（徳島大学大学開放実践センター助手・同埋蔵文化財調査室調査員）、山本愛子・加登哲子・堺　圭子・板東美幸・平田順子（以上徳島大学施設マネジメント部技術補佐員）がおもに分担し、中原　計（徳島大学総合科学部助手・同埋蔵文化財調査室調査員）、井本尚子・岸本多美子・安山かおり（以上徳島大学施設マネジメント部技術補佐員）、久米淑子・重見美緒（同、当時）がこれを助けた。

6　図面の浄図は山本愛子、加登哲子がおもに担当した。

7　本書の写真撮影は、現場においては調査担当者がおこない、遺物の写真撮影は中村　豊、板東美幸、平田順子がおもに分担した。ほかに炭化米の拡大写真撮影を和佐野喜久生（佐賀大学名誉教授）、鉄製品のＸ線写真と墨書土器・木製品の赤外線写真撮影を魚島純一（徳島県立博物館）、釣針状鉄製品の写真撮影を渡辺　誠（名古屋大学名誉教授）に依頼した。

8　自然科学の分析は以下の通りである。

人骨鑑定－山田正興（徳島大学名誉教授）、動物骨鑑定－富岡直人（岡山理科大学理学部）、貝類鑑定－中尾賢一（徳島県立博物館）、植物種子鑑定－茨木　靖（徳島県立博物館）、放射性炭素年代測定－小田寛貴・池田晃子・中村俊夫（以上名古屋大学年代測定総合研究センター）・山本直人（名古屋大学大学院文学研究科）、炭化米鑑定－和佐野喜久生。なお、石材鑑定は、塩田次男（徳島大

学総合科学部）の助言のもと中村　豊が肉眼観察によっておこなった。

9　墨書土器の判読は福家清司、および同氏の助言のもと中村　豊がおこなった。また、魚島純一の赤外線写真撮影による貢献も大きい。

10　木製品の保存処理は、財団法人元興寺文化財研究所に依頼した。

11　本書の執筆は調査担当者および、東　潮（徳島大学総合科学部）、定森秀夫、北條芳隆の助言のもと茨木　靖、小田寛貴・山本直人・池田晃子・中村俊夫、中尾賢一、中村　豊、福家清司、山田正興、和佐野喜久生、渡辺　誠がおこなった。それぞれの分担は目次に示した通りである。

12　本書の編集は関係者全員の協力のもと、定森秀夫・中村　豊がおこなった。

13　本書で使用するレベル高は海抜を示し、方位は真北を示す。

14　土器実測図の断面は、それぞれ白抜きは縄文土器・弥生土器・土師器を、黒塗りは須恵器・陶磁器を、トーンは瓦器・瓦質土器を示している。

15　赤彩土器は、墨ないしトーンで示している。

16　本書に収録した資料、実測図、記録類、写真のうち、木棺墓201出土人骨は徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部神経情報医学部門情報統合医学講座形態情報医学分野（旧医学部解剖学第１講座）にて、そのほかは財団法人徳島県埋蔵文化財センターで保管している。広く活用されることを望むものである。

17　発掘調査、整理作業、本書の編集に際しては、上記の諸氏のほかにも多数の方々にご協力いただいた。以下に明記しておきたい。

青木秀明、石井伸夫、石尾和仁、石野博信、石村和敬、一山　典、植地岳彦、氏家敏之、梅木謙一、大賀克彦、大北和美、岡山真知子、勝浦康守、河原純之、日下正剛、日下雅義、栗林誠治、近藤玲、斎野裕彦、貞野雅己、柴田昌児、菅原康夫、下田順一、関本秋夫、田川　憲、高島芳弘、瀧山雄一、谷川真基、田畑直彦、辻　佳伸、出原恵三、寺前直人、原多賀子、濵田竜彦、早渕隆人、藤川智之、松井一明、三宅良明、森　清治、山本雅和、湯浅利彦、渡邊昌宏、徳島地方史研究会、徳島文理中学校・高等学校、福岡県教育委員会。

本文目次

第１章　調査・整理にいたる経緯（中村　豊）……1
第１節　既往の調査……1
第２節　整理・報告書刊行にいたる経緯……1
第３節　調査・整理体制……6

第２章　遺跡の立地と環境（中村　豊）……13

第３章　調査の経過（中村　豊）……15

第４章　調査の成果……17
第１節　基本層序（中村　豊）……17
第２節　遺構と遺物……17
1　第３遺構面　弥生時代前期後葉～中期初頭の遺構と遺物（中村　豊）……17
2　第２遺構面　弥生時代中期（Ⅳ期）から中世の遺構と遺物（中村　豊）……25
3　第１遺構面　近世から近代の遺構と遺物（中村　豊）……32
4　包含層出土・時期不明の遺物（中村　豊）……32
5　庄遺跡出土の釣針状鉄製品について（渡辺　誠）……35

第５章　人骨・自然遺物・自然科学的分析……36
第１節　概要（中村　豊）……36
第２節　人骨（山田正興）……36
第３節　哺乳類・爬虫類骨（中村　豊）……36
第４節　庄遺跡徳島大学蔵本団地体育館地点から出土した貝類についてのコメント（中尾賢一）……38
第５節　出土植物遺体について（茨木　靖）……41
第６節　庄遺跡の炭化米粒特性と稲作起源（和佐野喜久生・中村　豊）……44
第７節　加速器質量分析法による徳島市庄遺跡出土炭化物資料の^{14}C 年代測定（小田寛貴・山本直人・池田晃子・中村俊夫）……51

第６章　結語（中村　豊）……54
おわりに（福家清司）……57

挿図目次

第１図　徳島大学蔵本地区における発掘調査地点…… 2
第２図　周辺の遺跡…… 12
第３図　作業風景…… 15
第４図　基本層序…… 18
第５図　確認トレンチ土層断面図…… 19
第６図　第３遺構面遺構配置図（弥生前期後葉～中期前葉）…… 20
第７図　第２遺構面遺構配置図（弥生中期（Ⅳ期）～中世）…… 26
第８図　第１遺構面遺構配置図（近世～明治期）…… 33
第９図　釣針状鉄製品…… 35
第５章　第６節　第１図　庄遺跡の所在地（円印）および周辺地域の地形図…… 44
第５章　第６節　第２図　比較基準遺跡および徳島県４遺跡の炭化米粒の長・幅平均値の分布図…… 47
第５章　第６節　第３図　庄遺跡の粒長の度数分布図…… 47
第５章　第６節　第４図　庄遺跡の炭化米粒の接写写真…… 49
第５章　第７節　第１図　暦年代較正の例…… 52

図版目次

図版１　土坑301・土坑302
図版２　土坑303
図版３　土坑304・土坑305
図版４　土坑306
図版５　土坑307・土坑308
図版６　土坑309
図版７　土坑311・土坑312
図版８　土坑313
図版９　土坑314・土坑315
図版10　土器だまり301・土器だまり302
図版11　土器だまり303
図版12　方形周溝墓201
図版13　竪穴住居201
図版14　竪穴住居202
図版15　竪穴住居203
図版16　掘立柱建物201
図版17　掘立柱建物202・井戸201
図版18　井戸202
図版19　木棺墓201
図版20　東西大溝201・南北溝203・南北溝204
図版21　東西大溝202
図版22　水路201
図版23　土坑201～土坑204
図版24　石敷暗渠平面図（部分）
図版25　東西大溝101ほか土層断面図
図版26　井戸101
図版27　土坑301（１～11）出土土器
図版28　土坑302（12～22）出土土器
図版29　土坑302（23～26）、土坑303（27～32）出土土器
図版30　土坑303（33～42）出土土器
図版31　土坑303（43～50）出土土器
図版32　土坑303（51～62）出土土器
図版33　土坑304（63～76）出土土器
図版34　土坑304（77～81）、土坑305（82）出土土器
図版35　土坑305（83～92）出土土器
図版36　土坑306（93～100）出土土器
図版37　土坑306（101～105）、土坑307（106～108）出土土器
図版38　土坑308（109～114）出土土器
図版39　土坑308（115～119）、土坑309（120～123）出土土器
図版40　土坑310（124～127）出土土器
図版41　土坑310（128～136）出土土器
図版42　土坑310（137～139）、土坑311（140・141）出土土器
図版43　土坑312（142・143）、土坑313（144～147）、土坑314（148・149）出土土器
図版44　土坑315（150～152）、土器だまり301（153～157）出土土器
図版45　土器だまり301（158～161）、土器だまり302（162～168）出土土器
図版46　土器だまり303（169～184）出土土器
図版47　土器だまり303（185～194）出土土器
図版48　土器だまり303（195）、土器だまり304（196～200）出土土器
図版49　土器だまり305（201～206）出土土器
図版50　土器だまり306（207～216）出土土器
図版51　方形周溝墓201（217）、竪穴住居201（218・219）、井戸201（220）、井戸202（221・222）出土土器
図版52　井戸203（223～234）出土土器
図版53　不明遺構201（235・236）、須恵器だまり201（237～244）出土土器
図版54　須恵器だまり201（245・246）出土土器
図版55　水路201土器だまり（247～293）出土土器
図版56　水路201貝層（294～318）出土土器

図版57　水路201上層（319～366）出土土器
図版58　水路201上層（367～402）出土土器
図版59　水路201上層（403～412）出土土器
図版60　水路201下層（413～438）出土土器
図版61　水路201下層（439～472）出土土器
図版62　水路201下層（473～502）出土土器
図版63　水路201下層（503～518・520・521）出土土器・（519）坩堝
図版64　水路201下層（522～548）出土土器
図版65　水路201下層（549～554）出土墨書土器
図版66　水路201下層（555～560）出土墨書土器
図版67　水路201下層（561～564）出土墨書土器・（565～576）製塩土器
図版68　東西大溝201（577～581）、東西大溝202（582～592）出土土器
図版69　東西大溝202（593）出土円筒埴輪・（594～609）出土土器、東西大溝101（610・611）出土土器
図版70　土坑203（617・618）、土坑204（612～616）、木棺墓201（619・620）、包含層（621～639）、確認トレンチ（640）出土土器
図版71　瓦（641・642）
図版72　土製品：土錘（643～677）
図版73　土製品：土錘（678～699）
図版74　土製品：鞴の羽口（700～705）、不明土製品土馬？（706）、不明土製品（707・708）、土鈴（709・710）、土製紡錘車（711～714）
図版75　石器：石鏃（715～731）、石錐（732・733）
図版76　石器：大型直縁刃石器（734）、スクレイパー（735・736）、打製石斧（737）
図版77　石器：打製石斧（738・739）、扁平片刃石斧（740～742）、扁平両刃石斧（743）、小型方柱状片刃石斧（744）
図版78　石器：柱状片刃石斧（745～748）
図版79　石器：両刃石斧（749～753）、不明石器（754）
図版80　石器：石鎌（755）、打製石庖丁（757）、磨製石庖丁（756・758～760）
図版81　石器：磨製石庖丁（761～770）、石製紡錘車（771）
図版82　石器：台石（772～776）
図版83　石器：台石（777）、凹石（778）、敲石（779）
図版84　石器：敲石（780・781）
図版85　石器：敲石（782・783）
図版86　石器：敲石（784・785）、軽石製品（786）、砥石（787・788）
図版87　玉類・滑石製品：臼玉（789～804）、ガラス製小玉（805・806）、ガラス製玉仏具？（807・808）、管玉（809～811）、勾玉（812・813）、勾玉形石製品（814～817）、双孔円盤（818・819）、紡錘車形石製品（820・821）
図版88　金属製品：斜縁鏡の破鏡（822）
図版89　金属製品・骨角器：銙帯巡方（823）、不明青銅製品（824・825）、不明銅銭（826・827）、乾元大宝（828）、青銅製鑿（829）、鰐口？（830）、板状鉄製品（831～833）、不明鉄製品（834）、釘・棒状鉄製品（835～839）、鹿角製品（840・841）
図版90　木製品：斎串（842～851）
図版91　木製品：斎串（852～866）
図版92　木製品：斎串（867～893）
図版93　木製品：斎串（894～900）、人形（901）
図版94　木製品：人形（902～905）、武器形木製品（906・911～914）、鳥形木製品（907～910）、舟形木製品（915）、不明木製品（916）
図版95　木製品：不明木製品（917・918）、杭（919～922）、棒状木製品（923～927）
図版96　木製品：箸・串（928～938）、ヒョウタン製容器片（939・940）、漆椀（941・942）、杓子（943・944）
図版97　木製品：柄杓（945）、横槌（946）、木槌（947）、栓（948）、下駄（949）、丸木弓（950）、扇子（951・952）、横櫛（953～959）
図版98　木製品：円形曲物蓋板（960～970）
図版99　木製品：円形曲物蓋板（971）、円形曲物底板（972～975）
図版100　木製品：円形曲物底板（976・977・979～982）、方形曲物底板（978）、円形曲物側板（983）
図版101　木製品：曲物側板（984～998）
図版102　木製品：部材（999・1000・1004～1007）、板状木製品（1001～1003）

写真図版目次

写真図版１　第３遺構面全景（西より）、第２遺構面全景（西より）
写真図版２　左から水路201・東西大溝202・東西大溝201（西より）、第１遺構面全景（東より）
写真図版３　土坑306、木棺墓201
写真図版４　イ－10区基本土層、土坑301、土坑302
写真図版５　土坑303検出状況、土坑303遺物出土状況
写真図版６　土坑305、土坑306検出状況、土坑306土器出土状況
写真図版７　土坑306、土坑306
写真図版８　土坑308、土坑308完掘状況、土坑308石庖丁・炭化物出土状況
写真図版９　土坑308炭化物出土状況、土坑309、土坑310土器出土状況
写真図版10　土坑311土器出土状況、土坑312、土坑314
写真図版11　土器だまり301、土器だまり302（部分）、土器だまり302石庖丁出土状況
写真図版12　土器だまり302石庖丁出土状況、土器だまり303、土器だまり305

写真図版13　方形周溝墓201、方形周溝墓201供献土器出土状況
写真図版14　竪穴住居201（手前）・同202（奥）、竪穴住居201掘削状況、竪穴住居201完掘状況
写真図版15　竪穴住居201炉・台石、竪穴住居201炉、竪穴住居201土器出土状況
写真図版16　竪穴住居202作業風景、竪穴住居202完掘状況、竪穴住居202炉
写真図版17　竪穴住居203、掘立柱建物201（南より）、掘立柱建物201（西より）
写真図版18　井戸201、井戸202、井戸203
写真図版19　不明遺構201付近、不明遺構201、須恵器だまり201
写真図版20　木棺墓201（北より）、木棺墓201（西より）
写真図版21　木棺墓201供献土器、木棺墓201人骨、木棺墓201人骨取り上げ状況
写真図版22　東西大溝201、東西大溝201
写真図版23　東西大溝101（右）と東西大溝202上面、東西大溝202（東より）、東西大溝202（北西より）
写真図版24　水路201（東より）、水路201土層
写真図版25　水路201（東より）、水路201上層土器だまり、水路201上層土器だまり
写真図版26　水路201上層土器だまり、水路201上層土器だまり、水路201下層獣骨
写真図版27　水路201下層石敷、水路201下層木製品出土状況、水路201下層斎串出土状況
写真図版28　土坑203土器出土状況、土坑204土器出土状況、畝状遺構（手前から）溝107～溝111
写真図版29　東西大溝101（東より）、東西大溝101土層、井戸101
写真図版30　石敷暗渠（部分）、石敷暗渠交差部分
写真図版31　出土遺物１
写真図版32　出土遺物２
写真図版33　出土遺物３
写真図版34　出土遺物４
写真図版35　出土遺物５
写真図版36　出土遺物６
写真図版37　出土遺物７
写真図版38　出土遺物８
写真図版39　出土遺物９
写真図版40　出土遺物10
写真図版41　出土遺物11
写真図版42　出土遺物12
写真図版43　出土遺物13
写真図版44　出土遺物14
写真図版45　出土遺物15
写真図版46　出土遺物16
写真図版47　出土遺物17
写真図版48　出土遺物18
写真図版49　出土遺物19
写真図版50　出土遺物20
写真図版51　出土遺物21
写真図版52　出土遺物22
写真図版53　出土遺物23
写真図版54　出土遺物27
写真図版55　出土遺物25
写真図版56　出土遺物26
写真図版57　出土遺物27
写真図版58　出土遺物28
写真図版59　出土遺物29
写真図版60　出土遺物30
写真図版61　出土遺物31
写真図版62　出土遺物32
写真図版63　出土遺物33
写真図版64　出土遺物34
写真図版65　出土遺物35
写真図版66　出土遺物36
写真図版67　出土遺物37
写真図版68　出土遺物38

表　目　次

第５章　第３節　第１表　哺乳類・爬虫類骨観察表 …… 37
第５章　第５節　第１表　大型植物遺体種名表 …… 41
第５章　第６節　第１表　比較基準遺跡及び庄遺跡の炭化米粒特性表 …… 46
第５章　第６節　第２表　比較基準遺跡および庄遺跡の炭化米粒の粒型分布表 …… 48
第５章　第７節　第１表　庄遺跡から出土した炭化物資料の^{14}C 年代 …… 52
遺物観察表　土器・須恵器・瓦器・磁器・埴輪 …… 59
遺物観察表　瓦・土製品 …… 66
遺物観察表　石器 …… 67
遺物観察表　玉類・石製品 …… 68
遺物観察表　金属製品・骨角器 …… 68
遺物観察表　木製品 …… 69

本　　文

第１章　調査・整理にいたる経緯

第１節　既往の調査

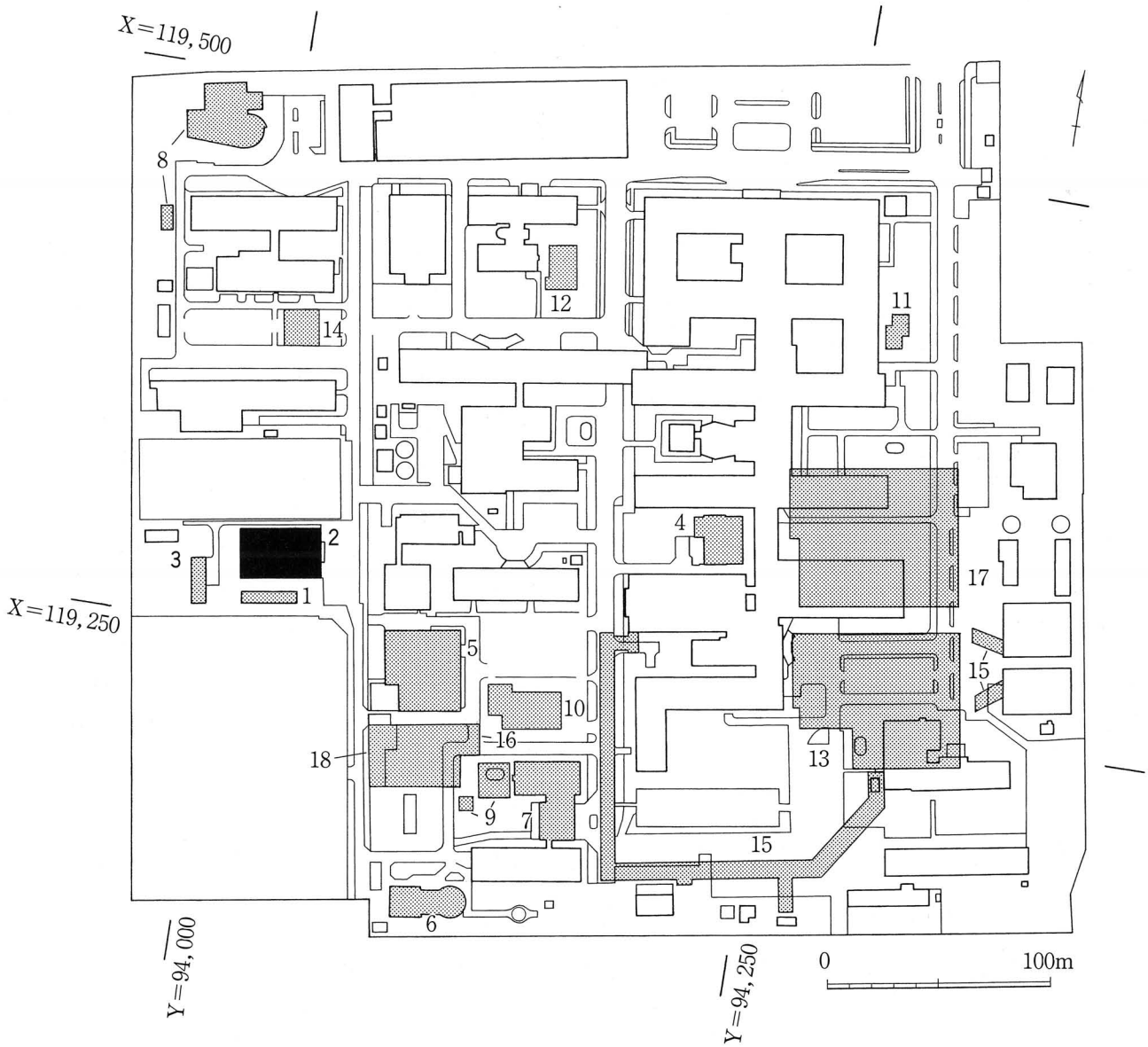
徳島大学蔵本団地内に位置する庄遺跡は県内有数の弥生時代遺跡として知られている。本学周辺にも展開しており、徳島県教育委員会、徳島市教育委員会も調査をおこなっている。本来ならこれらもふくめて調査次を数えるべきであるが、本学埋蔵文化財調査室編集の報告書においては、便宜上調査次数は構内に限定しており、本報告書でもこれにしたがう。

2004年３月31日現在、徳島大学蔵本団地において実施された埋蔵文化財発掘調査は、立会調査を除いて18件を数える（第１図）。第１次調査は1982年に行われた体育館器具庫地点の発掘調査であり、本学からの委嘱を受けて徳島県教育委員会が実施した。その後第２次調査体育館地点、第３次調査活動共用施設地点、第４次調査医学部臨床講義棟地点、第５次調査医学部附属動物実験施設地点、第７次調査医療技術短期大学校舎地点は県教育委員会の担当のもとに実施された。また、すでに第６次調査青藍会館地点、第８次長井記念ホール地点および薬学部実験研究棟地点、第９次医療技術短期大学部校舎増築地点、第10次酵素化学研究センター地点の発掘調査報告書は、徳島大学埋蔵文化財調査報告書１『庄・蔵本遺跡１』として1998年に刊行している。今回報告するのは、第２次調査体育館新築にともなう発掘調査である。

1982年、徳島大学では、蔵本キャンパスに体育館とそれにともなう器具庫の建設をおこなうこととなった。蔵本キャンパスは、既知の埋蔵文化財包蔵地であったため、当時発掘調査担当部門を持たなかった徳島大学では、徳島県教育委員会文化課（現文化財課）に事前発掘調査を依頼した。調査は２年度にわたっておこなわれた。調査面積は1,160㎡である。

第２節　整理・報告書刊行にいたる経緯

発掘調査終了後、諸般の事情により整理作業にはなかなか着手しえなかった。その後、1992年徳島大学埋蔵文化財調査室が発足し、大学内での発掘調査、整理作業が可能となったため、徳島県教育委員会文化財課と徳島大学とが協議した結果、以下のような合意のもと整理・報告がおこなわれることとなった。以下、その合意書・実施計画書を掲載する。



1　器具庫
2　体育館
3　活動共用施設
4　医学部臨床講義棟
5　動物実験施設
6　青藍会館
7　医療技術短期大学
8　長井記念ホール・薬学部実験研究棟
9　医療技術短期大学増築
10　酵素化学研究センター
11　MRI・CT 棟
12　附属図書館蔵本分館増築
13　東病棟
14　医薬資源教育研究センター
15　共同溝
16　ゲノム機能研究センター
17　中央診療棟
18　ゲノム機能研究センター増築

第1図　徳島大学蔵本地区における発掘調査地点
（1～5・7徳島県教育委員会調査、その他徳島大学埋蔵文化財調査室調査）

徳島県教育委員会が実施した徳島大学蔵本団地内における埋蔵文化財発掘調査による出土資料整理と報告書刊行に関する合意書

昭和57年度から昭和62年度の間に実施された、徳島大学蔵本団地内における埋蔵文化財発掘調査のうち、徳島大学（以下「甲」という。）が徳島県教育委員会（以下「乙」という。）に委託して実施した、６箇所の出土資料の整理と報告書刊行について、甲乙間で次のとおり合意書を交わす。

（目的）

第１条　この合意書は、甲の事情により、未報告のまま収蔵されている出土資料を整理し、報告書を刊行することによって公開し、真に国民共有の財産とすることを目的とする。

２　目的遂行のため、甲と乙は共同事業としてこれを位置づけ、相互の協力の基本的方向を定める。

（事業の対象）

第２条　事業の対象となるのは、徳島大学蔵本団地内の体育館器具庫、体育館、課外活動共用施設、医学部臨床講義棟、医学部動物実験施設、医学部医療技術短期大学校舎の６箇所の発掘調査による出土資料である。出土資料は、調査記録（実測図、写真資料等）および出土品（土器、石器、木器、鉄器、青銅器等）を中心に、その他日誌やメモの類をすべて含む。

（事業の体制）

第３条　事業を遂行するための整理作業は、出土資料を甲が乙から借り受けて実施する。

２　出土資料の借り受け及び取扱いについては、甲は出土資料の保管管理者である財団法人徳島県埋蔵文化財センターの指示を遵守するものとする。

３　出土資料の整理作業は、甲が埋蔵文化財調査室を担当部署として実施する。

４　甲は乙による発掘調査に係る担当者等の指導を受けながら、整理作業を実施するものとする。

（成果）

第４条　対象となる出土資料の報告書刊行及び活用可能な状態に整理収納された出土資料を成果とする。

（報告書）

第５条　報告書は甲乙の共同著作物として刊行する。

２　甲は対象となる６箇所それぞれの出土資料の整理作業終了後、客観的事実報告を内容とする報告書を刊行する。

３　乙は、第２項の報告書刊行後、甲と共同して研究考察を行うものとする。

（費用負担）

第６条　事業の遂行に必要な費用は、分担する内容に応じて甲乙それぞれが負担する。

（実施計画書）

第７条　事業は原則として別添実施計画書に基づき実施するものとする。

（その他の事項の取扱い）

第８条　この合意書に定めのない事項又は疑義を生じた事項については、甲乙協議して定めるものとする。

この合意の証として、本書２通を作成し、記名押印のうえ、各自１通を保有する。

平成13年３月26日

甲　徳島市新蔵町２丁目24番地
徳島大学長　齋藤史郎　印

乙　徳島市万代町１丁目１番地
徳島県教育委員会教育長　青木武久　印

実施計画書

1　整理体制

第３条、および第５条第２項にかかわる整理体制は次のとおりとする。

1　実施場所　徳島大学蔵本地区維持管理センター内（床面積100平方m）

2　整理担当部署　徳島大学埋蔵文化財調査室

3　整理組織　文部科学教官（兼務）　１名
　　技術補佐員　１名
　　整理作業員　５名

2　実施期間

第３条および第５条第２項にかかわる整理作業および報告書の刊行は下記の表のとおり４期10ヶ年度計画で重要度の高いものから順次実施するものとする。

期区分	事業実施年度	整理対象地点名	実務期間	報告書刊行年
第１期	平成13年 平成14年 平成15年（上半期）	体育館	21ヶ月	平成16年
第２期	平成15年（下半期） 平成16年 平成17年 平成18年	動物実験施設	33ヶ月	平成19年
第３期	平成19年 平成20年（上半期）	器具庫・ 医学部臨床講義棟	11ヶ月	平成21年
第４期	平成20年（下半期） 平成21年 平成22年（上半期）	医療技術短期大学・ 活動共用施設	11ヶ月	平成22年

3　事業内訳と負担区分

第６条にかかわる費用負担については下記のとおりとする。

事業の内約	負担区分	
	甲（徳島大学）	乙（徳島県教育委員会）
出土資料の借り受け・返却	負担	
整理作業	負担	
報告書の執筆・編集・刊行	負担	
報告書の配布		負担
研究考察の実施		負担

以上の合意書・実施計画書をふまえ、現在、徳島大学埋蔵文化財調査室では整理作業、報告書の作成をおこなっている。今後、１・３～５・７次調査についても、上記の合意書・実施計画書にしたがい、順次整理作業・報告書の刊行をおこなう。

第３節　調査・整理体制

徳島県教育委員会による昭和57・58年度当時の調査体制は下記のとおりである。

昭和57年度

（調査総括）

徳島県教育委員会	教育長	中田　清春
徳島県教育委員会文化課	課　長	川人　幸夫
同　上	課長補佐	本庄　午郎
同　上	文化財保護班長	立花　　博

（調査担当）

同　上	主　事	島巡　賢二
同　上	文化財調査員	秋山　浩一
同　上	同　上	野々村拓也

（事務担当）

同　上	主査兼庶務係長	清水　　博
同　上	主　事	大八木芳子

昭和58年度

（調査総括）

徳島県教育委員会	教育長	中田　清春
徳島県教育委員会文化課	課　長	西　　敏晴
同　上	課長補佐	本庄　午郎
同　上	文化財保護班長	立花　　博

（調査担当）

同　上	社会教育主事	福家　清司
同　上	文化財調査員	久保脇美朗
同　上	同　上	野々村拓也

（事務担当）

同　上	主査兼庶務係長	清水　　博
同　上	主　事	大八木芳子

徳島大学による平成13～16年度の整理体制は下記のとおりである。

平成13年度

徳島大学施設委員会	委員長	齋藤　史郎	（学　長）
	委　員	渋谷　雅之	（副学長）
	同　上	川上　　博	（同　上）
	同　上	石原　　徹	（総合科学部長）
	同　上	芳村　敏夫	（工学部長）
	同　上	森田　雄介	（附属図書館長）
	同　上	西村　捷敏	（大学開放実践センター長）
	同　上	鈴木　茂行	（地域共同研究センター長）
	同　上	大恵俊一郎	（総合情報処理センター長）
	同　上	桑折　範彦	（全学共通教育センター長）
	同　上	湊　　義博	（保健管理センター所長）
	同　上	大西　克成	（医学部長）
	同　上	三宅洋一郎	（歯学部長）
	同　上	長尾　義光	（薬学部長）
	同　上	杉野　　弘	（分子酵素学研究センター長）
	同　上	板倉　光夫	（ゲノム機能研究センター長）
	同　上	西谷　　弘	（アイソトープ総合センター長）
	同　上	香川　　征	（医学部附属病院長）
	同　上	中條　信義	（歯学部附属病院長）
	同　上	森本　忠興	（医療技術短期大学部長）
	同　上	北條　芳隆	（埋蔵文化財調査室長）
	同　上	森澤　良水	（事務局長）
	同　上	池本　　任	（総務部長）
	同　上	河野　正俊	（経理部長）
	同　上	平峰　英一	（施設部長）
	同　上	服部　　馨	（学務部長）

庶務担当	施設部長	平峰　英一	
	同企画課長	菊本　昭夫	
	同企画課専門員	高谷　英二	
	同企画係長	好田　建治	
	同企画係主任	栗林　博明	

整理業務担当	埋蔵文化財調査室	室　長	北條　芳隆	（総合科学部助教授）
		調査員	中村　　豊	（大学開放実践センター助手）
	施設部	技術補佐員	山本　愛子	

同　上　　加登　哲子
同　上　　堺　　圭子
同　上　　板東　美幸
同　上　　平田　順子

平成14年度

徳島大学施設委員会　委員長　　齋藤　史郎（学　長）
委　員　　渋谷　雅之（副学長）
同　上　　川上　　博（同　上）
同　上　　金品　昌志（学長補佐）
同　上　　石原　　徹（総合科学部長）
同　上　　芳村　敏夫（工学部長）
同　上　　森田　雄介（附属図書館長）
同　上　　廣渡　修一（大学開放実践センター長）
同　上　　鈴木　茂行（地域共同研究センター長）
同　上　　大恵俊一郎（総合情報処理センター長）
同　上　　桑折　範彦（全学共通教育センター長）
同　上　　曽根　三郎（保健管理センター所長）
同　上　　岸　　恭一（留学生センター長）
同　上　　黒田　泰弘（医学部長）
同　上　　三宅洋一郎（歯学部長）
同　上　　長尾　義光（薬学部長）
同　上　　杉野　　弘（分子酵素学研究センター長）
同　上　　板倉　光夫（ゲノム機能研究センター長）
同　上　　西谷　　弘（アイソトープ総合センター長）
同　上　　香川　　征（医学部附属病院長）
同　上　　中條　信義（歯学部附属病院長）
同　上　　森本　忠興（医療技術短期大学部長）
同　上　　定森　秀夫（埋蔵文化財調査室長）
同　上　　森澤　良水（事務局長）
同　上　　岩本　拓水（総務部長）
同　上　　河野　正俊（経理部長）
同　上　　平峰　英一（施設部長）
同　上　　服部　　馨（学務部長）

庶務担当　施設部長　　平峰　英一
同企画課長　　菊本　昭夫
同　上　　下村　眞澄

同企画課専門員　高谷　英二
同企画課補佐　向井　晃
同企画係長　好田　建治
同企画係主任　栗林　博明

整理業務担当　埋蔵文化財調査室　室　長　定森　秀夫（総合科学部助教授）
調査員　中村　豊（大学開放実践センター助手）
施設部　技術補佐員　山本　愛子
同　上　加登　哲子
同　上　堺　圭子
同　上　板東　美幸
同　上　平田　順子

平成15年度
徳島大学施設委員会　委員長　青野　敏博（学　長）
委　員　渋谷　雅之（副学長）
同　上　川上　博（同　上）
同　上　高麗　寛紀（学長補佐）
同　上　熊谷　正憲（総合科学部長）
同　上　芳村　敏夫（工学部長）
同　上　林　弘（附属図書館長）
同　上　廣渡　修一（大学開放実践センター長）
同　上　三輪　恵（地域共同研究センター長）
同　上　大恵俊一郎（総合情報処理センター長）
同　上　桑折　範彦（全学共通教育センター長）
同　上　大森　哲郎（保健管理センター所長）
同　上　岸　恭一（留学生センター長）
同　上　曽根　三郎（医学部長）
同　上　三宅洋一郎（歯学部長）
同　上　際田　弘志（薬学部長）
同　上　杉野　弘（分子酵素学研究センター長）
同　上　板倉　光夫（ゲノム機能研究センター長）
同　上　西谷　弘（アイソトープ総合センター長）
同　上　香川　征（医学部附属病院長）
同　上　長山　勝（歯学部附属病院長）
同　上　森本　忠興（医療技術短期大学部長）
同　上　定森　秀夫（埋蔵文化財調査室長）
同　上　森澤　良水（事務局長）

同　上　　岩本　拓水（総務部長）
同　上　　河野　正俊（経理部長）
同　上　　平峰　英一（施設マネジメント部長）
同　上　　堀内　和雄（学務部長）

庶務担当　施設マネジメント部長　平峰　英一
同施設企画課長　　下村　眞澄
同施設企画課補佐　　向井　　晃
同施設企画係長　　岡田　勢一
同施設企画係員　　河北　百合

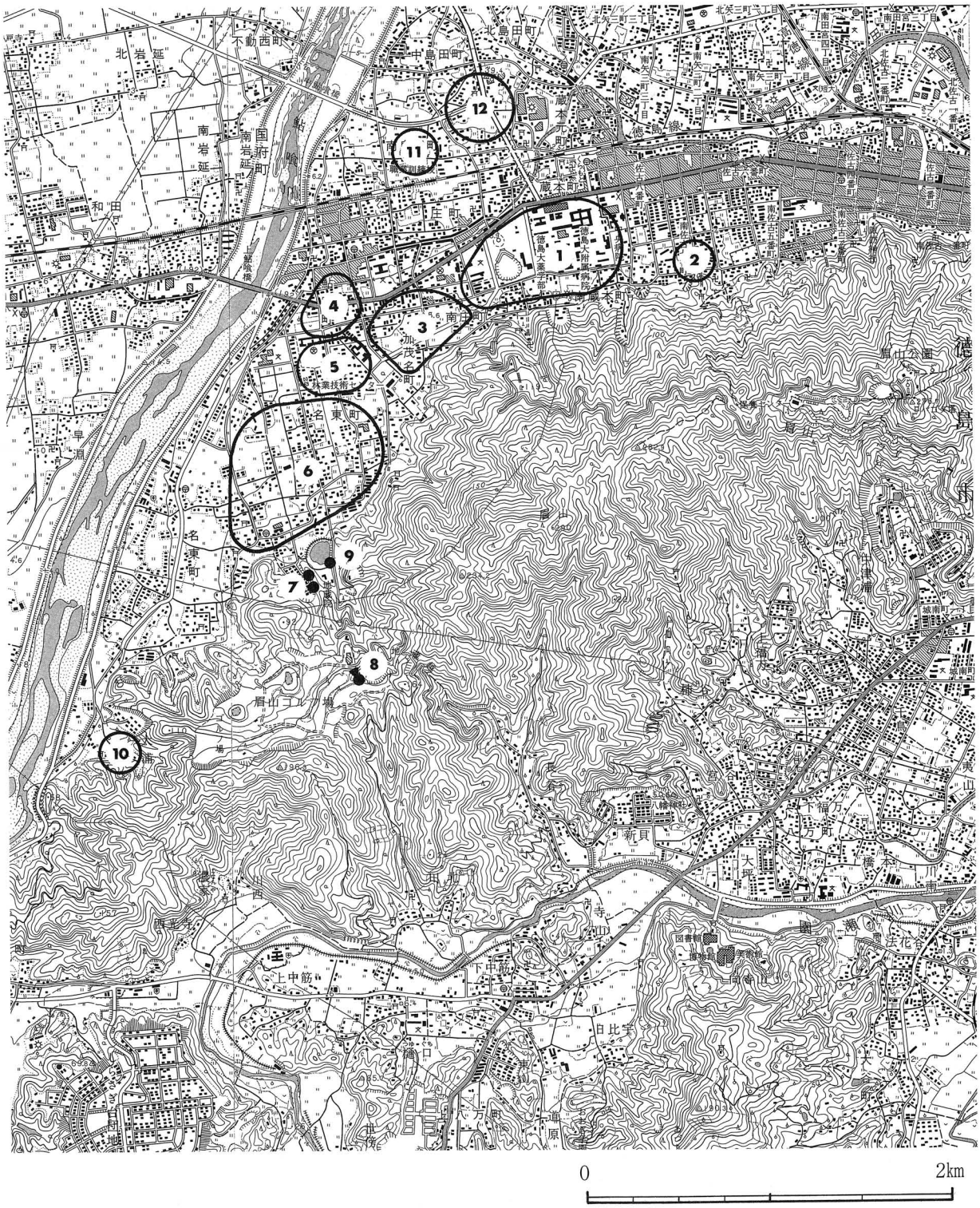
整理業務担当　埋蔵文化財調査室　　室　長　　定森　秀夫（総合科学部助教授）
調査員　　中村　　豊（大学開放実践センター助手）
施設マネジメント部　技術補佐員　　山本　愛子
同　上　　加登　哲子
同　上　　堺　　圭子
同　上　　板東　美幸
同　上　　平田　順子

平成16年度
徳島大学施設委員会　委員長　　青野　敏博（学　長）
委　員　　黒田　泰弘（副学長）
同　上　　渋谷　雅之（同　上）
同　上　　川上　　博（同　上）
同　上　　中村　廣志（同　上）
同　上　　北島　　久（同　上）
同　上　　熊谷　正憲（総合科学部長）
同　上　　矢野　米雄（工学部長）
同　上　　林　　弘（附属図書館長）
同　上　　廣渡　修一（大学開放実践センター長）
同　上　　三輪　　恵（地域共同研究センター長）
同　上　　大恵俊一郎（総合情報処理センター長）
同　上　　桑折　範彦（全学共通教育センター長）
同　上　　大森　哲郎（保健管理センター所長）
同　上　　市川　哲雄（留学生センター長）
同　上　　曽根　三郎（医学部長）
同　上　　三宅洋一郎（歯学部長）
同　上　　際田　弘志（薬学部長）

同　上　　蛯名　洋介（分子酵素学研究センター長）
同　上　　板倉　光夫（ゲノム機能研究センター長）
同　上　　足立　昭夫（アイソトープ総合センター長）
同　上　　香川　　征（医学部・歯学部附属病院長）
同　上　　長山　　勝（歯学部・歯学部附属病院副病院長）
同　上　　前澤　　博（医療技術短期大学部長）
同　上　　定森　秀夫（埋蔵文化財調査室長）
同　上　　大澤　弘和（総務部長）
同　上　　吉田　龍哉（財務部長）
同　上　　平野雄喜男（施設マネジメント部長）
同　上　　堀内　和雄（学務部長）
同　上　　小沼　加一（研究協力部長）

庶務担当　施設マネジメント部長　平野雄喜男
同施設企画課長　下村　眞澄
同施設企画課補佐　向井　　晃
同　上　高谷　英二
同施設企画係長　岡田　勢一
同施設企画係員　河北　百合

整理業務担当　埋蔵文化財調査室　室　長　定森　秀夫（総合科学部助教授）
調査員　中村　　豊（大学開放実践センター助手）
施設マネジメント部　技術補佐員　山本　愛子
同　上　加登　哲子
同　上　堺　　圭子
同　上　板東　美幸
同　上　平田　順子



1　庄遺跡	4　鮎喰遺跡	7　節句山古墳群	10　大浦遺跡
2　三谷遺跡	5　鮎喰南遺跡	8　八人塚古墳	11　中島田遺跡
3　南庄遺跡	6　名東遺跡	9　地蔵院穴不動古墳	12　南島田遺跡

第２図　周辺の遺跡

第２章　遺跡の立地と環境

庄遺跡は、吉野川下流南岸最大の支流である鮎喰川の形成する扇状地の東岸でもある眉山の北麓に位置する（第２図）。この眉山北麓には縄文時代後期から近世にいたるまでの豊富な遺跡群が展開している。今日の地名によって、三谷遺跡（２）、庄遺跡（１）、南庄遺跡（３）、鮎喰遺跡（４）、名東遺跡（６）に区分されている。しかしながら、各遺跡に明確な境界はなく「眉山西北麓遺跡群」ないし「鮎喰川東岸遺跡群」ともいうべき様相を呈している。

旧石器時代から縄文時代後期中葉にいたるまで、この一帯では遺跡は検出されていない。しかしながら、吉野川や鮎喰川の沖積層深くに埋没している可能性はあるため、今後は注意しておく必要があるだろう。なお、鮎喰川下流西岸の矢野遺跡においては、縄文時代中期末から後期初頭にかけての豊富な遺構、遺物が検出されている。

この一帯で微高地の形成が本格化し、遺構、遺物が検出されるのは縄文時代後期後葉である。庄遺跡財務省蔵本住宅地点では、後期後葉の住居跡１棟が検出されている（岡山1999）。晩期前半の土器は、庄遺跡旧あさひ学園地点で包含層が確認されている。晩期後半の突帯文土器期は、名東遺跡で土器、石器が豊富に出土した（勝浦1990）。三谷遺跡では突帯文土器と遠賀川式土器が共伴して出土し、多数の石器、貝塚や動植物遺体が検出され、７体にもおよぶイヌの埋葬が確認された（勝浦ほか1997）。

三谷遺跡と相前後するころ、庄遺跡において弥生時代前期の集落が形成され始める。前期初頭の遺跡は、比較的小規模なものが庄遺跡や鮎喰遺跡の微高地上で点々とみつかっている。三谷遺跡のように突帯文土器を主体とする小集団と遠賀川式土器を主体とする小集団が混在し、縄文から弥生への移行期を形成していたものと考えられる。続く弥生時代前期中葉、庄遺跡は、徳大蔵本キャンパスを中心に巨大化しはじめる。２重の環濠や灌漑用水路を掘削し、複数棟の住居跡も検出されている。本格的な弥生集落がようやく形成されたことを示すものである。続く前期末から中期初頭にかけて、徳大構内周辺の遺構群は厚い洪水砂によって埋没してしまう。埋没後も豊富な遺構、遺物が検出されているが、集落本体は南庄遺跡へと移動したようで、この時期の環濠とおぼしき溝や、膨大な量の遺構、遺物が検出されている（北條編1998）。続く弥生時代中期の遺構は名東遺跡でみつかっている（松永・森1990）。

弥生時代中期末から後期初頭にかけて、遺構は再び増加し始める。南庄遺跡では23棟の竪穴住居跡が密集して検出され、多数の石器未成品が出土している。名東遺跡で扁平鈕式銅鐸が埋納されたのもおおむねこの時期と考えられる（勝浦1990）。この「遺跡群」の規模が最高潮に達した時期である。後期前葉に、ふたたび遺構密度はうすくなるが、後期後葉から終末期に、また多数の遺構がみられるようになる。このころから鉄器が徐々に増加し、終末期には本格的な鍛冶遺構が検出されている。弥生時代終末期の集落は、弥生時代前期には水田や用水路が存在していたところに立地している。このころまでに、微高地の形成がさらに進んだことをうかがうことができる。

古墳時代には名東遺跡の東南、眉山西北麓の丘陵尾根上に前期古墳が点々と築かれる。なかでも節句山古墳群（７）や八人塚古墳（８）が知られている。八人塚古墳は全長60m、後円部直径30m の規模をもち、川原石を積み上げた、前方後円形の積石塚である。庄遺跡の背後に位置する眉山北麓では、今のところ古墳はみつかっていない。しかし、遺跡の規模、吉野川河口から紀伊水道を望む地形からみて古

墳が存在しないとは考えにくく今後、改めて分布調査を行う必要があると思われる。これら前期古墳にともなう集落は今のところ明確ではない。しかしながら、溝や井戸などが点々とみつかっており、いずれ住居群の存在も確認できると考えている。

古墳時代中期段階の古墳、集落ともこの地域では未見であるが、横穴式石室をもつ後期古墳は点々とみつかっている。節句山古墳群などとともに名東遺跡の東南に穴不動古墳が存在する。しかしながら、後期古墳に伴う集落跡も明確ではない。

奈良時代から平安時代の古代律令期の遺構は、庄遺跡や名東遺跡で大型の掘立柱建物跡がみつかっている。庄遺跡の加茂名中学校地点、財務省蔵本住宅地点や、今回報告の地点からは、掘立柱建物跡や流路が検出されており、墨書土器や土鈴、石製や銅製の帯金具、斎串や人形、鳥形木製品、多量のモモの種子などが検出されており、付近に官衙的機能を有する機関が存在していた可能性が高い。文献に残る名方郡衙、のちの名東郡衙は、特定はできないもののおおむねこの地域一帯に存在していたと考えられる。さらに、庄遺跡では、この時期の条里制区画に関連すると考えられる溝が検出されている。これらの溝は、若干場所をずらしながらも、中世、近世から今日にいたるまで受け継がれている。

中世の遺跡としては、中島田遺跡（11）や南島田遺跡（12）から鎌倉時代の遺跡がみつかっている。畿内産瓦器や輸入陶磁器も認められ、水運、交易の要所として位置づけることができるだろう。これらは、鮎喰川による沖積作用がさらに進み、生活域がさらに広まったことをうかがわせる。

江戸時代以降の本地域は、当時の絵図から、城下町周辺の散村および水田が展開していた。この時期の水田開発は比較的徹底されたものである可能性が高く、古墳時代から中世にかけての多くの遺構が削平を受けている。「眉山西北麓遺跡群」の景観は、この時期から大きく改変されていった。明治時代には、現徳大構内から蔵本公園にかけて陸軍第43連隊の兵営と練兵場が営まれた。昨今においては宅地造成が著しく進められており、眉山も採石場によって大きく削られ、谷は埋められつつある。徳島の象徴そのものでもある吉野川・眉山をふくめた景観をどのように受け継ぐかは、文化財の保存・活用と表裏一体であり、われわれの将来と関わる大きな課題である。

参考文献

一山　典・瀧山雄一　1985『第６回埋蔵文化財資料展　庄遺跡の人々のくらしと文化』徳島市教育委員会

一山　典・福家清司ほか　1994『図説日本の歴史36　徳島県の歴史』河出書房新社

岡山真知子　1999『庄遺跡Ⅲ－大蔵省蔵本団地宿舎新鋭工事（第３期工事）関連埋蔵文化財調査報告－』財団法人徳島県埋蔵文化財センター調査報告書24　財団法人徳島県埋蔵文化財調査センター

勝浦康守　1990『名東遺跡発掘調査概要－名東町２丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査－』名東遺跡発掘調査委員会

勝浦康守ほか　1997『三谷遺跡－徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査－』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

菅原康夫　1988『日本の古代遺跡37　徳島』保育社

北條芳隆編　1998『庄・蔵本遺跡１－徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査－』徳島大学埋蔵文化財調査報告書１　徳島大学埋蔵文化財調査室

松永住美・森　直樹　1990『県営名東町団地建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　名東遺跡（天神地区）』徳島県教育委員会

第３章　調査の経過

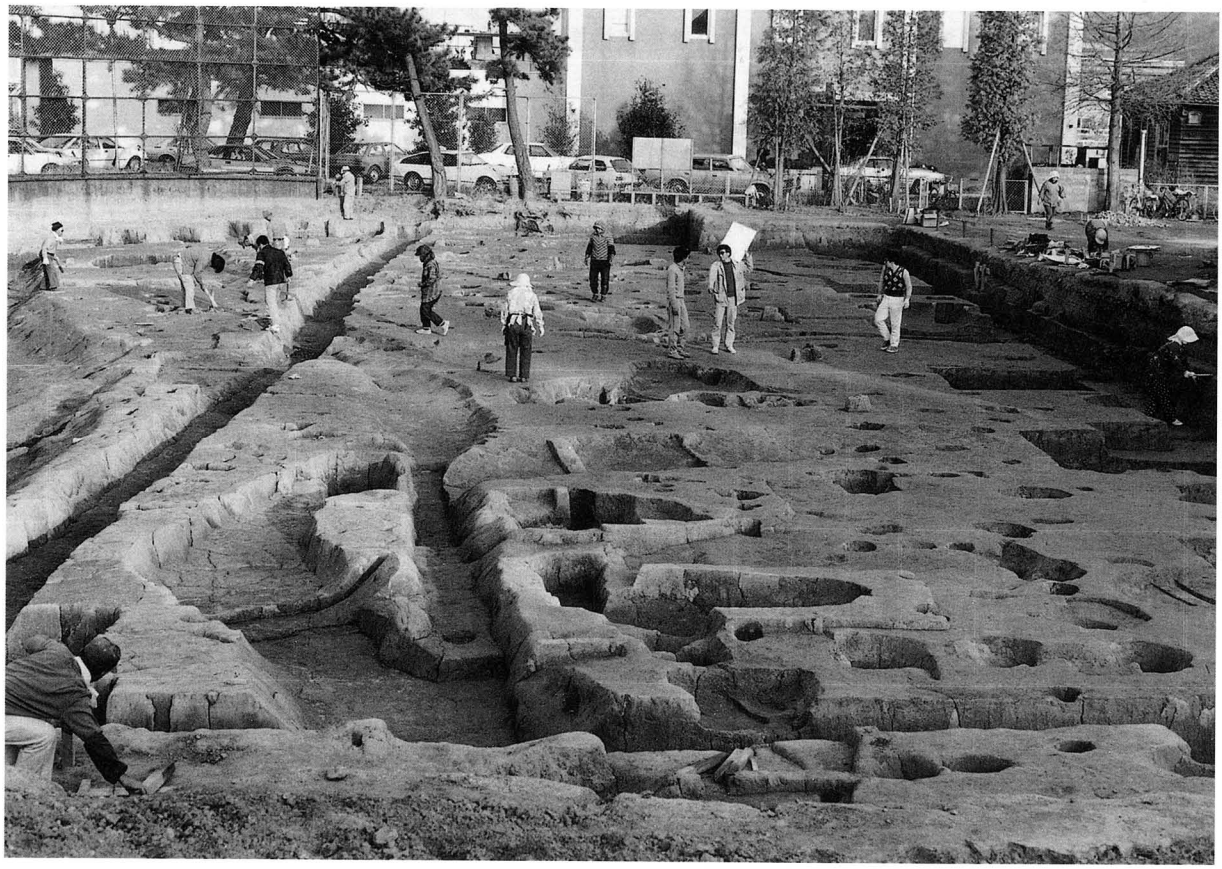
調査は、初年度は1982（昭和57）年11月30日から1983（昭和58）年３月31日まで、次年度は1983（昭和58）年４月１日から11月30日までおこなった。

1982年11月30日、現地調査の準備を開始し、12月８日重機掘削を開始した。

12月29日から１月３日までを休暇とした。

当初は器具庫地点の作業を優先していた。器具庫地点は２月５日には終了し、体育館地点の人力掘削も２月４日には着手した。２月10日から第１遺構面（近世・近代）の遺構調査を開始した。近世の大溝と、近代水田の石敷暗渠を掘削した。３月19日現地説明会を開催し、３月31日1983年度の調査を終了した。

1983年度は調査体制を一新、調査員を交代し、４月５日より調査を再開した。第１遺構面遺構の完掘、実測作業に４月28日まで要したが、部分的には４月25日より第２遺構面（中世から弥生中期）へ向けての掘り下げ作業を併行した。５月17日には全調査区の掘り下げを完了し、遺構検出を開始した。第２遺構面からは多くの遺構を検出したため、作業は難航した。とくに、調査区北端の水路はプラン確認に苦労し、排土量も多く、出土遺物も膨大であったため、掘削に多くの時間を要した。



第３図　作業風景

７月28日日下雅義氏（立命館大学文学部、所属は当時、以下同じ）来訪。

８月12日から15日を夏期休暇とした。

８月22日渡邊昌宏氏（大阪府教育委員会）ほか１名来訪。

24日河原純之氏（文化庁）来訪。

９月６日平安時代の木棺墓を検出、人骨が出土した。

10月２日徳島文理中教諭２名・生徒６名見学。

10月13日第２遺構面の全景写真の撮影をおこなった。

10月17日から第３遺構面（弥生前期末）へむけての掘削を開始し、以降第２遺構面の残りの作業と併行しておこなう。

10月21日徳島大学医学部解剖学第１教室山田正興氏の立ち会いのもと、平安時代木棺墓より出土した人骨の取り上げ作業をおこなった。

10月22日以降、第３遺構面へ向けての掘削を本格的に再開する。11月５日には第２遺構面の調査はほぼ完了し、17日以降は第３遺構面の遺構掘削に集中する。

11月14日石野博信氏（奈良県立橿原考古学研究所）来訪。

11月15日多数の土坑、土器だまりからなる第３遺構面の遺構群の全貌が明らかとなり、現地説明会の準備を開始する。同日、福岡県教育委員会の３名来訪。また、徳島新聞社の取材を受ける。

11月19日現地説明会を開催し、150名が参加した。

11月21日以降、第３遺構面の残りの作業を急ピッチで再開する（第３図）。23日には炭化米が出土した。

11月27日第３遺構面調査にめどがつき、全景写真撮影をおこなう。翌28日からは下層の確認トレンチ掘削をおこない、図化する。

11月30日すべての現場作業を完了し、撤収した。

第４章　調査の成果

第１節　基本層序

今日、庄遺跡の調査はおおむね３面の遺構面に区分しておこなわれている。この基礎を確立したのが第２次調査である。本地点の現地表は標高3.8mで、大学敷地は、ほぼ平坦を呈している。しかしながら、これは明治時代に陸軍第43連隊兵営を造成する際に盛り土をおこなった結果であって、本来の旧地形は、眉山から北へ向かって微高地が徐々に低く傾斜していたものと考えられる。大学の東西を流れる水路も本来は眉山の谷川として、付近を北東方向に流れていたと推測される。昨今の調査成果をふまえると、本調査区より北でおこなわれた調査では、近世・近代の水田層以前の堆積層は、ほとんど確認できない。本調査区北端に平安時代の水路が認められるように、弥生時代前期から中世にいたるまで、大学構内における生活域は、ほぼ本調査区を北限としていたものと考えられる。また、近世の水田も、緩斜面を段状に整備して営まれていたと考えられる。

調査区基本層序（第４図）の第１層は、第２次大戦後、徳島大学医学部創設時に盛られたグラウンド造成土である。第１層下に大小の礫からなる兵営建設にともなう造成土が残存する。続く第２・３層のオリーブ褐色シルト層は、近代の水田層と考えられる。

次の第４層上面が、近世から近代の第１遺構面である。ここで検出された大小の溝は、近世の畝痕や、区画溝、近代水田にともなう石敷暗渠である。第４層は弥生時代中期後葉（Ⅳ期）から13世紀にかけての土器を包含している。いずれの土器も細片で、後世に攪拌されたものと考えられる。

この下第５・６層の上面が第２遺構面である。弥生時代中期後葉（Ⅳ期）から13世紀の遺構を検出する。この第５・６層が黄褐色砂質シルト層で、弥生時代前期後葉から中期初頭の土器を包含している。この層下部から、次の第７層上面において、弥生時代前期後葉・中期初頭の遺構・土器だまりを検出している。これが第３遺構面である。この黄褐色シルト質砂層は、鮎喰川下流域に広く堆積しており、いずれも弥生時代前期の遺物を含んでいる。部分的には相当の深さがあり、土器の時期も限定しえることから、洪水などの要因によって短期間に堆積したものと推測することができる。

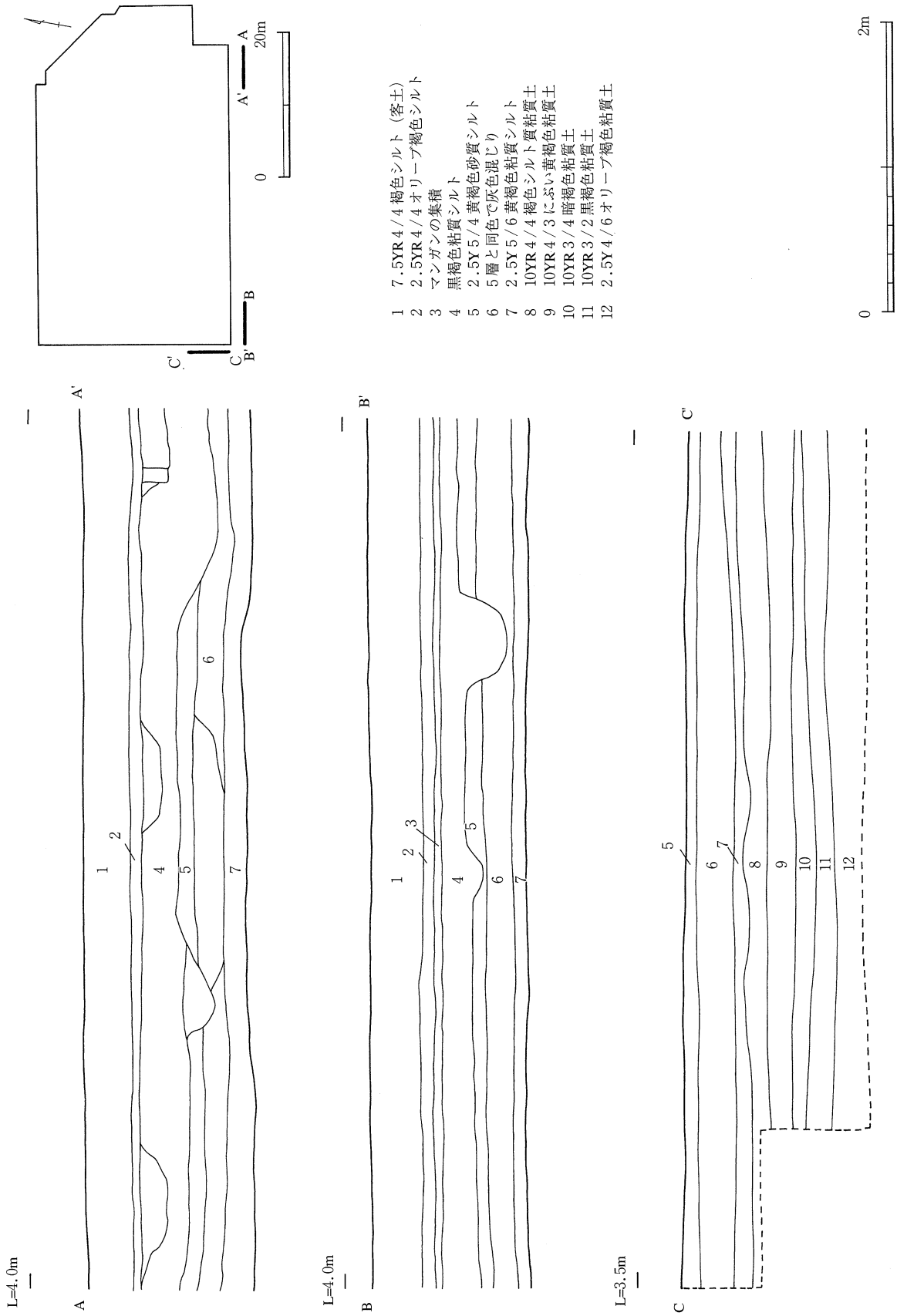
第７層以下は基本的には無遺物層である。弥生時代前期以前、この地に微高地が形成される過程の粘質土層である。ただし、地点によっては、しばしば、縄文時代後期から晩期末・弥生前期初頭にかけての包含層や遺構が検出されることもある。

なお、調査区各所に確認トレンチを掘削した（第５図）。基本的には無遺物であるが、確認トレンチの第６層黒褐色粘質土層は、低湿地に繁茂した有機質層と考えられ、縄文時代後期中葉の土器片が２点出土し、うち１点を図示した（図版70－640）。

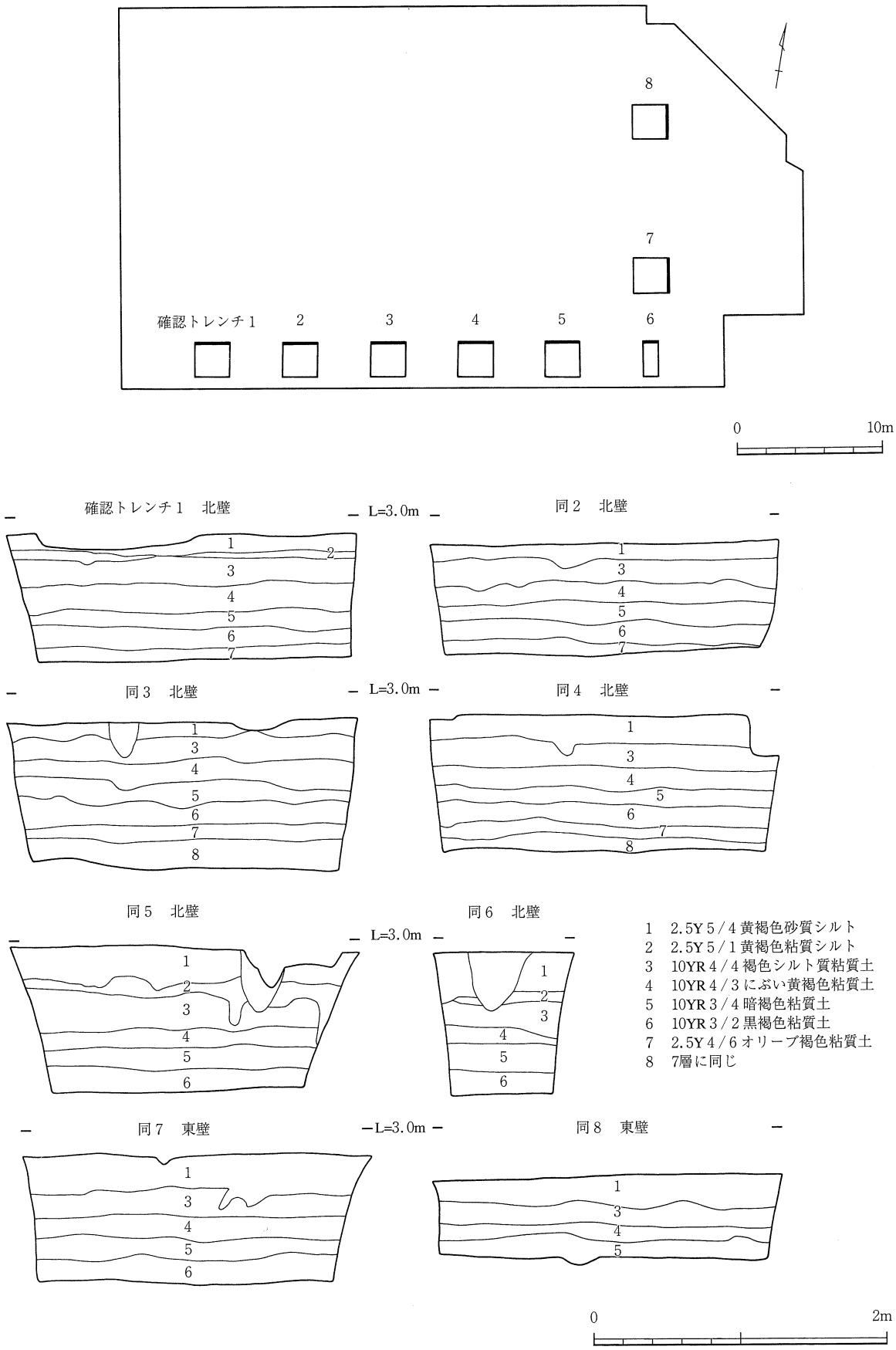
第２節　遺構と遺物

１　第３遺構面　弥生時代前期後葉～中期初頭の遺構と遺物

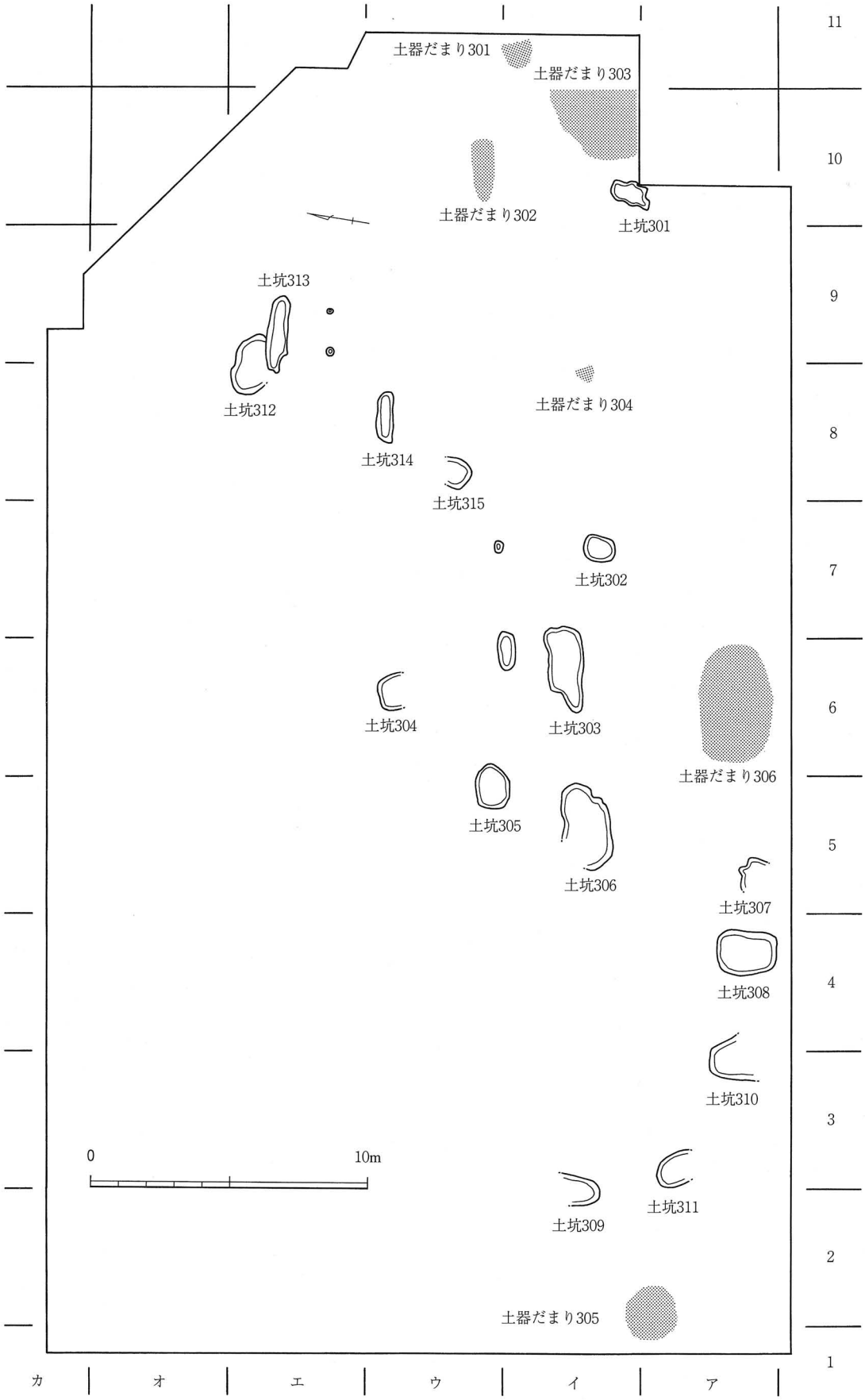
第３遺構面からは、弥生時代前期後葉～中期初頭の土坑15基、土器だまり６ヵ所を検出した（第６図）。基本的に遺構プランを認識しえたものを土坑、把握しえなかったものを土器だまりとしている。


A
A'
B
B'
C
C'
0
20m
1　7.5YR４/４褐色シルト（客土）
2　2.5YR４/４オリーブ褐色シルト
3　マンガンの集積
4　黒褐色粘質シルト
5　2.5Y５/４黄褐色砂質シルト
6　５層と同色で灰色混じり
7　2.5Y５/６黄褐色粘質シルト
8　10YR４/４褐色シルト質粘質土
9　10YR４/３にぶい黄褐色粘質土
10　10YR３/４暗褐色粘質土
11　10YR３/２黒褐色粘質土
12　2.5Y４/６オリーブ褐色粘質土
0
2m
L=4.0m
L=4.0m
L=3.5m

第４図　基本層序



第５図　確認トレンチ土層断面図



第６図　第３遺構面遺構配置図（弥生前期後葉～中期前葉）

ただし、それぞれの遺構はベースの土と埋土との区別は非常に困難で、遺構の区別は調査時の所見を尊重した。いうまでもないが、以下に述べる各遺構の規模は、あくまでも検出時の残存状況を示すものである。これらの遺構群は調査区南西隅から北東にむかって弧状に展開している。調査区の北西部では遺構・遺物ともに検出できなかった。これは、第２遺構面の水路201に破壊されていることもあるが、この調査地点より北ではこれまで弥生前期の遺構・遺物はほとんど認められない。したがって、これら遺構群は眉山北麓の微高地先端に位置していたものと考えられる。土坑308・土坑315出土の炭化米・炭化物からみても、集落縁辺に展開する貯蔵穴群ないしはゴミ穴群であった可能性が高い。

土坑301（図版１上）　ア・イ－10区に位置し、平面円形を呈する。径約1.2m、深さ約0.2m をはかり、多量の弥生前期末の土器が出土している（図版27－１～11）。

１～７は壺である。いずれも頸部・胴部にヘラ描きの少条・多条沈線ないしは貼り付け突帯を施す。調整は、ハケメののちにヘラミガキを施すが、いずれもハケメの痕跡を明瞭に残している。この時期特有の大きく開いた口縁部を有する。８・10・11は深手の鉢であろう。いずれも無文で、胴部にハケメを施す。９は粘土塊である。

土坑302（図版１下）　調査区中央やや東より、イ－７区に位置する。平面隅丸方形で、径約1.1m、深さ1.2m 程度である。時期は弥生前期後葉である（図版28－12～22、図版29－23～26）。

12～16、19～21は壺である。19の頸部には沈線間に刺突を施している。そのほかは頸部、ないし胴部にヘラ描きの沈線を施す。21はやや大型の壺であろう。17・18・22は甕である。22は如意形口縁で、胴部上半に４条の沈線を施す。胴部はハケメの痕跡が顕著である。23・24は鉢である。23は頸部に１条の沈線を施す。胴部にはハケメを施す。25・26は鉢ないし大型壺の底部である。石器は石鏃１点（図版75－728）、扁平両刃石斧１点（図版77－743）、磨製石庖丁１点（図版80－760）、砂岩製の台石１点（図版82－774）、敲石１点（図版84－780）が出土している。

土坑303（図版２）　イ－６・７区に位置する。平面楕円形を呈し、長径約3.2m、短径約1.3m、深さ約0.3m をはかる。時期は弥生前期後葉である（図版29－27～32、図版30－33～42、図版31－43～50、図版32－51～62）。

27～42は壺である。27～32・39は頸部にヘラ描き沈線を施し、31・32・39には沈線間に刺突を施す。33は頸部の貼り付け突帯が剥離し胴部に３箇所ヘラ描き沈線を施す。37・38・40・41は頸部に２～４条の貼り付け突帯を施す。40は突帯の上下に沈線を施し、41は無刻みである。34は口縁端部を刻んだ後に沈線を１条施している。35・36・42は胴部で、それぞれ貼り付け突帯を施す。42には突帯周辺に赤彩の痕跡を残す。43～48は甕である。いずれも如意形口縁で、胴部上半に２～４条の沈線を施す。49～55は鉢である。49・51～53は大型の鉢で、いずれも胴部上半に３・４条の沈線を施す。54も大型で、中型の55とともに無文である。50は小型でバケツ状を呈する。56～62は底部である。56は甕であろう。57・58は壺の底部とみられ、底部付近に沈線を施す。59～62は壺ないしは鉢である。

石器は両刃石斧１点（図版79－750）、石鎌１点（図版80－755）、磨製石庖丁１点（図版81－765）が出土している。

土坑304（図版３上）　調査区ほぼ中央に位置する。プランの一部は検出できなかった。時期は弥生前期後葉・中期初頭で（図版33－63～76、図版34－77～81）、やや時間幅がある。

63～76は壺である。63・67・68・70は頸部・胴部に貼り付け突帯を施す。67・68は赤彩の痕跡を有する。70は無刻みである。66の頸部は４条のヘラ描き沈線を施し、中央に竹管による刺突を施す。69・73

は、ともに櫛描文を施すⅡ期併行の個体である。69は頸部の発達した器形で、簾状文・櫛描波状文を交互に施し、下部に竹管による刺突文を施す。調整は板ナデである。73は胴部から底部の破片で、櫛描文・櫛描波状文を施す。調整はハケメである。65は口縁部片、64・71・72・74～76は底部である。77・78は甕蓋であろう。79～81は甕で、79は如意形口縁で、胴部上半に４条のヘラ描き沈線を施す。80・81は同一個体の可能性がある。80は如意形であるが、無文でハケメ調整である。器壁は非常に薄い。81は台形の底部を持つ。

石器は石鏃未製品１点（図版75－731）、柱状片刃石斧１点（図版78－747）が出土している。

土坑305（図版３下）　ウ－５区に位置し、平面円形に近い形態である。径約1.6m、深さ0.1mをはかる。弥生前期後葉の土器が、床面から浮いた状態で出土している（図版34－82、図版35－83～92）。

82～90は壺である。82は大型壺で、ハケメ調整を顕著に残す。83・84は頸部に貼り付け突帯を施し、上下に沈線を施す。88は頸部に２条の沈線を施す。外面にはハケメの痕跡を残すが、内面は比較的丁寧にヘラミガキを施す。85は胴部上半に多条沈線を施す。90は胴部上半に多条沈線、胴部最大径部に２条の貼り付け突帯を施す。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。89は口縁部片で、86・87は底部片である。91・92は甕で、91は内傾気味の如意形口縁で、胴部上半に３条の沈線を施す。92は底部片である。

石器は石鏃１点（図版75－716）が出土している。

土坑306（図版４）　イ－５区に位置し、平面楕円形を呈するが、一部プランを検出しえなかった。弥生前期後葉と同中期前葉の土器が出土している（図版36－93～100、図版37－101～105）。

93～100は壺である。93・94はともに大型壺であるが、頸部径が大きく寸胴気味の93と、頸部がすぼまる94の器形は対照的である。ともにヘラ描きの多条沈線を施す。ハケメ調整を顕著に残す。96も頸部と胴部に各４条の沈線を施す。95・97・98は口縁端部に沈線を施した後、刻目を施す。うち、97・98は頸部に貼り付け突帯を施す。99は頸部に太いヘラ描きの沈線を施す。100は口縁部片である。101・102・104・105は甕である。101・102はやや内湾気味に立ち上がる如意形口縁を呈し、胴部上半に３・４条の沈線を施す。102の口縁端部は無刻みである。104は大きく屈曲し、１条の沈線を施す。105は無文で外面タテハケ、内面ヨコハケを施す。中期前葉に属する。103は大型の鉢である。頸部に２条の沈線を施す。外面はハケメ調整が顕著で、内面ヨコミガキを施す。

石器は、磨製石庖丁未製品１点（図版81－761）が出土している。

土坑307（図版５上）　ア－５区に位置する。プランは明確ではなかった。弥生前期後葉の土器が出土している（図版37－106～108）。

106は壺である。やや細長い胴部で、胴部上半にヘラ描きの沈線を施す。107・108は大型の鉢である。108は無文で、107は口縁部に３条の沈線を施す。

土坑308（図版５下）　ア－４区に位置する。平面隅丸方形で、径約2.1m、深さ約0.4mをはかる。なお、床面から炭化米・炭化物が出土している。弥生前期後葉の土器が出土している（図版38－109～114、図版39－115～119）。

109～112は壺である。109・110は大型壺で、109は頸部に２条の沈線を施し、それを目安に粗大な突起を施す。胴部上半に３条の沈線を施し、胴部最大径に４条の沈線、その間に２条の貼り付け突帯を施す。胴部付近は丹念にヘラミガキを施すも、口縁部付近はハケメが顕著である。110は頸部に２条の無刻み突帯を施し、胴部上半に１条、胴部最大径に２条の刻目貼り付け突帯を施す。109同様、口縁部へ向かうほどヘラミガキが甘くなり、１次調整のハケメが目立つようになる。111は細長い胴部を有する。

外面のハケメが顕著である。112は頸部に６条のヘラ描き沈線を施す。113は鉢である。無文で、口縁部付近に１対の把手を貼り付ける。外面のハケメが顕著である。114は甕蓋である。115～119は甕である。４点とも如意形口縁であるが、116・119は外反の度合いが大きい。118は底部である。

石器は石鏃１点（図版75－718）、磨製石庖丁１点（図版81－766）が出土している。

土坑309（図版６）　イ－２・３区に位置し、平面楕円形を呈する。長径約2.3m、短径約1.2m、深さ約0.5mをはかる。中期初頭の土器が出土している（図版39－120～123）。

120～123は甕である。120は無文でハケメを施し、底部付近にのみ縦方向のヘラミガキを施す。底部は上げ底である。121も口縁端部を刻むものの無文である。外面はタテハケで、口縁部付近のみヨコハケである。底部付近に縦方向のヘラミガキを施す。内面にヨコハケを施す。胴部ハケメで底部付近にのみタテミガキを施す手法は120・123と共通する。122・123も無文の甕である。123の底部も上げ底である。これらは、いずれも前期の土器にはない特徴であり、中期初頭と考えられる。

土坑310　ア－３・４区に位置する。一部が攪乱によって破壊されている。弥生前期後葉の土器が出土している（図版40－124～127、図版41－128～136、図版42－137～139）。

124～133は壺である。124～126はいずれも口縁部・胴部に４～６条のヘラ描き沈線を施す。いずれも沈線は太く、特に124・125は波打っており稚拙である。127は口縁部内面を肥厚させ、口縁端部を刻んだ後、１条の沈線を施す。頸部には４条の突帯、胴部には３条の突帯を施す。128は頸部に４条のヘラ描き沈線を施す。129・130は小型無文壺で、129は外面にハケメを施す。132は大型壺の胴部で、９条のヘラ描き沈線を施す。ハケメの痕跡が顕著である。131・133は大型壺の胴部下半～底部である。134～136・138は甕である。134～136は如意形で、胴部上半に１～４条の沈線を施す。136は大型で、胴部最大径が口縁部径を上回る。138はいわゆる逆「Ｌ」字状口縁の甕である。胴部上半に８条のヘラ描き沈線を施す。137・139は鉢である。137は小型である。139は大型で、いずれも無文、ハケメ調整痕が著しい。

土坑311（図版７上）　ア－２・３区に位置する。一部が攪乱によって破壊されている。弥生前期後葉の土器が出土している（図版42－140・141）。

140は椀状の鉢で、外面ハケメ、内面板ナデ調整である。141は大型の鉢。無文で外面にハケメ、内面は口縁部付近にヨコハケを施す。胴部に穿孔を施した１対の把手を有する。

土坑312（図版７下）　エ－８・９区に位置し、土坑313によって破壊されており、プランの一部は明確ではない。弥生前期後葉の土器が出土している（図版43－142・143）。

142は胴部の細長い壺で、頸部に２条の沈線を施す。143は甕である。如意形口縁で、胴部上半に４条の沈線を施す。

土坑313（図版８）　エ－９区に位置する。平面長楕円形を呈し、長径約2.8m、短径約0.7m、深さ約0.1mである。弥生前期後葉の土器が出土している（図版43－144～147）。

144は甕、145～147は壷である。

土坑314（図版９上）　ウ－８区に位置する。一部が攪乱によって破壊されている。弥生前期後葉の土器が出土している（図版43－148・149）。

148は壺の頸部で無刻みの突帯を２条施す。149は壺で、頸部に２条の突帯を施し、胴部上半に４条（部分的には６条）の沈線を施す。調整はヘラミガキが甘く、ハケメが目立つ。

土坑315（図版９下）　土坑314と同じく、ウ－８区に位置する。一部が攪乱によって破壊されている。床面より炭化米・炭化物が出土した。弥生中期初頭の土器が出土している（図版44－150～152）。

150は壺で、口縁内面に三角形の工具による刺突を施す。口縁端部にも同様の工具による刺突を施している。151・152は甕である。双方とも無文で、外面はハケメのち胴部下半に縦方向のヘラミガキを施す。内面は板ナデ、ユビオサエ調整の後、部分的にヘラミガキを施している。弥生前期の甕に比べて、相対的に器壁が薄い傾向にある。

土器だまり301（図版10上）　イ－11区で検出した。径1.0m程度に遺物が分布している。弥生前期後葉の土器が出土している（図版44－153～157、図版45－158～161）。

153は胴部が細長い小型の壺である。154は頸部に4条のヘラ描き沈線を施す。155～157は壺の底部であるが、155は大型の鉢の可能性もある。158は「く」の字状口縁の甕である。最大径は胴部にあり、相当の容量がある。内外面ともハケメの痕跡が顕著である。159は甕の底部である。160は口縁端部が若干外反する甕である。胴部上半に6条のヘラ描き沈線を施す。161は無文の甕である。口縁端部に断面ほぼ正方形の貼り付け突帯を施している。

土器だまり302（図版10下）　ウ－10区で検出した。長楕円形に遺物が分布している。弥生前期後葉の土器が出土している（図版45－162～168）。

162～166は壺である。162は頸部に1条の貼り付け突帯を施すが、大部分が剥離している。163は頸部に6条、胴部に2条以上のヘラ描き沈線を施す。164は大型で、頸部に無刻みの突帯と沈線を施す。胴部には8条のヘラ描き沈線を施した下部に、連続的に突起を貼り付ける。165は細長い器形の壺で、胴部に2条の突帯を施すが、一部剥離している。166は壺の底部である。167・168は逆「L」字状口縁の甕である。本遺跡では量的にはまれである。

石器は、磨製石庖丁2点（図版80－758・759）が出土している。

土器だまり303（図版11）　イ－10区に遺物が広く集積していた。弥生前期後葉の土器が多量に出土している（図版46－169～184、図版47－185～194、図版48－195）。

169～178は壺である。172は小型の壺で頸部に沈線を施す。175は頸部に5条の沈線を施し、沈線の下端は削り出し突帯状に仕上げる。169は突帯が完全に剥落しており、上下に2条ずつ沈線を施す。170は頸部に4条以上の貼り付け突帯を施す。口縁部が大きく開くこの時期独特の器形を呈する。171は頸部の6条の貼り付け突帯の下に2対1単位の突起を貼り付ける。173は頸部に4条の貼り付け突帯を施す。174は胴部上半に6条以上の沈線、胴部最大径部に4条の貼り付け突帯を施す。176～178は壺の底部である。179～184は鉢である。179は口縁部の外反部が小さく、無文である。180・181・183・184は強い熱を受けており、融解している。182は大型の鉢の底部であろう。185～195は甕である。185は如意形口縁で、胴部上半に13条のヘラ描き沈線を施し、その下に2対1単位の突起を多数貼り付ける。胴部のハケメ調整が顕著である。186は、「く」の字状の口縁部を有する。胴部上半に5条の沈線を施す。口径は大きく相当の容量を有する。187は如意形口縁の甕で、胴部上半に2条の沈線を施す。これもハケメ調整が顕著に残る。188は逆「L」字状口縁の甕である。胴部上半に5条の沈線を施す。189は如意形、無文の小型甕である。190も如意形口縁の小型甕で、口縁端部の刻みはなく、胴部上半に2条の沈線に囲まれた2条1単位の山形文を施す。191～195は甕の底部である。194は相当の容量が考えられ、195は大型の鉢の可能性もある。

石器は、打製石斧1点（図版77－738）、両刃石斧2点（図版79－749・751）、磨製石庖丁1点（図版81－769）、砂岩製の台石2点（図版82－772・773）が出土している。

土器だまり304　イ－8区に広がりを持つ。数点の弥生前期後葉の土器が出土している（図版48－196～

200)。

196・198～200は壺で、196は口縁部内面に三角柱状の工具による刺突を施し、ジグザグ状の文様をなす。また、２個１組の紐孔を施す。内面は紐孔周辺に竹管による刺突を施している。また、その下部に断面三角形の無刻みの突帯を施す。なお、破損によって明らかにはしえないが、突帯は一部でくびれており、口縁端部へと続くものと考えられる。口縁端部には竹管による刺突を施す。頸部に貼り付け突帯を施している。198は口縁部片である。199は頸部に２条の貼り付け突帯を施した下に、４条以上の沈線を施す。200は頸部に６条のヘラ描き沈線を施し、胴部には２条１単位の沈線間に竹管文を施す。197は壺蓋である。

土器だまり305　ア･イ－１・２区に広がりを持つ。弥生前期後葉の土器が出土している（図版49－201～206)。

201・204は壺である。201は大型で、頸部に５条、胴部上半に３条、胴部最大径部に５条の貼り付け突帯を施す。204は頸部に４条の貼り付け突帯を施す。202・203・205・206は甕である。202は如意形口縁で、最大径は胴部にある。外面はハケメが顕著で、内面に板ナデ痕を残し、無文で底部を焼成前に穿孔する。203は如意形口縁の小型甕で、口縁端部は無刻みで、胴部上半に８条のヘラ描き沈線を施す。205は無文の甕で、逆「Ｌ」字状口縁を呈する。最大径は胴部にある。206は逆「Ｌ」字状口縁の甕で、頸部に４条の沈線を施す。

土器だまり306　ア－６区に広く分布する。同じく弥生前期後葉の土器が出土している（図版50－207～216)。

207～212・214・215は壺である。207は口縁端部に１条の沈線を施した後、刻目を加える。頸部には貼り付け突帯を施し、胴部上半には７条のヘラ描き沈線、胴部最大径部には上下２条の沈線の間に２条の貼り付け突帯を施す。頸部には紐孔を有する。208・210は壺の口縁部片である。209は頸部に細い沈線を２条施し、211は胴部に上下２条の沈線の間に２条の貼り付け突帯を施す。212は底部である。214は頸部に数条の沈線を施し、胴部に上下２条の沈線の間にレンズ状の突帯を施す。215は頸部に６条の沈線を施し一部に刻目を入れる。頸胴部界には削り出しの段を有する特異な器形である。213・216は大型の鉢で、いずれも如意形口縁を呈する。213は無文である。外面はハケメが顕著で、内面のヘラミガキと好対照をなす。216は胴部上半に３条の沈線を施す。

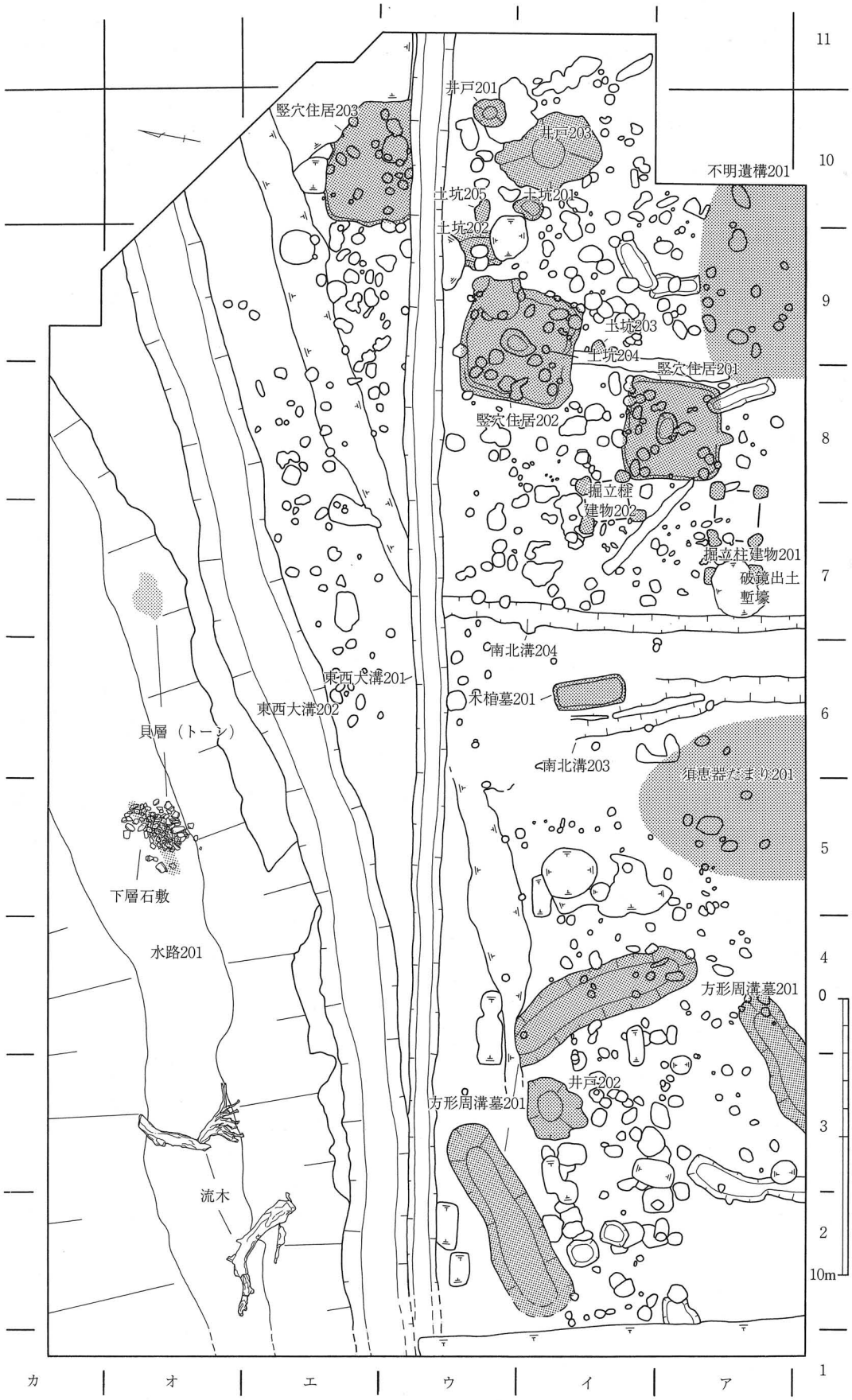
２　第２遺構面　弥生時代中期（Ⅳ期）から中世の遺構と遺物

第２遺構面においては弥生時代中期（Ⅳ期）から中世にいたる多数の遺構を検出した（第７図)。以上のうち、時期が明確で性格の明確な遺構のみ以下に略述する。

方形周溝墓201（図版12）　調査区南西隅に位置する。４隅が切れるタイプである。溝の幅2.0m 程度、深さ0.2～0.4m をはかる。復元で一辺約8.0m の正方形である。主体部は残存していなかった。東側の溝から供献されたと考えられる完形の壺が出土している。この壺から時期は弥生中期後葉（Ⅳ期）のものとみられる。

図版51－217がその細頸壺である。口縁部付近に３条の凹線、口頸部界に貼り付け突帯を施し、胴部最大径付近にハケメ原体による連続刺突文を施す。調整は、外面にハケメ調整を施し、底部付近にヘラミガキを施す。内面は、胴部下半にヘラケズリないし板ナデ、頸部にユビオサエを施す。

竪穴住居201（図版13）　ア･イ－８区に位置する。平面プランは隅丸方形である。多数のピットを検出



第７図　第２遺構面遺構配置図（弥生中期（Ⅳ期）～中世）

したものの、明確な柱穴はなかった。大きめの炉跡を中央に有し、周溝がめぐる。竪穴の規模は一辺約３.4mで、炉には炭化物が大量に含まれており、居住空間はほとんどない。鍛冶遺構の可能性も考えられる。時期は、出土土器から庄内式新相併行期と考えられる。

図版51－218・219がその鉢である。218は外面にヘラケズリを施し、内面に縦方向の暗文を施す。219は内面・外面ともハケメを施し、内面に縦方向の暗文を施す。

住居床面からは台石（図版82－776）が出土した。鉄製品の砥石として使用したと考えられる。

竪穴住居202（図版14）　イ・ウ－８・９区に位置する。平面プランは同じく隅丸方形である。規模・諸遺構とも性格が竪穴住居201にきわめて類似している。同様に鍛冶遺構の可能性も考えうる。時期は、出土土器が細片のため明確ではないが、同様に庄内式新相併行期の可能性を考えられる。

竪穴住居203（図版15）　エ－10区に位置する。平面プランは、隅丸方形である。規模は北東側をバックネットによる攪乱、南方を東西大溝201により破壊されているため明確ではないが、残存部から考えて、竪穴住居201･202と同様の形態・規模・機能を有するものである。出土土器はいずれも細片で、明確な時期は決定できない。

掘立柱建物201（図版16）　ア－７・８区に位置する。東西２間約3.2m×南北１間約1.9mである。建物の西側は攪乱によって一部破壊されている。柱穴はいずれも正方形で、一辺約0.6m、深さ0.4～0.6mである。出土遺物が無く時期は不明であるが、後述する東西大溝201・東西大溝202、水路201いずれかに付随するもので、古代から中世に属するものと思われる。

掘立柱建物202（図版17上）　イ－７・８区に位置する。東西・南北とも１間分を検出した。時期は不明であるが、掘立柱建物201と同様東西大溝または水路に付随するものと考えられる。

以上のほかにも多数の柱穴とおぼしきピットを検出した（第７図）が、確実に建物跡として認識できたものはない。

井戸201（図版17下）　ウ－10区に位置する。径約1.1m、深さ1.0m以上をはかる。湧水のため完掘していない。時期は古墳時代初頭と思われる。

図版51－220は土師器の甕である。球状の胴部を有し、「く」の字状に屈曲し、ほぼ直線に立ち上がる。口縁端部のつまみ上げ、肥厚はほとんど認められない。調整は、外面は底部付近にヘラケズリの痕跡を残すが、胴部はタテハケである。内面は、底部・口縁部付近にユビオサエが認められるほかは、ほぼヘラケズリでしめられる。布留１式（寺沢1986）に相当する。

井戸202（図版18）　イ－３区に位置する。２段の掘り込みを有し、上面径2.3m程度、下段径1.5m程度、深さ2.0m以上をはかる。湧水のため完掘していない。下層部分には17本の杭が打ち込まれていた。時期は古墳時代前期後葉である。

図版51－222は弥生Ⅳ期の甕で、混入である。図版51－221は土師器の甕である。布留４式である。

井戸203　イ･ウ－10区に位置する。径約3.0mをはかる。湧水・埋土の崩落が著しく十分に調査しえなかった。上層部から多量の土器が出土している（図版52－223～234）。

庄内式期前半の広口壺（231）や庄内式期後半の甕（224）、布留１式の甕（223）も出土しているものの、225～230・232～234から布留４式、古墳時代前期後葉に位置づけておきたい。225は小型の甕である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、胴部のタテハケはややあらく、器壁も厚い。内面調整は胴部にヘラケズリ、口縁部にハケメの痕跡をわずかに確認しえる。226は甕で長胴化が著しく、器壁も非常に厚いつくりである。調整は外面にあらいタテハケを施し、内面は基本的にはハケメで、胴部上半の一部

にヘラケズリを施す。227は小型の甕で、胴部は長胴化が認められる。口縁部の立ち上がる角度は緩く、口縁端部は細く仕上げる。外面調整は斜め方向のハケメ、内面は胴部下半にユビオサエが認められ、胴部上半・口縁部にはヨコハケが認められる。228は椀である。外面に板ナデの痕跡を残す。229・230・232～234は高杯である。234はほぼ直線気味に、ほかは椀状に立ち上がる。232・233の脚部は脚柱部から裾部へやや屈曲気味に移行する。232には円形のすかし孔を認めることができる。調整は、脚部に一部板ナデがみとめられるものの、基本的にはナデ仕上げである。

不明遺構201　ア－８～10区に位置する。

図版53－235・236は田辺編年MT15様式の須恵器蓋杯である。そのほかにも図化できない小片が出土している。おおむねMT15様式に相当し、古墳時代後期前葉に位置づけることができる。

須恵器だまり201　ア・イ－５・６区で検出した。ほとんど須恵器ばかりが出土（図版53－237・239～244、図版54－245・246）し、土師器はごく少数（図版53－238）であることからこの遺構名をとっている。

238は土師器の皿である。外面にヘラケズリを施し、内外面に赤彩を施す。237は長頸壺の底部であろう。239は蓋である。240・242は短頸壺で、242は把手が剥離している。241は平瓶、243～246は甕であろう。時期は平城宮Ⅲ期、８世紀前葉に相当する。

木棺墓201（図版19）　イ－６区で、ほぼ南北方向を主軸に残存していた。長方形を呈し、長辺2.6m、短辺1.0mをはかる。木棺の一部も残存している。人骨は相当に風化が進みながらも残存していた。頭を南へ向けて安置している。人骨南側の棺内には２点の回転台土師器が出土している（図版70－619・620）。ともに足高高台付杯である。619は口縁部外反ぎみに立ち上がる。一方620は内湾気味である。ともに回転ナデ調整。特徴は、後述の水路201上層出土のものと共通しており、いずれも赤褐色の精良な胎土である。時期は11世紀前葉と考えられる。

東西大溝201（図版20上）　調査区ほぼ中央に位置する。東西大溝202・水路201がやや北に振れた方位を示しているのに対し、この溝が、ほぼ東西正方位に掘削されている点は興味深い。幅1.0m、深さ0.4m内外である。東西大溝202に切られており、これより前に掘削されたことは間違いない。

埋土からはおもに須恵器が出土しており（図版68－577～581）、時期は７世紀後葉、飛鳥Ⅳ期に相当する。580の杯は田辺編年MT85様式に相当し本遺構出土土器のなかでは古い様相を示す。一方577の広口壺、578・579の蓋、581の短頸壺はTK48様式で、この遺構の時期を示している（田辺1981）。

東西大溝202（図版21）　調査区中央やや北寄りを、北東方向に向かう。ほぼ本地域の現代の地割りと同方向に掘削されている。幅約3.0m、深さ約0.6mをはかる。東西大溝201、水路201を切っており、これらの埋没後に掘削されたものである。方向は東西大溝201とは若干ずれている。これが、条里制にともなう溝で、当初は正方位であった東西大溝201を受け継いだものである可能性は、検討を有するものの十分に考えられる。なお、この溝の北側には、高さ20cm程度の土手状の盛り土を検出した。土錘が26点も出土したことは特徴的である。また、出土した哺乳類骨が全点ウマの歯である点は興味深い。時期は後述のように、出土瓦器椀から判断して13世紀前半まで下がると考えられる。

出土遺物（図版68－582～592、図版69－593～609）には多くの弥生・古墳・古代の土器が混入しており、相当残りのよい破片に関しては図化し、掲載した。582～584・586は弥生Ⅴ期後半の土器である。585・587・591は庄内式併行期の土器で、588～590・592は古墳時代前期の土器である。593は円筒埴輪片である。597の杯も古墳時代後期の須恵器で、594の蓋、596の壷、598の杯も、それぞれ６～８世紀代

の須恵器であろう。595の須恵器皿、599・600の土師器甕、602の土師器釜（摂津型、11世紀代か？）、603・604・606・607の土師器皿も確実な時期を決定する資料とはなりえない。ところが、601の瓦器脚付羽釜、605・608・609の瓦器椀はこの遺構の時期を決定する重要な資料である。瓦器脚付羽釜は、内湾する口縁部を持ち、外面のユビオサエが著しい。胎土に相当量の雲母が含まれており、本地域の土器としては異質であって、山城型（菅原1989）の可能性がある。瓦器椀は、いずれも胴部なかほど（605）ないしは胴部上半（608・609）に屈折部を持っている。605は風化のため調整が明らかではないが、底部は回転糸切り技法である。608・609は内面には暗文を施し、外面にはユビオサエが顕著である。以上のうち608・609は和泉型瓦器椀Ⅲ－１ないしⅢ－２期の特徴を有している（尾上1983、橋本1992）。これらからこの遺構の下限は13世紀前半と判断しえる。なお、本地域ではこの時期、和泉型瓦器椀の出土例が増加しつつある（勝浦1995）。

土製品は、平瓦１点・土錘26点・鞴の羽口１点・不明土製品２点・土鈴１点（図版79－709）が出土している。平瓦は外面にタタキ、内面に布目痕を残す（図版71－642）。土錘は管状土錘が26点（図版72－643・647・648・650・651・655・658・659・663・665～669・672・674・675・677・図版73－678・680～684・686・687）出土している。鞴の羽口（図版74－703）は小破片である。不明土製品は球状を呈し、沈線を施す（図版74－707・708）。

南北溝203（図版20下左）　南北方向の浅い溝である。遺物が少なく、時期は明らかではないが、南北溝204と同性格の遺構であると考えられる。

南北溝204（図版20下右）　南北溝203と同様の浅い溝である。東西大溝201に切られており、９世紀以前に掘削されたものと思われるが、確実に時期を決定しえる遺物を欠いている。

水路201（図版22）　調査区北端に接するように、南西方向から北東方面へと向かう。幅7.0m 以上、深さ約2.0m をはかる。断面プランや杭が出土しているところからみて、眉山からの谷川ないし鮎喰川の伏流水に人工的な改変を加えた用水路と考えられる。なお、最下層部からは、流木２本と人頭大の石敷を検出している（第７図）。

この遺構からは大量の遺物が出土しているが、おおむね上下２層に区分しえる。下層（第26層～第39層）は10世紀後葉の土器が出土している（図版60～図版67）。一方、上層（第１層～第25層）からは、10世紀後葉のものとともに11世紀前葉の土器が出土している（図版57～図版59）。上層中には土器だまりと貝層（24層中）が認められる。これらから出土した土器にはある程度の一括性を認めてもよいだろう。この貝層・土器だまりからは11世紀前葉の土器が出土している。以上からこの溝は、おおむね、10世紀後葉までには掘削され、11世紀前葉にかけて埋没したと考えられる。出土土器の圧倒的多数を占めるものは回転台土師器皿・杯である。

図版55は土器だまり出土土器である。いずれの器種も回転ナデ調整、底部回転ヘラ切りが基本で、ナデ消しを施したものもある。赤褐色、精良な胎土を持つ。247～278は土師器皿で、279～281は土師器杯である。282～290は土師器足高高台付皿で、本遺構上層には一般的であるが、下層からは１点しか出土しておらず、時間差を示している。291・292は黒色土器Ａ類椀で、292は内面の暗紋が顕著である。293は黒色土器Ｂ類椀で、内面に暗紋を施す。

図版56は貝層出土土器である。294～305は土師器皿で、306～309は土師器杯である。ともに回転ナデ調整で、底部はヘラ切り、一部ナデ消すものもある。310・311・315・316は黒色土器Ｂ類椀で、312～314・317は黒色土器Ａ類椀である。318は土師器甕で、外反する口縁部を持つ。内・外面ともあらいハ

ケメ痕が著しい。また、外面のススの付着が顕著である。

貝層はヤマトシジミ・マシジミ、ハイガイ、ハマグリを主体とし、ニホンジカ、ウシ、ウマなど哺乳類骨も出土している（第5章参照）。

土製品は管状土錘2点（図版72－670、図版73－690）、鞴の羽口の小片1点（図版74－702）が出土している。また、釣針状鉄製品（本章第5節参照、第9図）もここから出土した。

図版57～図版59は土器だまり・貝層以外の水路201上層出土土器である。319～363は土師器皿で、364～392は土師器杯である。ともに回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切り、これをナデ消すものもある。388は内・外面ともに赤彩を施す。393は土師器足高高台付皿で、回転ナデ調整。394～400は土師器足高高台付杯である。395・396・398はゆるく外反する口縁部で、397・399・400は内湾する。いずれも回転ナデ調整である。401・402は土師器高台付椀である。403～407・409は黒色土器A類椀で、内面のヘラミガキが顕著である。408は黒色土器B類椀で、内外面ともヘラミガキを施す。410は土師器鍋で、外反する口縁部を持つ。411は土師器甕、外反する口縁部を持つ。いずれもあらいハケメを施す。412は須恵器甕である。

土製品は管状土錘5点（図版72－644・671・676、図版73－689・692）、棒状土錘1点（図版73－696）、不明土製品（土馬の破片か？）1点（図版74－706）、土鈴の破片1点（図版74－710）が出土している。

水路201上層からもニホンジカ、ウシ、スッポンなどの哺乳類・爬虫類骨のほか、人骨の細片5点も出土している。

図版60～図版67は水路201下層出土土器である。413～452は土師器皿である。418は本遺構唯一の手づくね土器で、畿内からの搬入品と考えられる。431・433～439・441・450は、内面ないし外面に赤彩を施す。439は内・底面ともに、436・441・442は内面に、437・438・440は底面に刻書を施す。453～506は土師器杯である。501は8世紀代の混入で、畿内からの搬入品と考えられる。461・477・480・482～487・500・503・505は内面ないし外面に赤彩を施す。503・506は内面に、504・505は内・底面ともに刻書を施す。507は土師器足高高台付皿で、508・509は土師器足高高台付杯である。510～513・515・516は土師器高台付椀で、うち512・513・516には内面ないし内・外面に赤彩を施す。514は黒色土器B類椀で、517・518・520・521は黒色土器A類椀である。いずれも内面のヘラミガキが顕著で、518は外面にも施す。519は坩堝である。522～524は土師器甕で、「く」の字状に強く屈折する。523は口縁端部に沈線を施す。内・外面にあらいハケメを施す。525・526は甑の把手である。

水路201下層出土土器はおおむね10世紀後葉から11世紀前葉の土器でしめられるが、弥生・古墳時代から8・9世紀代の土器も混入している。以下に主要なものを示しておこう。527は弥生V期の鉢、528は古墳時代前期初頭の小型丸底壺である。529～531は須恵器の杯で、いずれも9世紀代のものである。532～535は須恵器の甕で、8・9世紀代の所産である。536は須恵器壺の底部で、8世紀代と考えられる。537・538・543・544・545は須恵器蓋である。543はTK47様式である。537・538は6世紀で、544・545は7世紀後葉～8世紀前葉のものである。539は須恵器短頸壺で、6世紀後葉のものと思われる。540は須恵器瓶子で8世紀代のものである。541・542・546・547は須恵器杯である。541・546は6世紀後葉、542・547は8世紀前葉の所産である。548は灰釉陶器の皿で、9世紀中葉に属する。

下層からは墨書土器も認められた（図版65－549～554、図版66－555～560、図版67－561～564）。いずれもほかの下層出土土器と同時期とみて相違あるまい。墨書のある土器はすべて土師器杯・皿で、564が内面に書く以外はすべて底面である。以下、判読は福家清司氏の論考（1984）と同氏の助言によ

るところが大きい。549は「賀専當」と記してある。550・551は「加毛」と考える。552は「□原」である。553は絵画と思われる。554は破損していないものの判読できない。555～557は「六」である。558は「九」である。559は「くりや」と考えたい。560～564は破損のため判読できない。

図版67－565～576は製塩土器である。565～569は厚手・無文である。いずれもナデ調整で、内湾ぎみに立ち上がる。570～572は同じく厚手で、２次焼成が著しい。内面に布目を残す。焼塩土器と思われる。573～576はやや薄手で、内湾ぎみに立ち上がる。外面にあらいタタキメを残す。

土製品は管状土錘が10点（図版72－645・646・649・652・654・673、図版73－688・691・693・694）、鞴の羽口小片２点（図版74－700・701）、土製紡錘車４点（図版74－711～714）が出土している。

下層からは、本調査出土木製品の大半が出土している。このうち、原形を明確にとどめ、器種を確認できた166点を図示した。これらが、おおむね本遺構出土木製品の傾向を示しているとみてよい。以下、奈良国立文化財研究所の分類基準を参考に記述する（奈良国立文化財研究所1985）。

祭祀具は最多の74点を占める。なかでも斎串の59点がもっとも多い（図版90－842～851、図版91－852～866、図版92－867～893、図版93－894～900）。斎串は上端を圭頭状に、下端を剣先状に仕上げるものがほとんどである。なかでも、上下からの複数の切り込みを入れるものが多く（842～844・846～848・850・851・897）、下からの切り込みを欠くもの（845・849）もある。人形は５点出土している（図版93－901、図版94－902～905）。901は長さ105cmをはかり、両側からＶ字の切り欠きを入れ、頭部をつくる。902は頭部に被り物をあらわし、両側からＶ字の切り欠きを入れ、頭部をつくる。903・904には顔の表現がある。武器形木製品は５点出土している（図版94－906・911～914）。うち906は刀形、911～914は鏃形である。ほかに、鳥形木製品４点（図版94－907～910）、舟形木製品１点（図版94－915）が出土している。舟形は船首を尖らせている。船尾は完結しておらず、孔を穿っていることから、部材を組み合わせたものとみられる。

次いで、容器が45点出土している。ヒョウタン製の容器片２点（図版96－939・940）、漆椀２点（図版96－941・942）、柄杓１点（図版97－945）、栓１点（図版97－948）、円形曲物蓋板12点（図版98－960～970、図版99－971）、円形曲物底板11点（図版99－972～975、図版100－976・977・979～983）、方形曲物底板１点（図版100－978）、曲物側板15点（図版101－984～998）である。底板にはそれぞれ要所に結合孔があり、皮紐を残している。

食事具は13点で、箸または串11点（図版96－928～938）、杓子２点（図版96－943・944）が出土している。

服飾具は10点で、下駄１点（図版97－949）、扇子２点（図版97－951・952）、横櫛７点（図版97－953～959）である。

農工具は２点で、横槌１点（図版97－946）、木槌１点（図版97－947）である。

武器（狩猟具）は丸木弓１点（図版97－950）である。

ほかに、用途不明木製品３点（図版94－916、図版95－917・918）、杭４点（図版95－919～922）、棒状木製品５点（図版95－923～927）、部材６点（図版102－999・1000・1004～1007）、板状木製品３点（図版102－1001～1003）などが出土している。

水路201下層からは、このほかにもモモの種子をはじめとする多量の植物遺体やニホンジカ、ウシ、ウマ、イノシシ、タヌキなど動物骨が出土している（第５章第３節第１表）。

土坑201～土坑204（図版23）　いずれも調査区東端付近から検出した。水路201の上層と同時期の土師

器が出土しており、ほぼ同時期に機能していたものと考えられる。

土坑201　イ－10区に位置する。

土坑202　ウ－９区に位置する。

土坑203　イ－９区に位置し、竪穴住居202を切っている。11世紀前葉の遺物が出土している（図版70－617・618）。いずれも土師器で、617は皿、618は椀である。

土坑204　イ－９区に位置する。11世紀前葉の遺物が出土している（図版70－612～616）。いずれも土師器で、612は甕である。口縁端部に沈線を施し、胴部にタタキメのちハケメの痕跡を残す。613は皿である。614は足高高台付皿で、615・616は杯である。

土坑205　ウ－10区に位置する。

そのほかの遺構　以上のほかにも多数の土坑・ピット・溝が存在する（第７図）。いずれも時期が明らかではなく詳述しない。

3　第１遺構面　近世から近代の遺構と遺物

第１遺構面では近世・近代の遺構を検出した（第８図）。

東西大溝101（図版25上）　イ－２区からエ－10区にむかって東西に展開する溝である。幅2.0m、深さ0.4m内外である。掘削時期は近世である。埋没時期は、明治初期の兵営造営期から一部は戦後まで「窪み」として残存していたようで、上面には多量のゴミ類が投棄されていた。規模・方向からみて、東西大溝201・同202を受け継いだ条里制の区画にともなう溝である可能性が高い。文化５（1808）年作成の『名東郡村浦分間絵図』中の『佐古村蔵本村分間絵図』記載の道路・溝ともほぼ位置、方向が一致しており、これに対応するものと思われる。

遺物はわずかである（図版69－610・611）。図示した２点は、いずれも幕末のものである。610は磁器皿の底部である。611は瓦器の羽釜である。

溝102～111（図版25中）　調査区南半に展開する南北方向の溝である。ほぼ３～５m間隔に深さ0.2m程度、幅0.8m程度に掘削されている。溝110が東西大溝101を切っており、これらは大溝埋没後兵営造営までの間、すなわち幕末・維新期に、畑の畝などの機能を果たしていたものと考えられる。遺物は細片ばかりであるが、陶磁器が出土している。

石敷暗渠（図版24・25下）　東西・南北方向に石敷きの暗渠を検出した。東西大溝101へと続いており、これと有機的関係をもっていたものと考えられる。これも近代兵舎造営前に水田に付随して機能していたと考えられる。

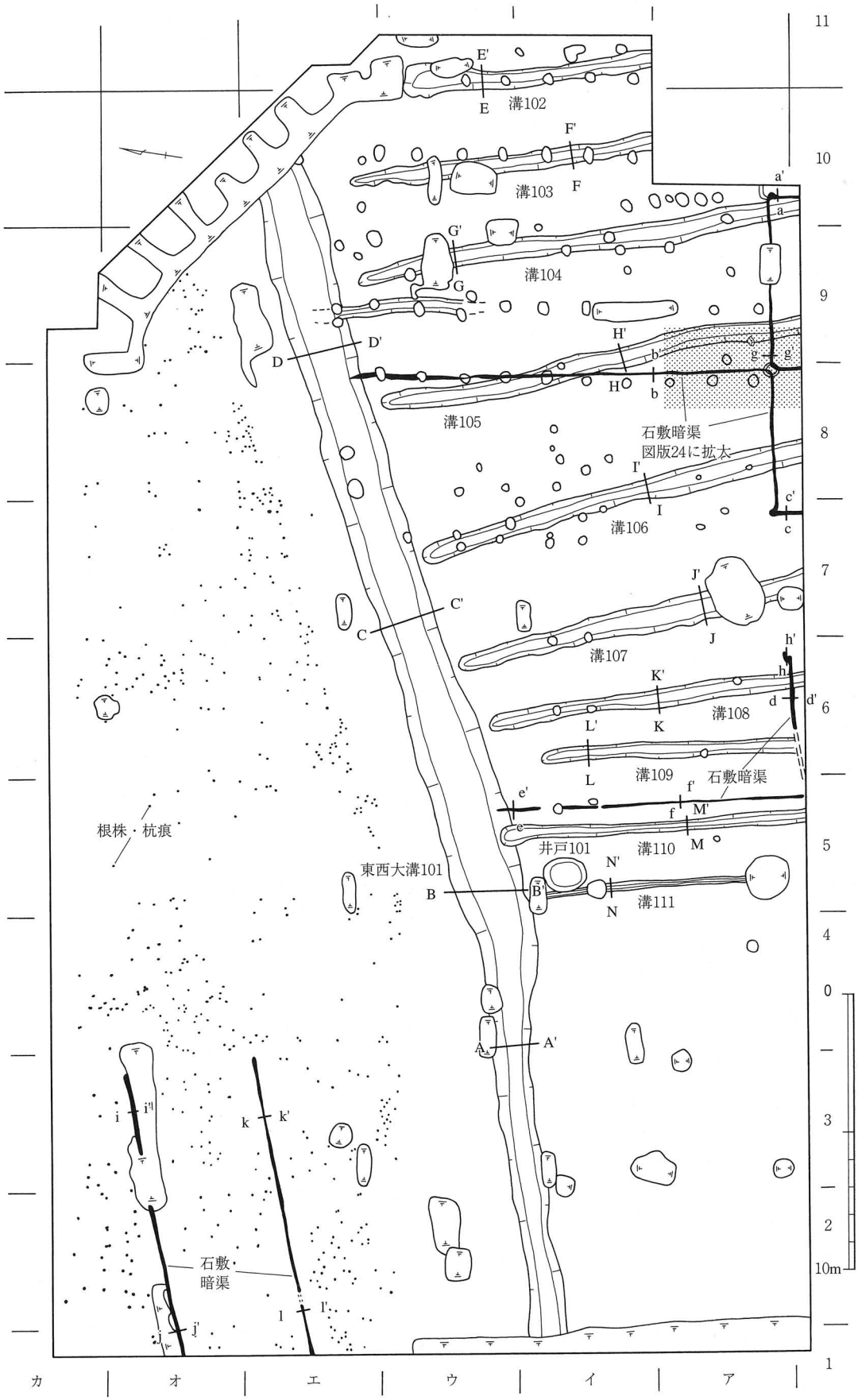
井戸101（図版26）　イ－５区に位置する。径約1.7m、深さ約0.6mをはかる。東西大溝101に付属していたと考えられる。遺物は細片ばかりで、時期は幕末以降と考えられる。

そのほかの遺構　以上のほかに東西大溝101より北側から、多数の植物の根株痕ないし杭痕を検出した。また、東西大溝101を切る小溝１条も検出しているが、出土遺物はない。また、兵営時に掘削された塹壕を20基ほど検出した。

4　包含層出土・時期不明の遺物

以下、遺構出土の混入と考えられるものや、包含層などから出土した遺物を図示する。

図版70－621～639に弥生前期から古代の土器・須恵器を図示した。



第８図　第１遺構面遺構配置図（近世～明治期）

土製品は平瓦１点（図版71－641）、管状土錘９点（図版72－653・656・657・660～662・664、図版73－679・685）、有溝土錘１点（図版73－695）、棒状土錘３点（図版73－697～699）、鞴の羽口片２点（図版74－704・705）を図示した。これら土製品の時期を特定することは難しいが、各種と同型式のものが東西大溝202ないし水路201から出土している場合が多い。したがって、10世紀後葉から13世紀前葉におさまる可能性が高い。

石器は石鏃11点（図版75－715・717・719～727・729）、石鏃未製品１点（図版75－730）、石錐２点（図版75－732・733）、大型直縁刃石器（ただし、石鏃などの素材として持ち込まれた可能性もある）１点（図版76－734）、スクレイパー２点（図版76－735・736）、打製石斧２点（図版76－737、図版77－739）、扁平片刃石斧３点（図版77－740～742）、小型方柱状片刃石斧１点（図版77－744）、柱状片刃石斧３点（図版78－745・746・748）、両刃石斧２点（図版79－752・753）、砂岩製の不明石器１点（図版79－754）、打製石庖丁１点（図版80－757）、磨製石庖丁７点（図版80－756、図版81－762～764・767・768・770）、石製紡錘車１点（図版81－771）、台石２点（図版82－775、図版83－777）、凹石１点（図版83－778）、敲石６点（図版83－779、図版84－781、図版85－782・783、図版86－784・785）、軽石製品１点（図版86－786）、砥石２点（図版86－787・788）を図示した。石器の大半は元来第３遺構面諸遺構、すなわち弥生時代前期末・中期初頭のものであろう。ただし、一部の台石、敲石、砥石は鍛冶などにかかわるものであった可能性があり、その時期は弥生後期以降に下がる。

石材利用の特徴としては、石鏃・石錐をはじめとする剥片石器・打製石器類に金山産サヌカイトを利用し、礫石器・磨製石器類に地元産石材を利用する傾向がある。後者をより詳しくみると、加工斧や小型の磨製石器類に結晶片岩や粘板岩、シャールスタイン（小豆色の石）を利用し、伐採斧に御荷鉾帯緑色岩類を利用する。さらに、打製石器でも打製石庖丁や打製石斧といった植物採集にかかわる石器は地元産石材を使用する傾向がある。台石・砥石の大半は砂岩で、敲石にはひん岩を多用する。

玉類・石製品は、滑石製臼玉16点（図版87－789～804）、ガラス製小玉２点（図版87－805・806）、仏具とおぼしき球状のガラス玉２点（図版87－807・808）、管玉３点（図版87－809～811）、勾玉２点（図版87－812・813）、滑石製の勾玉形石製品４点（図版87－814～817）、滑石製の双孔円盤２点（図版87－818・819）、同じく滑石製の紡錘車形石製品２点（図版87－820・821）を図示した。玉類・石製品の大半は元来古墳時代中・後期のものと思われる。ただし、管玉の一部は弥生時代にさかのぼる可能性がある。また、球状のガラス玉は、古代～中世の仏具の可能性がある。

金属製品は青銅製品９点（図版88－822、図版89－823～830）、鉄製品９点（図版89－831～839）を図示した。822は斜縁鏡の破鏡である。アー７区塹壕（第７図）より出土した。復元径12.5cm、重量5.54gをはかる。ちなみに、本遺跡では、1999～2000年におこなわれた第17次中央診療棟地点においても、異体字銘帯鏡の破鏡が出土している。823は銅製銙帯の巡方である。長さ1.75cm、幅2.05cm、重さ4.13gをはかる。すでに調査地周辺では銅製１点、石製１点の銙帯が出土しており、付近に官衙関連の施設があった傍証となる貴重な資料を蓄積したことになる。824・825は用途不明。826・827は銭種不明の銅銭である。828は皇朝十二銭の最後（958年）に初鋳された乾元大宝で、径1.90cm、2.87gをはかる。水路201検出中に、南岸肩付近より出土した。829は鑿、830は鰐口であると考える。831～833は板状の鉄製品、834は不明鉄製品、835～839は釘、棒状鉄製品である。

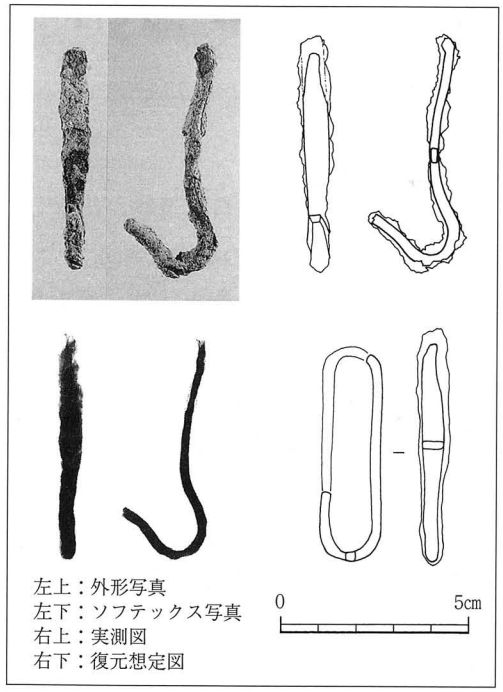
骨角器は２点（図版89－840・841）を図示した。840・841はニホンジカの角の先端に加工を加えた製品である。

5　庄遺跡出土の釣針状鉄製品について

徳島市庄遺跡徳島大学蔵本団地体育館地点より出土した一鉄製品について、発掘当初より釣針とされてきた。当時鉄製釣針のソフトＸ線撮影を続けていた筆者も、釣針として借用して紹介した（渡辺編1995）。

しかし近年返却に際し再検討をしたところ、釣針としては疑問視されることとなった。理由は形態観察が不十分だったことにあるが、その前提に鉄製釣針の類例を１点でも多く集成したいという希望があったためである。

この鉄製品の両端は断面が四角形であるが、中の長い部分は叩かれて扁平になり、断面は長方形である。そして全体として変形していると考えられる。ソフトＸ線による撮影当時は、それらのうち釣針とみるのに都合のいい下部の曲がり部分のみを見ていたことになる。しかもその先端は折れていて、釣針にとって重要なかえしが観察できないのが残念である。



第９図　釣針状鉄製品

したがってこの変形の本来の姿を推定すると、両端の長い長方形となる。材料は一辺３～４㎜の四角い棒を曲げて長方形に接合し、その長辺部分を叩いて扁平化したと考えられる。ただしその用途については不明である（第９図）。

参考文献

尾上　実　1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念　古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

勝浦康守　1995「Ⅱ各地の土器様相　11 四国　3 阿波」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

古代の土器研究会編　1992『古代の土器１　都城の土器集成』

古代の土器研究会編　1993『古代の土器２　都城の土器集成Ⅱ』

古代の土器研究会編　1994『古代の土器３　都城の土器集成Ⅲ』

菅原正明　1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』19　国立歴史民俗博物館

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

寺沢　薫　1986『矢部遺跡－国道24号線橿原バイパス建設に伴う遺跡調査報告Ⅱ－』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49　奈良県立橿原考古学研究所

奈良国立文化財研究所　1985『木器集成図録　近畿古代編』奈良国立文化財研究所史料27

橋本久和　1992「瓦器椀研究をめぐって」『中世土器研究序論』真陽社

福家清司　1984「庄遺跡出土の墨書土器銘「賀専当」について」『高校地歴』20　徳島県高等学校教育研究会地歴学会

渡辺　誠編　1995『考古資料ソフテックス写真集』10

第５章　人骨・自然遺物・自然科学的分析

第１節　概要

本遺跡では、多量の自然遺物が出土した。木棺墓201出土人骨をのぞくこれらの大半は、東西大溝202ないしは水路201からの出土である。とくに、水路201からはおびただしい量の哺乳類骨・貝類・種子が出土した。貝類はコンテナ16箱、総重量68.3kgにもおよぶ。このうちヤマトシジミ・マシジミがもっとも多く49.6kg、ついでハイガイ15.4kg、ハマグリ2.7kg、巻貝類0.23kg、オキシジミ0.09kgと続く。マガキ、アサリ、その他の貝は極少量である。以上のうち、ヤマトシジミ・マシジミ、ハイガイ、ハマグリ、オキシジミの主要４種について、平均的な大きさの半片20点（オキシジミのみ５点）を抽出し、その平均重量を２倍したところ、ヤマトシジミ・マシジミ6.3g、ハイガイ13.3g、ハマグリ16.6g、オキシジミ8.7gとなった。おおむねこれが１粒あたりの平均重量となろう。この４種それぞれの総重量からさきの１粒あたりの平均重量を割り、４種の概数を算出した。結果はヤマトシジミ・マシジミ約7,873個体、ハイガイ約1,158個体、ハマグリ約163個体、オキシジミ約10個体となった。なお、貝類の所見については、第４節を参照されたい。

つぎに、水路201からは629点の植物種子が出土している。このうちモモが618点で、圧倒的多数を占めている。ついで、マツが８点、オニグルミが３点である。所見は第５節を参照されたい。

なお、炭化米分析に供した試料は土坑308、土坑315より出土したものである。また、年代測定の試料は土坑308出土の炭化物である。

第２節　人骨

山田　正興（徳島大学名誉教授）

人骨は、木棺墓201よりほぼ全身のものが、水路201上層より上半身の細片が５点出土している。このうち、鑑定可能な木棺墓201出土人骨について以下に鑑定結果を記しておきたい。人骨の残存状況はきわめて悪く、数値はあくまでも推定である。

性別　不詳

年齢　熟年

身長　男性であれば157cm前後、女性であれば160cm前後

死後硬直のまま仰臥伸展葬をおこなっていたと考えられる。

第３節　哺乳類・爬虫類骨

本遺跡出土の哺乳類・爬虫類骨は、すべて東西大溝202、水路201からの出土である。東西大溝202は、すべてウマの歯からなっており、水路201は、ニホンジカ・ウシ・ウマを中心とする。なお、鑑定は富岡直人氏（岡山理科大学理学部）による（第１表）。

第１表　哺乳類・爬虫類骨観察表

番号	整理番号	写真番号	出土遺構･層位	種名	部位	備考
1	8	5	水路 201 貝層	ニホンジカ	下顎骨	
2	9	6	水路 201 貝層	ニホンジカ	肩甲骨	
3	10	7	水路 201 貝層	ニホンジカ	橈骨	
4	11		水路 201 貝層	ニホンジカ	中足骨	
5	16		水路 201 貝層	ニホンジカ	頸椎 M	
6	17	9	水路 201 貝層	ニホンジカ	脛骨 R	
7	18		水路 201 貝層	ニホンジカ	頸椎 M	椎体＋骨幹部
8	19		水路 201 貝層	ニホンジカ	大腿骨 R	
9	57	16	水路 201 貝層	ニホンジカ	下顎骨 L	
10	13		水路 201 貝層	ウシ	中足骨	
11	33		水路 201 貝層	ウシ	臼歯破片	
12	35		水路 201 貝層	ウシ	中手首 L	
13	14	8	水路 201 貝層	ウマ	大腿首 R	
14	54	15	水路 201 貝層	ウマ	上顎臼歯	
15	73	24	水路 201 貝層	哺乳類	不明	
16	15		水路 201 貝層	中型哺乳類	椎角破片	
17	34		水路 201 貝層	小・中型哺乳類	皿肢骨	
18	2		水路 201 上層	ニホンジカ	下顎骨 R	幼獣
19	22	11	水路 201 上層	ニホンジカ	下顎骨 R	完形
20	26		水路 201 上層	ニホンジカ	椎骨（頸椎.腰椎）M	
21	27		水路 201 上層	ニホンジカ	橈骨	成獣 f
22	30		水路 201 上層	ニホンジカ	中手骨 R	
23	43	14	水路 201 上層	ニホンジカ	腰椎 M	
24	44		水路 201 上層	ニホンジカ	上腕骨 L	
25	50		水路 201 上層	ニホンジカ	肩甲骨 R	
26	23	12	水路 201 上層	ニホンジカ？	第１頸椎	完形、翼突起一部欠損
27	1	1	水路 201 上層	ウシ	下顎 L	
28	5	4	水路 201 上層	ウシ	尺骨 L	成獣 f、切痕あり
29	25		水路 201 上層	ウシ	上顎骨臼歯	
30	42		水路 201 上層	ウシ	下顎後臼歯 L	
31	36		水路 201 上層	ウシ	中手首 R	
32	47		水路 201 上層	ウシ	上顎臼歯	
33	49		水路 201 上層	ウシ	橈骨	
34	66		水路 201 上層	ウシ	下顎臼歯 L	
35	31		水路 201 上層	ウシ？	尺骨 L	骨幹部、切痕あり
36	45		水路 201 上層	ウシ or ウマ	橈骨 LR？	ネズミ噛痕あり
37	46		水路 201 上層	ウシ or ウマ	上腕骨？LR？	
38	68	21	水路 201 上層	スッポン	背甲骨板	
39	28		水路 201 上層	小・中型哺乳類網？	肋骨 L	
40	24		水路 201 上層	小型哺乳類	肋骨 R	
41	7		水路 201 下層	ニホンジカ	大腿骨 L	
42	21		水路 201 下層	ニホンジカ	大腿骨？	
43	29		水路 201 下層	ニホンジカ	脛骨 L	
44	51		水路 201 下層	ニホンジカ	肩甲骨	
45	52		水路 201 下層	ニホンジカ	橈骨	
46	53		水路 201 下層	ニホンジカ	上腕骨	
47	60		水路 201 下層	ニホンジカ	下顎骨 L	
48	6		水路 201 下層	ニホンジカ？	大腿骨 L	
49	67	20	水路 201 下層	イノシシ	臼歯 L	
50	59	17	水路 201 下層	タヌキ	肩甲骨 R	
51	3	2	水路 201 下層	ウシ	大腿骨 R	完形、成獣 f
52	4	3	水路 201 下層	ウシ	脛骨 R	完形
53	20	10	水路 201 下層	ウシ	橈骨 L	
54	32		水路 201 下層	ウシ	下顎後臼歯 L	
55	38		水路 201 下層	ウシ	上顎臼歯破片 L	
56	69		水路 201 下層	ウマ	下顎臼歯	
57	70		水路 201 下層	ウマ	上顎前臼歯	
58	55		水路 201 下層	ウマ	下顎臼歯 R	
59	71	22	水路 201 下層	大型哺乳類	大腿骨	
60	72	23	水路 201 下層	哺乳類	不明	
61	74		水路 201 下層	哺乳類	不明	
62	37		水路 201 下層	哺乳類網？	骨幹部 LR？	
63	56		東西大溝 201	ウマ	下顎臼歯	
64	39		東西大溝 201	ウマ	下顎臼歯 L	
65	40	13	東西大溝 201	ウマ	下顎臼歯 L	
66	62		東西大溝 201	ウマ	下顎臼歯 L	
67	63		東西大溝 201	ウマ	下顎臼歯 L	
68	65	19	東西大溝 201	ウマ	下顎臼歯 R	

※骨角器は本文末観察表参照。

第4節　庄遺跡徳島大学蔵本団地体育館地点から出土した貝類についてのコメント

中尾　賢一（徳島県立博物館）

1　概要

この遺跡から出土した主要な貝類は、個体数の多い順にシジミ、ハイガイ、ハマグリ、オキシジミである。また、巻貝も出土している。ここではまずそれぞれの種やグループごとに簡単に解説し、そのあとで県内各地の遺跡から出土した貝類群との比較を行う。

シジミ　徳島市内の遺跡から出土する可能性のあるシジミ（*Corbicula* 属）には、汽水性のヤマトシジミ（*C. japonica*）と淡水性のマシジミ（*C. leana*）がある。両者は生息環境や生息様式がかなり異なるものの、殻の形態はよく似ている。両者を識別するために、田村（1980）に基づいて検討を試みた。その結果、ヤマトシジミの形質（歯丘の鑢目の彫刻、わずかな套線入）を示す個体は多く認められたが、明らかにマシジミと同定される個体は確認できなかった。この結果は、庄遺跡出土のシジミの多くが汽水性のヤマトシジミであることを示唆している。現在、ヤマトシジミは吉野川の干潟に多くみられ、漁もさかんに行われている。ヤマトシジミが多いのは、ハマグリが分布する場所よりやや上流側で、より低鹹度の干潟である。

ハマグリ　近年になってから全国各地で個体数が激減した種としても知られている（和田編1996）。徳島平野の沖積層からは、しばしば多量の貝殻が出土する（中尾2001）。現在でも吉野川や勝浦川の河口近くの砂泥干潟に生息しているが、数は少ない。

ハイガイ　泥干潟に生息する貝である。戦前までは西日本の各地に生息していたが、近年では泥干潟が干拓や埋め立てによって失われ、生息地と個体数が激減した。現在、有明海と瀬戸内海の一部にわずかに生息地が残っている（佐藤2000）。県内では生きた個体の記録はないが、海岸には古びた貝殻が落ちていることがある。

オキシジミ　シジミの仲間ではなく、むしろハマグリやアサリに近縁な貝である。潮間帯の砂泥底に生息する。現在でも、吉野川・勝浦川・那佐湾などの干潟に生息している。県内では個体数も少なくないが、漁獲の対象とされないので、一般にはあまり知られていない。

巻貝　検討した約80個体のうちの大部分は淡水性のカワニナである。これ以外には、オオタニシ・イボウミニナ・ホソウミニナ・カワアイ？がそれぞれ1個体ずつ識別できた。オオタニシは淡水域に、他の3種は干潟に生息する。

2　考察

徳島平野では、多量の貝殻をともなう遺跡はあまり多くない。しかし、ヤマトシジミ－ハマグリ－ハイガイを中心とした貝類の組み合わせは、近世以降の遺跡を除けば、普遍的にみられる。縄文時代中期以降、これらの貝類が吉野川沿いの干潟に豊富に生息していたことを間接的に示しているのだろう。ふつうこのような貝の組み合わせの貝塚では多くのマガキを伴うことが多いが、庄遺跡ではわずかしか出土していない。消極的な特徴であるが、この点もこの遺跡の特徴といってよいかもしれない。

近距離にあり、出土した貝類の組み合わせも似ている遺跡に三谷遺跡（縄文時代晩期～弥生時代前

期）がある。ただし、この遺跡ではヤマトシジミよりハマグリが多い点が異なっている。

三谷遺跡の時代には海が近くて近隣地域でハマグリがたくさん採れたものの、庄遺跡の時代になると平野の埋積が進んで海が遠くなり、近場の干潟ではヤマトシジミが相対的に多くなったということを示しているのかもしれない。それに加えて、庄遺跡は三谷遺跡の約1km上流側に位置しているので、この影響も多少あると思われる。

ハイガイは縄文海進高頂期のころにもっとも分布を広げた貝として、また、貝塚から出土する貝としてよく知られている。この貝の生息場所である泥干潟は、海進期には大小の溺れ谷の奥に形成されやすいものの、高海面期～海退期には陸域からの砂などの供給によって埋積され、消滅しやすい地形である。縄文海進高頂期以降に、ハイガイの生息域が減少したおもな理由として、このような泥干潟の消滅が指摘されている（松島1984）。

県内でも、三谷遺跡をはじめ、地下の沖積層（奥村ほか1990・1996、中尾2000・2001）や森崎貝塚（縄文時代中期）、城山貝塚（縄文時代後期～弥生時代前期）、田宮遺跡（中世）で、ハイガイの報告がある。森崎貝塚ではハイガイが圧倒的に多い（鈴木1972）が、城山貝塚ではハマグリ・カキ（おそらく大部分がマガキ）とならんで多出する貝のひとつと報告されている（笠井1922）。三谷遺跡ではハマグリ・ヤマトシジミ・オキシジミほどには多くない（徳島市教育委員会1995）。田宮遺跡（須崎2001）では、出土する貝のほとんどがヤマトシジミであり、ハイガイは検出されるものの、その数はたいへん少ない。このように、ハイガイの出土頻度は時代とともに減少していく傾向があるようにみえる。

徳島平野における平安時代の貝類のまとまった報告は、おそらく今回が最初である。10世紀の徳島平野では、非常に多産するとはいえなくなっているものの、ハイガイはまだ比較的たくさん生息しており、食用にされていたことがわかる。

一方、巻貝の大半を占めるカワニナは、大半の二枚貝と異なり淡水性種である。遺物や貝殻が出土したのは河道埋積堆積中とのことなので、カワニナの一部は人為的な廃棄物ではなく、もともと川の中に生息していたものがそこで自然死したものかもしれない。

参考文献

奥村　清・横山達也・大塚啓二郎・戸田理人　1990「徳島平野北部　大谷川および姫田より発見された貝化石群とその^{14}C年代」『地学研究』39－1 p37－55

奥村　清・濱田美穂　1996「徳島市及び鳴門市から産出した徳島平野地下の完新世貝類遺骸群集」『徳島県立博物館研究報告』6 p97－127

笠井新也　1922「阿波國貝塚概説」『阿波名勝』2 p56－69

佐藤慎一　2000「二枚貝類－特に諫早湾について」佐藤正典（編）『有明海の生きものたち　干潟・河口域の生物多様性』p150－183　海游舎　東京

須崎一幸　2001「田宮遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』12 42p

鈴木重治　1972『鳴門森崎貝塚』25 p+7 図版　鳴門市教育委員会　鳴門

田村　実　1980「蜆と汽水環境と貝塚」『熊本地学会誌』63 p2－15

徳島市教育委員会　1995『企画展　徳島の縄文貝塚　第15回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る－最近の発掘調査と徳島の縄文貝塚－』p6－14

中尾賢一　2000「高知市一宮から産出した完新世貝化石群」『徳島県立博物館研究報告』10 p49－60

中尾賢一　2001「徳島平野南部、西須賀町の海成沖積層から得られた貝化石群とその^{14}C年代」『徳島県立博物館研究報告』11 p105－121

松島義章　1984「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集－特に環境変遷に伴うその時間的・空間的変遷－」『神奈川県立博物館研究報告（自然科学）』15 p37－109

和田恵次編　1996「日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状」『WWF Japan サイエンスレポート』3　182p

第５節　出土植物遺体について

茨木　　靖（徳島県立博物館）

１　概要

出土した種実遺体は庄遺跡（徳島大学蔵本地区体育館地点）の平安時代の水路埋積堆積物である。その主なものはモモであり、わずかに異種の物が混入する（第１表）。以下ではそれぞれの種について解説を行う。

モモ　*Amygdalus persica* L.　バラ科サクラ属

モモは、黄河上流域の高原地帯の原産で、中国では７世紀頃から栽培がはじめられた。日本へは奈良時代初頭に渡来したとされ、古事記や日本書紀に記載が見られる。平安時代になると観賞用としての栽培も行われる様になり、万葉集には花を観賞する内容の歌も残されている。また、延喜式には諸国から桃仁（核）が薬用に献上されたことが記されている。平安時代末期から鎌倉時代にはすでに日常生活の重要な菓子となり、江戸時代には果樹としての栽培も行われた（小南1989、並河・水谷1994）。

核の形態的特徴　モモの核は、深い点刻があるのが特徴であり（並河・水谷1994）、今回の出土植物遺体の多くはこの特徴に一致することからモモであると考えられる。核の大きさに不揃いが見られるが、これは生育状況や品種の違いによると推測される。

モモに近縁な栽培植物にはアンズ *Armeniaca vulgaris* Lam.、ウメ *A. mume* (Sieb. et Zucc.) de Vriese.、ニホンスモモ *Prunus salicina* Lindl. などがあるが、それらの核はモモとは形態的に異なり区別できる。

具体的には、アンズの核は広楕円形で背面は鈍稜、腹面はややするどい稜となり、稜の左右に浅い溝がそれぞれ一つずつ並ぶ。また、溝に挟まれた稜の側面には数個の穴がある。さらに表面には複雑な皺が無いなどの点でモモとは異なる（Grisez 1974、中山ほか2000）。

ウメの核は広楕円形で核の表面には多数の小凹点が分布するのが特徴であるが、今回の出土品に見られるような深い皺が無い点で異なる（石川1994、中山ほか2000）。

また、ニホンスモモでは核の形状が長楕円形でやや扁平であり、表面に条溝と凹凸があるものの、モモのような不規則な深い溝とならないなどの点で異なっている（上原1961、中国科学院植物研究所編1972、Ku 1986、平井1996、中山ほか2000、Endo 2001）。

オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura クルミ科クルミ属

北海道・本州・四国・九州の川沿いの湿気の多い場所に生える落葉高木で、高さ７－10m ほどになる（山崎1989）。徳島県内でも池田町、東祖谷山村、一宇村、木屋平村、美郷村、脇町、川島町、土成町、北島町、上勝町、神山町など各地に広く分布している（阿部1990）。

核の形態的特徴　オニグルミの核は卵円形または楕円形で、先が尖り、長さ2.5－3.5㎝。表面に皺があ

第１表　大型植物遺体種名表

科名	和名	学名
バラ科	モモ	*Amygdalus persica* L.
クルミ科	オニグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura
マツ科	マツ属	*Pinus* sp.

る。オニグルミにごく近縁な植物としてはヒメグルミ *J. mandshurica* Maxim. var. *cordiformis*（Makino）Kitamuraがあるが、徳島県には自生していない。また、後者の核は扁平な円心形で長さより幅が広く、長さ2－2.5㎝、幅2.3－2.7㎝。表面に一本の縦の溝がある他はほとんど平滑であることからオニグルミとは容易に区別される。県産のクルミ科植物にはこの他にサワグルミ*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc、ノグルミ *Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc もあるが、これらの果実は散布様式の違いなどから形態的にまったく異なっており、オニグルミとは容易に区別できる。以上のことからオニグルミの他に県内産植物で今回の出土遺体の様な形態の核を持つ植物はない。

2　その他の種実

上記の他にはマツ属（*Pinus*）の球果が含まれるが、その量はごくわずかである。

3　まとめ

オニグルミは、日本各所で出土しており（パリノ・サーヴェイ株式会社2003、南木・中川2000）、古くから食料として採取、利用されてきたことが知られる。一方、河川を流下し、海浜へ漂着することも知られており（茨木2003）、今回の遺体も何らかの理由で流下してきた可能性がある。なお、モモについては徳島県でも土成町の北原遺跡から炭化した核の出土記録がある（徳島県教育委員会文化課編1988）。

ニホンスモモに関しては、東京都の小山隆義氏に情報をいただきました。ここに記して謝意を表します。

参考文献

阿部近一　1990『徳島県植物誌』580p　教育出版センター　徳島

中国科学院植物研究所編　1972『中国高等植物図鑑２』1312p　科学出版社　北京

Endo Y.　2001 *Prunus. In* Iwtsuki K. et al.（eds.）Flora of Japan. II b：128. Kodansha, Tokyo.

Grisez T. J.　1974 *Prunus* L. *In* Schopmeyer C. S. ed. Seeds of woody plants in U States.：658－673. Forest service, U. S. Department of agriculture, Washington, D. C.

平井信二　1996『木の大百科－解説編－』642p　朝倉書店　東京

石川茂雄　1994『原色日本植物種子写真図鑑』328p　石川茂雄図鑑刊行委員会　東京

茨木　靖　2003「徳島県の漂着種子と果実」『漂着物学会会報６』p１－４

小南一郎　1989「モモ」堀田満編『世界有用植物事典』p863－865　平凡社　東京

Ku T. C.　1986 *Prunus. In*：Yu, T. T.（ed.）Flora Reipublicae Popularis Sinicae. 38：34－41. Science Press, Beijing.（in Chinese）

南木睦彦・中川治美　2000「大型植物遺体」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書３－２粟津湖底遺跡Ⅲ』p49－112　滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　大津

中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000『日本植物種子図鑑』642p　東北大学出版会　仙台

並河　治・水谷房雄　1994「モモ」塚本洋太郎監修『園芸植物大辞典２』p2480－2486　小学館　東京

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003「松ノ木遺跡の自然科学調査」本山町教育委員会編『本山町埋蔵文化財

調査報告書第11集　松ノ木遺跡Ｖ』p351－357　本山町教育委員会　高知
徳島県教育委員会文化課　1988『内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』115p
徳島県教育委員会　徳島
上原敬二　1961『樹木大図説』1203p　有明書房　東京
山崎　敬　1989「クルミ科 Juglandaceae」佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・冨成忠夫編『日本の野生植物木本
１』p29－30　平凡社　東京

第６節　庄遺跡の炭化米粒特性と稲作起源

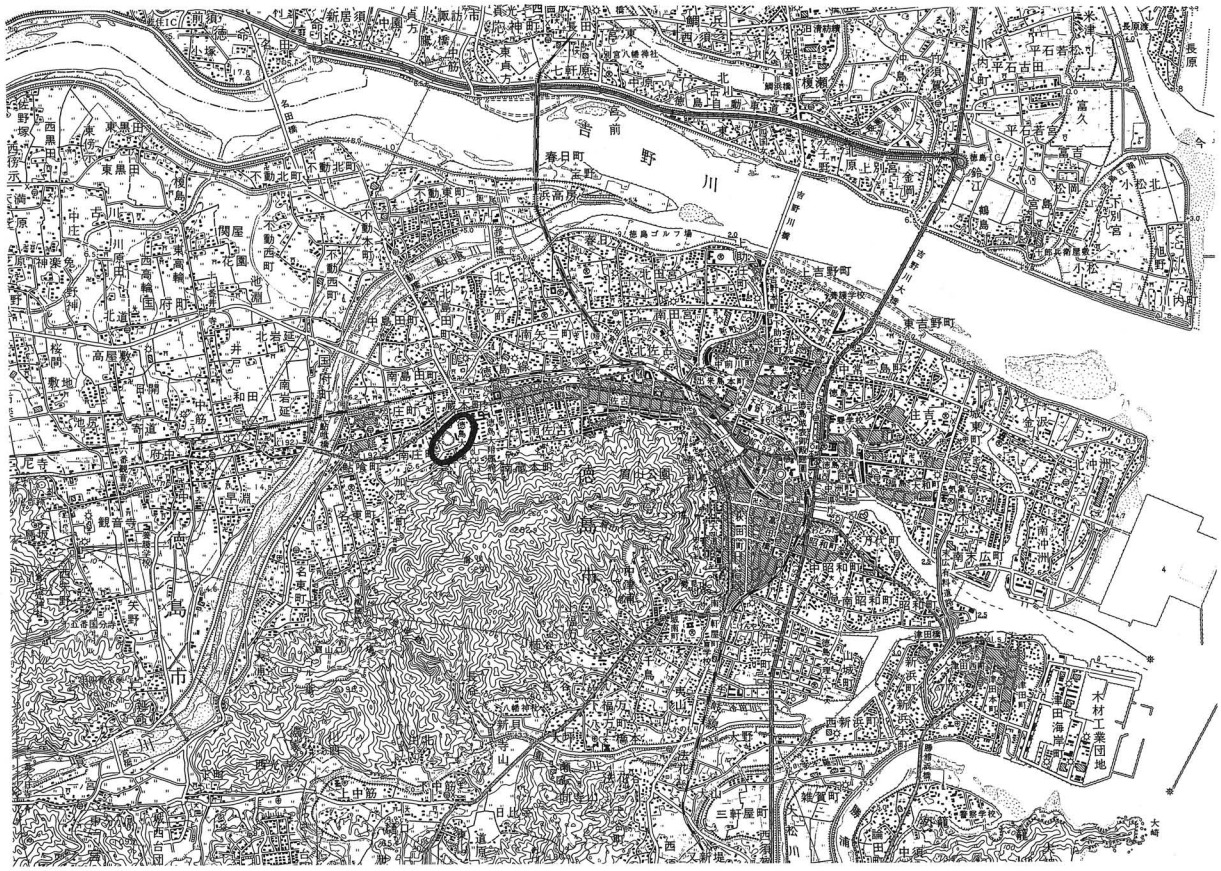
和佐野喜久生（佐賀大学名誉教授）
中村　　豊（徳島大学埋蔵文化財調査室）

１　庄遺跡の概要

本遺跡は、中央構造線にそって徳島県を西から東へと流れる吉野川の最下流南岸に流入する最大の支流、鮎喰川の東岸に位置する（第１図）。鮎喰川の東岸にある眉山山麓には、鮎喰川の堆積作用によって扇状地・微高地が形成されるが、徳島県下の主要な縄文時代後晩期から古代にいたるまでの遺跡は、この鮎喰川の扇状地にもっとも密度濃く分布している。

縄文時代晩期から弥生時代への移行期に眉山北麓に営まれた三谷遺跡では、突帯文土器と遠賀川式土器とが共伴して出土するが、石器相は縄文時代そのものであり、炭化米が出土している。しかし、この炭化米が三谷遺跡の現地で生産されたものか、あるいは外部からもたらされたものかは今後の課題である。

その後、遠賀川式土器が単独で出土し、大陸系の文物を有する庄遺跡が三谷遺跡の西方600m ほどの地点に形成される。成立期の集落跡は未見であるが、墓域は確認されている。この墓域は列状の配置を



第１図　庄遺跡の所在地（円印）および周辺域の地形図

呈し、木棺墓、配石墓、箱式石棺墓を擁している（北條ほか1998）。また、同遺跡ではかつて有柄式磨製石剣の切っ先が採集され、国学院大学に保管されている。同じような墓制は、九州東北部から響灘沿岸を中心に、山陰沿岸から中国山地、松山平野など中四国西部にも点々と分布している。これらの地域では有柄式磨製石剣の出土も多く、この墓制が九州北部方面から東方に展開し、本遺跡で受容されたと考えることができる。おそらく本地域の弥生文化を構成する諸要素についても、同じ頃、受容されたものと思われる。受容ルートは、西部瀬戸内から海岸部を経由するルートと、吉野川中流を経由するルートとが考えられる。現時点では海岸ルートが有力ではあるが、内陸部の調査例が少ない現時点では、結論は保留せざるをえない。

続く弥生前期中葉には環濠集落が形成され、大陸系磨製石器の本格的な製作・使用も開始される。また、集落の拡大とともに水田も形成される。この時期の灌漑施設や炭化米は未見であるが、本格的な水稲耕作を開始していたことは、ほぼ間違いない。

続く弥生時代前期末には大規模な用水路と井堰をともなった灌漑施設が設けられる。この用水路・灌漑施設を見る限り、前期末の土木技術・治水技術が予想以上に発達していたことがうかがえる。なお、この灌漑用水路からも炭化米が出土している。

この大規模灌漑用水路発掘の地点から、おおむね100mほど西方の地点で、今回報告の第２次調査出土の炭化米が出土した土坑群が検出された。これらの土坑群と灌漑用水路はほぼ同時期であり、両者の有機的な関連性が指摘される。

今回検出の土坑群は15基で、うち２基から炭化米を検出した。これらの土坑群は、規模・深さとも周辺の土色・土質との区分が難しく、どのような性格かは認定しにくい。この調査区より北側では、弥生時代前期末の文物はほとんど検出されていないので、眉山北麓微高地上の集落縁辺部に位置する貯蔵穴、ないしはゴミ穴であった可能性が高いと考えられる。

以上のことから、庄遺跡周辺の水稲耕作文化の成立過程は、縄文晩期から弥生前期にかけて、米の情報、大陸文化の受容、灌漑施設をともなう大規模環濠集落の形成と時期ごとに段階を踏んで成し遂げられたことがうかがい知れる（中村　豊）。

２　炭化米粒特性と稲作起源

材料及び方法　本遺跡の炭化米資料は徳島県教育委員会によって発掘されたもので、形質調査は発掘された全資料の46粒を対象とした。炭化米粒の計測調査は、粒の平面及び側面を接写撮影し、約4.5倍大にプリントしたものからデジタル表示式ノギスを用いて行った。炭化米の形態的特性は、粒長、粒幅及び粒厚の測定値および計算によって求めた長/幅比の４項目とし、北部九州および韓国の10～18遺跡（11～20資料）ものと比較した。

稲粒（米・籾）の形態的特性の表し方及び粒型の分類法は、既報（和佐野1995a・b）の方法によって示した。粒長は粒長平均の最小階級値3.5㎜を粒長特性指数１（極短粒）として、階級幅0.6㎜で順次３（短粒）、５（中長粒）、７（長粒）、９（極長粒）及び10（極大長粒）とし、粒幅は同様に最小階級値１．３㎜を粒幅特性指数１（極狭粒）とし、階級幅0.6㎜で順次３（狭粒）、５（中幅粒）、７（広粒）及び９（極広粒）として表した。粒型は、このような指数値（粒幅指数値・粒長指数値）を組み合わせたものである。例えば、3･5型のものは、粒幅指数が３（階級値1.9㎜）、粒長指数５（階級値4.7㎜）のもので、狭粒の中長粒種であることを示している。

第１表　比較基準遺跡及び庄遺跡の炭化米粒特性表

遺跡名	菜畑(縄文)	菜畑(弥生)	板付	瑞穂	松本	有田	金場１	金場２
時代	縄文晩期	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生中期	弥生中期
所在地	唐津市	唐津市	福岡市	福岡市	北九州市	前原市	朝倉郡	朝倉郡
長(㎜)	4.11	3.93	4.19	4.17	3.41	4.01	3.73	4.45
S.D	0.35	0.28	0.24	0.24	0.56	0.22	0.36	0.3
幅(㎜)	2.45	2.38	2.64	2.77	2.11	2.33	2.32	2.69
S.D	0.23	0.2	0.18	0.19	0.31	0.15	0.23	0.17
厚(㎜)	1.93	1.95	1.8	1.86	1.59	1.59	1.56	1.74
S.D	0.22	0.24	0.13	0.15	0.29	0.11	0.21	0.17
長/幅比	1.69	1.66	1.59	1.51	1.62	1.72	1.61	1.66
S.D	0.17	0.12	0.11	0.11	0.17	0.11	0.14	0.11
調査粒数	155	38	120	100	46	107	104	101

金場1：遺構35

金場2：遺構37

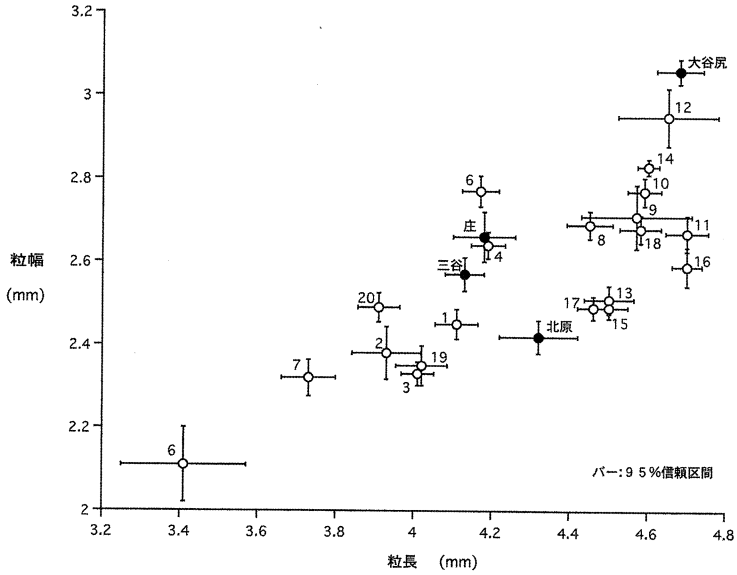
遺跡名	空前	須川	津古牟田	安永田	吉野ヶ里	八女岩崎	八女吉田	庄
時代	弥生前期	弥生前期	弥生中期	弥生中期	弥生中期	弥生中期	弥生後期	前期末
所在地	小郡市	朝倉郡	小郡市	鳥栖市	佐賀県	八女市	八女市	徳島市
長(㎜)	4.59	4.65	4.7	4.5	4.6	4.5	4.7	4.18
S.D	0.22	0.41	0.28	0.34	0.19	0.25	0.17	0.29
幅(㎜)	2.77	2.95	2.67	2.51	2.83	2.49	2.59	2.66
S.D	0.17	0.22	0.22	0.18	0.13	0.13	0.21	0.19
厚(㎜)	1.95	2.16	1.92	1.86	1.98	1.76	1.91	2.11
S.D	0.2	0.18	0.17	0.16	0.13	0.12	0.18	0.27
長/幅比	1.66	1.58	1.77	1.8	1.63	1.81	1.83	1.59
S.D	0.11	0.17	0.16	0.15	0.1	0.12	0.14	0.13
調査粒数	100	39	100	110	180	100	76	46

S.D：標準偏差

なお、日本の古代稲を対象とした長粒系および短粒系の分類は、およそ粒長4.4㎜以上（4.6㎜前後）を長粒系、4.2㎜以下（4.0㎜前後）を短粒系としているが、4.2−4.4㎜の境界領域には長・短粒系の混種とみなされるものが多く分布する。

また、弥生時代の遺跡それぞれから出土する炭化米粒は、粒特性それぞれがかなりの変異幅を示すが、発掘資料が他と区別できる異なる粒特性値をもつものは、１つのイネ品種としての特性を示すものとみなしているが、同じ特性値を示すものがすべて同じ品種になるとは限らない。

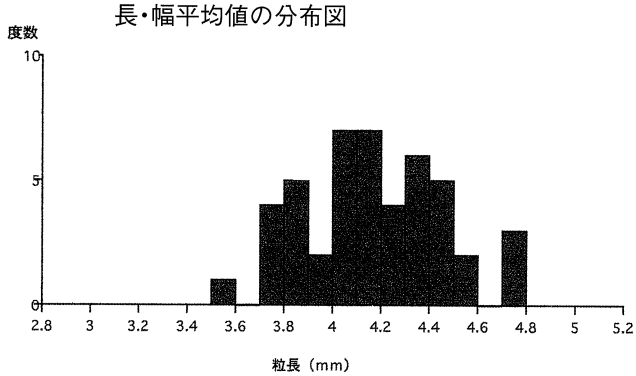
結果及び考察　第１表に本遺跡の炭化米粒特性の平均値、標準偏差および調査粒数を13の比較基準遺跡(15資料)のものと比較して示した。第２図には、本遺跡及び徳島県所在の他の３遺跡の炭化米粒の形・大きさを比較するために長・幅平均値（付95％信頼区間）の分布図を18の比較基準遺跡（20資料）のものと合わせて示した。本遺跡の炭化米粒特性は、第１表及び第２図に示されるように、短粒系の板付遺跡のものによく類似するが、粒厚が短粒系の比較基準遺跡のいずれよりもすぐれもっとも厚かった。



比較基準遺跡名

１.菜畑(縄文)　２.菜畑(弥生)　３.有田　４.板付　５.瑞穂　６.松本　７.金場１　８.金場２　９.里田原
１０.空前　１１.津古牟田　１２.須川　１３.安永田　１４.吉野ヶ里　１５.岩崎　１６.吉田　１７.立岩
１８.川の上　１９.松菊里　２０.面城

第２図　比較基準遺跡および徳島県４遺跡の炭化米粒の長・幅平均値の分布図



第３図　庄遺跡の粒長の度数分布図

第３図はイネ品種の遺伝的純粋性をみるために粒長の度数分布図を示したものであるが、本遺跡の粒長は3.5～4.7㎜とやや広い変異幅を示し、やや多頂的分布をすることから長短両粒系を含む数品種の混合したもののように考えられる。

第２表は、本遺跡の炭化米粒それぞれ個々の粒型分布を対照遺跡と比較したものである。本遺跡の炭化米は5･3型（中幅・短粒型）がもっとも多く（48%）、次いで7･3型（広幅・短粒型）20%とその周辺の5･1型（中幅・極短粒型）、5･5型（中幅・中長型）、および7･5型（広幅・中長型）をそれぞれ10%前後含み、全体的に板付遺跡のものに類似するが7･3型をより多く含む。

炭化米の粒厚2.11㎜は短粒系の比較基準遺跡の平均値のいずれよりも優れ、イネ粒の充実は非常に良かったようであり、稲作の栽培環境は良好な条件にあったと考えられる。ただ、イネ品種は混種であったと考えられることから、稲作の知識・技術は必ずしも十分進んでいなかったようであるが、大規模な用水路と井堰をともなった灌漑施設遺構がみられていたことから、前期末の水田稲作に関連する土木・治水技術はかなり発達していたとも考えられる。なお炭化米粒の長/幅比の1.59は粒形がほぼ典型的なジャポニカ・タイプであることを示している。

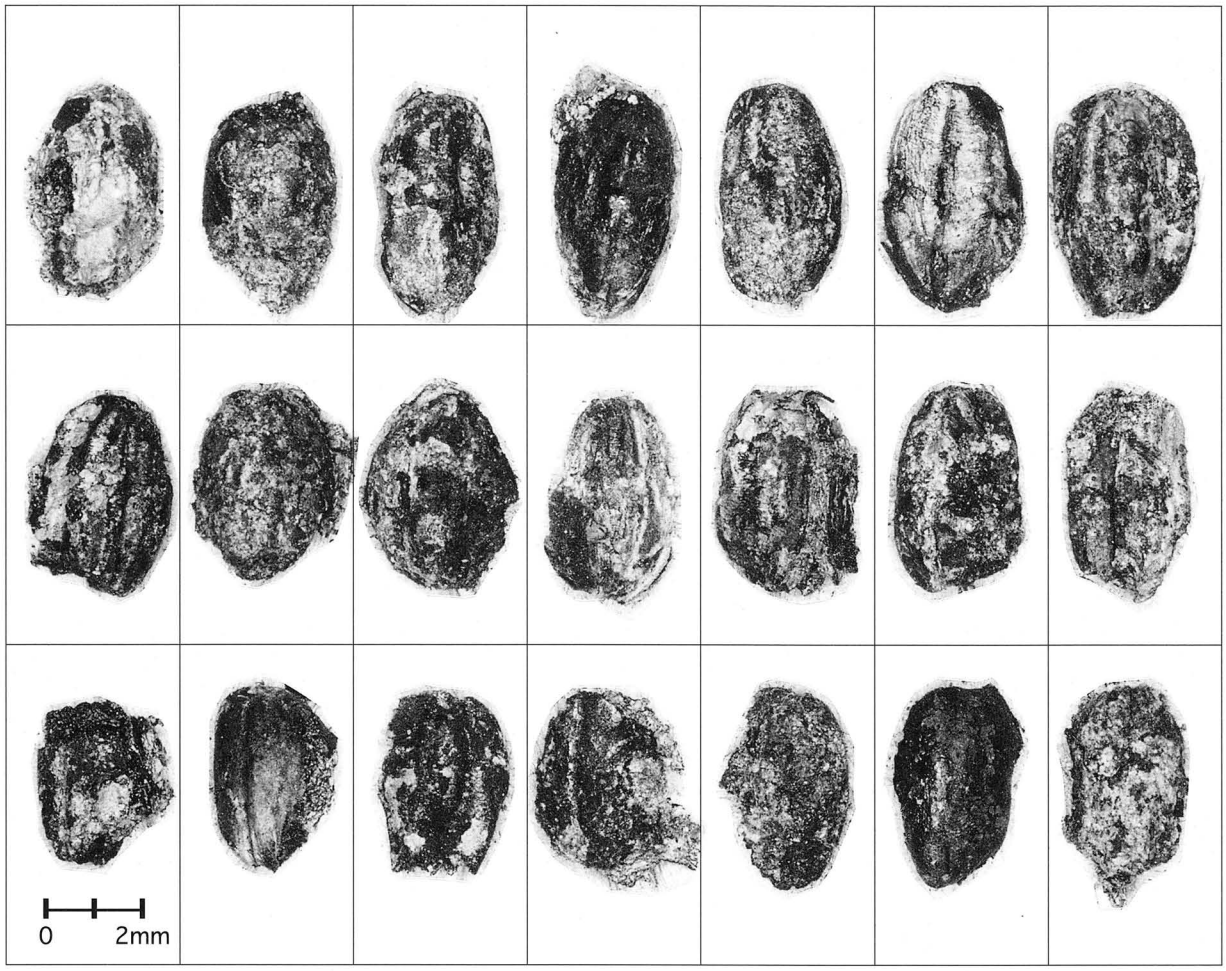
第４図の炭化米粒の接写写真は、粒測した46粒から整粒を選んで全体を代表するように右上から大き

第２表　比較基準遺跡および庄遺跡の炭化米粒の粒型分布表

		菜畑縄文　155粒　粒長指数					計	菜畑弥生　38粒　粒長指数					計	有田　107粒　粒長指数					計
		1	3	5	7	9	(%)	1	3	5	7	9	(%)	1	3	5	7	9	(%)
粒幅指数	1																		
	3		8	5	2		15	13	3				16	6	9				15
	5		14	47	19		80	18	53	11			82	10	71	3			84
	7			5	1		6		3				3		1				1
	9																		
計%			22	57	22		101	31	59	11			101	16	81	3			100
		板付　120粒　粒長指数					計	瑞穂　100粒　粒長指数					計	空前　100粒　粒長指数					計
粒幅指数	1																		
	3							1					1						
	5		5	58	15		78	4	45	8			57		12	44	1		57
	7			13	8		21		35	7			42		4	38	1		43
	9																		
計%			5	71	23		99	5	80	15			100		16	82	2		100
		須川　39粒　粒長指数					計	津古牟田　100粒　粒長指					計	吉野ヶ里　180粒　粒長指数					計
粒幅指数	1																		
	3								1				1						
	5			8	8	3	19		9	50	13		72		6	33	1		40
	7		3	13	49	18	83		2	23	2		27		7	54			61
	9																		
計%			3	21	57	21	102		12	73	15		100		13	87	1		101
		八女吉田　76粒　粒長指数					計	川の上　100粒　粒長指数					計	庄　46粒　粒長指数					計
粒幅指数	1																		
	3				3		3												
	5			4	71	5	80		21	54	3		78	11	48	13			72
	7				16	1	17		2	21			23		20	9			29
	9																		
計%				4	90	6	100		23	75	3		101	11	68	22			101

い順に配列したものである。米粒には付着物が多く、また粒形は揃いが悪く混種であることを示している。日本列島の稲作は北部九州地方に起源したとして稲作の伝播ルートを考えると、時代別を考慮したルート上に分布する遺跡及び周辺地域の遺跡の炭化米粒の形態的類似性と同時に、考古学的遺構・遺物による地域間の交流関係の有無が重要な情報源になる。

本遺跡の稲作起源は、本遺跡の東600m に縄文時代晩期（突帯文土器と遠賀川式土器が共伴）の三谷遺跡から炭化米が出土していることから、吉野川の最下流の支流、鮎喰川東岸の眉山山麓に形成された扇状地一帯の微高地には縄文晩期から弥生時代前期の比較的早い時代から水田稲作文化がもたらされていたと考えられる。三谷遺跡から出土した炭化米が縄文時代晩期に属することが間違いなければ、両遺跡の炭化米の粒特性もよく類似していることから本遺跡の稲作は三谷遺跡から伝わったものと解釈される。ただ、問題は瀬戸内海沿岸域の遺跡から発掘された炭化米はほとんどが弥生時代の中期から後期のもので、縄文時代晩期の発掘例は玉津田中遺跡（神戸市、やや時代確定の精度は欠く）のみであり、兵庫県及び四国東端の徳島県に北部九州とほぼ同時代に水田稲作が起源したと考えることが可能であるかは今後の検討課題である。なお、玉津田中遺跡や奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡からは弥生時代前期の炭化米が発掘されていることから、稲作が北部九州から瀬戸内海沿岸域の陸路を東漸していったという



第４図　庄遺跡の炭化米粒の接写写真

一般的解釈も成立しなくなる。発掘された炭化米粒の時代及び形態的類似性から考えると、板付遺跡とほぼ同時代に中国大陸の水田稲作文化が海路によって瀬戸内海及び山陰日本海沿岸を経て直接（東漸ではなく）四国東端を含む近畿地方にもたらされたことになるが、考古学的遺構・遺物がそのことを傍証できるかどうかが問題である。なお、山陰日本海沿岸経由をも考慮したのは長粒系の炭化米粒を混種として含むことからである。

考古学的遺構・遺物から考えられることは、本遺跡の墓域に列状に配置された木棺墓、配石墓、箱式石棺墓の墓制及び有柄式磨製石剣の切っ先が採集され、同じような墓制と石剣が、東北部九州から響灘沿岸を中心に、山陰沿岸から中国山地、松山平野など中四国西部にも点々と分布していることである。これらの文化の本遺跡への受容ルートは、西部瀬戸内から海岸部を経由するルートと、吉野川中流を経由するルートとが考えられるが、内陸部の調査例が少ない現時点では海岸ルートが有力である。しかし、これらの文化受容が弥生時代の稲作文化の北部九州からの東漸説の傍証になりうるか、あるいは四国東端を含む近畿地方での縄文晩期の稲作起源と関連するものかどうかは、なお今後の検討が必要である。

３　まとめ

１．本遺跡は徳島市庄町から蔵本町一帯に所在し、吉野川最下流南岸に注ぐ鮎喰川東岸に形成された眉山山麓扇状地の微高地に位置する。炭化米は弥生時代前期末の大規模な用水路と井堰をともなっ

た灌漑施設の遺構を有する15の土坑群の２基から徳島県教育委員会によって発掘された。本遺跡の東600m には縄文時代晩期の炭化米が出土した三谷遺跡が隣接する。

２．炭化米は、粒特性平均値からは板付遺跡のものによく類似した短粒系に属するが、粒長の度数分布図では長短両粒系を含む数品種の混合したものと考えられる。

３．炭化米粒の粒型分布は5･3型（中幅・短粒型）がもっとも多く、ついで7･3型（広幅・短粒型）を20％含み、全体的には板付遺跡のものに類似したが7･3型をより多く含むものであった。

４．炭化米の粒厚2.11㎜は短粒系の比較基準遺跡の平均値のいずれよりも優れ、イネ粒の充実は非常に良く、稲作の栽培環境は良好な条件にあったと考えられる。ただ、イネ品種は混種であったと考えられることから、稲作の知識・技術は必ずしも十分進んでいなかったようである。しかし、大規模な用水路と井堰をともなった灌漑施設遺構がみられていたことから、前期末の土木技術・治水技術はかなり発達していたとも考えられる。

５．炭化米粒の長/幅比の1.59は粒形がほぼ典型的なジャポニカ・タイプであることを示している。

６．本遺跡の稲作起源・伝播経路は、本遺跡の東600m に縄文時代晩期の三谷遺跡からも本遺跡のものと形態が類似した炭化米が出土していることから、吉野川の最下流の支流、鮎喰川東岸の眉山山麓に形成された扇状地一帯に縄文晩期に始まった水田稲作が三谷遺跡から伝わったものと解釈され、兵庫県（玉津田中遺跡）及び四国東端の徳島県には北部九州とほぼ同時代に稲作が起源した可能性が考えられる。炭化米粒の発掘時代及び形態的類似性からは、板付遺跡とほぼ同時代に中国大陸から同起源の水田稲作文化が海路によって瀬戸内海及び山陰日本海沿岸を経て直接（陸路の東漸ではなく）四国東端を含む近畿地方にもたらされたと考えざるを得ないが、考古学的遺構・遺物によってそのことを傍証できるかどうかが今後の課題である（和佐野喜久生）。

参考文献

北條芳隆ほか　1998『庄・蔵本遺跡１－徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査－』徳島大学埋蔵文化財調査報告書１　徳島大学埋蔵文化財調査室

和佐野喜久生　1993「九州北部古代遺跡の炭化米の粒特性に関する考古・遺伝学的研究」『育種学雑誌』43 p586－602

和佐野喜久生　1995a「稲作の江南起源説」『講座・文明と環境　第３巻　農耕と文明』朝倉書店 p143－167東京

和佐野喜久生　1995b「東アジアの古代稲と稲作起源」『東アジアの稲作起源と古代稲作文化　文部省科学研究費による国際学術研究　報告・論文集』和佐野喜久生研究代表・編集　ｐ１－52

和佐野喜久生・山下史郎　1996「玉津田中遺跡の炭化米特性と稲作起源」『兵庫県文化財調査報告第135－６冊』ｐ１－24

和佐野喜久生　2000.３「東中根遺跡の古代イネと日本の稲作起源」『ひたちなか市埋蔵文化財センター報告第12号』ｐ４－６

和佐野喜久生・東本秀雄　2000.３「妻木晩田遺跡の炭化米粒特性と稲作起源」『大山町埋蔵文化財調査報告書第17集』p241－251

第７節　加速器質量分析法による徳島市庄遺跡出土炭化物資料の ^{14}C年代測定

小田　寛貴（名古屋大学年代測定総合研究センター）
山本　直人（名古屋大学大学院文学研究科）
池田　晃子（名古屋大学年代測定総合研究センター）
中村　俊夫（名古屋大学年代測定総合研究センター）

１　はじめに

徳島市蔵本町庄（徳島大学構内）遺跡から出土した炭化物資料について、加速器質量分析法（AMS: Accelerator Mass Spectrometry）による^{14}C年代測定を行った。本報はその結果を報ずるものである。

庄遺跡の弥生時代前期の遺構は、同時期の厚い洪水砂層に覆われている。年代測定に供した炭化物資料は、この微高地上に形成された集落の端に位置する土坑より出土したものである。それゆえ、弥生時代前期末（畿内第Ｉ様式新段階併行）という資料の相対年代は確実なものである。本研究の目的は、弥生時代前期末という相対年代をもつこの炭化物資料について、^{14}C年代という自然科学的な年代を得るところにある。

２　試料

本研究において年代測定に供した資料は、穀物が炭化したものと思われる。^{14}C年代測定には木炭などが用いられることが多いが、一般に木製資料の場合、歴史学的な年代よりも古い^{14}C年代が得られる。old wood effectとよばれる現象である。すなわち、樹木は数十年から数百年をかけて成長するため、心材に近い部分の炭化物が測定に供された際には、その木材が伐採された年代よりも樹齢に応じた分だけ古い年代値が得られることになる。また、廃材や古材などが利用されたものであれば、さらに古い値を示すはずである。これに対して穀物の場合、その生育期間は一年であり、^{14}C年代測定によって得られる年代とその穀物が収穫された年代との間に系統的なずれはない。それゆえ、遺構との関連性が明確な穀物は、^{14}C年代測定に極めて適した資料であるということができる。

３　実験

約200mgの炭化物資料を分取し、^{14}C年代測定に用いた。この試料について、以下の化学処理を行った。まず、蒸留水中にて超音波洗浄を行い、表面に付着した汚染物を除いた。次いでホットプレート上にて60－70℃程度に加温し、炭酸塩などの不純物を除くため、塩酸による洗浄を行い、さらに、土壌起源のフミン酸などを除くため、60－70℃で水酸化ナトリウム水溶液による処理を行った。この後、再度塩酸による処理を行い、蒸留水で洗浄した後、90℃で乾燥させた。

この化学洗浄後の試料7.3mgを、約900mgの酸化銅とともに、ガラス管に真空封入し、850℃で２時間以上加熱することで、試料中の炭素を二酸化炭素に変換した。この二酸化炭素を、真空ライン中にて液体窒素・エタノール・n－ペンタンといった冷媒を用いて精製した後、水素と触媒の鉄粉とともに、再度ガラス管に封入した。このガラス管の下端部を650℃で６時間以上加熱することで、試料起源の二

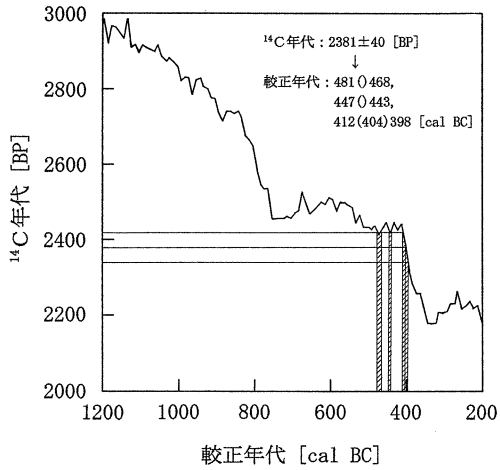
酸化炭素からグラファイト（黒鉛）を合成した。

得られたグラファイトを専用のアルミニウム製ホルダーに充填し、名古屋大学年代測定総合研究センターのタンデトロン加速器質量分析計2号機（Model 4130－AMS ,High Voltage Engineering Europe 社製，the Netherlands）によって、^{14}C 年代測定を行った。測定は、3回繰り返して行った。

^{14}C 年代値の同位体分別効果の補正には、タンデトロン加速器質量分析計2号機により測定された^{13}C/^{12}C 比を用いたが、精製後の二酸化炭素を試料として、トリプルコレクター式気体用質量分析計（MAT－252，finnigan MAT 社製，Germany）によっても δ^{13}C 値を測定した。

4　結果および考察

^{14}C 年代測定の結果は、第1表に示すように、3回の測定の平均値として、2373±20[BP]と得られた。なお、誤差には測定精度の一標準偏差を用いた。また、1998年に発表された較正曲線 INTCAL98(Stuiver *et al.*1998)を用いて、得られた^{14}C 年代を暦年代に換算した。較正曲線とは、自然科学的年代である^{14}C 年代と実際の暦年代との関係を示した曲線である。ただし、一つの^{14}C 年代に対して複数の暦年代が対応する点があるために、較正後の暦年代の誤差範囲は複数の区間に分割される場合がある。第1図には、^{14}C 年代2381±40[BP]を暦年代に較正した例を示した。図中の折れ線が較正曲線である。三本の横棒のうち中央のものが^{14}C 年代の中央値を示し、上下のものが誤差の両限を示す。これら横棒と較正曲線との交点から横軸に垂線をおろすことで、較正年代が求められる。なお、自然科学的な年代である^{14}C 年代を較正して得られた暦年代には、通常の暦年代と区別すべく、「較正(calibration)」の意を含む[cal AD]ないしは[cal BC]という単位を用いる。2381±40[BP]の場合、2381[BP]が較正年代404[cal BC]に対応し、誤差の両限が481、468、447、443、412、398[cal BC]に換算される。また、第1表の較正年代の欄においては、^{14}C 年代の中央値を較正した結果を(　)の内側に、誤差の両限を較正した結果を(　)の外側に示した。すなわち、2381±40[BP]という^{14}C 年代を較正して得られた暦年代の場合、481(　)468、447(　)443、412(404)398[cal BC]と表記した。



第1図　暦年代較正の例

第1表に示された較正年代を通覧するに、値はおおむね400[cal BC]前後に集中している。平均をとる以前の値を見ても、500～400[cal BC]の範囲が示されている。それゆえ、この炭化物資料は紀元前5世紀頃のものであり、その中でも特に紀元前400年前後のものである可能性が高いといってよい。

第1表　庄遺跡から出土した炭化物資料の^{14}C 年代

測定回数	^{14}C 年代[BP]	較正年代[cal BC]	測定コード
1	2398±37	516(　)460,　452(　)438,　431(　)418,　414(407)401	
2	2381±40	481(　)468,　447(　)443,　412(404)398	
3	2339±27	403(398)392	
平均値	2373±20	407(403)399	NUTA 2－5024

一方、トリプルコレクター式気体用質量分析計によって、この資料の^{13}C含有率（δ^{13}C値）は、－10.5±0.1[‰]との結果が得られた。高等植物は、二酸化炭素固定経路の違いから、大きくC_3植物とC_4植物とに分けることができる。C_3植物は、Calvin-Bensonサイクルによる二酸化炭素固定を行う植物であり、多くの植物がこれにあてはまる。穀物では、コメ・ムギなどがC_3植物である。一方、C_4植物はHatch-Slack経路による二酸化炭素固定を行う植物で、トウモロコシ・ヒエ・アワ・キビなどが挙げられる。C_3植物とC_4植物とではδ^{13}C値が異なり、前者の場合－25‰前後、後者の場合－10‰前後の値を示す（南川2000）。庄遺跡では炭化米の出土も確認されているが、本研究に用いた資料は、そのδ^{13}C値が－10.5±0.1[‰]であることから、ヒエ・アワ・キビなどのC_4植物の種子が炭化したものであると考えられる。

参考文献

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Back,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,G., van der Plicht,J. and Spurk,M. 1998 INTCAL 98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40(3), 1041－1083.

南川雅男　2000「先史人は何を食べていたか－炭素・窒素同位体比法でさぐる－」馬淵久夫・富永健編『考古学と化学を結ぶ』p195－221　東京大学出版会

第6章　結語

庄遺跡は戦前より、弥生時代の遺物を出土することからその存在を知られていた。しかし、大規模な調査により具体像が明らかになりつつあるのは、体育館地点の調査を嚆矢とするここ20年ほどのことである。以下体育館地点調査の成果と今後の課題若干をのべておきたい。

まず、本遺跡が、おおむね3面の遺構面からなる複合遺跡であることが明らかとなった。すなわち、第1遺構面が近世、第2遺構面が弥生後期から中世、第3遺構面が弥生前期という認識である。この調査での層位的認識の確立は非常に大きく、その後の調査の規範となっている。それでもなお、近年の調査において、より南に位置する眉山の山裾に近い地点では、第3遺構面下より縄文晩期末から弥生前期前葉の遺構が検出されることがある。また、西方200mほどの地点では縄文時代後期末、宮滝式期の住居跡が検出されている（岡山1999）。微高地形成がより早かったと考えられる眉山に近い地点での調査では「第4遺構面」ともいうべき古い遺構・遺物が埋没している可能性に、今後も十分注意を払わねばならない。

次に、本遺跡での遺構密度が濃厚な北限をおおむね決めたことも大きい。本遺跡は、北は国道192号線から南は眉山の山裾まで遺構が散在している。しかし、密度がもっとも集中する範囲は、おおむねこの体育館地点を北限としていることがその後の調査で明らかにされつつある。ただ、この地点より北側の遺構密度が低くなるといっても、網目状に展開する旧河道中に中洲状の微高地が残存し、そこには遺構が残っている可能性も十分に考えうるし、漁業・水上交通などの痕跡が検出される可能性は十分に考えられる。旧地形を復元しつつ、今後も開発には十分注意を払い続けねばならないことに変わりはない。

第3遺構面からは、弥生時代前期末から中期初頭の良好な一括資料をえることができた。これらの資料は、黄褐色のシルト質を上面としており、同色の良質なシルトによってほどなく覆われる。このシルト層がいかなる成因によって形成されたのかは今後の大きな課題である。また、この層の形成によってそれ以前の地形が大きく改変された可能性があると考えられる。

その一方、遺物はパックされた状態になり一括性は高く、編年には適した資料である。本地域では、すでに弥生前期後葉から中期前葉の編年はおこなわれている（瀧山2000、中村2000）ものの、これらを検証し、今後も標識として使用すべき基礎資料を報告できた。また、土坑308からは、床面から多量の炭化米・炭化物が出土しており、土坑の用途、食生活の復元とともに、年代測定試料としても適しているといえる。そういう意味で、弥生前期末・中期初頭の実年代に紀元前400年前後というデータが蓄積できた点は成果のひとつとして評価できる。これらの遺構に、土器に伴って多くの石器が出土している事実も、石器の時期を決定する上で見逃せない事実である。

第2遺構面でもさまざまな成果があった。まずは弥生時代中期後葉（Ⅳ期）の方形周溝墓を1基検出したことである。本学の調査でも、第13次東病棟地点で1基、第16次ゲノム機能研究センター地点において3基検出されており、Ⅳ期の方形周溝墓が相当数存在したと考えられる。周辺の遺跡では、名東遺跡でもⅢ・Ⅳ期の方形周溝墓が計28基検出されている。本遺跡では、前期前葉には九州東北部から周防灘周辺地域に盛行した列状配置の墓域を採用しており、いつ、いかなる背景で東方との関連性が深い方形周溝墓が採用されるにいたったのか、今後の大きな検討課題である。また、これら方形周溝墓ほぼすべてが四隅の切れるタイプであり、今後ほか地域との比較もおこなう必要がある。

この時期の住居跡も、名東遺跡や南西に隣接する南庄遺跡で計40棟以上検出されており、前期末・中期初頭の集落埋没後、ふたたび集落が形成され、しかも庄・南庄・名東の３遺跡に相当な規模の集落が拡大・形成されていたことが分かる。

庄内式後半から布留式期にかけての小型の方形竪穴住居を３棟検出した。これらはいずれも床面積があまりにも狭いので、工房など居住空間以外の可能性も視野に入れるべきであろう。同時期の井戸３基も県下では稀少例である。

なお、近代の塹壕からの出土ではあるが、斜縁鏡の破鏡が出土していることも注目される。本遺跡からは第17次中央診療棟地点において異体字銘帯鏡の破鏡も出土しており、西方との交流拠点でもあった可能性がある。

飛鳥時代から鎌倉時代にかけての東西大溝・水路を検出したことも大きい。飛鳥時代（飛鳥Ⅳ期）の東西大溝201は、ほぼ正方位を示しているのに対し、10世紀後葉から11世紀前葉の水路201と13世紀前葉の東西大溝202はやや北に振れている。すでに先学諸氏によって注目されている（一山2002、木原2002、藤川2002ほか）この間の条里制の変化の解明は、今後の大きな課題となる。

水路201からは、10世紀後葉から11世紀前葉にかけての多量の土器が出土した。現在本県域では当該期の良好な資料は認められないため、今後編年の空白を埋める貴重な資料となろう。とくに、水路資料とはいえ、上層の土器だまりや貝層には一括性を認めてもよいと考えられる。上層に多い土師器足高高台付皿が下層では１点しかみられないなど、上層と下層の土器相に違いを確認できた点も大きい。土器については、すでに勝浦康守（1995）、久保脇美朗（2002）、辻　佳伸（2000）氏らによって研究がすすめられており、さらに進歩する可能性が高まった。

また、墨書土器や刻書土器、斎串、人形などが出土しており、なんらかの「水辺の祭祀」がおこなわれていたものと推察できよう。また、製塩土器が出土していることは、物資流通の拠点であったことを暗示するものである。さらに、墨書土器に官職を示したとみられる「賀専當」、建物を示したと思われる「くりや」を記したもの、土鈴や銙帯、乾元大宝の出土もふまえて、付近に官衙に関連する施設、すなわち「名東郡衙」所在の可能性を探るのも今後の検討課題である。

これらの溝に関連する遺構として、２棟の掘立柱建物をあげることができるが、時期決定はできなかった。

名東郡衙との関連性については、すでに墨書土器の判読から福家清司氏が考察をおこなっており（福家1984）、関連する研究としては藤川智之（2002）、早渕隆人（2002）氏などによるものがある。今回の公表でさらに考察が深められることを期待したい。

上記の東西大溝にほぼ重なるように近世の溝も検出されている。これは、近世の絵図とも方向が一致しているとともに、場所によっては現在でも残存している。すなわち、平安中期の地割りが、ほぼ今日にいたるまで受け継がれていたことが分かる。

いずれにせよ、遺物・遺構の詳細な検討は今後の課題である。考察編にむけて、その素材となる情報を提供できた点が、本報告書最大の成果である。とくに弥生前期末・中期初頭および平安時代の資料については、今後の本県研究の基準となりうるものと評価できる。

参考文献

一山　典　2002「阿波国府の考古学的考察」『論集　徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

岡山真知子　1999『庄遺跡Ⅲ－大蔵省蔵本団地宿舎新鋭工事（第3期工事）関連埋蔵文化財調査報告－』財団法人徳島県埋蔵文化財センター調査報告書24　財団法人徳島県埋蔵文化財調査センター

勝浦康守　1995「Ⅱ各地の土器様相　11四国　3 阿波」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

木原克司　2002「吉野川下流域の条里施行期と阿波国府の構造」『論集　徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

久保脇美朗　2002「吉野川中下流域における中世前半期の土師器供膳具について」『論集　徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

瀧山雄一　2000「阿波地域　第Ⅰ様式・第Ⅱ様式」『弥生土器の様式と編年　四国編』木耳社

辻　佳伸　2000「四国」『中近世土器の基礎研究XV』日本中世土器研究会

中村　豊　2000「阿波地域における弥生時代前期の土器編年」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会

早渕隆人　2002「古代阿波における官衙と祭祀」『論集　徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

福家清司　1984「庄遺跡出土の墨書土器銘「賀専当」について」『高校地歴』20　徳島県高等学校教育研究会地歴学会

藤川智之　2002「古代」『論集　徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

おわりに

私（福家）が体育館地点の調査に携わったのは1983（昭和58）年４月～11月の間であった。すでに前年度12月に器具庫地点の調査が開始されており、４月に引き継いだ時点では体育館地点も第１遺構面の遺構検出がほぼ終了する段階であった。調査スタッフは前年度まで高校で教壇に立っていた私、３月まで千葉県で調査に従事していた久保脇、ただ一人前年度の調査スタッフからの継続となった野々村の３名であった。

東西に長い長方形の調査区は中央部を西から東に流れる溝状遺構を境に北側と南側では土層堆積が明らかに異なっていた。北側は見るからに湿地性の土層であって、遺構、遺物もあまり期待できそうになかった。ところが、排水と土層観察のために掘り下げたトレンチ内から木簡状の板製品や完形の土師器皿などの遺物が全く偶然に出土したことから、自然流路とおぼしきこの部分の調査が俄に慌ただしくなった。そして、その慌ただしさは自然流路の調査だけにとどまらず、第２、３遺構面の調査へと引き継がれ、結局、調査が終了する11月末まで続くこととなった。そのために、20年余が経過した今でも、体育館の調査といえば、とにかく忙しい調査現場であったことが鮮明な思い出となっているほどである。

忙しい原因は流路の掘り下げと出土遺物の取り上げに時間を要したことだけでなく、第２遺構面では弥生時代中期から中世にかけての時期の遺構が濃密に検出されたことと第３遺構面の弥生時代前期の遺構・遺物が比較的多かったことによる。さほど広くない調査区ではあったが、文字通り隙間がないほど遺構が密集し、遺物も大量に出土した。遺構埋土も古い時代になるほど区別がつきにくく、遺構検出には苦労させられた現場であった。大量の出土品のために、出土品を収蔵するためのコンテナが予算不足で購入できなくなり、スーパーマーケットなどでもらってきたダンボール箱で間に合わしたのも当時の現場の実態であった。

土層の確認・検討、図面の作成に追われ続けた調査作業であったが、流路内から出土した斎串や人形などの木製祭祀具は当時としては県内初の出土で、毎日が新鮮な驚きの連続であったように思う。また、達筆な筆で記された「賀専當」などの墨書土器が出土したことも、もともと文献史学専攻の私にとっては楽しい思い出ともなっている。

このような思い出の多い調査の報告書が20年を経て、ようやく刊行されようとしている今、調査担当者としての責任を考えると内心忸怩たるものがあるが、今はお世話になった中村　豊氏、北條芳隆氏をはじめとする徳島大学関係者各位に御礼を申し上げたいと思う。

また、この体育館地区の発掘調査では、調査作業に従事していただいていた宮崎さんが排土運搬中に突然倒れられ、同じ構内の大学病院で治療を受けたものの、薬石の効無く、ついに意識が回復することなく亡くなられるという思いがけない不幸な出来事があったことをここに銘記するとともに、改めて冥福をお祈りしたい。

以上、学術的な評価については中村氏の結語に譲ったため、ここでは調査報告書には似つかわしくない、感傷的な思い出の記となってしまったことを反省しつつ、稿を閉じることにする。

遺物観察表

遺物観察表　土器・須恵器・瓦器・磁器・埴輪

番　号	整理番号	遺構・層位	種　類	器　種	型式・時期・年代	口径cm	底径cm	器高cm	備　考
27−1	2	土坑301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(21.0)	−	−	
2	5	土坑301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(26.6)	−	−	
3	6	土坑301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(18.8)	−	−	
4	7	土坑301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(19.4)	−	−	
5	11	土坑301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
6	1	土坑301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
7	4	土坑301	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
8	3	土坑301	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(32.0)	−	−	
9	8	土坑301	弥生土器	粘土塊	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
10	9	土坑301	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(49.6)	−	−	
11	10	土坑301	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(31.0)	−	−	
28−12	33	土坑302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	21.4	−	−	
13	32	土坑302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(24.2)	−	−	
14	39	土坑302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(21.4)	−	−	
15	31	土坑302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	8.0	−	
16	29	土坑302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	13.0	−	
17	30	土坑302	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	−	7.6	−	
18	22	土坑302	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	−	5.2	−	
19	40	土坑302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	17.6	−	−	
20	38	土坑302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
21	37	土坑302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
22	35	土坑302	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(19.6)	−	−	
29−23	26	土坑302	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(39.0)	−	−	
24	28	土坑302	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
25	36	土坑302	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	−	9.0	−	
26	34	土坑302	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	−	10.0	−	
27	90	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(16.0)	−	−	
28	46	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(20.4)	−	−	
29	45	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(20.0)	−	−	
30	44	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(22.6)	−	−	
31	89	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(20.0)	−	−	
32	47	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(17.0)	−	−	
30−33	78	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(20.4)	−	−	
34	80	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	24.6	−	−	
35	84	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
36	86	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
37	79	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(24.2)	−	−	
38	249	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(18.8)	−	−	
39	92	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(21.0)	−	−	
40	48	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
41	93	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
42	81	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	赤彩
31−43	50	土坑303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(20.0)	−	−	
44	51	土坑303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(24.4)	−	−	
45	82	土坑303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(22.0)	−	−	
46	85	土坑303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(27.0)	−	−	
47	41	土坑303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	23.6	−	−	
48	91	土坑303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(21.2)	−	−	
49	49	土坑303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(44.0)	−	−	
50	890	土坑303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	10.6	5.0	8.2	
32−51	248	土坑303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(44.2)	−	−	
52	88	土坑303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(37.2)	−	−	
53	87	土坑303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(33.0)	−	−	
54	83	土坑303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(35.0)	−	−	
55	306	土坑303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	18.5	8.4	17.0	
56	69	土坑303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	−	8.4	−	
57	73	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	8.8	−	
58	60	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	9.0	−	
59	68	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	(8.0)	−	
60	62	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	9.7	−	
61	65	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	8.6	−	
62	42	土坑303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	(12.4)	−	
33−63	108	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	17.6	−	−	
64	100	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	9.4	−	
65	104	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(19.8)	−	−	
66	109	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	16.4	−	−	
67	111	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	赤彩
68	111	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	赤彩
69	110	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅱ期前葉	−	−	−	
70	102	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
71	94	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	8.4	−	
72	114	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	8.4	−	
73	98	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅱ期前葉	−	(7.0)	−	
74	95	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	7.4	−	
75	99	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	(8.0)	−	
76	101	土坑304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	(8.4)	−	
34−77	97	土坑304	弥生土器	甕蓋	弥生Ⅰ期末	6.6	−	−	
78	96	土坑304	弥生土器	甕蓋	弥生Ⅰ期末	6.0	−	−	
79	107	土坑304	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(23.0)	8.1	23.8	
80	105	土坑304	弥生土器	甕	弥生Ⅱ期前葉	(22.4)	−	−	
81	106	土坑304	弥生土器	甕	弥生Ⅱ期前葉	−	6.2	−	
82	123	土坑305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	32.5	(11.6)	(46.1)	
35−83	119	土坑305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(22.0)	−	−	
84	116	土坑305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(17.8)	−	−	
85	122	土坑305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
86	113	土坑305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	8.4	−	−	
87	115	土坑305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	(7.4)	−	
88	118	土坑305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(20.0)	−	−	
89	117	土坑305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(21.0)	−	−	
90	112	土坑305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
91	120	土坑305	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	20.4	−	−	
92	121	土坑305	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	−	(10.0)	−	
36−93	124	土坑306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	30.1	−	−	
94	243	土坑306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	−	−	−	
95	241	土坑306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(23.0)	−	−	
96	125	土坑306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	17.6	8.8	35.2	

番　号	整理番号	遺構・層位	種　類	器　種	型式・時期・年代	口径cm	底径cm	器高cm	備　考
97	129	土坑306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(25.0)	－	－	
98	133	土坑306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(18.0)	－	－	
99	242	土坑306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(23.0)	－	－	
100	132	土坑306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(22.0)	－	－	
37－101	131	土坑306	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(27.0)	－	－	
102	130	土坑306	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(31.2)	－	－	
103	244	土坑306	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(31.2)	－	－	
104	139	土坑306	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	21.4	4.4	23.2	
105	882	土坑306	弥生土器	甕	弥生Ⅱ期前葉	18.3	－	－	
106	142	土坑307	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
107	128	土坑307	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(42.0)	－	－	
108	135	土坑307	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(68.0)	－	－	
38－109	302	土坑308	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	23.1	10.2	44.5	
110	303	土坑308	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	22.4	12.0	47.8	
111	145	土坑308	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	10.0	－	
112	149	土坑308	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(20.4)	－	－	
113	308	土坑308	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	14.5	5.6	13.6	
114	144	土坑308	弥生土器	甕蓋	弥生Ⅰ期末	8.0	－	－	
39－115	146	土坑308	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	21.6	－	－	
116	147	土坑308	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(22.4)	－	－	
117	308	土坑308	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	19.0	7.1	23.3	
118	143	土坑308	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	－	7.6	－	
119	148	土坑308	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(22.6)	－	－	
120	310	土坑309	弥生土器	甕	弥生Ⅱ期前葉	18.1	6.0	25.8	
121	165	土坑309	弥生土器	甕	弥生Ⅱ期前葉	19.6	－	－	
122	166	土坑309	弥生土器	甕	弥生Ⅱ期前葉	－	－	－	
123	167	土坑309	弥生土器	甕	弥生Ⅱ期前葉	－	8.0	－	
40－124	164	土坑310	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	10.1	8.8	38.4	
125	162	土坑310	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	17.2	－	－	
123	159	土坑310	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	18.0	4.8	33.5	
127	150・151・156	土坑310	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	19.6	9.2	38.0	
41－128	153	土坑310	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	17.0	－	－	
129	163a	土坑310	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	10.0	7.4	17.3	
130	154	土坑310	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	6.0	－	
131	152	土坑310	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	7.8	－	
132	157	土坑310	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
133	163	土坑310	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	8.6	－	
134	155	土坑310	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(20.0)	－	－	
135	160	土坑310	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(24.8)	－	－	
136	161a	土坑310	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(30.2)	－	－	
42－137	161b	土坑310	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(23.0)	－	－	
138	173	土坑310	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(11.0)	－	－	
139	307	土坑310	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	32.2	9.0	27.0	
140	312	土坑311	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	20.7	8.0	15.5	
141	174	土坑311	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	47.1	10.4	34.8	
43－142	304	土坑312	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	16.8	9.7	33.9	
143	20	土坑312	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(20.4)	－	－	
144	22	土坑313	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(28.6)	－	－	
145	14	土坑313	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	21.2	－	－	
146	21	土坑313	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	21.4	－	－	
147	16	土坑313	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	17.0	－	
148	18	土坑314	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
149	250	土坑314	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	26.8	－	－	
44－150	19	土坑315	弥生土器	壺	弥生Ⅱ期前葉	(18.8)	－	－	
151	13	土坑315	弥生土器	甕	弥生Ⅱ期前葉	(22.2)	－	－	
152	12	土坑315	弥生土器	甕	弥生Ⅱ期前葉	(23.0)	－	－	
153	240	土器だまり301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	13.4	－	－	
154	235	土器だまり301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	(9.2)	－	
155	236	土器だまり301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	(12.0)	－	
156	232	土器だまり301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	10.0	－	
157	234	土器だまり301	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	12.8	－	
45－158	239	土器だまり301	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(41.4)	－	－	
159	233	土器だまり301	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	－	8.2	－	
160	238	土器だまり301	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(30.0)	－	－	
161	237	土器だまり301	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(32.2)	－	－	瀬戸内型
162	256	土器だまり302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(21.0)	－	－	
163	258	土器だまり302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
164	251	土器だまり302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	9.4	－	
165	257	土器だまり302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
166	253	土器だまり302	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	11.0	－	
167	254b	土器だまり302	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	－	－	－	瀬戸内型
168	254a	土器だまり302	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	－	－	－	瀬戸内型
46－169	213	土器だまり303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	16.2	－	－	
170	207	土器だまり303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	24.8	－	－	
171	206	土器だまり303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
172	208	土器だまり303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
173	209	土器だまり303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
174	212	土器だまり303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
175	205	土器だまり303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
176	199	土器だまり303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	10.0	－	
177	221	土器だまり303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	8.3	－	
178	225	土器だまり303	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	9.6	－	
179	226	土器だまり303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(36.0)	－	－	
180	216	土器だまり303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	－	－	－	被熱
181	214a	土器だまり303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	－	－	－	被熱
182	231	土器だまり303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	－	22.8	－	
183	214b	土器だまり303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	－	－	－	被熱
184	215	土器だまり303	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	－	－	－	被熱
47－185	228	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(23.4)	－	－	
186	196	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(34.2)	－	－	
187	227	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	20.9	8.0	23.8	
188	195	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(37.0)	－	－	
189	211	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(18.4)	－	－	
190	210	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(18.0)	－	－	
191	224	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	－	(9.4)	－	
192	219	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	－	8.0	－	
193	194	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	－	8.6	－	
194	192	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	－	11.2	－	

番　号	整理番号	遺構・層位	種　類	器　種	型式・時期・年代	口径cm	底径cm	器高cm	備　考
48－195	197	土器だまり303	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	－	13.0	－	
196	190	土器だまり304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(29.0)	－	－	
197	188	土器だまり304	弥生土器	壺蓋	弥生Ⅰ期末	－	(23.0)	－	
198	187	土器だまり304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(24.0)	－	－	
199	189	土器だまり304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
200	191	土器だまり304	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
49－201	171b	土器だまり305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	10.0	－	
202	171	土器だまり305	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	26.0	4.8	14.9	
203	171a	土器だまり305	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	15.6	5.4	16.1	
204	169	土器だまり305	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
205	168	土器だまり305	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(33.2)	－	－	瀬戸内型
206	170	土器だまり305	弥生土器	甕	弥生Ⅰ期末	(15.8)	－	－	瀬戸内型
50－207	301	土器だまり306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	18.0	7.5	32.1	
208	178	土器だまり306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(12.8)	－	－	
209	176	土器だまり306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(20.4)	－	－	
210	177	土器だまり306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	(23.0)	－	－	
211	186	土器だまり306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	赤彩
212	184	土器だまり306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	(10.0)	－	
213	174	土器だまり306	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	43.4	10.8	32.3	
214	180	土器だまり306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
215	175	土器だまり306	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	－	－	－	
216	179	土器だまり306	弥生土器	鉢	弥生Ⅰ期末	(44.4)	－	－	
51－217	309	方形周溝墓201	弥生土器	細頸壺	弥生Ⅳ期前葉	13.8	7.7	36.0	
218	461	竪穴住居201	弥生土器	鉢	弥生終末期	17.0	－	6.0	
219	462	竪穴住居201	弥生土器	鉢	弥生終末期	11.3	－	3.5	
220	757	井戸201	土師器	甕	古墳前期初頭	13.6	－	22.0	
221	441	井戸202	土師器	甕	古墳前期	(24.8)	－	(26.1)	
222	442	井戸202	弥生土器	甕	弥生Ⅳ期	15.5	6.3	25.0	
52－223	447	井戸203	土師器	甕	古墳前期初頭	(15.0)	－	－	
224	450	井戸203	弥生土器	甕	弥生終末期	(14.2)	－	－	
225	314	井戸203	土師器	甕	古墳前期	12.5	－	17.5	
226	454	井戸203	土師器	甕	古墳前期	16.0	－	28.3	
227	449	井戸203	土師器	甕	古墳前期	(14.6)	－	－	
228	446	井戸203	土師器	椀	古墳前期	(18.6)	－	(6.2)	
229	443	井戸203	土師器	高杯	古墳前期	(14.8)	－	－	
230	444	井戸203	土師器	高杯	古墳前期	(17.0)	－	－	
231	451	井戸203	弥生土器	広口壺	弥生Ⅴ期	(22.0)	－	－	
232	445	井戸203	土師器	高杯	古墳前期	13.8	9.8	11.5	
233	453	井戸203	土師器	高杯	古墳前期	－	(10.0)	－	
234	452	井戸203	土師器	高杯	古墳前期	(19.8)	－	－	
53－235	317a	不明遺構201	須恵器	蓋	MT15	－	15.6	4.7	
236	317b	不明遺構201	須恵器	杯	MT15	14.0	－	3.7	
237	480	須恵器だまり201	須恵器	長頸壺	8C前葉	－	－	(11.2)	
238	875	須恵器だまり201	土師器	皿	8C前葉	(10.6)	(9.0)	2.5	内外面赤彩
239	873	須恵器だまり201	須恵器	蓋	8C前葉	12.4	－	－	
240	477	須恵器だまり201	須恵器	短頸壺	8C前葉	(10.8)	－	－	
241	870	須恵器だまり201	須恵器	平瓶	8C前葉	9.7	－	－	
242	479	須恵器だまり201	須恵器	短頸壺	8C前葉	13.0	－	－	
243	478	須恵器だまり201	須恵器	甕	8C前葉	(19.8)	－	－	
244	481	須恵器だまり201	須恵器	甕	8C前葉	22.2	－	－	
54－245	846	須恵器だまり201	須恵器	甕	8C前葉	(23.6)	－	－	
246	615	須恵器だまり201	須恵器	甕	8C前葉	(17.3)	－	－	
55－247	738	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(11.0)	(7.5)	(2.2)	
248	743	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.0	8.0	1.5	
249	744	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.0	8.5	1.3	
250	808	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	10.4	6.7	1.4	
251	819	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	10.2	7.2	1.6	
252	742	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	10.6	8.0	1.5	
253	739	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(10.2)	－	1.7	
254	730	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.5	9.0	1.1	
255	537b	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	10.0	6.5	1.8	
256	860	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	10.2	2.1	7.8	
257	726	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	13.8	7.8	2.1	
258	731	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(10.4)	(5.0)	(2.4)	
259	735	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(10.6)	(7.0)	(2.2)	
260	737	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(11.0)	(8.0)	(2.4)	
261	725	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.1	7.8	2.3	
262	723	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.6	7.8	2.4	
263	746	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.6	8.4	2.4	
264	727	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.2	7.8	2.5	
265	732	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(12.4)	(8.2)	(2.6)	
266	747	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.8	8.1	2.3	
267	741	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.4	8.0	2.4	
268	724	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	12.0	8.5	2.4	
269	716	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(11.8)	(8.0)	(2.2)	
270	745	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.6	8.4	2.7	
271	718	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(12.0)	(8.0)	(2.4)	
272	715	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(11.4)	(7.1)	(2.7)	
273	720	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(11.4)	(7.7)	(2.8)	
274	748	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(11.6)	(8.0)	2.8	
275	740	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.7	6.0	2.6	
276	721	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	12.4	6.0	2.6	
277	749	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	11.9	3.9	2.9	
278	722	水路201土器だまり	土師器	皿	11C前葉	(12.0)	(5.0)	(2.4)	
279	507	水路201土器だまり	土師器	杯	11C前葉	12.5	9.1	3.6	
280	734	水路201土器だまり	土師器	杯	11C前葉	(12.0)	(7.0)	(3.6)	
281	717	水路201土器だまり	土師器	杯	11C前葉	(13.8)	(8.8)	(3.9)	
282	754	水路201土器だまり	土師器	足高高台付皿	11C前葉	(10.5)	5.4	2.6	
283	814	水路201土器だまり	土師器	足高高台付皿	11C前葉	10.4	7.2	3.3	
284	751	水路201土器だまり	土師器	足高高台付皿	11C前葉	10.4	6.6	3.5	
285	606	水路201土器だまり	土師器	足高高台付皿	11C前葉	11.1	6.9	3.6	
286	752	水路201土器だまり	土師器	足高高台付皿	11C前葉	10.4	6.7	3.5	
287	750	水路201土器だまり	土師器	足高高台付皿	11C前葉	(10.8)	6.5	3.4	
288	818	水路201土器だまり	土師器	足高高台付皿	11C前葉	12.4	7.5	3.5	
289	753	水路201土器だまり	土師器	足高高台付皿	11C前葉	(11.9)	7.8	3.5	
290	815	水路201土器だまり	土師器	足高高台付皿	11C前葉	12.2	7.1	3.6	
291	880	水路201土器だまり	黒色土器A	椀	11C前葉	14.1	7.2	5.5	
292	806	水路201土器だまり	黒色土器A	椀	11C前葉	15.6	8.0	6.5	

番　号	整理番号	遺構・層位	種　類	器　種	型式・時期・年代	口径cm	底径cm	器高cm	備　考
293	811	水路201土器だまり	黒色土器B	椀	11C前葉	16.8	7.9	6.8	
56−294	635	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	(10.8)	(7.4)	1.5	
295	633	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	(11.6)	(7.8)	1.3	
296	634	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	12.0	8.3	1.1	
297	585	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	11.5	7.5	2.3	
298	625	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	11.2	7.9	2.2	
299	509	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	11.6	8.4	2.6	
300	636	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	11.2	8.0	2.6	
301	511	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	11.6	4.0	2.8	
302	510	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	11.6	4.9	2.7	
303	627	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	11.1	7.8	2.4	
304	512	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	11.2	7.7	2.8	
305	865	水路201貝層	土師器	皿	11C前葉	10.6	8.0	2.5	
306	626	水路201貝層	土師器	杯	11C前葉	11.6	7.2	3.3	
307	632	水路201貝層	土師器	杯	11C前葉	(12.2)	(7.2)	3.6	
308	864	水路201貝層	土師器	杯	11C前葉	12.7	8.8	3.1	
309	517	水路201貝層	土師器	杯	11C前葉	(12.8)	(9.0)	4.2	
310	881	水路201貝層	黒色土器B	椀	11C前葉	(17.7)	(7.9)	5.7	
311	583	水路201貝層	黒色土器B	椀	11C前葉	(15.7)	8.2	5.6	
312	515	水路201貝層	黒色土器A	椀	11C前葉	(15.0)	(9.0)	5.7	
313	516	水路201貝層	黒色土器A	椀	11C前葉	(15.8)	(8.0)	5.9	
314	513	水路201貝層	黒色土器A	椀	11C前葉	(14.8)	(6.9)	(8.4)	
315	868	水路201貝層	黒色土器B	椀	11C前葉	13.7	7.2	5.2	
316	869	水路201貝層	黒色土器B	椀	11C前葉	(15.0)	(7.8)	5.9	
317	514	水路201貝層	黒色土器A	椀	11C前葉	(15.2)	(8.0)	6.5	
318	532	水路201貝層	土師器	甕	11C前葉	(35.0)	−	−	
57−319	801	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.0	8.0	1.3	
320	537a	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	10.3	7.0	1.1	
321	520	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	10.2	7.4	1.2	
322	647.5	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	10.4	7.4	1.1	
323	622	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.7	8.0	1.7	
324	652	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.5	8.0	1.5	
325	587	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.1	9.0	1.5	
326	508	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.6	8.4	2.6	
327	501	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	10.3	9.4	1.2	
328	519	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	12.5	9.3	1.5	
329	502	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.3	8.0	1.6	
330	503	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.2	8.0	1.3	
331	547	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	10.6	1.0	1.7	
332	601	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	9.7	7.8	1.7	
333	659	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	10.1	−	−	
334	653	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	(11.3)	(8.0)	2.0	
335	642	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.7	7.9	2.2	
336	588	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.3	5.0	2.4	
337	713	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.0	7.0	2.4	
338	850	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.8	8.0	2.3	
339	619	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.4	8.0	2.1	
340	658	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.5	7.5	2.5	
341	609	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	(10.4)	7.5	2.2	
342	600	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	(10.0)	(7.4)	(1.8)	
343	589	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.0	7.0	2.2	
344	525	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.4	7.8	2.2	
345	851	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.7	8.0	2.3	
346	657	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	12.0	8.0	2.5	
347	816	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.3	7.8	2.6	
348	598	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.7	8.3	2.5	
349	714	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.1	3.5	2.2	
350	620	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.4	5.0	2.4	
351	552	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.7	10.0	2.3	
352	650	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	12.3	9.0	2.4	
353	599	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.5	8.2	2.7	
354	506	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.8	9.4	2.9	
355	597	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.7	5.8	2.9	
356	586	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.3	7.5	2.5	
357	855	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.7	7.2	2.6	
358	856	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.8	5.9	2.6	
359	549	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	12.6	9.0	2.8	
360	644	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	(11.0)	(8.4)	2.5	
361	531	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	(10.7)	(5.0)	2.6	
362	530	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.2	7.5	2.7	
363	621	水路201上層	土師器	皿	11C前葉	11.3	7.0	2.5	
364	651	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	(12.5)	−	(3.0)	
365	580	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.4	8.0	3.3	
366	820	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.3	6.8	3.1	
58−367	546	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	10.8	7.2	3.2	
368	505	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.2	7.6	3.3	
369	649	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.4	8.0	3.4	
370	617	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.2	7.0	3.4	
371	593	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.4	9.0	3.4	
372	554	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	(12.0)	(7.2)	(3.5)	
373	681	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	(12.4)	(7.0)	3.8	
374	578	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.2	9.0	3.5	
375	817	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	11.4	7.9	3.2	
376	809	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.2	5.3	3.2	
377	656	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.4	9.2	3.0	
378	683	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.4	7.0	3.2	
379	613	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	13.2	5.7	3.6	
380	616	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	(13.0)	(8.0)	3.5	
381	810	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.5	6.1	3.1	
382	682	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	13.2	7.7	3.6	
383	608	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	(14.1)	5.0	3.8	
384	655	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	13.0	5.1	3.8	
385	524	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	13.4	9.2	3.2	
386	577	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	12.8	7.5	3.6	
387	592	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	13.5	8.8	3.8	
388	755	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	13.7	7.0	3.7	内外面赤彩
389	563	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	13.2	8.0	4.1	
390	579	水路201上層	土師器	杯	11C前葉	13.4	7.5	3.5	

番　号	整理番号	遺構・層位	種　類	器　種	型式・時期・年代	口径cm	底径cm	器高cm	備　考
391	654	水路201上層	土師器	杯	11C 前葉	14.8	8.7	3.6	
392	529	水路201上層	土師器	杯	11C 前葉	15.3	7.0	4.7	
393	827	水路201上層	土師器	足高高台付皿	11C 前葉	12.8	7.3	3.2	
394	623	水路201上層	土師器	足高高台付杯	11C 前葉	－	7.6	－	
395	760	水路201上層	土師器	足高高台付杯	11C 前葉	15.1	7.9	5.7	
396	802	水路201上層	土師器	足高高台付杯	11C 前葉	16.1	8.8	5.2	
397	584	水路201上層	土師器	足高高台付杯	11C 前葉	12.6	7.2	4.9	
398	603	水路201上層	土師器	足高高台付杯	11C 前葉	(15.4)	7.4	5.7	
399	594	水路201上層	土師器	足高高台付杯	11C 前葉	14.3	7.2	5.4	
400	591	水路201上層	土師器	足高高台付杯	11C 前葉	(14.1)	8.4	5.6	
401	551	水路201上層	土師器	高台付椀	11C 前葉	12.6	6.2	5.3	
402	548	水路201上層	土師器	高台付椀	11C 前葉	13.5	7.5	4.5	
59－403	834	水路201上層	黒色土器 A	椀	11C 前葉	16.4	8.4	7.0	
404	593.5	水路201上層	黒色土器 A	椀	11C 前葉	(14.9)	(7.4)	(6.1)	
405	843	水路201上層	黒色土器 A	椀	11C 前葉	(14.8)	(7.8)	(5.2)	
406	590	水路201上層	黒色土器 A	椀	11C 前葉	(14.7)	(7.6)	6.0	
407	607	水路201上層	黒色土器 A	椀	11C 前葉	(15.3)	－	－	
408	550	水路201上層	黒色土器 B	椀	11C 前葉	13.0	7.4	4.8	
409	879	水路201上層	黒色土器 A	椀	11C 前葉	15.8	7.4	5.5	
410	756	水路201上層	土師器	鍋	11C 前葉	(26.2)	－	－	
411	604	水路201上層	土師器	甕	11C 前葉	35.0	－	－	
412	847	水路201上層	須恵器	甕	11C 前葉	(25.0)	－	－	
60－413	696	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	10.3	7.0	1.3	
414	647	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	14.4	10.4	1.8	
415	560	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(11.2)	(8.3)	(1.3)	
416	861	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	11.5	1.4	9.3	
417	697	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	11.6	8.0	1.3	
418	703	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	13.8	11.2	1.2	手づくね、畿内系？
419	707	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(13.8)	(8.6)	(1.9)	
420	573.5	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	14.1	11.6	1.5	
421	645	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	13.1	8.8	1.9	
422	674	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	12.9	9.6	1.8	
423	673	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	13.2	10.6	1.4	
424	706	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(13.8)	(8.4)	(1.6)	
425	573	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	14.8	9.8	1.2	
426	387	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	13.9	9.2	1.4	
427	680	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	13.8	9.5	1.8	
428	523	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(14.9)	(12.0)	2.2	
429	646	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	14.5	8.0	2.5	
430	841	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(15.2)	(12.6)	(1.8)	
431	762	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(14.8)	(10.8)	2.7	内面赤彩
432	840	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	14.4	10.6	2.6	
433	705	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(18.0)	－	－	内外面赤彩
434	704	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(26.0)	－	－	内面赤彩
435	678	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	13.0	8.0	1.8	内外面赤彩
436	888	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(17.5)	(13.0)	2.1	内外面赤彩、刻書
437	854	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	15.6	11.0	2.0	内外面赤彩、刻書
438	852	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	14.6	9.5	2.0	内外面赤彩、刻書
61－439	853	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(14.5)	(10.0)	1.6	内外面赤彩、刻書
440	698	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	13.8	8.5	1.4	刻書
441	836	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	14.2	2.2	8.6	内面赤彩、刻書
442	838	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	14.2	8.4	1.8	刻書
443	677	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(13.8)	(9.5)	(2.1)	
444	679	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	13.3	7.0	2.0	
445	600.5	水路201下層	土師器	皿	11C 前葉	10.2	7.4	1.7	
446	559	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	11.2	7.8	2.6	
447	526	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	11.1	8.1	2.7	
448	688	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	(11.4)	(6.0)	(2.4)	
449	571	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	10.7	8.7	2.2	
450	837	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	14.0	7.9	3.0	内面赤彩
451	568	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	13.5	8.8	2.9	
452	667	水路201下層	土師器	皿	11C 前葉	(13.8)	(8.4)	2.9	
453	555	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(13.0)	(8.5)	(3.2)	
454	638	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.2	9.2	3.0	
455	569	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(11.9)	7.8	3.3	
456	556	水路201下層	土師器	杯	11C 前葉	12.4	8.0	3.1	
457	689	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(12.8)	(6.5)	(3.6)	
458	701	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(12.8)	(7.5)	(3.2)	
459	666	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(13.0)	(9.0)	(3.1)	
460	567	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.6	8.2	3.8	
461	848	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.8	9.0	3.0	内外面赤彩
462	693	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.0	8.5	3.0	
463	664	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.4	8.2	3.0	
464	534	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(12.5)	(8.0)	3.5	
465	557	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.4	8.4	3.0	
466	692	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(11.9)	(6.5)	3.4	
467	662	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(14.8)	－	－	
468	702	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(13.4)	－	－	
469	663	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.0	8.0	3.5	
470	643	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.0	8.8	3.3	
471	518	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(10.8)	(6.5)	3.0	
472	535	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.7	6.0	3.6	
62－473	665	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(13.0)	(4.2)	(3.3)	
474	699	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.0	8.6	3.0	
475	618	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.4	7.0	3.4	
476	639	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.8	9.1	3.1	
477	581	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.9	8.0	3.3	内外面赤彩
478	637	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.5	8.3	3.3	
479	668	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.0	8.0	3.3	
480	835	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.2	－	3.4	
481	558	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.6	7.4	3.4	
482	661	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(12.8)	(7.6)	(3.3)	内面赤彩
483	570	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.4	9.0	3.0	内外面赤彩
484	887	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(11.8)	(7.0)	3.0	外面赤彩
485	322	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.3	8.0	3.3	内外面赤彩
486	319	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	11.9	9.5	3.0	内面赤彩
487	710	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.3	8.0	2.8	内外面赤彩
488	686	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.1	7.0	3.2	

番　号	整理番号	遺構・層位	種　類	器　種	型式・時期・年代	口径cm	底径cm	器高cm	備　考
489	711	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.4	7.5	3.7	
490	672	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(13.0)	(7.5)	(3.5)	
491	533	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.4	7.8	3.5	
492	695	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.0	7.0	3.7	
493	669	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(12.8)	－	－	
494	694	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.1	8.0	3.7	
495	321	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.8	7.8	4.0	
496	640	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	14.2	9.2	4.2	
497	614	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.0	5.2	4.2	
498	671	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(12.0)	－	－	
499	700	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.0	8.7	4.3	
500	641	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(14.4)	(11.0)	3.4	内外面赤彩
501	648	水路201下層	土師器	杯	8C 代	(16.8)	(14.2)	4.7	畿内搬入
502	562	水路201下層	黒色土器B	杯	10C 後葉～11C 前葉	(14.0)	(10.6)	(3.5)	
63－503	687	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.1	6.5	3.4	内外面赤彩、刻書
504	670	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.0	8.6	3.1	刻書
505	849	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.7	8.5	2.8	内外面赤彩、刻書
506	320	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.0	7.5	3.0	刻書
507	826	水路201下層	土師器	足高高台付皿	10C 後葉～11C 前葉	10.5	6.4	3.2	
508	866	水路201下層	土師器	足高高台付杯	10C 後葉～11C 前葉	14.8	5.0	7.4	
509	812	水路201下層	土師器	足高高台付杯	10C 後葉～11C 前葉	15.7	8.8	5.3	
510	831	水路201下層	土師器	高台付椀	10C 後葉～11C 前葉	17.1	9.8	5.4	
511	833	水路201下層	土師器	高台付椀	10C 後葉～11C 前葉	17.0	9.6	6.3	刻書
512	828	水路201下層	土師器	高台付椀	10C 後葉～11C 前葉	15.8	9.4	5.0	内外面赤彩
513	830	水路201下層	土師器	高台付椀	10C 後葉～11C 前葉	15.0	8.9	5.5	内面赤彩
514	684	水路201下層	黒色土器B	椀	10C 後葉～11C 前葉	15.2	8.6	5.4	
515	572	水路201下層	土師器	高台付椀	10C 後葉～11C 前葉	(16.1)	(7.2)	5.3	
516	566	水路201下層	土師器	高台付椀	10C 後葉～11C 前葉	(16.6)	5.0	(9.6)	内外面赤彩
517	842	水路201上層	黒色土器A	椀	11C 前葉	(16.4)	(8.2)	(5.9)	
518	522	水路201上層	黒色土器A	椀	11C 前葉	15.6	－	－	
519	青18	水路201下層	土師器	坩堝	10C 後葉～11C 前葉	(6.0)	－	(2.2)	被熱変色・付着物なし
520	553	水路201下層	黒色土器A	椀	10C 後葉～11C 前葉	(15.4)	(8.3)	(5.6)	
521	521	水路201下層	黒色土器A	椀	10C 後葉～11C 前葉	(16.0)	(7.7)	5.7	
64－522	758	水路201下層	土師器	甕	10C 後葉～11C 前葉	(21.2)	－	－	
523	574	水路201下層	土師器	甕	10C 後葉～11C 前葉	24.0	－	－	
524	538	水路201下層	土師器	甕	10C 後葉～11C 前葉	(21.3)	－	－	
525	576	水路201下層	土師器	甑把手	10C 後葉～11C 前葉	－	－	－	
526	575	水路201下層	土師器	甑把手	10C 後葉～11C 前葉	－	－	－	
527	759	水路201下層	弥生土器	鉢	弥生Ⅴ期	13.6	－	8.8	
528	315	水路201下層	土師器	小型丸底壺	古墳前期初頭	10.0	－	7.0	
529	877	水路201下層	須恵器	杯	9C	(12.6)	(8.2)	3.5	
530	884	水路201下層	須恵器	杯	9C	(12.2)	－	－	
531	539	水路201下層	須恵器	杯	9C	(12.2)	(9.0)	3.5	
532	543	水路201下層	須恵器	甕	8・9C	(13.7)	－	－	
533	765	水路201下層	須恵器	甕	8・9C	(14.8)	－	－	
534	541	水路201下層	須恵器	甕	8・9C	(23.7)	－	－	
535	564	水路201下層	須恵器	甕	8・9C	(30.0)	－	－	
536	545	水路201下層	須恵器	長頸壺	8C	－	(11.0)	－	
537	596	水路201下層	須恵器	蓋	6C	11.7	－	－	
538	318a	水路201下層	須恵器	蓋	6C	－	16.2	5.7	
539	542	水路201下層	須恵器	短頸壺	6C後葉	(8.2)	－	－	
540	871	水路201下層	須恵器	瓶子	8C	－	4.7	－	
541	318b	水路201下層	須恵器	杯	6C	(14.4)	－	(5.0)	
542	872	水路201下層	須恵器	杯	8C	(11.6)	(8.4)	3.4	
543	316	水路201下層	須恵器	蓋	TK47	2.8	(11.4)	5.2	
544	527	水路201下層	須恵器	蓋	7～8C	－	(15.0)	(2.5)	
545	886	水路201下層	須恵器	蓋	7～8C	(15.2)	－	3.2	
546	528	水路201下層	須恵器	杯	6C	(13.6)	－	－	
547	561	水路201下層	須恵器	杯	8C	(16.0)	(12.0)	(3.6)	
548	874	水路201下層	灰釉陶器	皿	9C	(14.6)	(7.4)	2.8	
65－549	ピンク3	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	－	6.0	－	墨書「賀専當」
550	ピンク2	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.2	7.1	3.7	墨書「加毛」？
551	赤7	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(12.8)	(8.1)	(3.1)	墨書「加毛」？内外面赤彩
552	ピンク5	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	－	(6.0)	－	墨書「□原」？
553	ピンク7	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	－	(7.6)	－	墨書　絵画？
554	赤6	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	12.7	7.6	3.1	墨書「□」
66－555	ピンク1	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	－	4.0	－	墨書「六」
556	ピンク4	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	－	7.8	－	墨書「六」
557	赤5	水路201下層	土師器	皿	10C 後葉～11C 前葉	13.6	9.7	1.7	墨書「六」
558	赤4	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	－	(8.0)	－	墨書「九」？
559	536	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	13.4	6.0	3.5	墨書「くりや」
560	赤1	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	－	(8.4)	－	墨書「□」内外面赤彩
67－561	赤2	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	－	(7.2)	－	墨書「□」
562	ピンク7	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	－	(7.3)	－	墨書「□」
563	ピンク6	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	－	7.9	－	墨書「□」
564	赤3	水路201下層	土師器	杯	10C 後葉～11C 前葉	(12.6)	－	－	墨書「□」
565	製塩8	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	－	－	－	
566	製塩4	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	－	－	－	
567	製塩16	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	－	－	－	
568	製塩1	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	－	－	－	
569	製塩17	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	－	－	－	
570	製塩9	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	－	－	－	
571	製塩7	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	－	－	－	
572	製塩11	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	－	－	－	
573	仮1	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	(11.1)	－	－	
574	仮13	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	(14.0)	－	－	
575	仮3	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	(7.5)	－	－	
576	仮2	水路201下層	製塩土器	－	10C 後葉～11C 前葉	(16.0)	－	－	
68－577	440	東西大溝201	須恵器	広口壺	7C後葉	(28.0)	－	－	
578	435	東西大溝201	須恵器	杯蓋	7C後葉	2.5	2.5	15.7	
579	436	東西大溝201	須恵器	杯蓋	7C後葉	－	(14.5)	(2.2)	
580	437	東西大溝201	須恵器	杯	7C後葉	(13.8)	－	(3.5)	
581	438	東西大溝201	須恵器	短頸壺	7C後葉	(5.8)	－	－	
582	408	東西大溝202	弥生土器	鉢	弥生Ⅴ期	(17.2)	－	－	
583	405	東西大溝202	弥生土器	広口壺	弥生Ⅴ期	21.4	－	－	
584	431	東西大溝202	弥生土器	高杯	弥生Ⅴ期	24.6	－	－	
585	402	東西大溝202	弥生土器	二重口縁壺	庄内式併行	20.3	－	－	
586	313	東西大溝202	弥生土器	高杯	弥生Ⅴ期	22.7	14.6	14.4	

番　号	整理番号	遺構・層位	種　類	器　種	型式・時期・年代	口径cm	底径cm	器高cm	備　考
587	409	東西大溝202	弥生土器	甕	弥生終末期	(13.2)	－	－	
588	403	東西大溝202	土師器	小型丸底壺	古墳前期	－	－	－	
589	404	東西大溝202	土師器	甕	古墳前期	(11.6)	－	－	
590	410	東西大溝202	弥生土器	甕	古墳前期	13.0	－	22.0	
591	406	東西大溝202	弥生土器	甕	弥生終末期	(13.2)	－	－	
592	407	東西大溝202	土師器	甕	古墳前期	(12.0)	－	－	
69－593	橙2	東西大溝202	円筒埴輪	－	古墳後期	－	－	－	
594	426	東西大溝202	須恵器	杯蓋	6～8C	－	9.7	2.3	
595	417	東西大溝202	須恵器	皿	－	8.2	3.5	1.2	手づくね
596	439	東西大溝202	須恵器	壺	古墳後期	(12.2)	－	－	
597	416	東西大溝202	須恵器	杯	古墳後期	(14.0)	－	(4.1)	
598	885	東西大溝202	須恵器	杯	6～8C	14.8	11.2	3.5	
599	412	東西大溝202	土師器	甕	13C前葉	33.0	－	－	
600	428	東西大溝202	土師器	甕	13C前葉	23.4	－	－	
601	878	東西大溝202	瓦器	脚付羽釜	13C前葉	(17.1)	－	－	
602	413	東西大溝202	土師器	釜	11C	19.6	－	－	
603	420	東西大溝202	土師器	皿	13C前葉	10.3	8.1	1.5	
604	844	東西大溝202	土師器	皿	13C前葉	(16.0)	(5.4)	(5.5)	
605	421	東西大溝202	瓦器	椀	13C前葉	10.1	7.8	1.9	
606	423	東西大溝202	土師器	皿	13C前葉	10.3	5.1	1.4	
607	422	東西大溝202	土師器	皿	13C前葉	9.5	7.5	1.0	
608	415	東西大溝202	瓦器	椀	13C前葉	15.3	4.8	4.8	
609	414	東西大溝202	瓦器	椀	13C前葉	15.2	5.0	5.0	
610	761	東西大溝101	磁器	皿	幕末	－	(8.5)	－	
611	401	東西大溝101	瓦器	羽釜	幕末	(21.8)	－	－	
70－612	456	土坑204	土師器	甕	11C前葉	21.5	－	－	
613	459	土坑204	土師器	皿	11C前葉	11.3	5.0	1.2	
614	460	土坑204	土師器	足高高台付皿	11C前葉	－	7.7	－	
615	457	土坑204	土師器	杯	11C前葉	10.5	3.0	3.0	
616	458	土坑204	土師器	杯	11C前葉	13.0	7.0	3.2	
617	466	土坑203	土師器	皿	11C前葉	11.3	7.8	1.4	
618	463	土坑203	土師器	椀	11C前葉	13.7	7.4	5.1	
619	805	木棺墓201	土師器	足高高台付杯	11C前葉	13.3	7.0	5.1	
620	804	木棺墓201	土師器	足高高台付杯	11C前葉	16.5	9.7	6.9	
621	883	包含層	弥生土器	壺	弥生Ⅰ期末	20.4	－	－	
622	845	包含層	須恵器	鉢	－	(18.7)	－	－	
623	474	包含層	弥生土器	甕	弥生終末期	(13.2)	－	－	
624	605	包含層	須恵器	長頸壺	－	(9.0)	－	－	
625	764	包含層	須恵器	杯	－	13.2	7.0	3.5	
626	763	包含層	須恵器	杯	－	13.3	－	3.8	
627	448	包含層	須恵器	蓋	－	2.7	11.1	3.1	
628	610	包含層	土師器	皿	11C前葉	9.4	5.0	1.5	
629	612	包含層	土師器	皿	11C前葉	11.4	5.5	1.5	
630	471	包含層	土師器	皿	11C前葉	11.1	7.2	1.7	
631	465	包含層	土師器	皿	11C前葉	11.8	7.2	1.6	
632	473	包含層	土師器	皿	11C前葉	11.4	5.2	1.5	
633	469	包含層	土師器	杯	11C前葉	11.6	6.7	3.1	
634	467	包含層	土師器	杯	11C前葉	11.5	7.2	3.3	
635	464	包含層	土師器	杯	11C前葉	12.1	8.0	3.2	
636	468	包含層	土師器	杯	11C前葉	11.9	4.6	4.0	
637	475	包含層	土師器	杯	11C前葉	12.8	4.0	3.4	
638	476	包含層	黒色土器A	椀	11C前葉	15.2	7.5	6.5	
639	472	包含層	黒色土器A	椀	11C前葉	15.8	8.0	6.2	
640	橙1	確認トレンチ	縄文土器	浅鉢	縄文後期中葉	－	－	－	

遺物観察表　瓦・土製品

番号	整理番号	遺構・層位	種類	長さ(残長)cm	幅(残幅)cm	厚さ(残厚)cm	孔幅cm	重量(欠損)g
71－641	橙８	包含層	平瓦	－	－	－	－	－
642	橙７	東西大溝202	平瓦	－	－	－	－	－
72－643	土６C	東西大溝202	管状土錘	2.40	0.85	－	0.40	1.92
644	土19	水路201上層	管状土錘	4.00	1.10	－	0.30	4.49
645	土45	水路201下層	管状土錘	4.10	1.10	－	0.25	4.51
646	土16B	水路201下層	管状土錘	4.60	1.00	－	0.25	4.21
647	土６B	東西大溝202	管状土錘	4.60	1.20	－	0.45	5.26
648	土７B	東西大溝202	管状土錘	5.30	1.10	－	0.40	6.61
649	土44	水路201下層	管状土錘	5.20	1.50	－	0.35	6.11
650	土４B	東西大溝202	管状土錘	4.10	0.95	－	0.25	4.39
651	土15	東西大溝202	管状土錘	4.80	1.00	－	0.25	5.31
652	土43	水路201下層	管状土錘	4.40	1.15	－	0.40	4.69
653	土48	包含層	管状土錘	3.90	1.05	－	0.35	4.05
654	土３	水路201下層	管状土錘	4.20	1.00	－	0.40	2.88
655	土７D	東西大溝202	管状土錘	3.80	1.00	－	0.35	4.33
656	土50	包含層	管状土錘	3.80	1.05	－	0.35	3.90
657	土18	包含層	管状土錘	3.80	1.20	－	0.40	5.64
658	土41	東西大溝202	管状土錘	5.90	1.05	－	0.30	4.95
659	土30	東西大溝202	管状土錘	3.60	1.10	－	0.35	4.70
660	土25	包含層	管状土錘	4.30	1.20	－	0.50	5.33
661	土24	包含層	管状土錘	3.10	1.10	－	0.25	3.81
662	土20	包含層	管状土錘	3.00	1.40	－	0.30	4.95
663	土31	東西大溝202	管状土錘	3.40	1.20	－	0.30	4.80
664	土23	包含層	管状土錘	4.10	1.30	－	0.35	4.54
665	土７E	東西大溝202	管状土錘	3.80	1.00	－	0.25	4.18
666	土７C	東西大溝202	管状土錘	3.80	1.20	－	0.40	4.74
667	土36	東西大溝202	管状土錘	4.10	1.80	－	0.50	9.63
668	土28	東西大溝202	管状土錘	4.20	1.90	－	0.40	11.37
669	土40	東西大溝202	管状土錘	6.30	1.45	－	0.40	12.24
670	土46	水路201貝層	管状土錘	5.40	1.15	－	0.30	6.24
671	土１	水路201上層	管状土錘	6.10	1.25	－	0.35	8.78
672	土29	東西大溝202	管状土錘	6.40	1.60	－	0.35	13.30
673	土17	水路201下層	管状土錘	5.20	1.40	－	0.35	9.28
674	土13B	東西大溝202	管状土錘	5.60	1.70	－	0.55	13.26
675	土４A	東西大溝202	管状土錘	4.80	2.10	－	0.60	10.11
676	土２	水路201上層	管状土錘	5.90	2.40	－	0.55	23.34
677	土32	東西大溝202	管状土錘	4.80	1.70	－	0.55	12.60
73－678	土35	東西大溝202	管状土錘	5.80	1.90	－	0.55	21.53
679	土22	包含層	管状土錘	6.30	1.90	－	0.55	19.05
680	土38	東西大溝202	管状土錘	5.70	2.20	－	0.55	28.28
681	土39	東西大溝202	管状土錘	5.10	1.70	－	0.50	11.48
682	土37	東西大溝202	管状土錘	5.70	1.70	－	0.50	15.58
683	土13A	東西大溝202	管状土錘	5.50	1.30	－	0.65	14.96
684	土27	東西大溝202	管状土錘	6.10	1.70	－	0.50	16.50
685	土49	包含層	管状土錘	7.00	2.00	－	0.60	30.36
686	土６A	東西大溝202	管状土錘	5.30	1.70	－	0.55	13.69
687	土７A	東西大溝202	管状土錘	5.50	1.80	－	0.60	15.76
688	土16A	水路201下層	管状土錘	5.50	1.90	－	0.40	15.86
689	土47	水路201上層	管状土錘	5.40	2.20	－	0.80	19.88
690	土５	水路201貝層	管状土錘	5.00	2.50	－	0.55	28.63
691	土14B	水路201下層	管状土錘	5.20	1.30	－	0.70	20.10
692	土12	水路201上層	管状土錘	5.80	2.90	－	1.00	54.18
693	土11	水路201下層	管状土錘	7.80	2.90	－	1.20	44.36
694	土14A	水路201下層	管状土錘	7.50	3.40	－	1.30	65.94
695	土26	包含層	有溝土錘	5.70	3.40	－	－	51.47
696	土９	水路201上層	棒状土錘	4.70	1.20	－	0.35	10.40
697	土10	包含層	棒状土錘	4.60	1.20	－	0.50	9.86
698	土42	東西大溝101	棒状土錘	4.10	1.40	－	0.50	8.58
699	土51	包含層	棒状土錘	3.90	1.40	－	0.55	8.00
74－700	土20	水路201下層	鞴の羽口	(6.50)	(5.00)	(1.60)	－	(35.92)
701	土18	水路201下層	鞴の羽口	(3.10)	(4.90)	(2.40)	－	(34.30)
702	土19	水路201貝層	鞴の羽口	(4.50)	(5.20)	(2.20)	－	(52.04)
703	土24	東西大溝202	鞴の羽口	(4.15)	(5.30)	(2.80)	－	(41.64)
704	土22	包含層	鞴の羽口	(6.00)	(4.60)	(2.10)	－	(44.10)
705	土23	包含層	鞴の羽口	(3.45)	(6.20)	(3.10)	－	(49.39)
706	土21	水路201上層	土馬？	(4.90)	(5.00)	(3.10)	－	(45.59)
707	土15	東西大溝202	不明土製品	(1.50)	(2.10)	－	－	(4.32)
708	土14	東西大溝202	不明土製品	(2.05)	(3.30)	－	0.70	(18.94)
709	土16	東西大溝202	土鈴	(5.20)	(4.00)	－	－	(24.70)
710	土17	水路201上層	土鈴	(3.60)	(3.00)	－	－	(10.85)
711	土12	水路201下層	土製紡錘車	(2.90)	(3.20)	－	0.50	(5.51)
712	土10	水路201下層	土製紡錘車	3.45	3.60	－	0.50	8.05
713	土11	水路201下層	土製紡錘車	3.95	4.10	－	0.55	8.58
714	土13	水路201下層	土製紡錘車	(4.40)	(3.20)	－	(0.70)	(9.70)

遺物観察表　石器

番号	整理番号	遺構・層位	種類	長さ(残長)cm	幅(残幅)cm	厚さ(残厚)cm	重量(欠損)g	石材	備考
75－715	石６	包含層	石鏃	1.35	1.10	0.10	0.17	サヌカイト	
716	石12	土坑305	石鏃	1.30	1.05	0.30	0.31	サヌカイト	
717	石３	包含層	石鏃	1.55	1.20	0.30	0.38	サヌカイト	
718	石７	土坑308	石鏃	1.70	1.30	0.20	0.44	サヌカイト	
719	石２	須恵器だまり201	石鏃	1.70	1.30	0.20	0.41	サヌカイト	
720	石１	包含層	石鏃	(1.60)	1.40	0.30	(0.49)	サヌカイト	
721	石８	包含層	石鏃	(1.85)	1.65	0.30	(0.78)	サヌカイト	
722	石15	東西大溝202	石鏃	1.95	1.65	0.35	1.14	サヌカイト	
723	石13	包含層	石鏃	1.80	1.30	0.30	0.45	サヌカイト	
724	石４	包含層	石鏃	2.10	1.15	0.30	0.61	サヌカイト	
725	石５	包含層	石鏃	(2.35)	1.30	0.45	(0.92)	サヌカイト	
726	石16	包含層	石鏃	2.55	1.90	0.40	1.26	サヌカイト	
727	石14	包含層	石鏃	2.55	0.50	0.30	1.07	サヌカイト	
728	石９	土坑302	石鏃	2.50	1.50	0.30	1.07	サヌカイト	
729	石17	竪穴住居202	石鏃	3.40	1.40	0.45	1.87	サヌカイト	
730	緑37	包含層	石鏃	3.10	2.10	0.80	4.74	サヌカイト	
731	石11	土坑304	石鏃	6.60	4.95	0.90	25.34	サヌカイト	未製品
732	石10	包含層	石錐	2.20	1.05	0.45	1.03	サヌカイト	未製品
733	緑52	包含層	石錐	(3.30)	1.40	0.30	(1.70)	サヌカイト	
76－734	緑35	包含層	大型直縁刃石器	12.60	9.80	2.80	337.90	サヌカイト	
735	緑50	水路201下層	スクレイパー	9.20	5.50	0.90	43.70	サヌカイト	
736	緑36	包含層	スクレイパー	6.35	7.00	1.00	(28.19)	サヌカイト	
737	緑15	東西大溝202	打製石斧	(9.90)	6.20	2.40	(168.40)	硅質片岩	
77－738	緑17	土器だまり303	打製石斧	18.95	7.60	1.85	318.80	硅質片岩	
739	緑16	竪穴住居201	打製石斧	15.50	8.15	1.80	354.50	緑色岩	
740	緑42	東西大溝202	扁平片刃石斧	3.80	(2.75)	4.50	10.15	塩基性片岩	
741	緑51	水路201下層	扁平片刃石斧	(2.80)	(2.30)	(0.60)	(4.50)	点紋藍閃石－塩基性片岩	
742	緑８	包含層	扁平片刃石斧	4.10	2.40	0.70	11.30	点紋藍閃石－塩基性片岩	
743	緑58	土坑302	扁平両刃石斧	(7.20)	(5.30)	1.60	(92.00)	砂質片岩	
744	緑９	水路201上層	小型方柱状片刃石斧	5.00	1.60	1.40	22.90	塩基性片岩	
78－745	緑53	包含層	柱状片刃石斧	13.60	3.70	2.10	187.10	点紋藍閃石－塩基性片岩	未製品
746	緑40	包含層	柱状片刃石斧	12.40	4.65	2.30	254.10	点紋藍閃石－塩基性片岩	
747	緑６	土坑304	柱状片刃石斧	13.60	4.80	2.30	295.70	塩基性片岩	
748	緑39	包含層	柱状片刃石斧	(6.90)	(2.90)	(2.90)	(110.76)	点紋藍閃石－塩基性片岩	
79－749	緑41	土器だまり303	両刃石斧	(4.80)	(4.25)	(1.90)	(51.42)	塩基性片岩	
750	緑45	土坑303	両刃石斧	(7.20)	(7.15)	(4.90)	(384.80)	緑色岩	
751	緑44	土器だまり303	両刃石斧	(10.40)	(7.05)	(4.90)	(570.80)	緑色岩	
752	緑43	包含層	両刃石斧	(5.90)	(6.80)	(4.00)	(218.60)	緑色岩	
753	緑59	水路201下層	両刃石斧	(6.40)	(4.90)	4.90	(178.90)	蛇紋岩	
754	緑10	包含層	不明石器	8.80	3.80	3.20	115.46	砂岩	
80－755	緑28	土坑303	石鎌	(11.40)	(3.90)	(12.50)	(104.66)	緑色岩	
756	緑27	包含層	磨製石庖丁	6.40	16.60	1.10	177.70	点紋藍閃石－塩基性片岩	未製品
757	緑18	東西大溝202	打製石庖丁	5.00	12.60	0.80	73.83	点紋藍閃石－塩基性片岩	
758	緑３	土器だまり302	磨製石庖丁	4.60	13.50	0.80	87.20	点紋塩基性片岩	
759	緑１	土器だまり302	磨製石庖丁	4.50	(14.40)	0.90	(86.90)	粘板岩	
760	緑２	土坑302	磨製石庖丁	4.80	(9.90)	0.90	(63.98)	粘板岩	
81－761	緑４	土坑306	磨製石庖丁	(11.20)	(5.20)	1.00	(81.50)	粘板岩	未製品
762	緑５	溝107	磨製石庖丁	(7.60)	(4.90)	(0.75)	(37.50)	点紋藍閃石－塩基性片岩	
763	緑20	水路201下層	磨製石庖丁	4.50	(5.80)	1.05	(34.17)	泥岩	
764	緑21	東西大溝202	磨製石庖丁	(4.85)	(7.90)	0.60	(34.18)	点紋塩基性片岩	
765	緑26	土坑303	磨製石庖丁	(4.00)	(4.05)	(0.70)	(15.39)	シャールスタイン(小豆色)	
766	緑19	土坑308	磨製石庖丁	5.15	(8.00)	0.90	(36.46)	点紋藍閃石－塩基性片岩	
767	緑24	東西大溝202	磨製石庖丁	(4.30)	(4.60)	(0.80)	(26.55)	点紋藍閃石－塩基性片岩	
768	緑22	東西大溝202	磨製石庖丁	(3.45)	(7.95)	0.70	(20.31)	泥岩	
769	緑23	土器だまり303	磨製石庖丁	(3.15)	(5.40)	0.90	(19.48)	点紋藍閃石－塩基性片岩	
770	緑25	包含層	磨製石庖丁	(2.75)	(6.60)	(0.70)	(22.30)	点紋藍閃石－塩基性片岩	
771	緑７	水路201下層	石製紡錘車	(4.50)	(2.95)	(0.60)	11.90	塩基性片岩	
82－772	緑31	土器だまり303	台石	(13.05)	(13.70)	(4.90)	1055.00	砂岩	
773	緑32	土器だまり303	台石	(16.20)	(15.60)	(5.40)	1800.00	砂岩	
774	緑30	土坑302	台石	(17.40)	(17.60)	(6.70)	3040.00	砂岩	
775	緑33	弥生前期包含層	台石	20.40	23.00	6.10	4735.00	砂岩	
776	緑34	竪穴住居201	台石	16.00	24.60	9.00	6395.00	砂岩	
83－777	緑54	水路201下層	台石	(11.00)	(23.70)	3.70	(1343.30)	塩基性片岩	
778	緑60	包含層	凹石	(11.20)	(8.00)	(3.80)	(473.30)	点紋塩基性片岩	
779	緑56	水路201上層	敲石	17.30	7.80	4.20	827.50	砂岩	
84－780	緑29	土坑302	敲石	(9.85)	9.90	5.30	(581.20)	硬質砂岩	
781	緑12	包含層	敲石	9.30	6.35	5.40	443.00	硬質砂岩	
85－782	緑55	水路201下層	敲石	11.90	9.90	5.40	1259.50	緑色岩	
783	緑57	水路201上層	敲石	9.50	8.60	7.80	951.70	ひん岩	
86－784	緑13	東西大溝202	敲石	8.90	9.70	6.30	745.90	ひん岩	
785	緑49	東西大溝202	敲石	15.60	3.95	3.50	286.70	硬質砂岩	
786	緑38	包含層	軽石製品	7.40	4.50	3.20	24.48	軽石	
787	緑11	東西大溝202	砥石	6.80	2.35	2.60	70.64	砂岩	
788	緑14	東西大溝202	砥石	9.10	10.50	3.95	578.90	砂岩	

遺物観察表　玉類・石製品

番号	整理番号	遺構・層位	種類	長さ(残長)cm	径・幅(復元)cm	厚さ(残厚)cm	孔径(復元)cm	重量(欠損)g	石材・素材
87－789	金属・玉37	包含層	白玉	－	0.30	0.15	0.10	0.03	滑石
790	金属・玉38	須恵器だまり201	白玉	－	0.40	0.15	0.15	0.02	滑石
791	金属・玉39	包含層	白玉	－	0.50	0.15	0.15	0.06	滑石
792	金属・玉36	包含層	白玉	－	0.30	0.25	0.10	0.03	滑石
793	金属・玉35	包含層	白玉	－	0.40	0.25	0.10	0.08	滑石
794	金属・玉40	包含層	白玉	－	0.40	0.25	0.10	0.08	滑石
795	金属・玉42	包含層	白玉	－	0.45	0.30	0.15	0.10	滑石
796	金属・玉34	包含層	白玉	－	0.40	0.35	0.15	0.07	滑石
797	金属・玉32	包含層	白玉	－	0.50	0.40	0.10	0.18	滑石
798	金属・玉33	包含層	白玉	－	0.50	0.40	0.15	0.15	滑石
799	金属・玉31	包含層	白玉	－	0.55	0.40	0.10	0.18	滑石
800	金属・玉30	包含層	白玉	－	0.55	0.25	0.15	0.19	滑石
801	金属・玉41	包含層	白玉	－	0.50	0.30	0.15	0.11	滑石
802	金属・玉44	包含層	白玉	－	0.65	0.40	0.20	0.22	滑石
803	金属・玉43	包含層	白玉	－	0.40	0.20	0.15	0.05	滑石
804	金属・玉49	水路201上層	白玉	－	0.40	4.80	0.15	0.10	滑石
805	金属・玉46	東西大溝101	ガラス製小玉	－	3.80	0.40	0.10	0.06	－
806	金属・玉45	東西大溝202	ガラス製小玉	－	2.80	4.50	0.10	0.09	－
807	金属・玉47	包含層	ガラス製玉(仏具？)	－	8.50	9.50	0.15	1.29	－
808	金属・玉48	包含層	ガラス製玉(仏具？)	－	(8.50)	(8.50)	0.20	(0.83)	－
809	金属・玉29	東西大溝202	管玉	1.60	(0.95)	－	(0.10)	(1.04)	粘板岩？
810	金属・玉28	包含層	管玉	1.60	0.50	－	0.20	0.90	碧玉
811	金属・玉27	包含層	管玉	2.50	0.40	－	0.15	0.77	蛇紋岩
812	金属・玉23	東西大溝202	勾玉	1.95	0.50	0.90	0.20	1.41	蛇紋岩
813	金属・玉26	須恵器だまり201	勾玉	2.50	6.50	1.60	0.10	3.51	蛇紋岩
814	金属・玉21	溝109	勾玉形石製品	(4.00)	(2.20)	(0.80)	－	(9.53)	滑石
815	金属・玉24	包含層	勾玉形石製品	3.20	0.50	2.20	0.10	5.67	塩基性片岩
816	金属・玉22	包含層	勾玉形石製品	4.20	0.80	2.40	0.10	13.47	塩基性片岩
817	金属・玉25	水路201下層	勾玉形石製品	4.85	0.65	3.10	0.10	13.22	蛇紋岩
818	金属・玉19	包含層	双孔円盤	－	2.25	0.30	－	2.46	滑石
819	金属・玉18	包含層	双孔円盤	－	2.65	0.45	－	4.80	滑石
820	金属・玉17	水路201上層	紡錘車形石製品	－	(4.30)	(0.70)	(0.80)	(9.54)	滑石
821	金属・玉20	溝109	紡錘車形石製品	－	(2.60)	(0.60)	(0.60)	4.47	塩基性片岩

遺物観察表　金属製器・骨角器

番号	整理番号	遺構・層位	種類	長さ(残長)cm	幅・径(復元)cm	厚さ(残厚)cm	重量(欠損)g	備考
88－822	ピンク12	近代塹壕	破鏡	－	(12.50)	0.50	(5.54)	斜縁鏡
89－823	ピンク10・11	包含層	銙帯巡方	1.75	2.05	0.30	4.13	
824	金属・玉50	東西大溝202	釣針状青銅製品	2.40	1.90	0.20	1.14	
825	金属・玉51	包含層	不明青銅製品	1.10	0.40	0.30	0.42	
826	金属・玉54	包含層	銅銭	－	2.30	－	(1.97)	銭種不明
827	金属・玉53	包含層	銅銭	－	2.20	－	2.17	銭種不明
828	－	水路201上層	銅銭	－	1.90	－	2.87	乾元大宝
829	金属・玉52	包含層	青銅製鑿	2.90	1.60	0.70	15.78	
830	ピンク13	包含層	鰐口	－	－	－	(34.90)	
831	金属・玉4	包含層	板状鉄製品	6.00	1.60	0.50	18.14	
832	金属・玉11	東西大溝201	板状鉄製品	4.75	2.15	0.25	14.57	
833	金属・玉13	包含層	板状鉄製品	2.20	3.10	0.25	13.61	
834	金属・玉14	包含層	不明鉄製品	3.90	5.15	0.65	14.18	
835	金属・玉6	水路201貝層	鉄釘	2.00	4.80	1.10	31.44	
836	金属・玉7	東西大溝202	棒状鉄製品	7.35	2.50	0.25	11.88	
837	金属・玉5	東西大溝202	棒状鉄製品	6.90	1.50	0.90	30.38	
838	金属・玉3	包含層	鉄釘	4.35	9.50	0.20	5.13	
839	金属・玉8	東西大溝202	鉄釘	3.25	0.40	0.30	3.47	
第4章6	－	水路201貝層	釣針状鉄製品	(6.00)	－	0.20	(6.60)	
840	緑47	水路201上層	骨角製品	(6.60)	1.50	－	(10.38)	ニホンジカ
841	緑48	包含層	骨角製品	(4.50)	1.15	－	(2.61)	ニホンジカ

遺物観察表　木製品

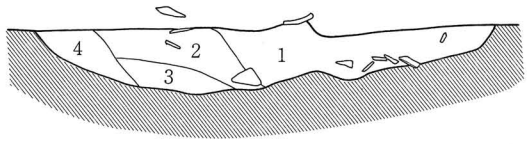
番号	整理番号	遺構・層位	種類	長さ(残長)cm	幅(残幅)cm	厚さ(残厚)cm
90－842	木47	水路201下層	斎串	32.1	1.7	0.4
843	木216	水路201下層	斎串	30.8	2.2	0.2
844	木137	水路201下層	斎串	27.4	1.5	0.2
845	木236	水路201下層	斎串	(31.6)	0.9	0.4
846	木176	水路201下層	斎串	31.5	1.2	0.4
847	木116	水路201下層	斎串	30.3	1.2	0.4
848	木90	水路201下層	斎串	32.0	1.6	0.3
849	木200	水路201下層	斎串	34.7	1.8	0.2
850	木144	水路201下層	斎串	29.1	1.8	0.2
851	木145	水路201下層	斎串	24.1	1.7	0.2
91－852	木92	水路201下層	斎串	30.5	1.5	0.3
853	木91	水路201下層	斎串	23.9	1.4	0.2
854	木161	水路201下層	斎串	(20.2)	1.7	0.5
855	木49	水路201下層	斎串	20.1	1.2	0.4
856	木3	水路201下層	斎串	20.9	1.2	0.1
857	木63	水路201下層	斎串	(12.8)	1.9	0.4
858	木48	水路201下層	斎串	(12.2)	1.4	0.5
859	木177	水路201下層	斎串	(10.9)	1.7	0.3
860	木147	水路201下層	斎串	(15.7)	1.3	0.3
861	木62	水路201下層	斎串	18.8	1.5	0.3
862	木70	水路201下層	斎串	(8.2)	1.7	0.2
863	木150	水路201下層	斎串	(9.3)	1.8	0.2
864	木178	水路201下層	斎串	(13.2)	1.6	0.4
865	木75	水路201下層	斎串	(13.8)	1.7	0.2
866	木22	水路201下層	斎串	(15.5)	1.9	0.2
92－867	木148	水路201下層	斎串	(8.4)	1.2	0.2
868	木180	水路201下層	斎串	(7.3)	1.7	0.2
869	木58	水路201下層	斎串	(6.9)	1.1	0.2
870	木115	水路201下層	斎串	7.6	2.0	0.3
871	木43c	水路201下層	斎串	(6.7)	(2.8)	0.1
872	木33	水路201下層	斎串	(7.1)	1.4	0.1
873	木94	水路201下層	斎串	(5.4)	1.0	0.3
874	木71	水路201下層	斎串	(6.1)	1.3	0.2
875	木108	水路201下層	斎串	(5.6)	1.3	0.4
876	木32	水路201下層	斎串	(7.0)	1.3	0.2
877	木27	水路201下層	斎串	(4.0)	1.4	0.3
878	木187	水路201下層	斎串	(4.1)	1.1	0.1
879	木186	水路201下層	斎串	(3.2)	1.0	0.3
880	木4	水路201下層	斎串	10.8	1.4	0.2
881	木139	水路201下層	斎串	(13.1)	1.8	0.2
882	木85	水路201下層	斎串	(14.0)	1.1	0.3
883	木50	水路201下層	斎串	(15.6)	1.6	0.4
884	木127	水路201下層	斎串	14.3	1.1	0.5
885	木79	水路201下層	斎串	(12.9)	1.0	0.5
886	木13	水路201下層	斎串	(13.6)	1.0	0.3
887	木140	水路201下層	斎串	(13.7)	1.6	0.1
888	木26	水路201下層	斎串	(17.1)	(1.6)	0.2
889	木149	水路201下層	斎串	(18.2)	1.9	0.4
890	木138	水路201下層	斎串	(16.6)	1.6	0.4
891	木201	水路201下層	斎串	(18.2)	2.0	0.1
892	木51	水路201下層	斎串	(17.9)	2.5	0.4
893	木169	水路201下層	斎串	(15.1)	1.4	0.1
93－894	木5b	水路201下層	斎串	(9.2)	1.5	0.6
895	木202	水路201下層	斎串	(17.1)	1.5	0.1
896	木10	水路201下層	斎串	27.0	1.7	0.5
897	木215	水路201下層	斎串	30.0	1.9	0.4
898	木1	水路201下層	斎串	(30.3)	1.6	0.5
899	木179	水路201下層	斎串	(47.3)	2.3	0.6
900	木78－1	水路201下層	斎串	50.8	1.7	0.5
901	木239	水路201下層	人形	105.0	5.5	0.6
94－902	木214	水路201下層	人形	(46.4)	6.7	0.5
903	木6	水路201下層	人形	(17.4)	3.1	0.2
904	木80	水路201下層	人形	(12.1)	2.3	0.4
905	木23	水路201下層	人形	(23.0)	(3.3)	0.6
906	木146	水路201下層	武器形木製品	(25.1)	1.2	0.7
907	木130	水路201下層	鳥形木製品	11.6	1.7	0.3
908	木217	水路201下層	鳥形木製品	13.0	2.6	0.3
909	木218	水路201下層	鳥形木製品	11.7	4.4	0.4
910	木204	水路201下層	鳥形木製品	15.7	1.8	0.3
911	木119	水路201下層	武器形木製品	(20.9)	2.4	0.6
912	木151	水路201下層	武器形木製品	(18.5)	1.6	0.3
913	木65	水路201下層	武器形木製品	20.1	1.0	0.2
914	木114	水路201下層	武器形木製品	(9.8)	1.7	0.3
915	木219	水路201下層	舟形木製品	16.4	3.0	0.7
916	木37	水路201下層	不明木製品	(16.6)	3.0	0.7
95－917	木8	水路201下層	不明木製品	7.5	2.7	2.0
918	木154	水路201下層	不明木製品	36.5	2.5	2.5
919	木25	水路201下層	杭	38.9	4.7	3.3
920	木97	水路201下層	杭	22.6	2.4	2.5
921	木55	水路201下層	杭	11.9	2.6	2.1
922	木199	水路201下層	杭	(14.6)	2.1	1.3
923	木2	水路201下層	棒状木製品	(13.2)	1.8	1.7
924	木136	水路201下層	棒状木製品	(32.4)	1.5	1.1
925	木171	水路201下層	棒状木製品	(30.4)	1.2	0.9
926	木109	水路201下層	棒状木製品	33.6	0.5	0.4
927	木83	水路201下層	棒状木製品	39.2	0.9	0.7
96－928	木54	水路201下層	箸または串	24.2	1.1	0.7
929	木207	水路201下層	箸または串	(11.9)	0.7	0.6
930	木20	水路201下層	箸または串	17.0	0.5	0.5
931	木121	水路201下層	箸または串	29.5	0.4	0.3
932	木59b	水路201下層	箸または串	16.0	0.4	0.4
933	木34	水路201下層	箸または串	14.9	0.5	0.5
934	木84	水路201下層	箸または串	26.2	0.7	0.6
936	木160	水路201下層	箸または串	25.0	0.5	0.4
935	木61	水路201下層	箸または串	20.9	0.7	0.6
937	木77	水路201下層	箸または串	(11.7)	0.4	0.4

番号	整理番号	遺構・層位	種類	長さ(残長)cm	幅(残幅)cm	厚さ(残厚)cm
938	木53	水路201下層	箸または串	12.4	0.5	0.5
939	木191	水路201下層	ヒョウタン製容器	(3.9)	(2.1)	0.3
940	木99	水路201下層	ヒョウタン製容器	(4.6)	9.7	0.6
941	木237	水路201下層	漆椀	—	—	—
942	木238	水路201下層	漆椀	—	—	—
943	木120	水路201下層	杓子	22.2	6.2	0.6
944	木107	水路201下層	杓子	28.5	6.8	0.8
97−945	木225	水路202下層	柄杓	(39.2)	2.0	1.1
946	木164	水路201下層	横槌	34.8	6.1	4.5
947	木57	水路201下層	木槌	(11.0)	3.3	2.4
948	木106	水路201下層	栓	4.1	3.5	3.0
949	木224	水路201下層	下駄	18.5	(4.5)	1.2
950	木89	水路201下層	弓	(47.8)	1.7	1.9
951	木60b	水路201下層	扇子	16.7	1.0	0.9
952	木60a	水路201下層	扇子	(13.5)	1.0	0.2
953	木234	水路201下層	横櫛	(5.3)	3.9	0.9
954	木210−3	水路201下層	横櫛	(3.2)	3.8	0.5
955	木212	水路201下層	横櫛	(4.2)	3.3	0.7
956	木210−4	水路201下層	横櫛	(3.9)	3.1	0.5
957	木210−1	水路201下層	横櫛	(3.8)	(1.6)	0.7
958	木210−2	水路201下層	横櫛	(2.3)	3.0	0.5
959	木211	水路201下層	横櫛	(1.2)	2.8	0.8
98−960	木41	水路201下層	円形曲物蓋板	14.3	(9.6)	0.5
961	木170	水路201下層	円形曲物蓋板	(16.2)	(7.1)	0.8
962	木102	水路201下層	円形曲物蓋板	15.9	(8.3)	0.7
963	木134	水路201下層	円形曲物蓋板	12.9	(5.5)	0.6
964	木103	水路201下層	円形曲物蓋板	13.0	(11.6)	0.7
965	木221	水路201下層	円形曲物蓋板	9.1	7.4	0.5
966	木12	水路201下層	円形曲物蓋板	11.5	(7.3)	0.2
967	木135−1	水路201下層	円形曲物蓋板	(7.5)	(3.1)	0.7
968	木17	水路201下層	円形曲物蓋板	(13.4)	6.0	0.6
969	木81	水路201下層	円形曲物蓋板	(10.6)	(5.0)	0.5
970	木18	水路201下層	円形曲物蓋板	(11.0)	(3.3)	0.6
99−971	木213	水路201下層	円形曲物蓋板	(41.4)	(17.3)	0.7
972	木104	水路201下層	円形曲物底板	16.6	14.6	0.7
973	木232	水路201下層	円形曲物底板	18.7	16.7	0.6
974	木88−5	水路201下層	円形曲物底板	14.7	14.1	0.4
975	木16	水路201下層	円形曲物底板	(15.6)	(6.3)	0.7
100−976	木220	水路201下層	円形曲物底板	(20.8)	(5.0)	0.8
977	木166	水路201下層	円形曲物底板	(15.1)	(7.6)	0.7
978	木235	水路201下層	方形曲物底板	29.1	27.3	0.5
979	木133	水路201下層	円形曲物底板	(7.2)	2.0	1.1
980	木135−4	水路201下層	円形曲物底板	(10.4)	(1.2)	0.5
981	木198	水路201下層	円形曲物底板	(10.8)	(2.7)	0.3
982	木189a	水路201下層	円形曲物底板	(14.7)	(2.2)	0.7
983	木231	水路201下層	円形曲物側板	18.0	18.2	2.3
101−984	木209	水路201下層	曲物側板	(34.3)	(6.1)	0.6
985	木205−2	水路201下層	曲物側板	(10.2)	3.5	0.2
986	木205−6	水路201下層	曲物側板	(17.6)	3.1	0.4
987	木105	水路201下層	曲物側板	(21.5)	4.0	0.4
988	木205−3	水路201下層	曲物側板	(10.5)	(2.7)	0.2
989	木205−4	水路201下層	曲物側板	(9.8)	0.8	0.2
990	木205−5	水路201下層	曲物側板	(10.7)	(2.1)	0.3
991	木117	水路201下層	曲物側板	(9.6)	(2.1)	0.3
992	木88−3	水路201下層	曲物側板	(9.1)	(0.8)	0.3
993	木205−1	水路201下層	曲物側板	(8.9)	(1.2)	0.2
994	木88−1	水路201下層	曲物側板	(11.9)	(2.8)	0.3
995	木88−4	水路201下層	曲物側板	(5.1)	(1.4)	0.3
996	木156−1	水路201下層	曲物側板	(3.9)	3.0	0.3
997	木156−2	水路201下層	曲物側板	(4.1)	(1.8)	0.3
998	木156−3	水路201下層	曲物側板	(4.1)	(0.9)	0.3
102−999	木223	水路201下層	部材	(16.4)	6.7	0.6
1000	木132	水路201下層	部材	32.5	8.1	0.3
1001	木163	水路201下層	板状木製品	32.5	(6.1)	0.7
1002	木9a	水路201下層	板状木製品	17.6	4.0	0.8
1003	木222	水路201下層	板状木製品	8.6	3.0	0.5
1004	木112	水路201下層	部材	(6.5)	1.6	0.4
1005	木76	水路201下層	部材	(9.2)	1.3	0.7
1006	木73	水路201下層	部材	11.9	2.1	0.2
1007	木226	水路201下層	部材	(16.2)	(2.2)	0.4

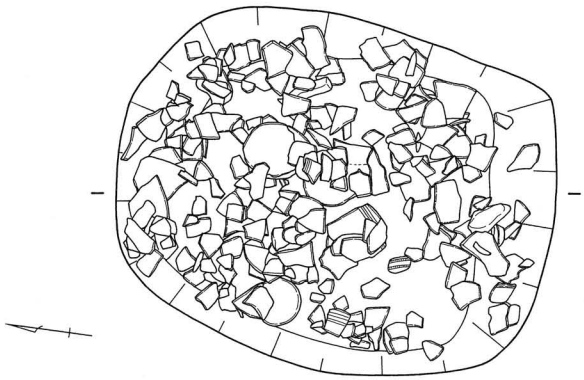
図　　版

土坑301

L=3.0m

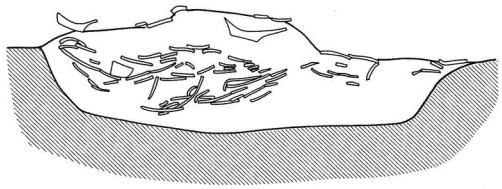


1　暗褐色粘質土
2　暗褐色砂質土
3　黄褐色砂質土
4　暗褐色砂質土



土坑302

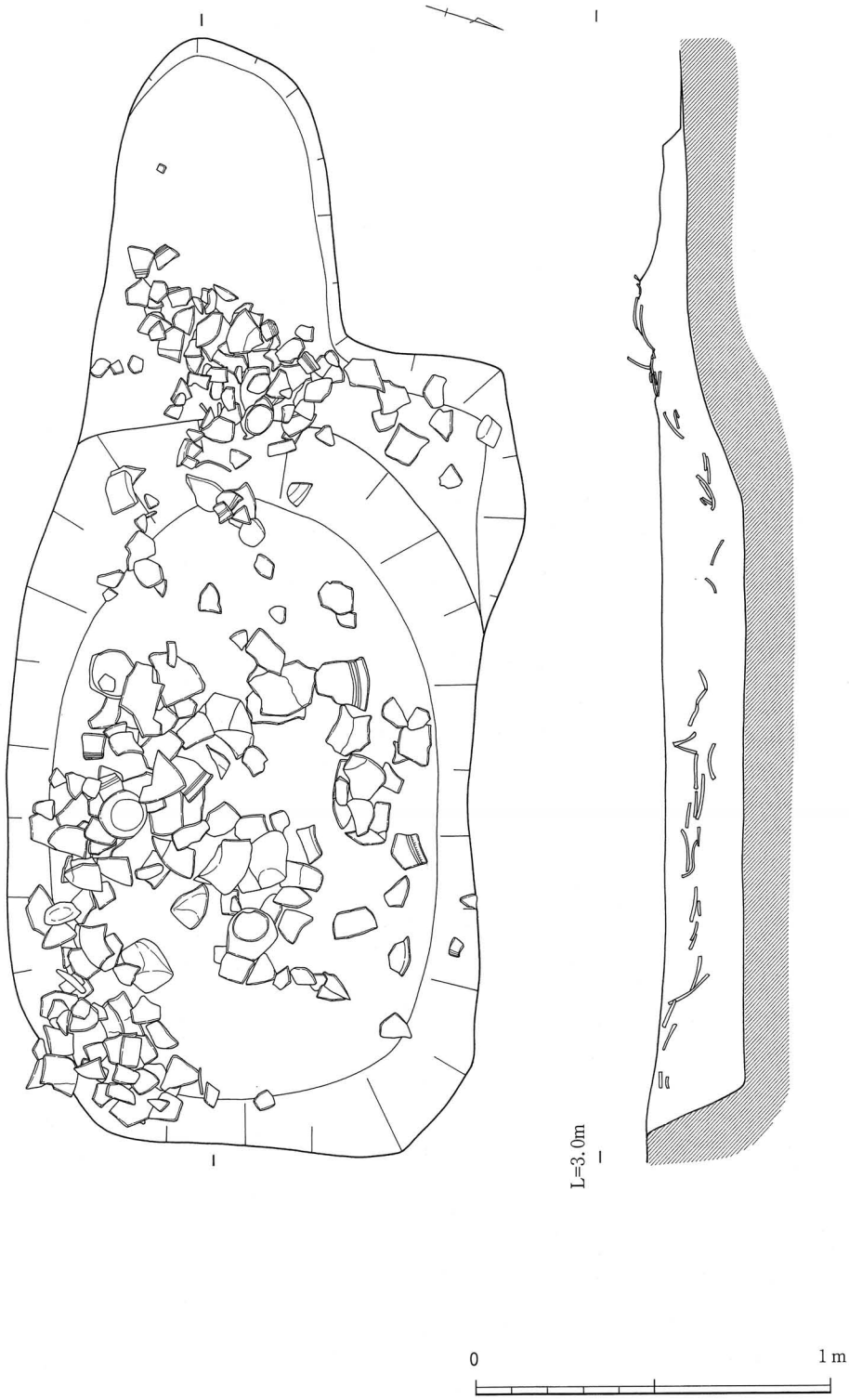
L=3.30m



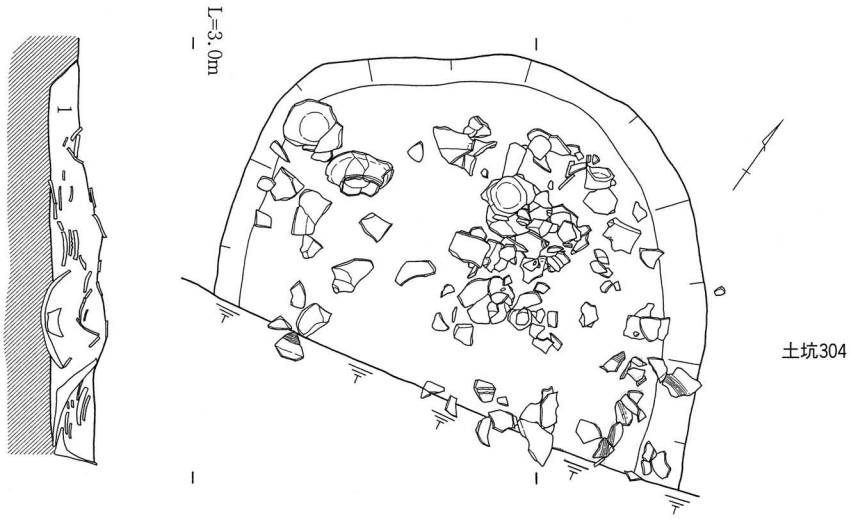
0　1 m

土坑301・土坑302

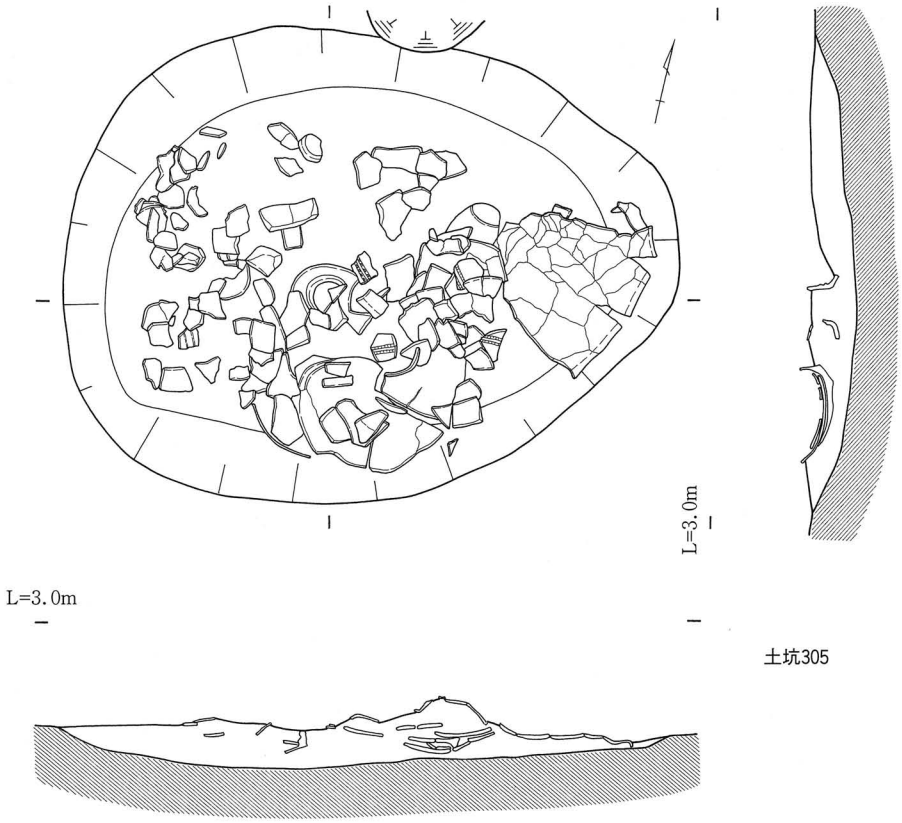
図版２



土坑303



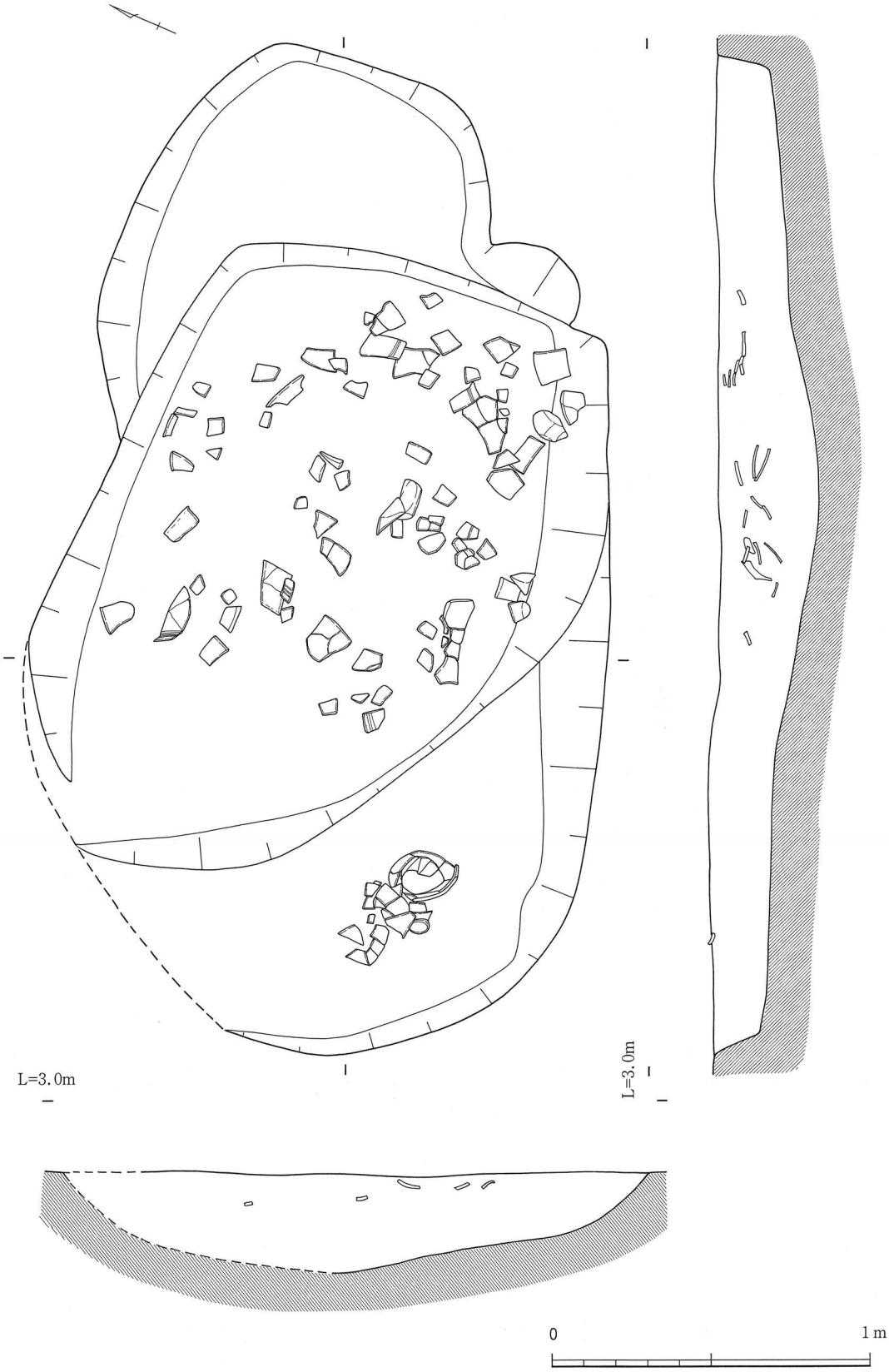
1　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色シルト（炭化物を多く含む）



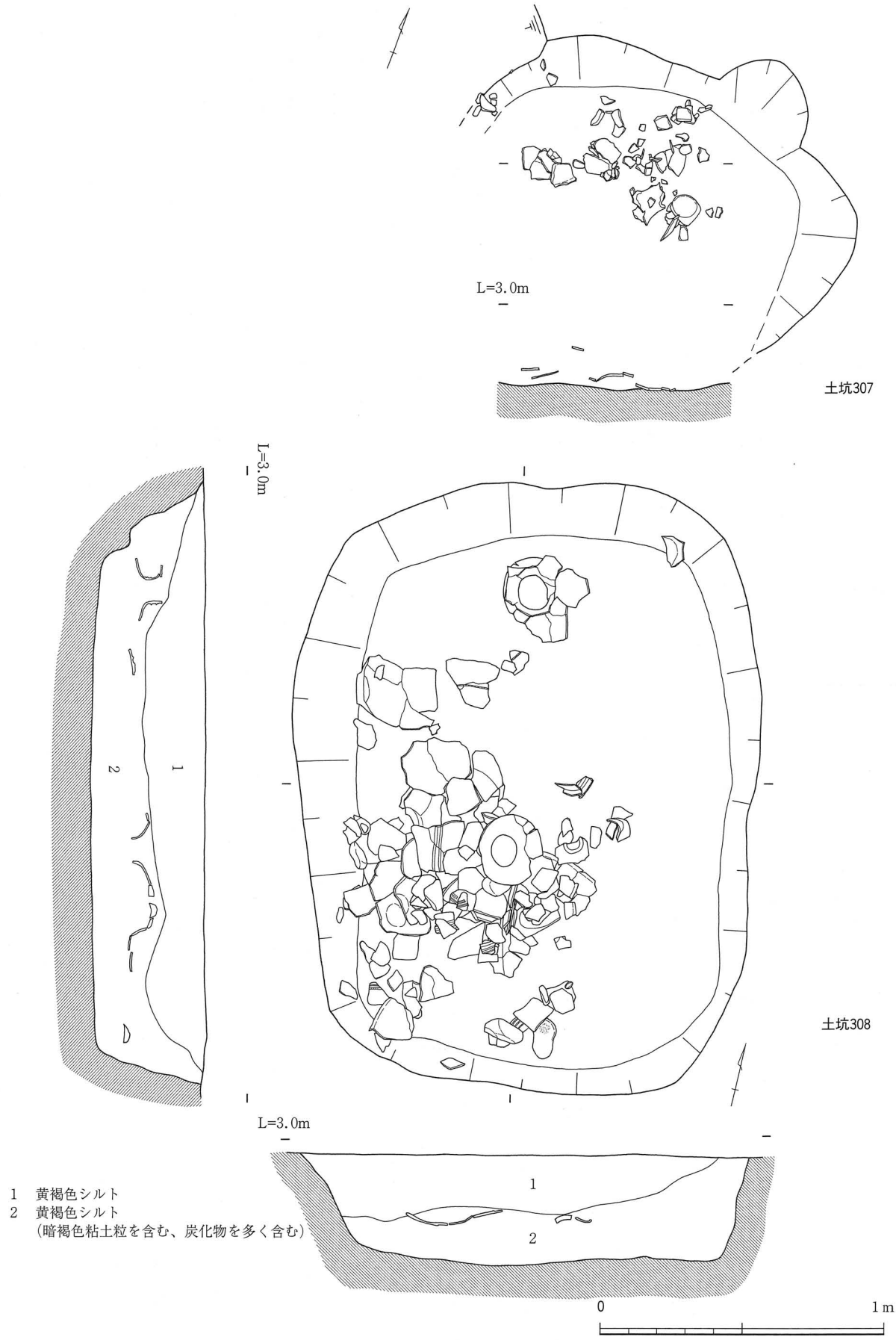
0　1 m

土坑304・土坑305

図版 4



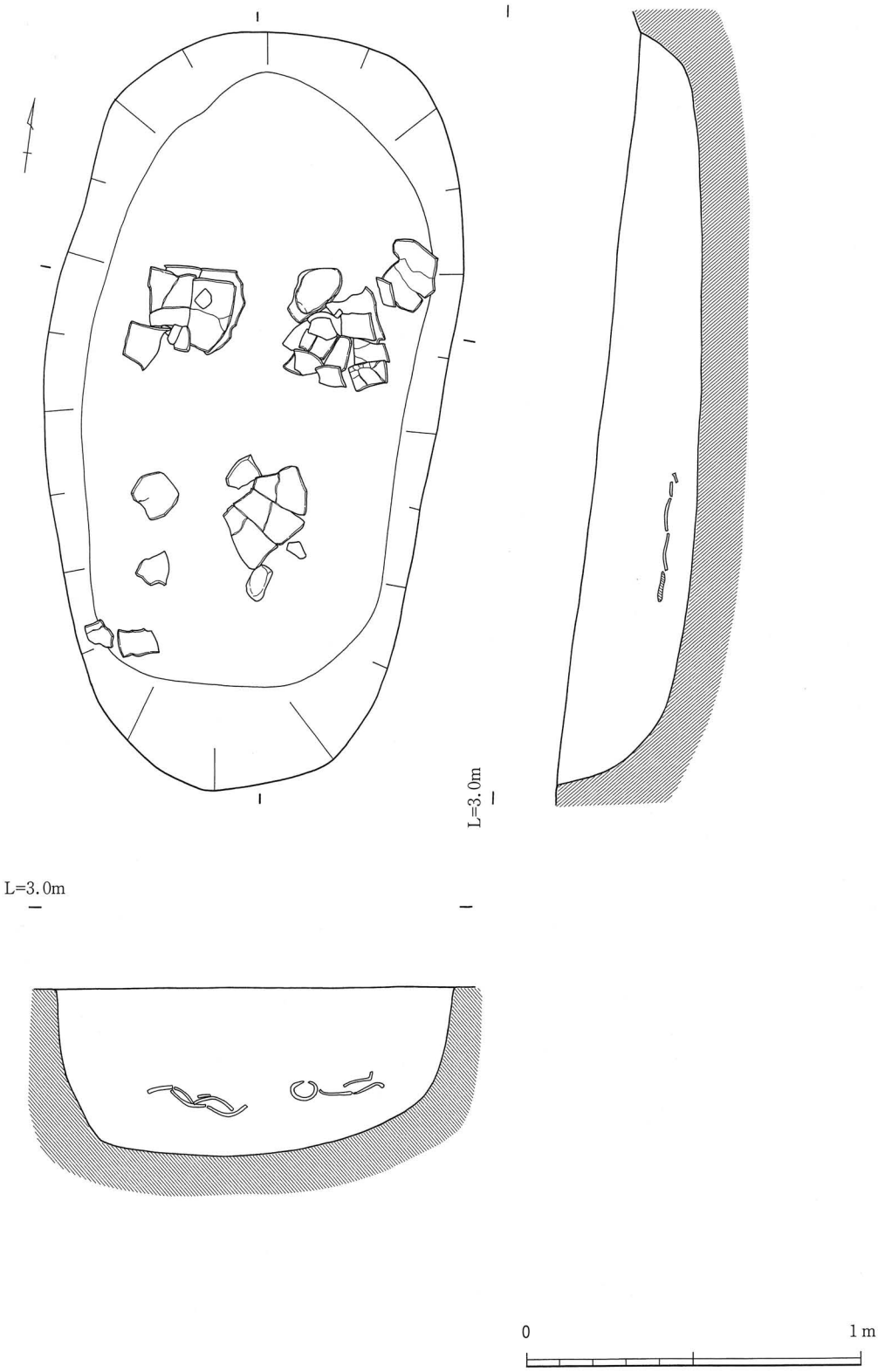
土坑306



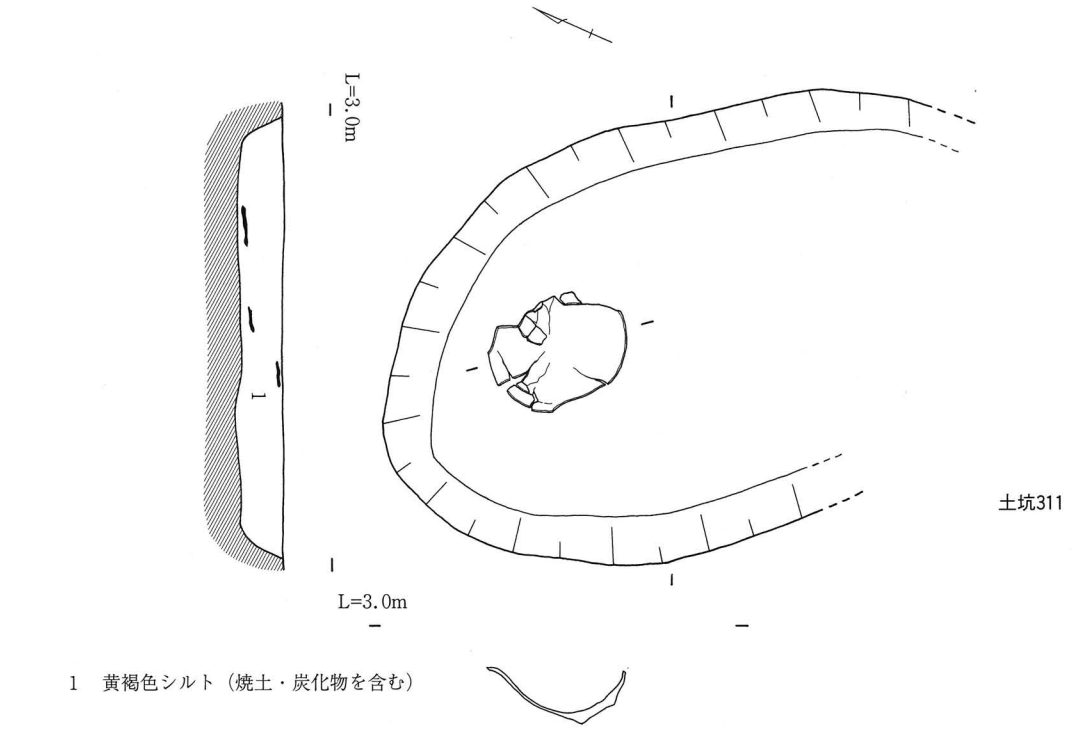
1　黄褐色シルト
2　黄褐色シルト
（暗褐色粘土粒を含む、炭化物を多く含む）

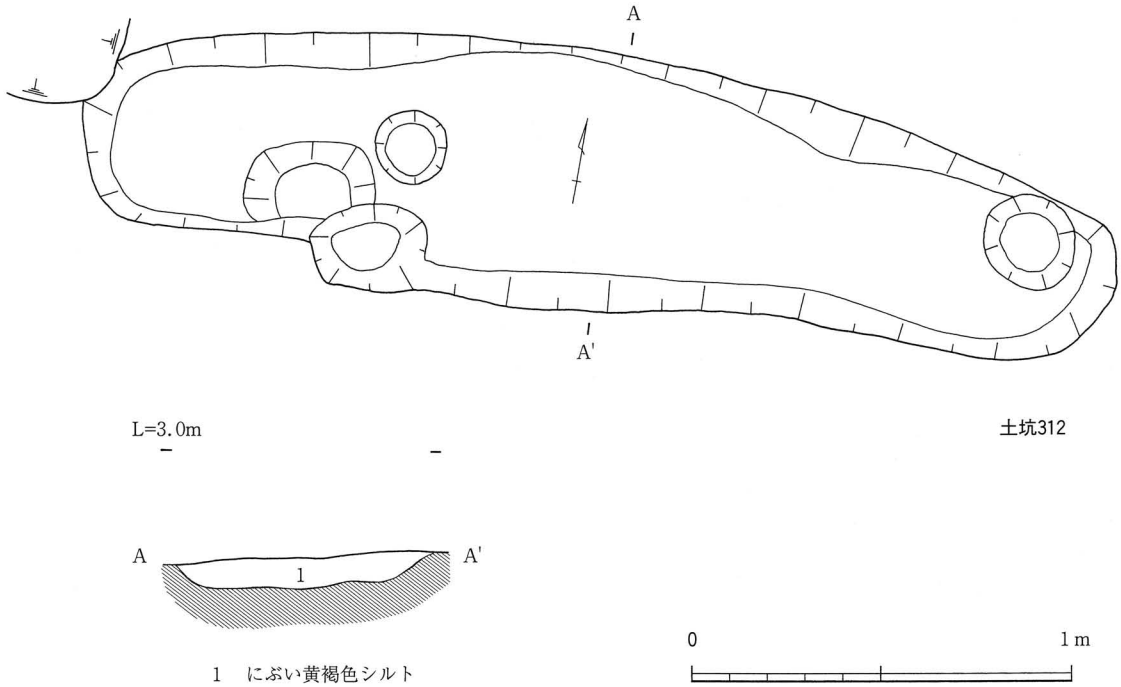
土坑307・土坑308

図版 6



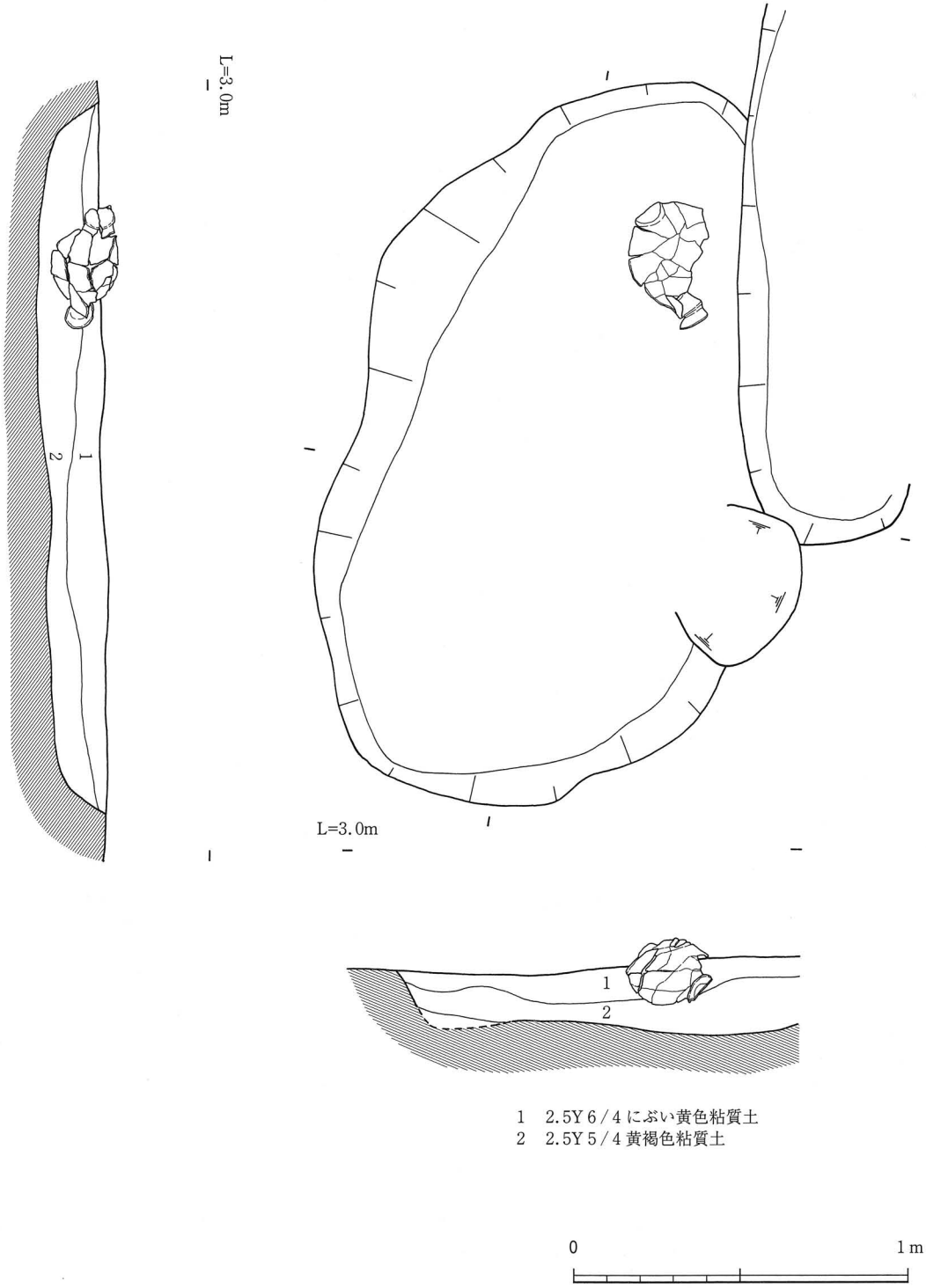
土坑309


L=3.0m
1
L=3.0m
土坑311
1　黄褐色シルト（焼土・炭化物を含む）


A
A'
L=3.0m
土坑312
A
A'
1
1　にぶい黄褐色シルト
0
1 m

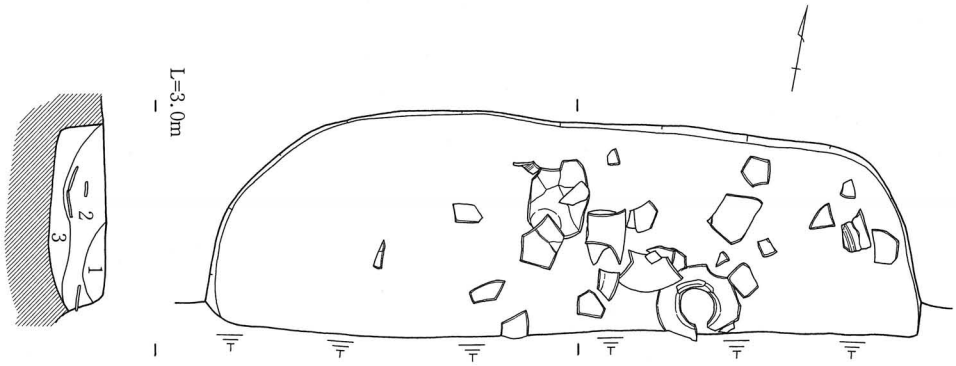
土坑311・土坑312

図版８



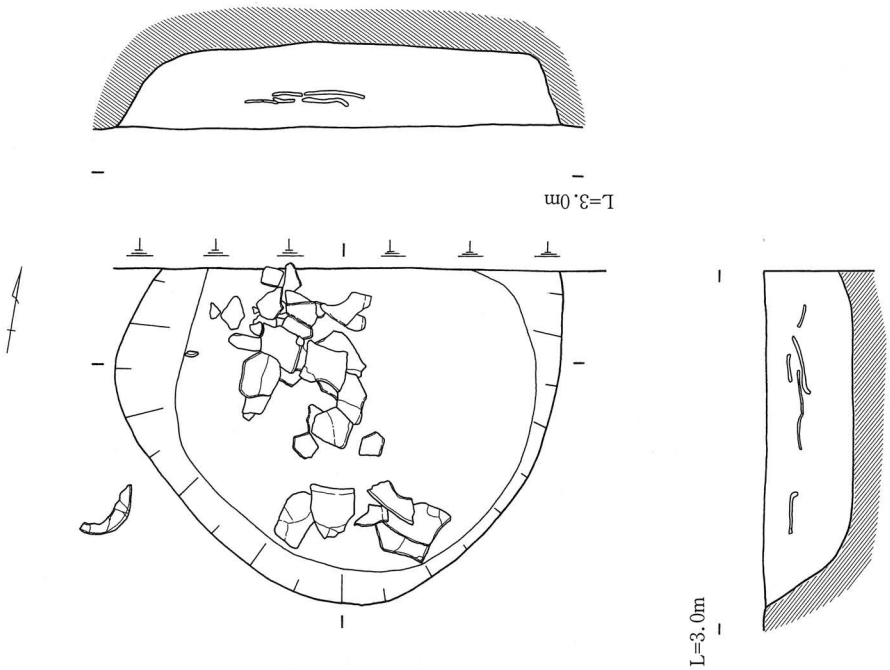
1　2.5Y 6／4 にぶい黄色粘質土
2　2.5Y 5／4 黄褐色粘質土

土坑313



1　茶褐色土
2　黄褐色土
3　明黄褐色土

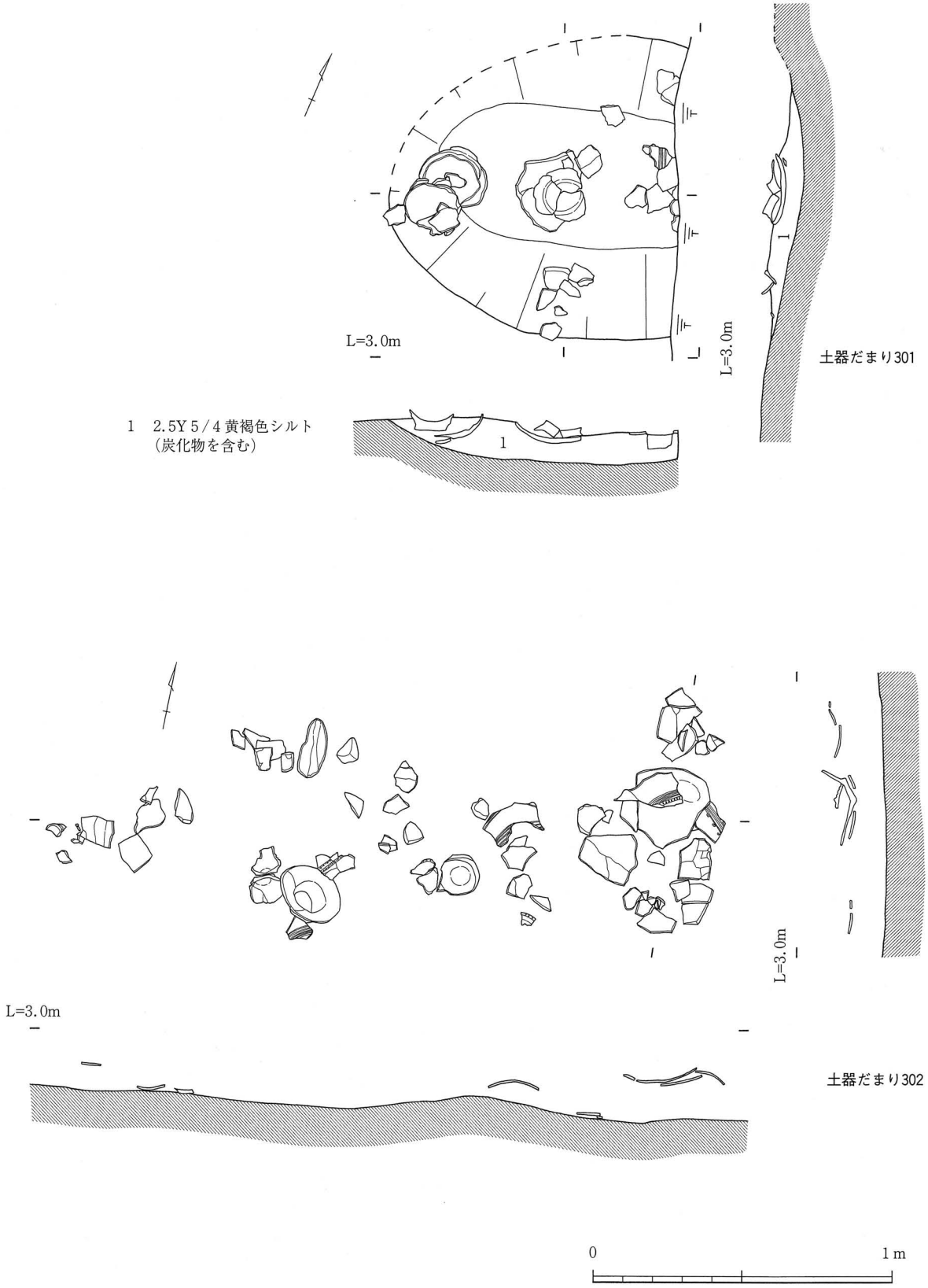
土坑314



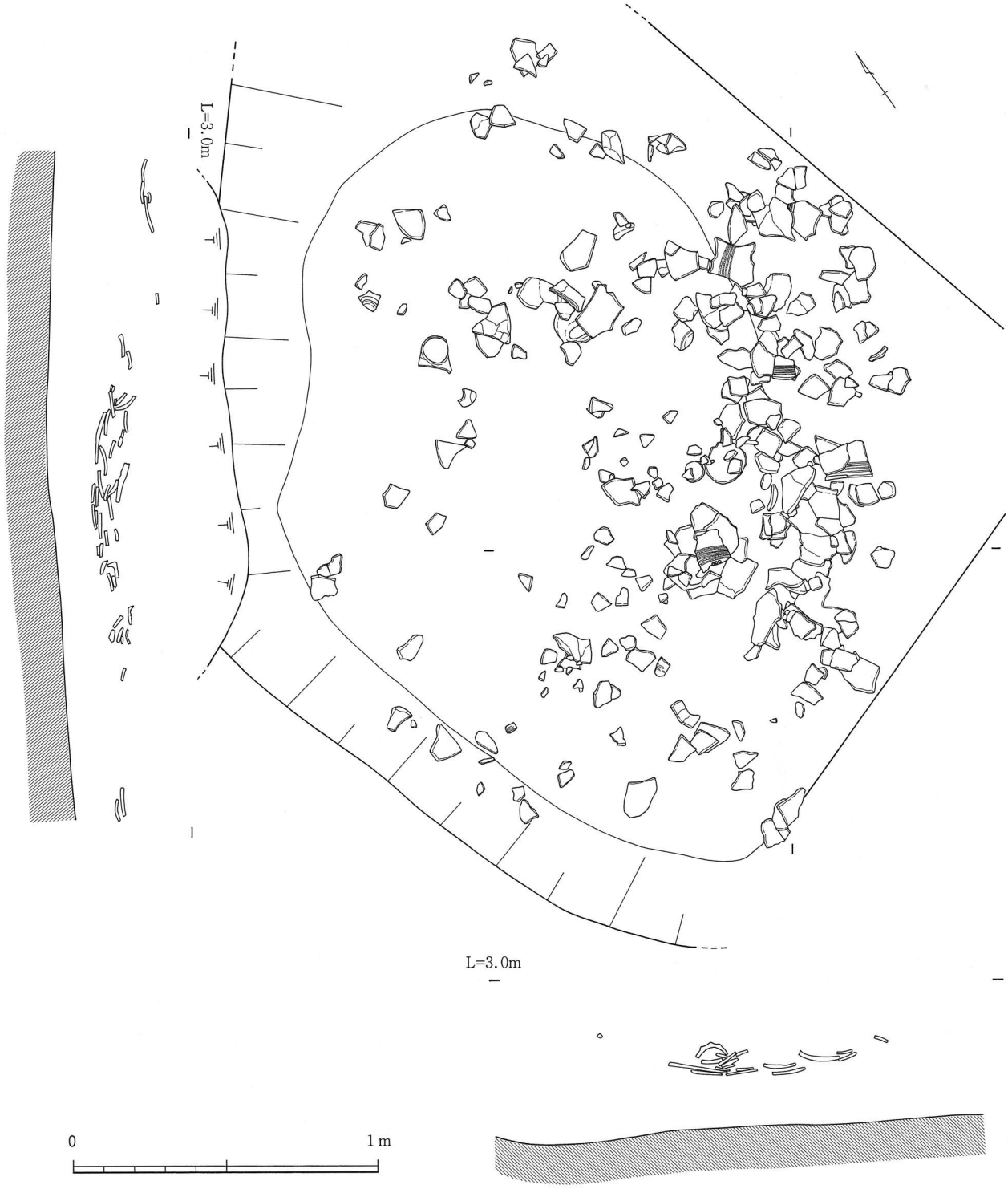
土坑315

土坑314・土坑315

図版 10

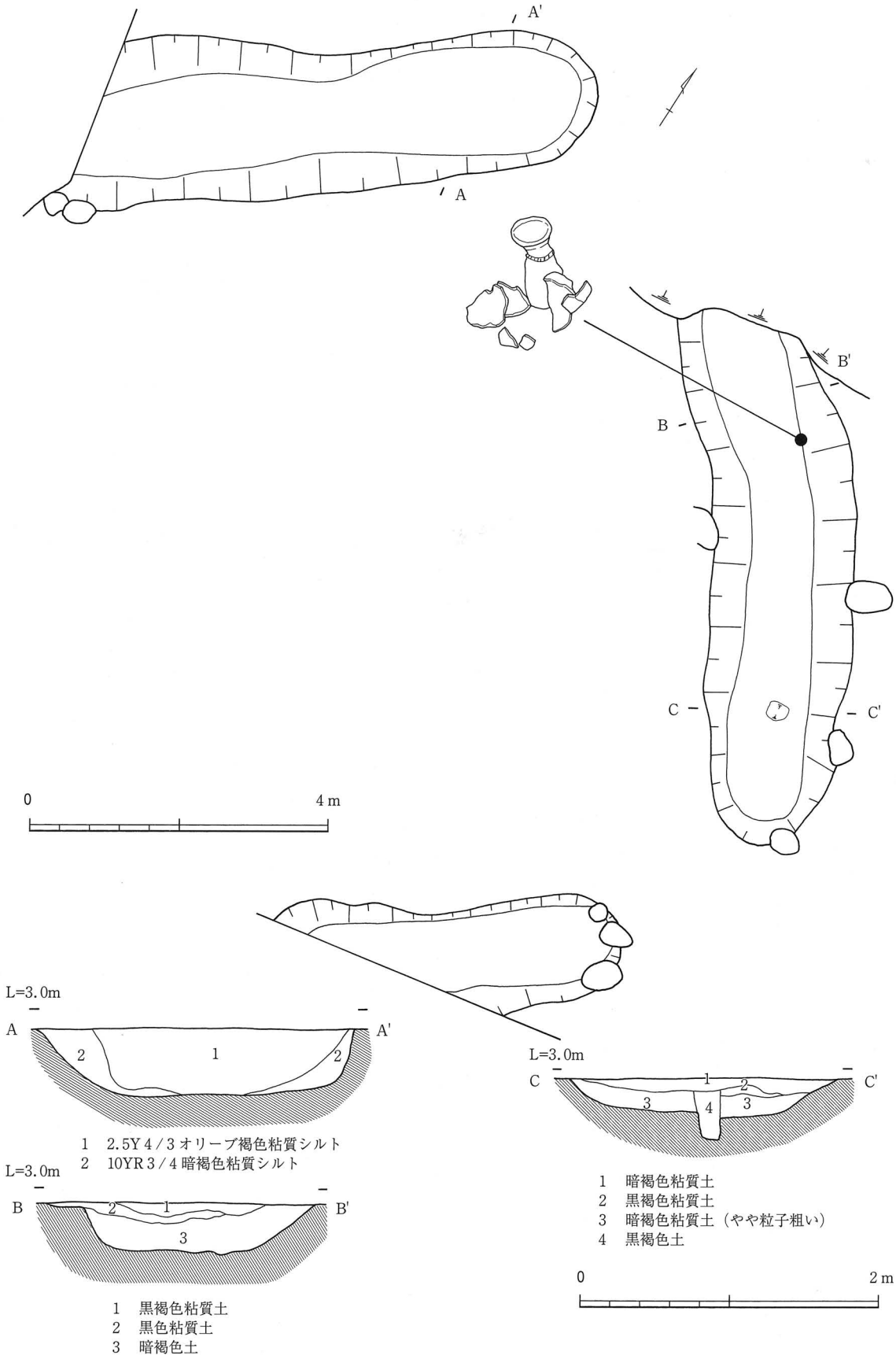


土器だまり301・土器だまり302

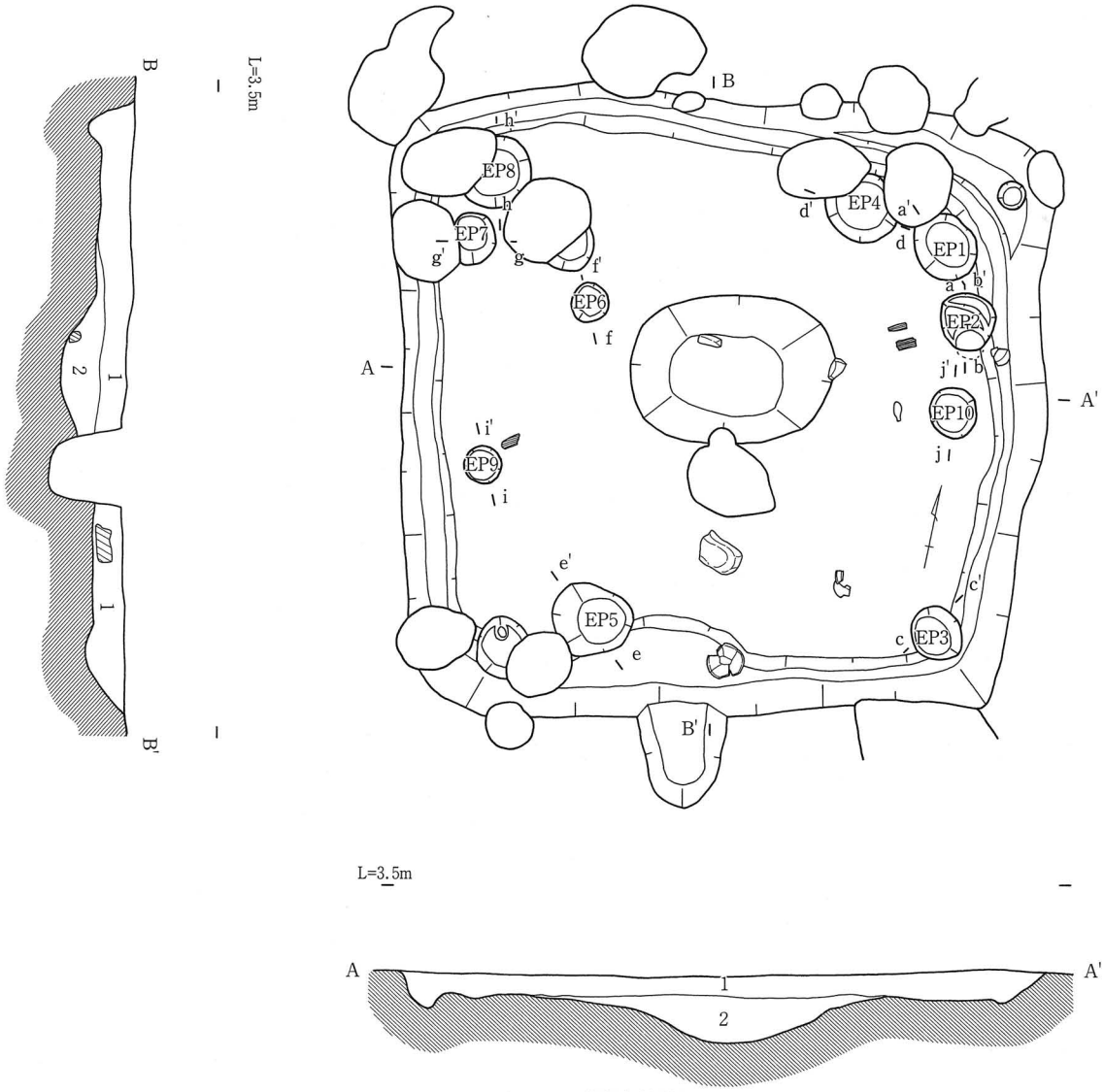


土器だまり303

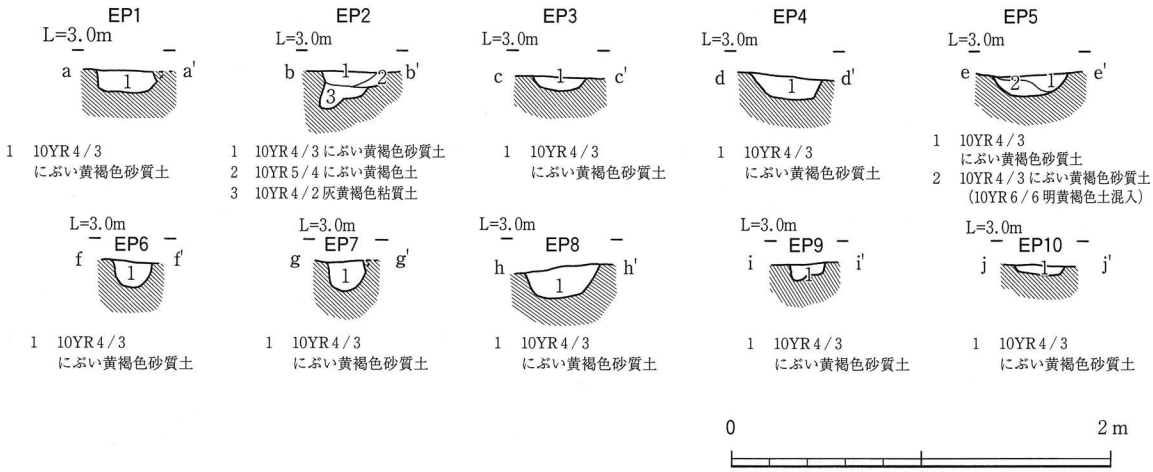
図版 12



方形周溝墓201

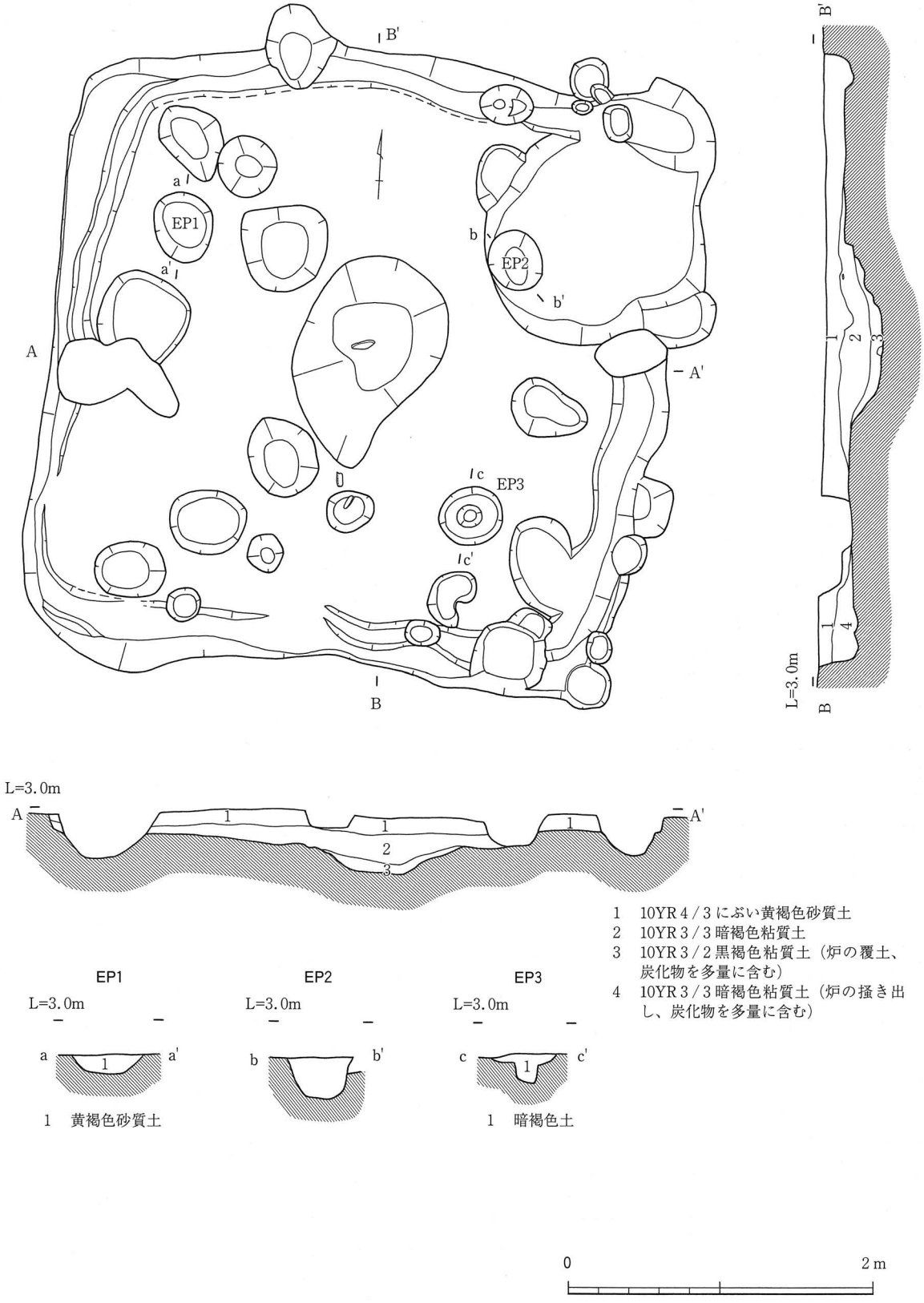


1　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土
2　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土（炭化物を多く含む、炉および炉の掻き出し土）

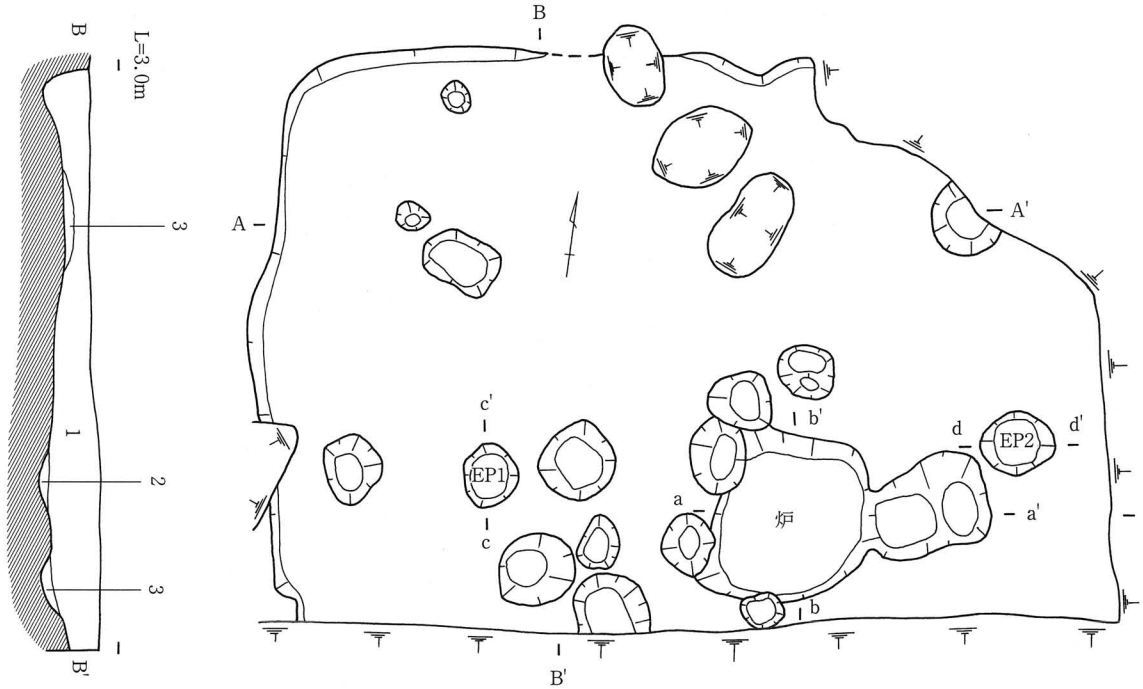


竪穴住居201

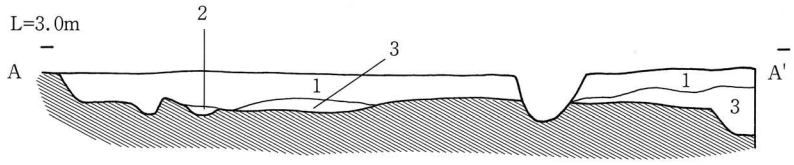
図版 14



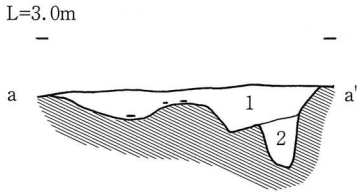
竪穴住居202



1　10YR 3 / 4 暗褐色粘質シルト
2　2.5Y 4 / 6 オリーブ褐色粘質シルト
3　7.5YR 3 / 1 黒褐色粘質シルト

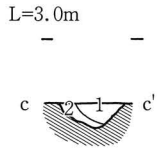


炉（東西）



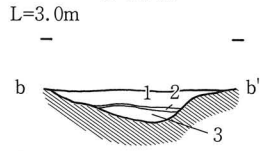
1　10YR 3 / 4 暗褐色粘質シルト
2　10YR 3 / 2 黒褐色粘質シルト

EP1



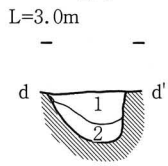
1　10YR 3 / 4 暗褐色粘質シルト
2　10YR 3 / 2 黒褐色粘質シルト

炉（南北）



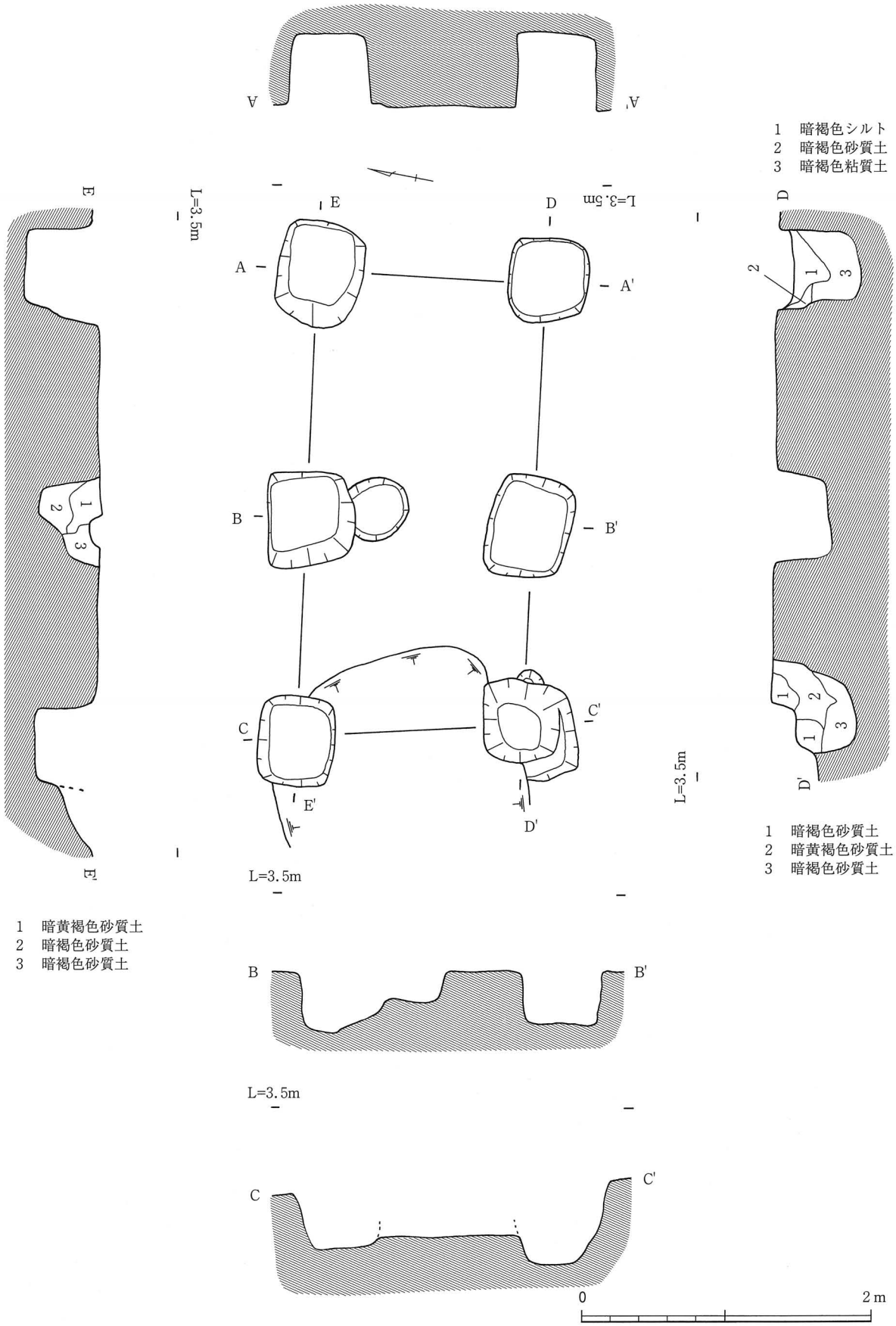
1　10YR 3 / 4 暗褐色粘質シルト
2　炭層
3　2.5Y 4 / 6 オリーブ褐色粘質シルト

EP2

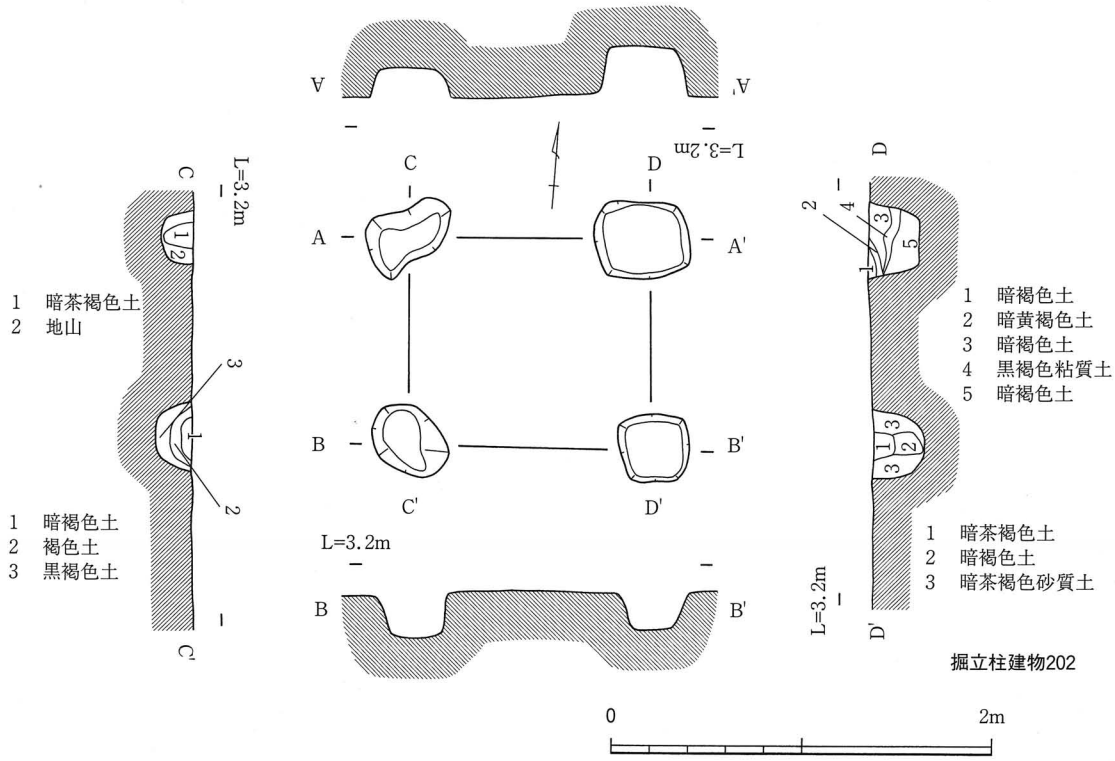


1　10YR 3 / 4 暗褐色粘質シルト
2　10YR 3 / 2 黒褐色粘質シルト

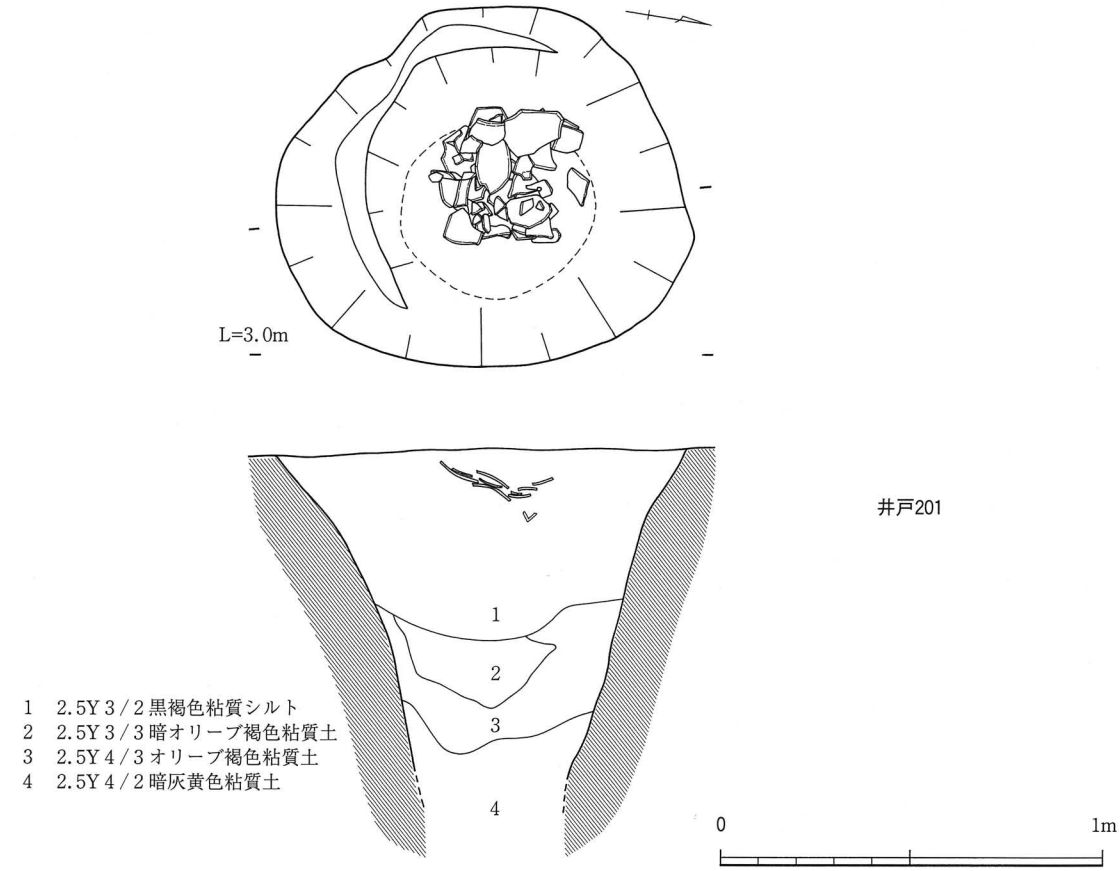
竪穴住居203


A
A'
1 暗褐色シルト
2 暗褐色砂質土
3 暗褐色粘質土
E
L=3.5m
D
L=3.5m
A
A'
B
B'
C
C'
E'
D'
L=3.5m
D
D'
L=3.5m
E
E'
1 暗黄褐色砂質土
2 暗褐色砂質土
3 暗褐色砂質土
1 暗褐色砂質土
2 暗黄褐色砂質土
3 暗褐色砂質土
B
B'
L=3.5m
C
C'
0
2 m

掘立柱建物201



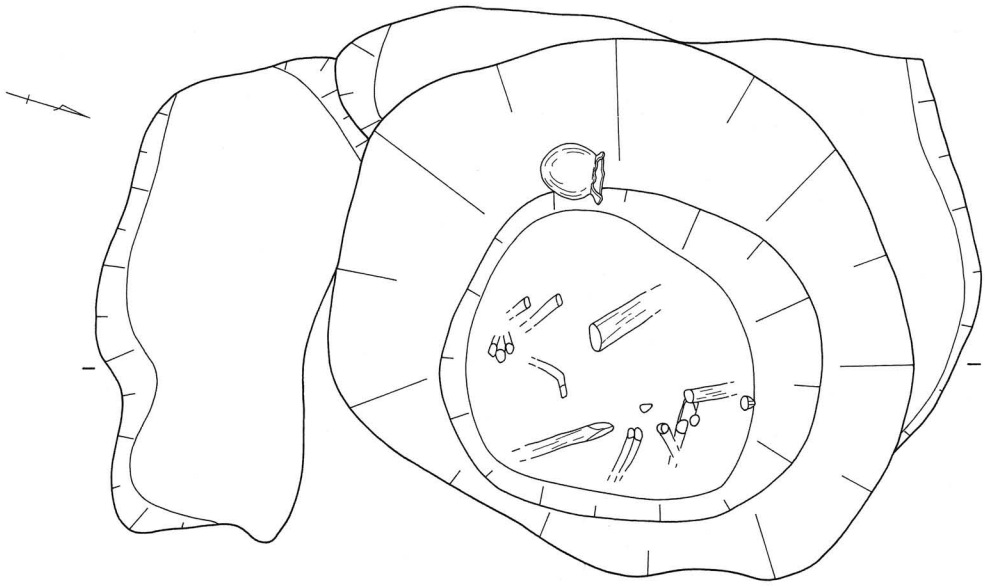
掘立柱建物202

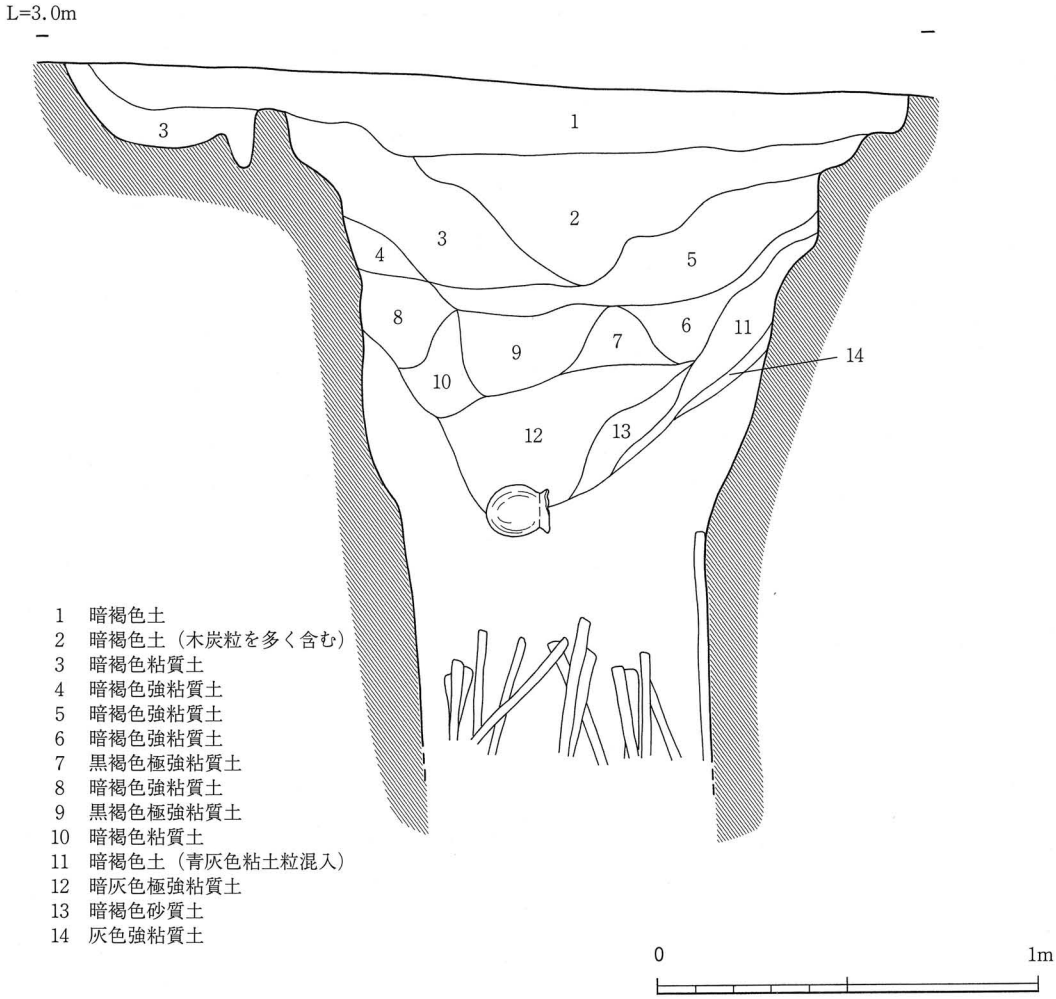


井戸201

掘立柱建物202・井戸201

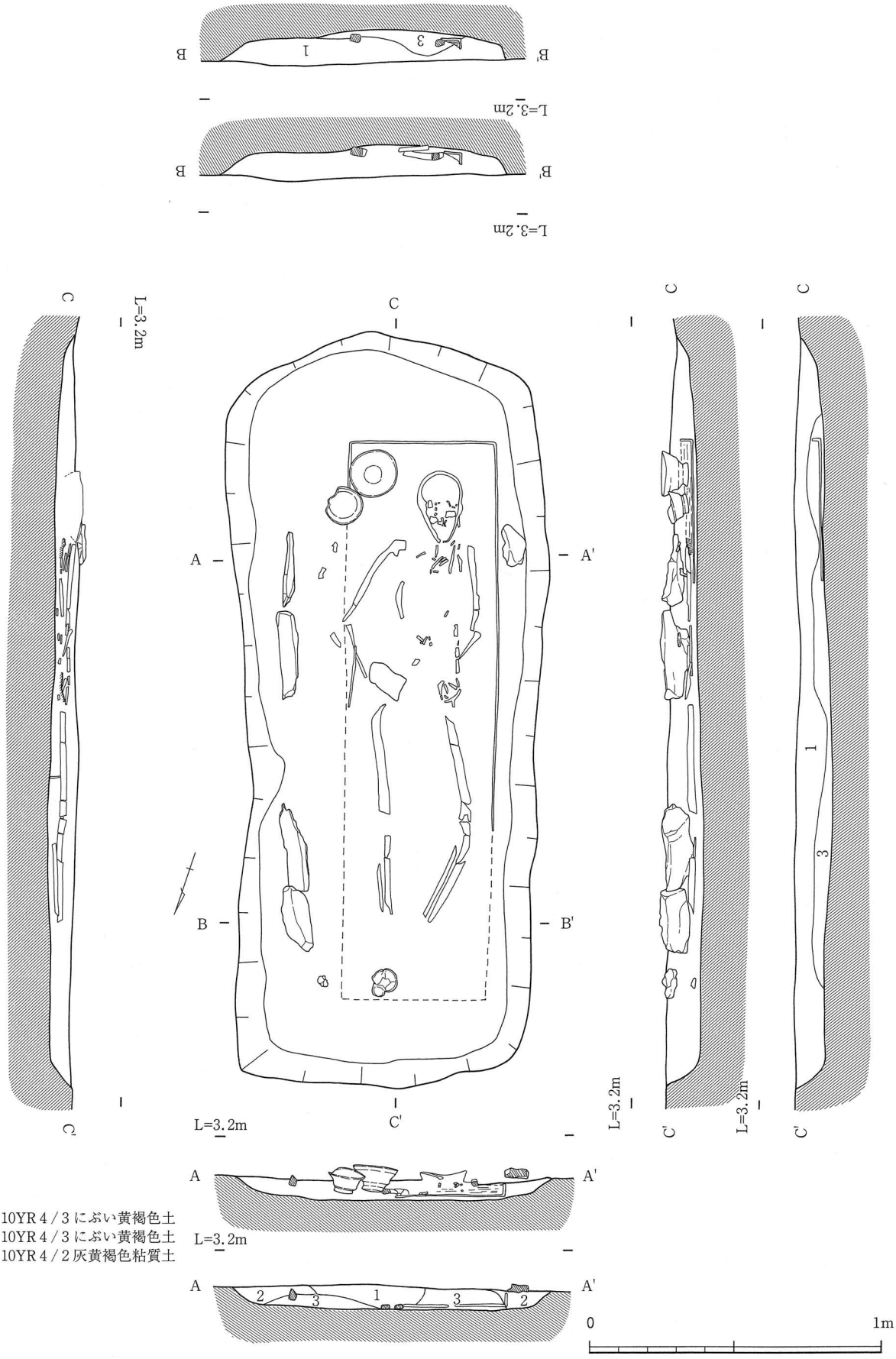
図版 18





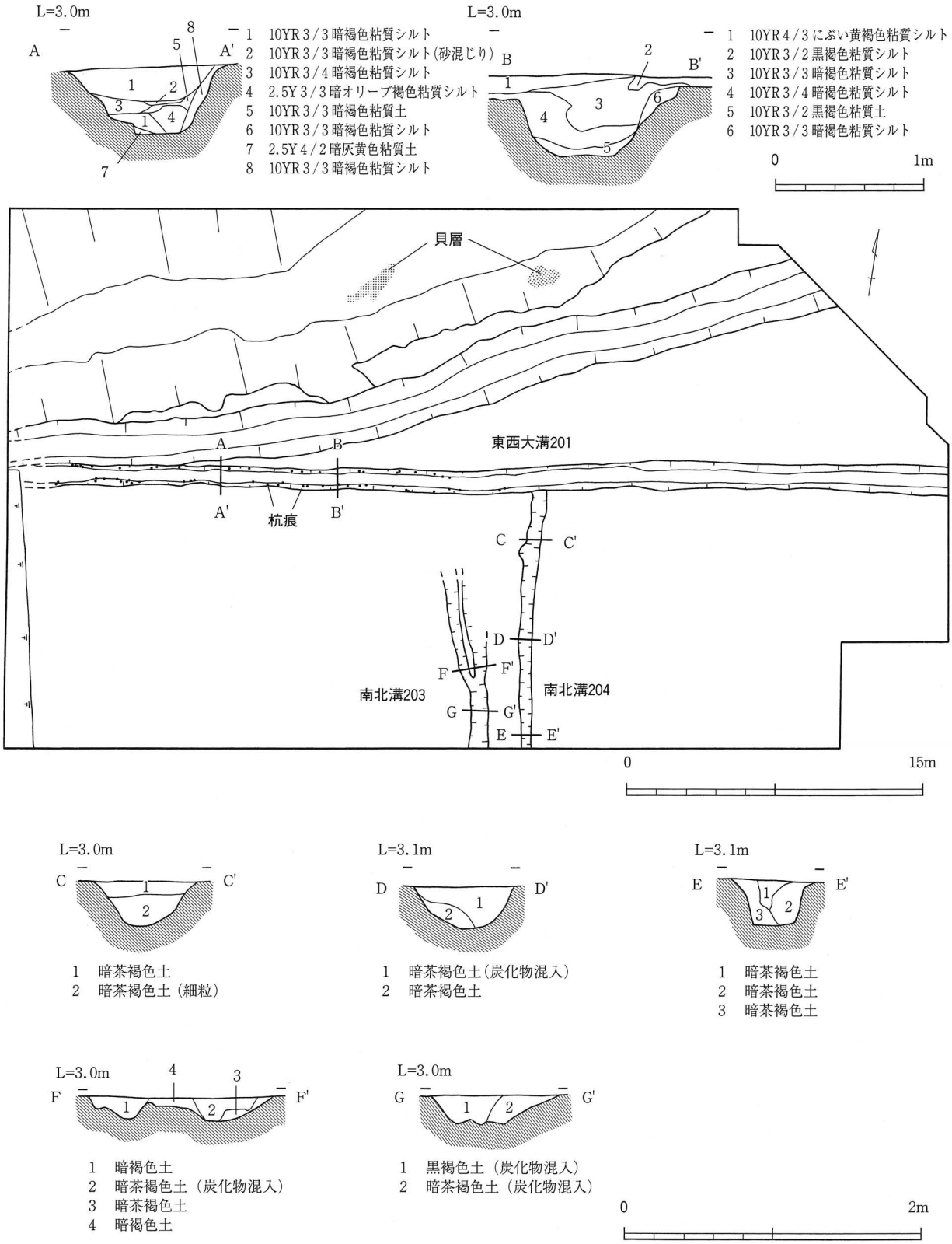
1　暗褐色土
2　暗褐色土（木炭粒を多く含む）
3　暗褐色粘質土
4　暗褐色強粘質土
5　暗褐色強粘質土
6　暗褐色強粘質土
7　黒褐色極強粘質土
8　暗褐色強粘質土
9　黒褐色極強粘質土
10　暗褐色粘質土
11　暗褐色土（青灰色粘土粒混入）
12　暗灰色極強粘質土
13　暗褐色砂質土
14　灰色強粘質土

井戸202

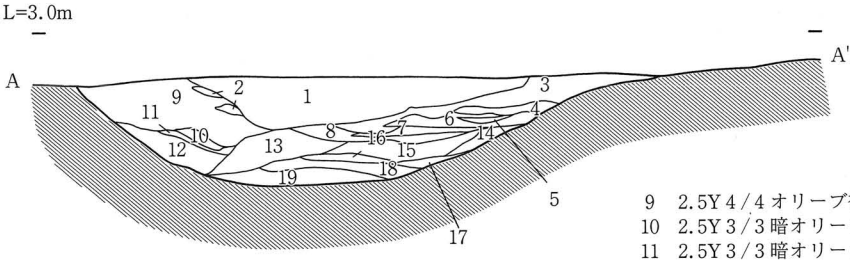


1　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色土
2　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色土
3　10YR 4 / 2 灰黄褐色粘質土

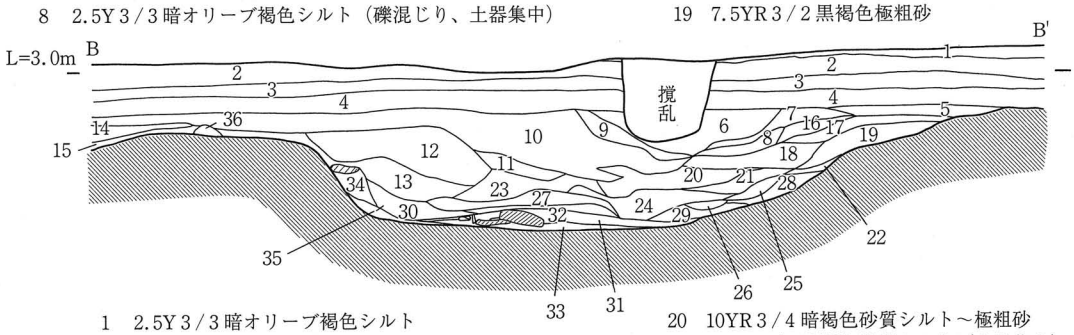
木棺墓201



東西大溝201・南北溝203・南北溝204

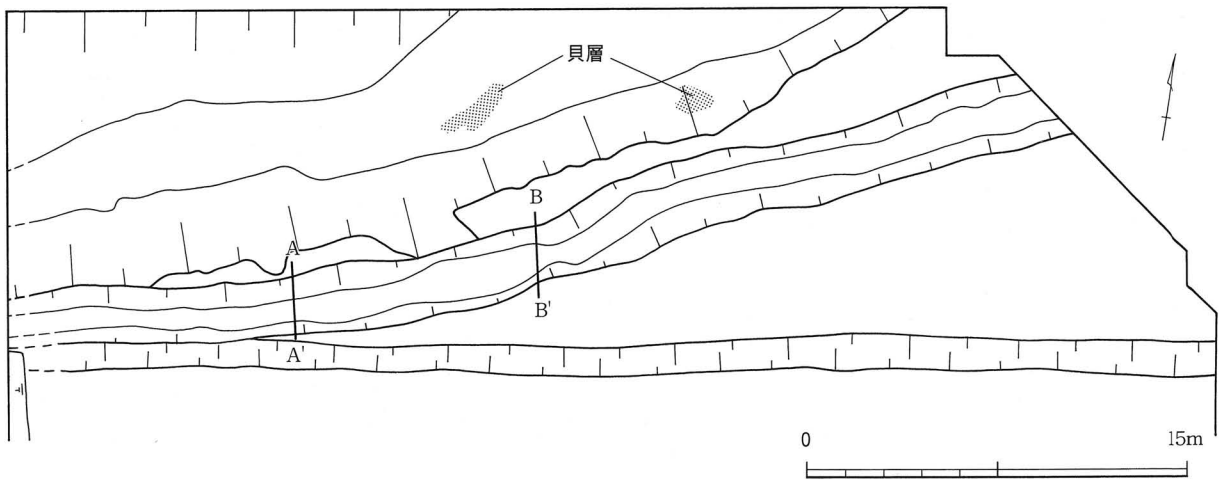


1　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト
2　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色砂質シルト
3　2.5Y 4 / 4 オリーブ褐色シルト
4　2.5Y 4 / 4 オリーブ褐色砂質シルト（土器集中）
5　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色砂質シルト
6　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色シルト（礫混じり）
7　2.5Y 4 / 4 オリーブ褐色シルト
8　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色シルト（礫混じり、土器集中）
9　2.5Y 4 / 4 オリーブ褐色シルト
10　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色シルト
11　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色シルト（炭化物集中）
12　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色砂質シルト
13　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色砂質シルト
14　10YR 3 / 3 暗褐色砂質シルト
15　10YR 3 / 3 暗褐色極粗砂
16　10YR 3 / 3 暗褐色細砂～粗砂
17　5Y 4 / 2 灰オリーブ色砂質シルト
18　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色極粗砂
19　7.5YR 3 / 2 黒褐色極粗砂

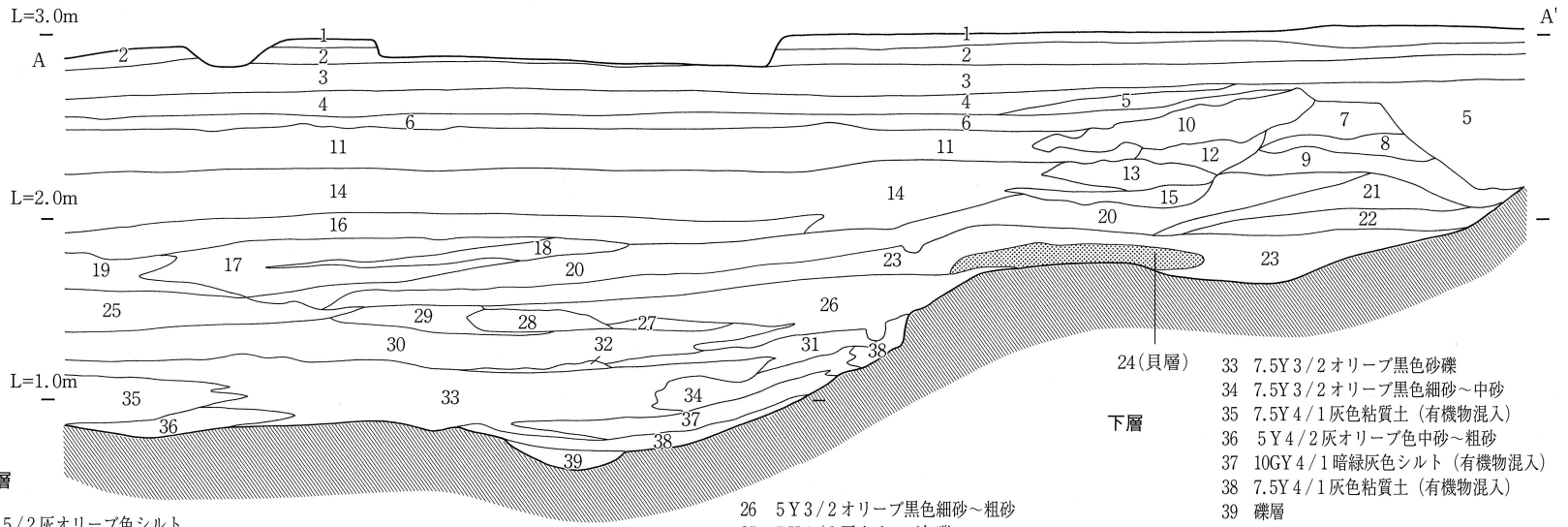


1　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色シルト
2　5Y 2 / 2 オリーブ黒色シルト
3　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト
4　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色粘質シルト（マンガン集積）
5　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色粘質シルト
6　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト
7　2.5Y 5 / 3 黄褐色シルト
8　2.5Y 5 / 3 黄褐色砂質シルト
9　2.5Y 5 / 3 黄褐色砂質シルト
10　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト
11　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色砂質シルト
12　2.5Y 4 / 4 オリーブ褐色シルト
13　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色砂質シルト
14　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色粘質シルト
15　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色粘質シルト
16　10YR 3 / 3 暗褐色シルト
17　10YR 3 / 3 暗褐色シルト（砂混じり、土器集中）
18　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色砂質シルト
19　10YR 3 / 3 暗褐色シルト（砂混じり）
20　10YR 3 / 4 暗褐色砂質シルト～極粗砂
21　10YR 3 / 4 暗褐色砂質シルト（土器集中）
22　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色粘質シルト
23　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色砂質シルト
24　5Y 4 / 2 灰オリーブ色砂質シルト
25　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色粘質土
26　5Y 4 / 2 灰オリーブ色砂質シルト
27　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色細砂～粗砂
28　10YR 3 / 4 暗褐色粘質土
29　5Y 4 / 2 灰オリーブ色砂質シルト
30　5Y 4 / 2 灰オリーブ色粘質土
31　5GY 3 / 1 暗オリーブ灰色粗砂～極粗砂
32　5GY 3 / 1 暗オリーブ灰色粗砂～極粗砂（土器集中）
33　5GY 3 / 1 暗オリーブ灰色粗砂～極粗砂（土器集中）
34　5Y 4 / 2 灰オリーブ色粘質土
35　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ灰色粘質土

0　2 m

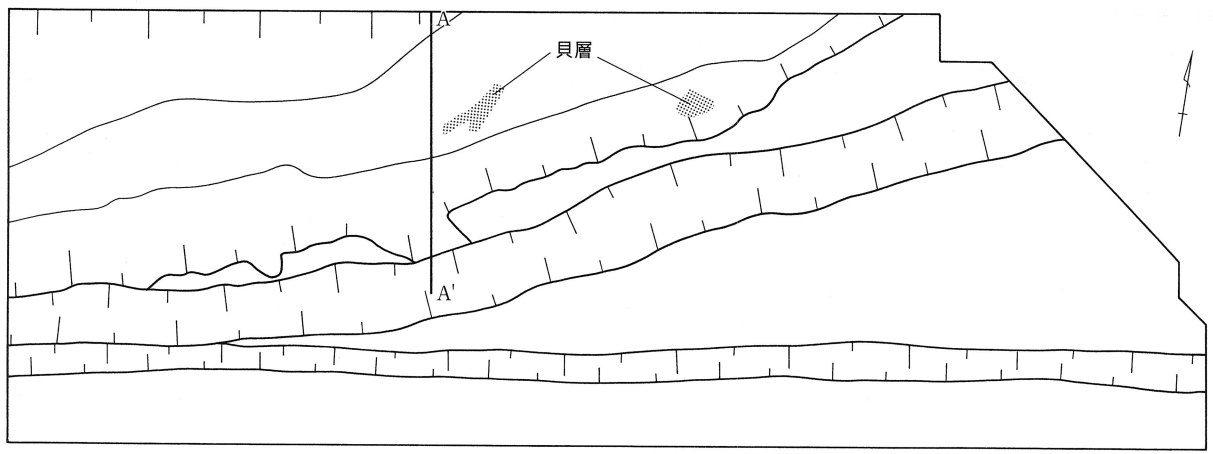


東西大溝202

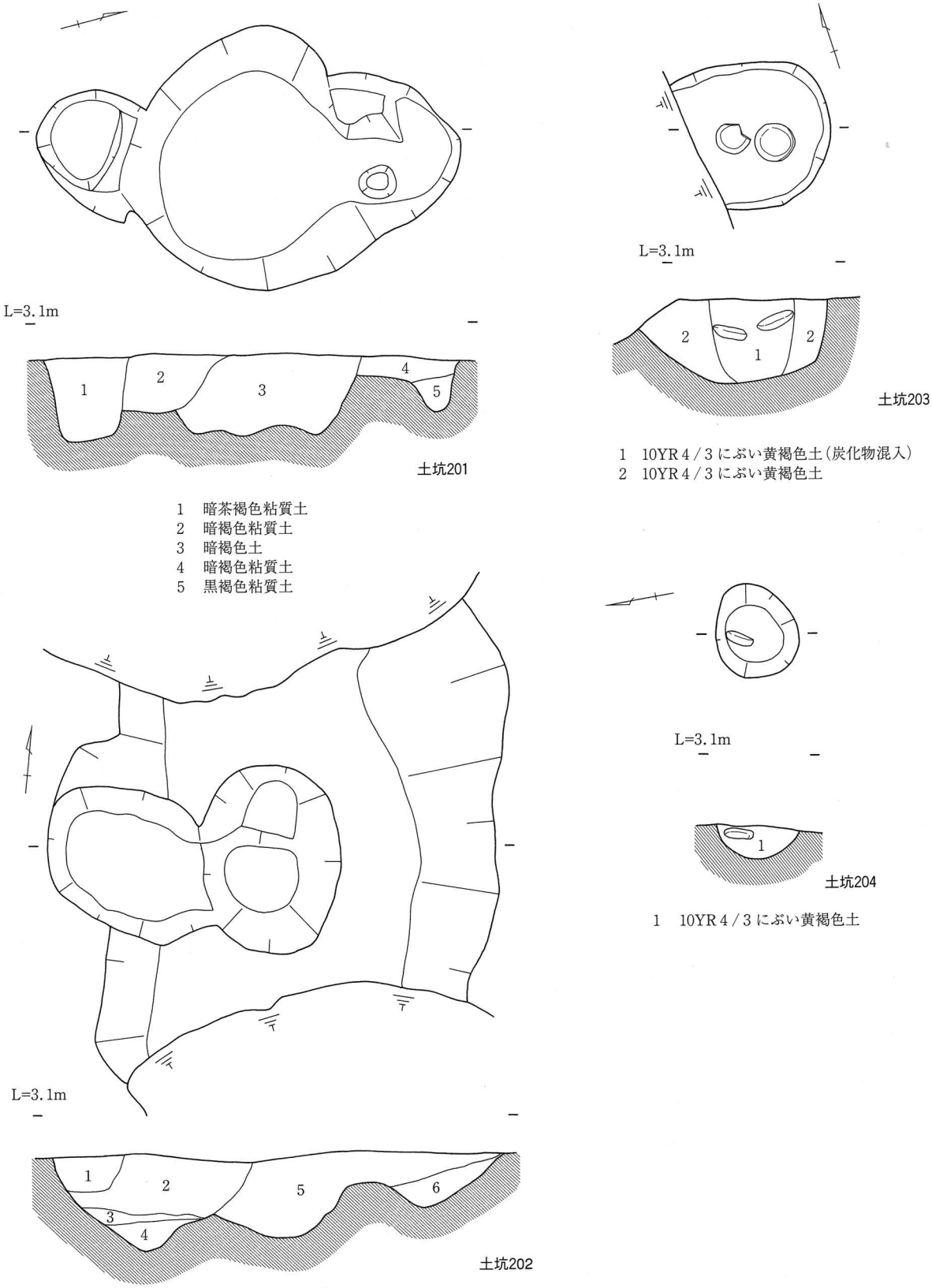


1　5Y5/2灰オリーブ色シルト
2　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
3　10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（マンガン集積）
4　2.5Y4/4オリーブ褐色粘質シルト
5　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
6　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト（マンガン集積）
7　2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト
8　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質シルト
9　7.5YR4/4褐色粘質土
10　10YR3/2黒褐色粘質シルト
11　5Y4/2灰オリーブ色粘質土
12　2.5Y3/2黒褐色粘質シルト
13　5Y3/2オリーブ黒色粘質土
14　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土
15　10YR3/4暗褐色細砂～極粗砂
16　7.5Y3/2オリーブ黒色粘質シルト
17　5Y4/3暗オリーブ色中砂～極粗砂
18　5Y3/2オリーブ黒色粘質シルト
19　7.5Y2/2オリーブ黒色粘質土（有機物混入）
20　5Y3/1オリーブ黒色粘質土（有機物混入）
21　5Y4/2灰オリーブ色粘質土
22　5Y3/2オリーブ黒色粘質土
23　2.5Y3/3暗オリーブ褐色極細砂～極粗砂
24　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粗砂～中砂（貝層）
25　5Y3/2オリーブ黒色中砂～極粗砂
26　5Y3/2オリーブ黒色細砂～粗砂
27　5Y4/2灰オリーブ色礫
28　2.5Y4/6オリーブ褐色砂礫
29　5Y4/2灰オリーブ色砂礫
30　7.5Y3/1オリーブ黒色砂礫（有機物混入）
31　10Y3/2オリーブ黒色細砂～中砂（有機物少量混入）
32　10Y4/2オリーブ灰色中砂～粗砂
33　7.5Y3/2オリーブ黒色砂礫
34　7.5Y3/2オリーブ黒色細砂～中砂
35　7.5Y4/1灰色粘質土（有機物混入）
36　5Y4/2灰オリーブ色中砂～粗砂
37　10GY4/1暗緑灰色シルト（有機物混入）
38　7.5Y4/1灰色粘質土（有機物混入）
39　礫層

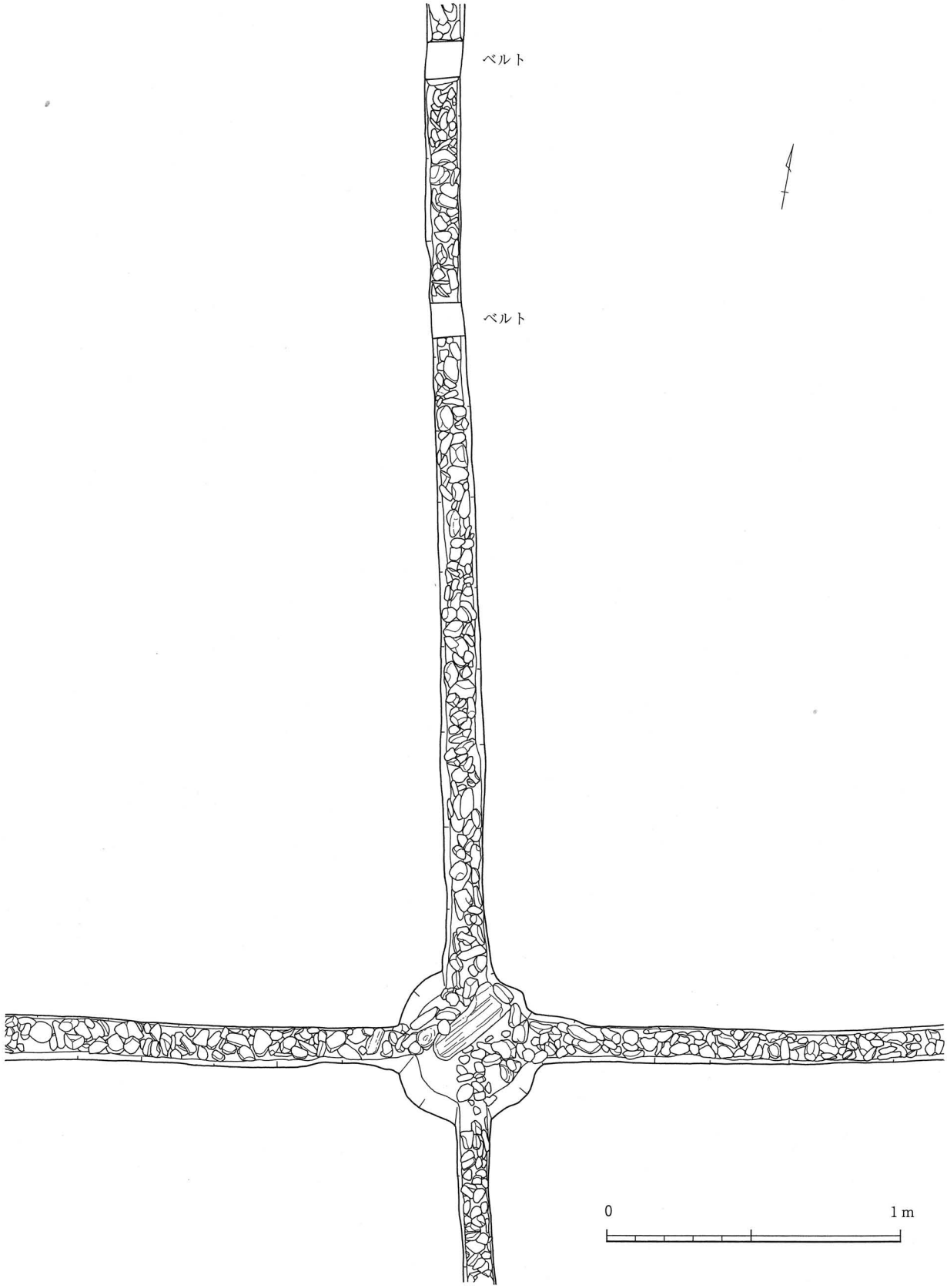
0　2m



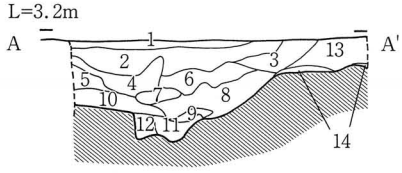
0　15m


L=3.1m
1
2
3
4
5
土坑201
1　暗茶褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　暗褐色土
4　暗褐色粘質土
5　黒褐色粘質土
L=3.1m
2
1
2
土坑203
1　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色土（炭化物混入）
2　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色土
L=3.1m
1
土坑204
1　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色土
L=3.1m
1
2
3
4
5
6
土坑202
1　暗褐色粘質土
2　暗茶褐色粘質土（炭化物・焼土混入）
3　暗茶褐色土
4　暗茶褐色土
5　暗褐色粘質土
6　暗褐色強粘質土
0
2 m

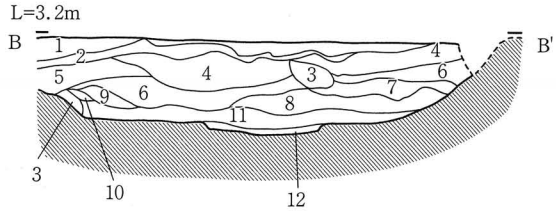
土坑 201～土坑 204



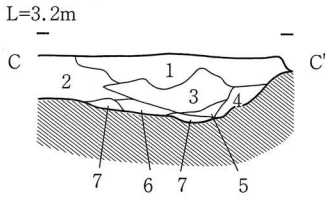
石敷暗渠平面図（部分）



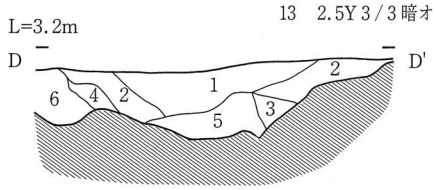
1　10YR 3 / 3 暗褐色シルト
2　5 Y 5 / 2 灰オリーブ色シルト
3　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色シルト
4　2.5Y 4 / 4 オリーブ褐色シルト
5　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト
6　10YR 4 / 3 にぶい黄褐色シルト
7　10YR 3 / 4 暗褐色シルト
8　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト
9　10YR 4 / 6 褐色シルト
10　2.5Y 4 / 4 オリーブ褐色シルト
11　5 Y 5 / 3 灰オリーブ色シルト
12　5 Y 5 / 3 灰オリーブ色シルト
13　10YR 3 / 2 黒褐色粘質シルト
14　10YR 3 / 2 黒褐色粘質土



1　10YR 3 / 3 暗褐色シルト
2　5 Y 5 / 2 灰オリーブ色シルト
3　10YR 3 / 3 暗褐色シルト
4　2.5Y 4 / 4 オリーブ褐色シルト
5　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト
6　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト
7　5 Y 4 / 2 灰オリーブ色シルト
8　5 Y 5 / 3 灰オリーブ色砂質シルト
9　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色砂質シルト
10　5 Y 4 / 2 灰オリーブ色シルト
11　5 Y 4 / 2 灰オリーブ色砂質シルト
12　5 Y 4 / 2 灰オリーブ色粘質シルト
13　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色シルト

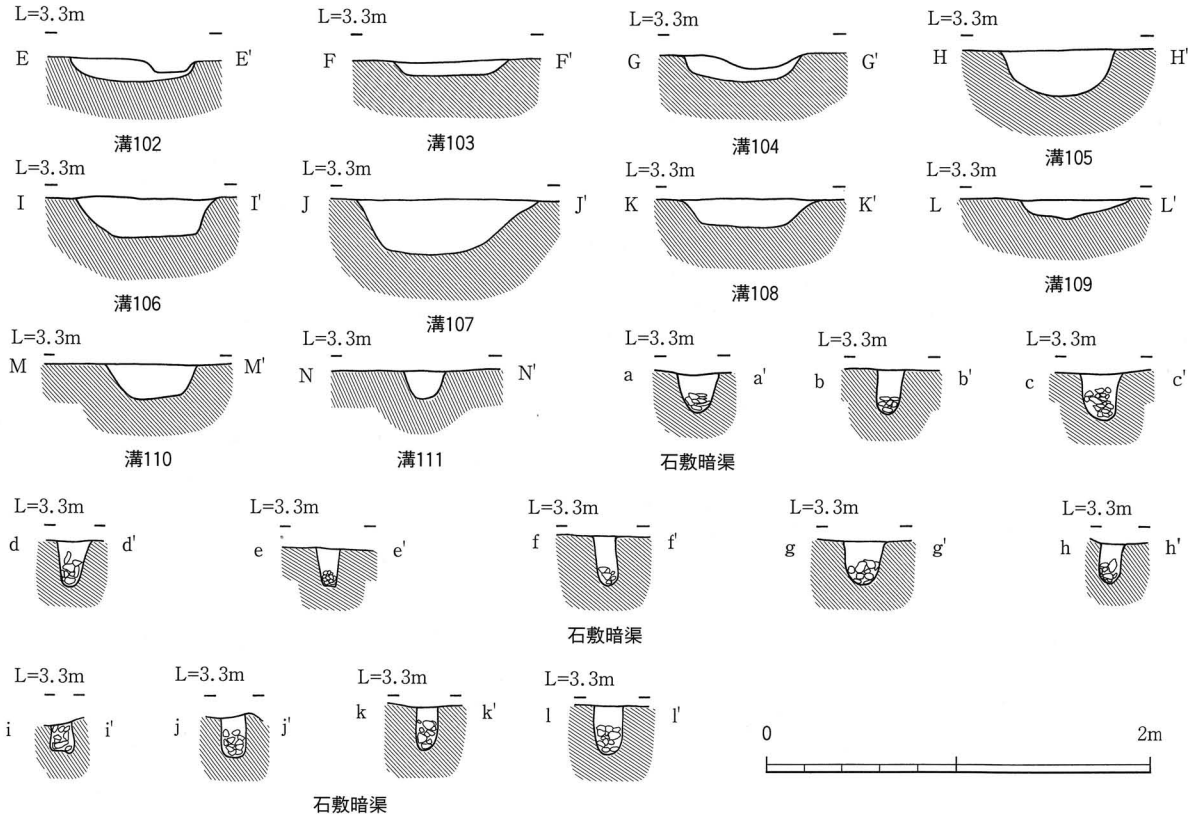


1　2.5Y 4 / 2 暗灰黄色シルト
2　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色シルト
3　5 Y 4 / 2 灰オリーブ色砂質シルト
4　5 Y 4 / 2 灰オリーブ色シルト
5　5 Y 5 / 3 灰オリーブ色砂質シルト
6　5 Y 4 / 2 灰オリーブ色砂質シルト
7　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色砂質シルト

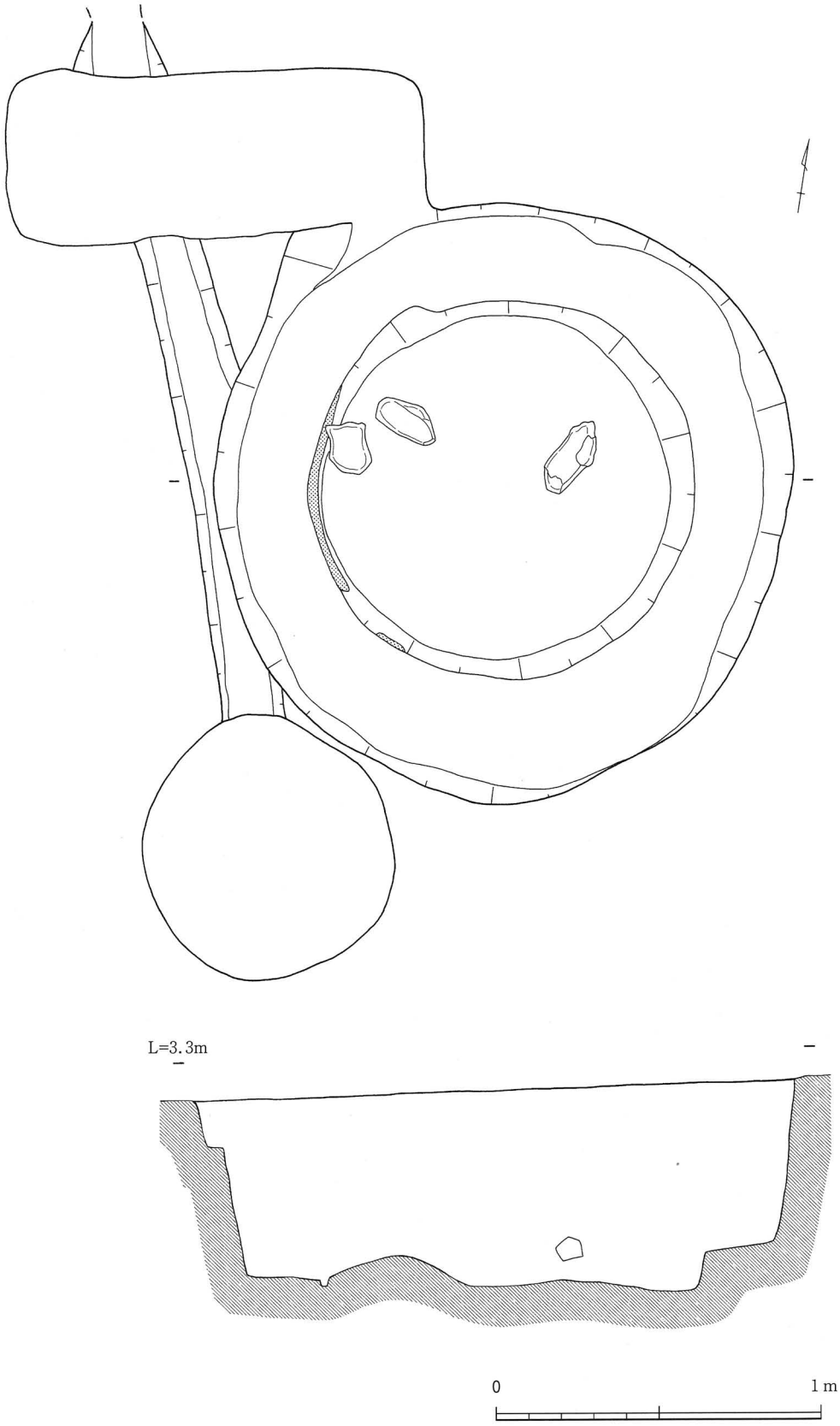


1　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト
2　2.5Y 4 / 4 オリーブ褐色シルト
3　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト
4　2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色シルト
5　5 Y 4 / 2 灰オリーブ色シルト質砂
6　2.5Y 4 / 3 オリーブ褐色シルト

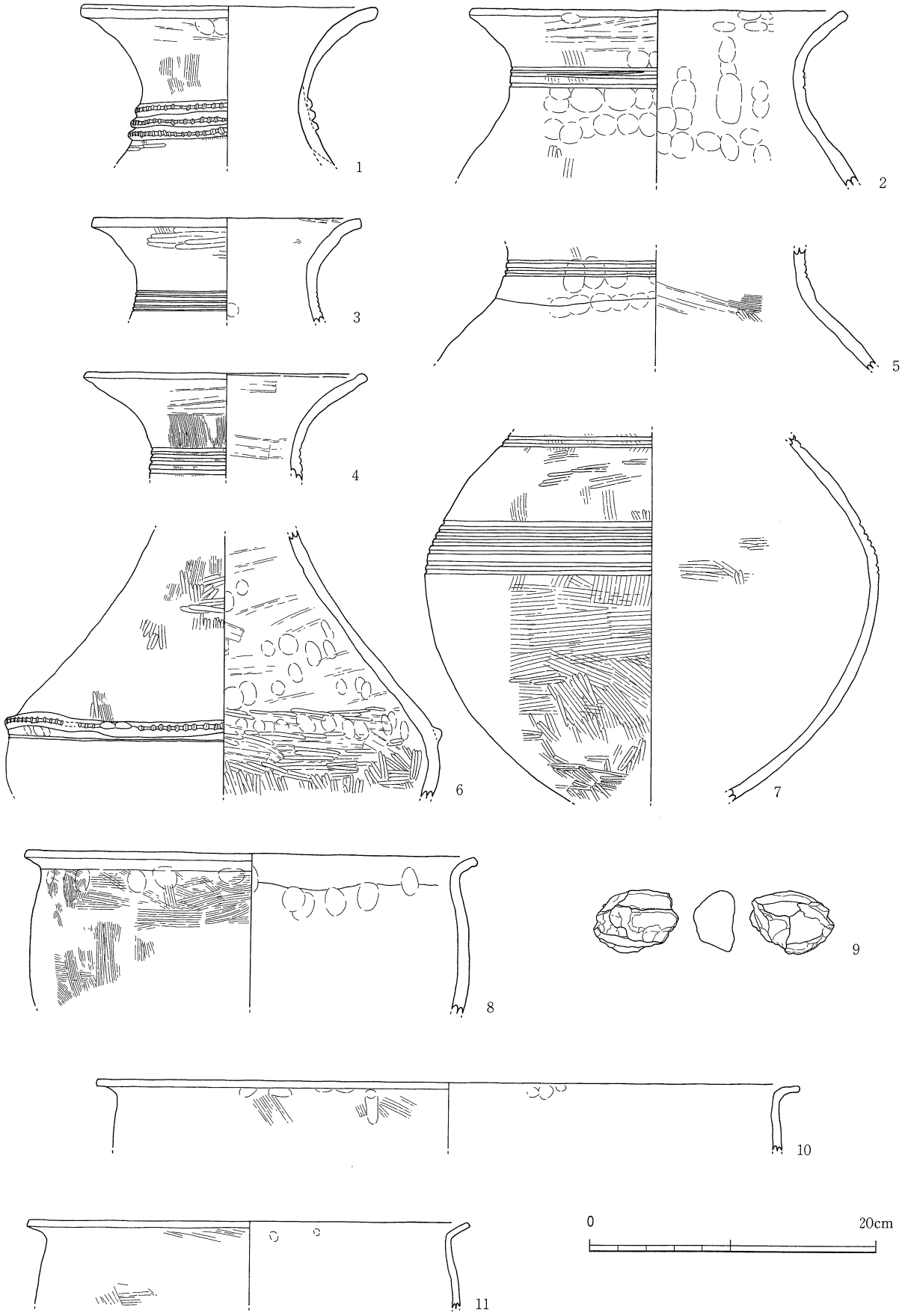
東西大溝101



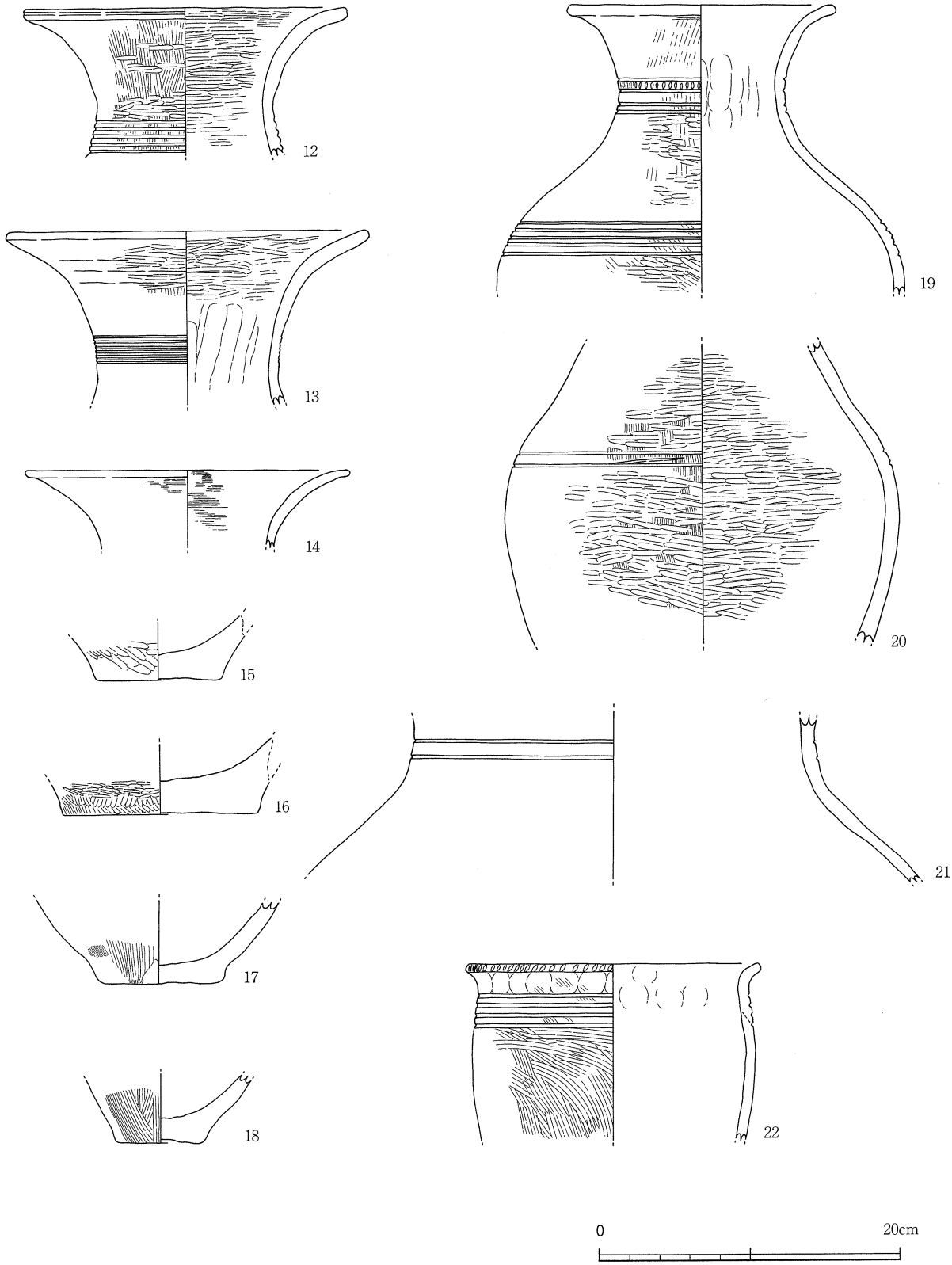
東西大溝101ほか土層断面図（平面図は P33　第 8 図を参照）



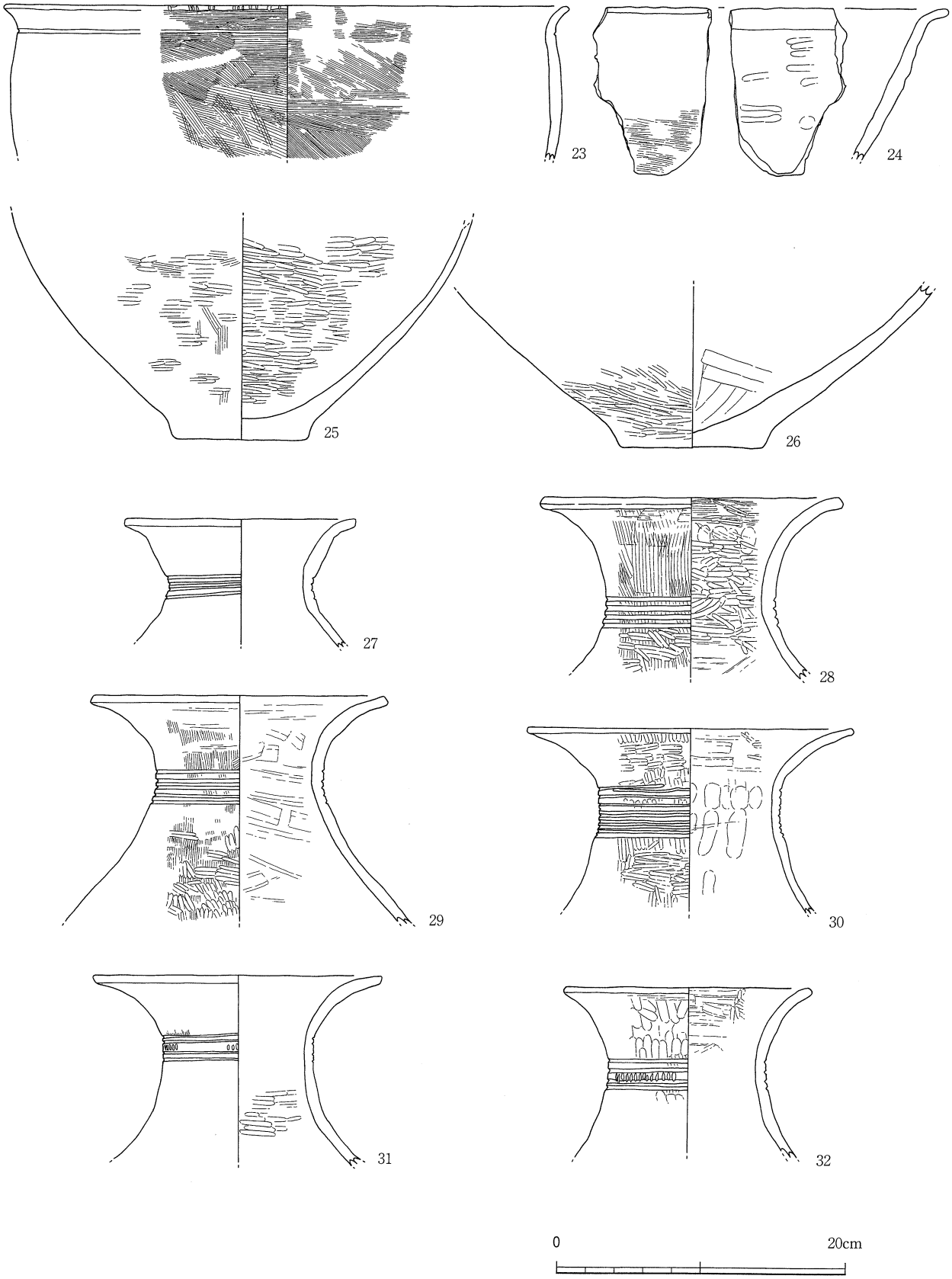
井戸101



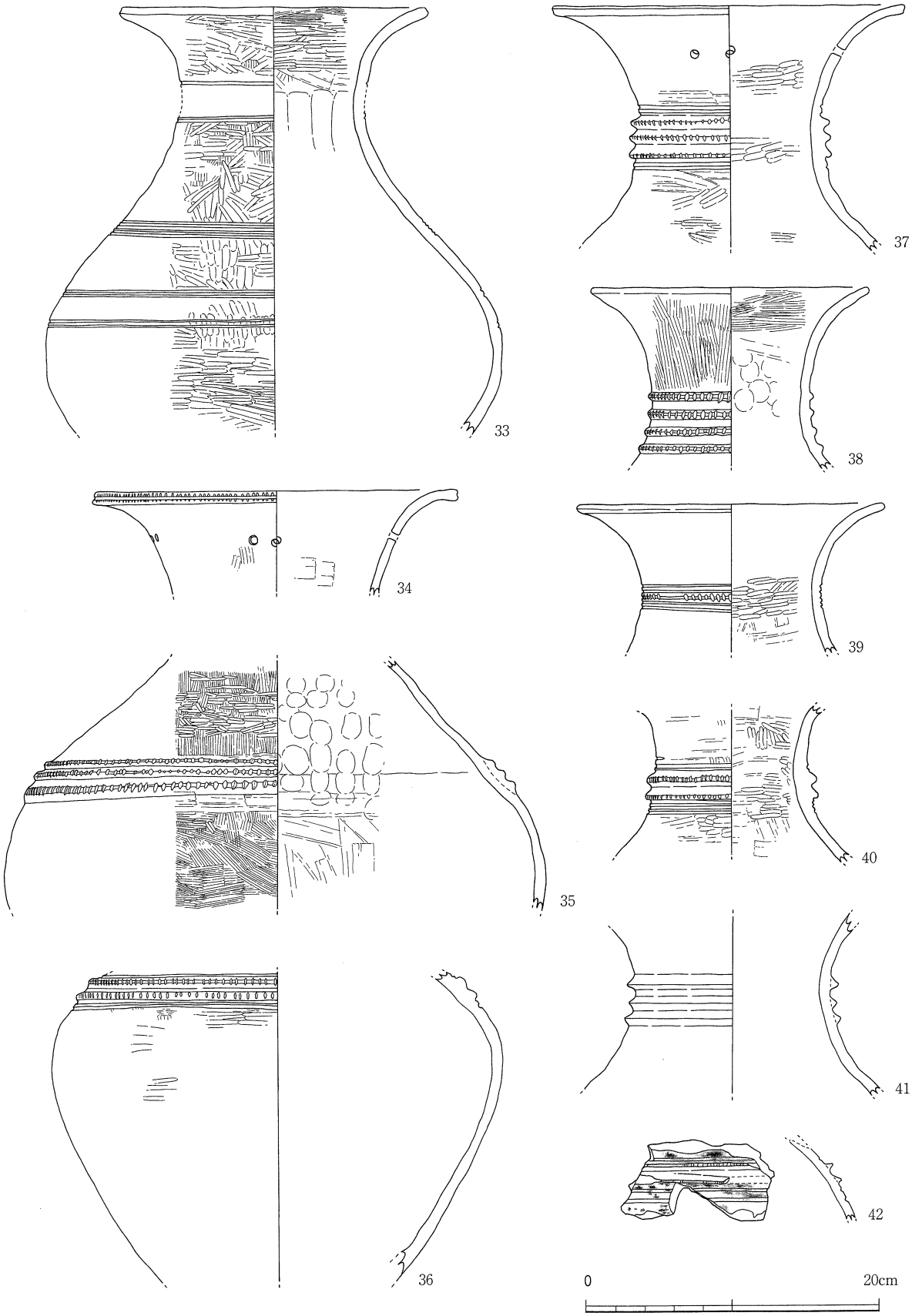
土坑301（1～11）出土土器



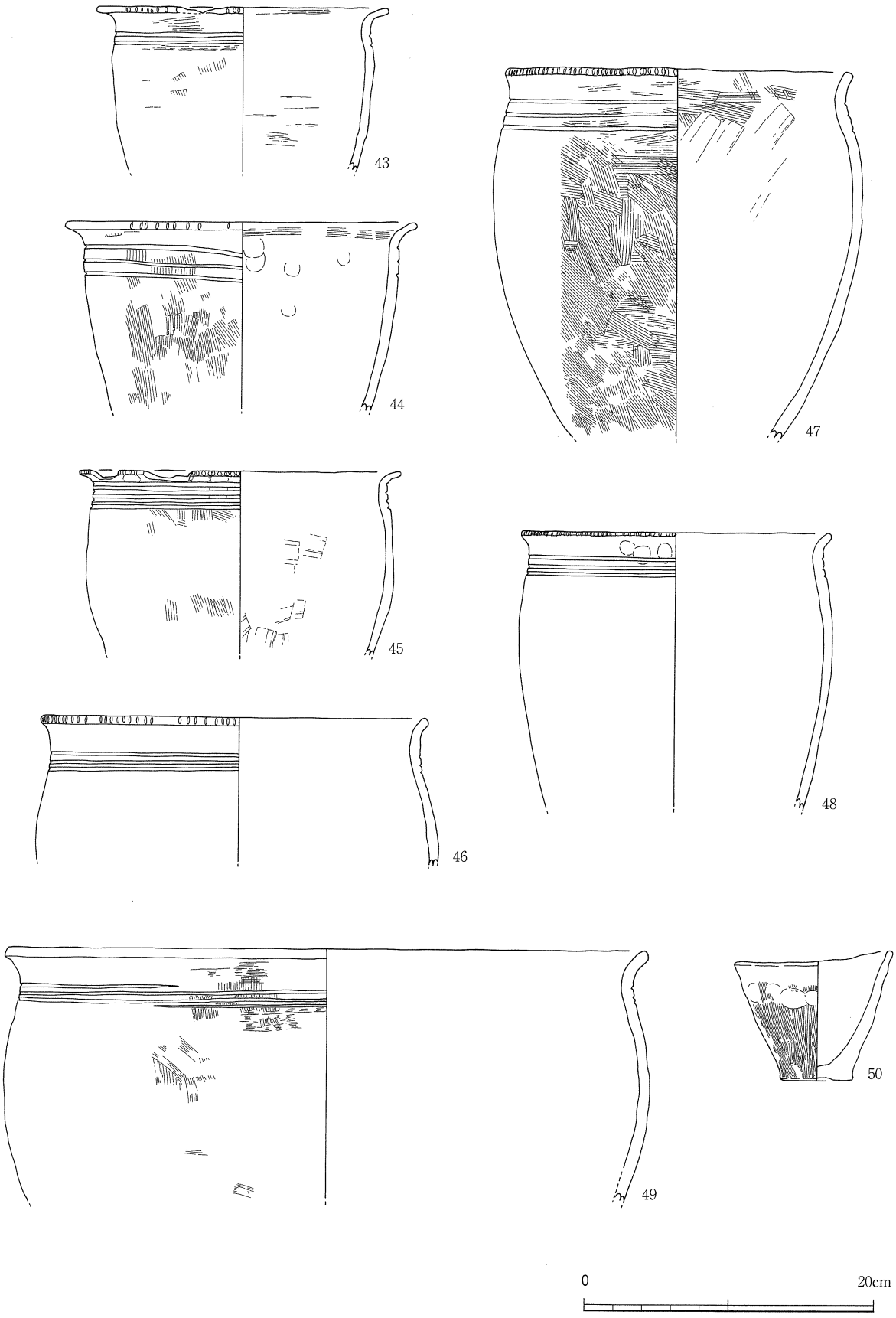
土坑302（12～22）出土土器



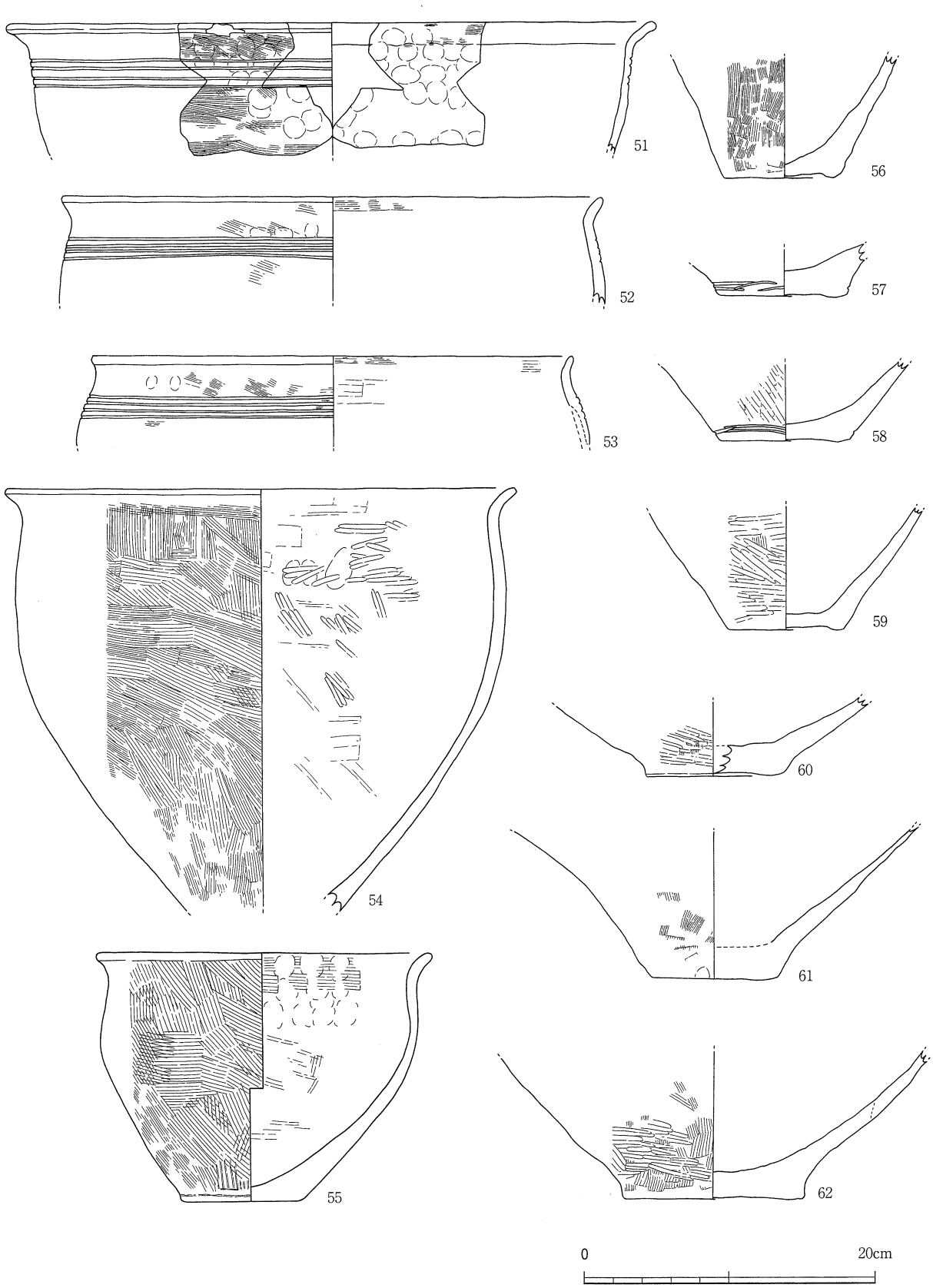
土坑302（23～26）、土坑303（27～32）出土土器



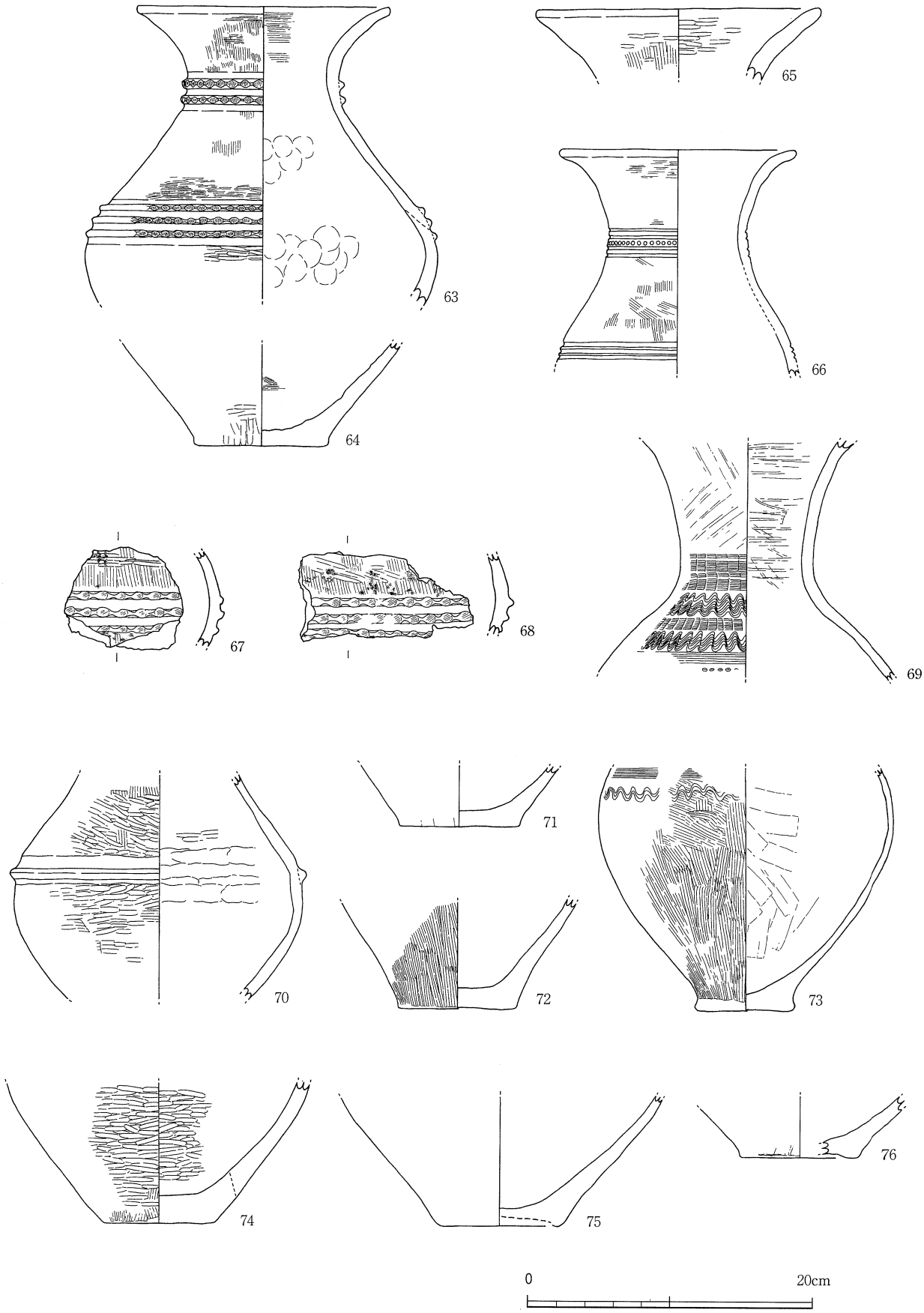
土坑303（33～42）出土土器



土坑303（43～50）出土土器

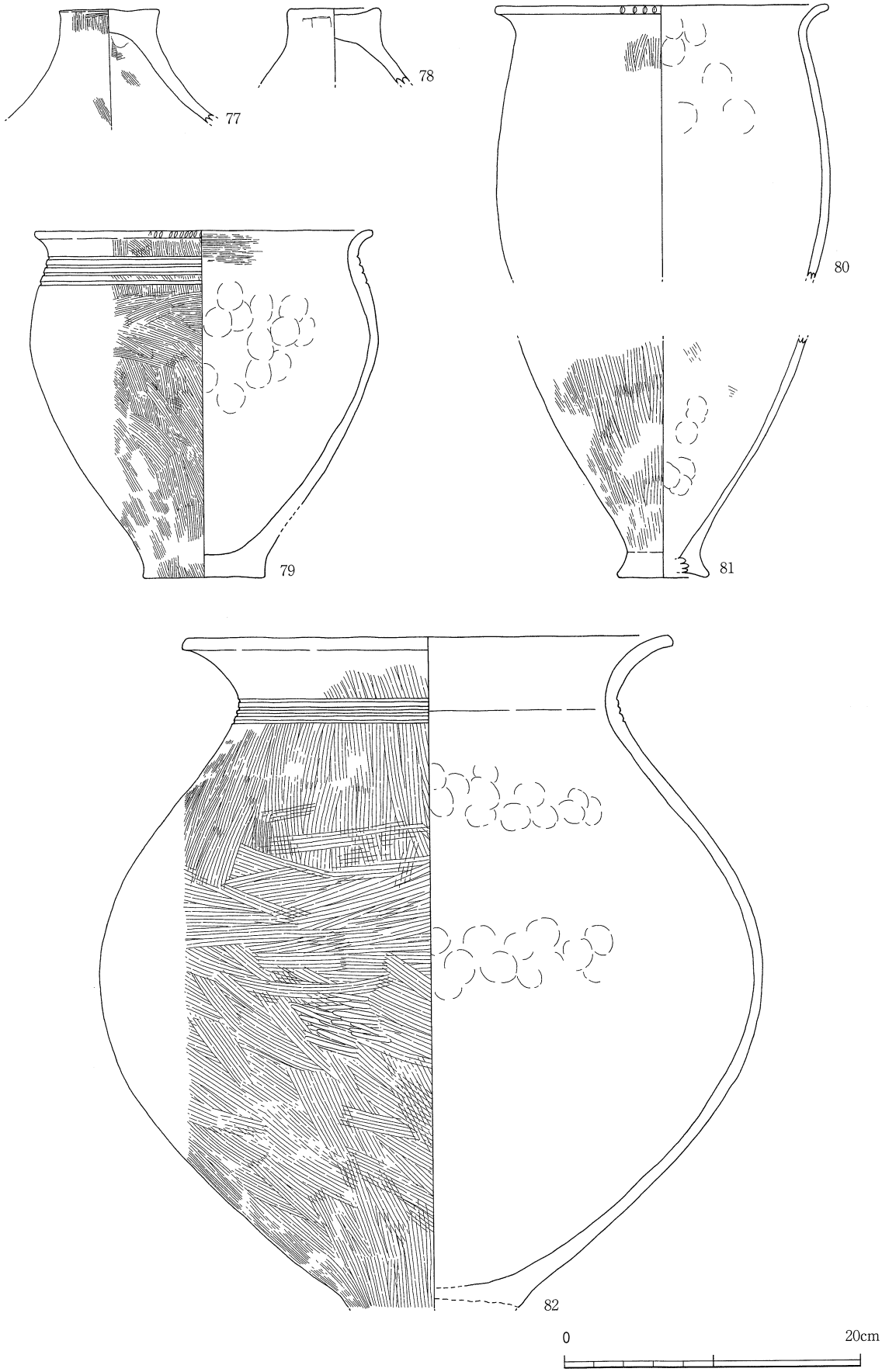


土坑303（51～62）出土土器

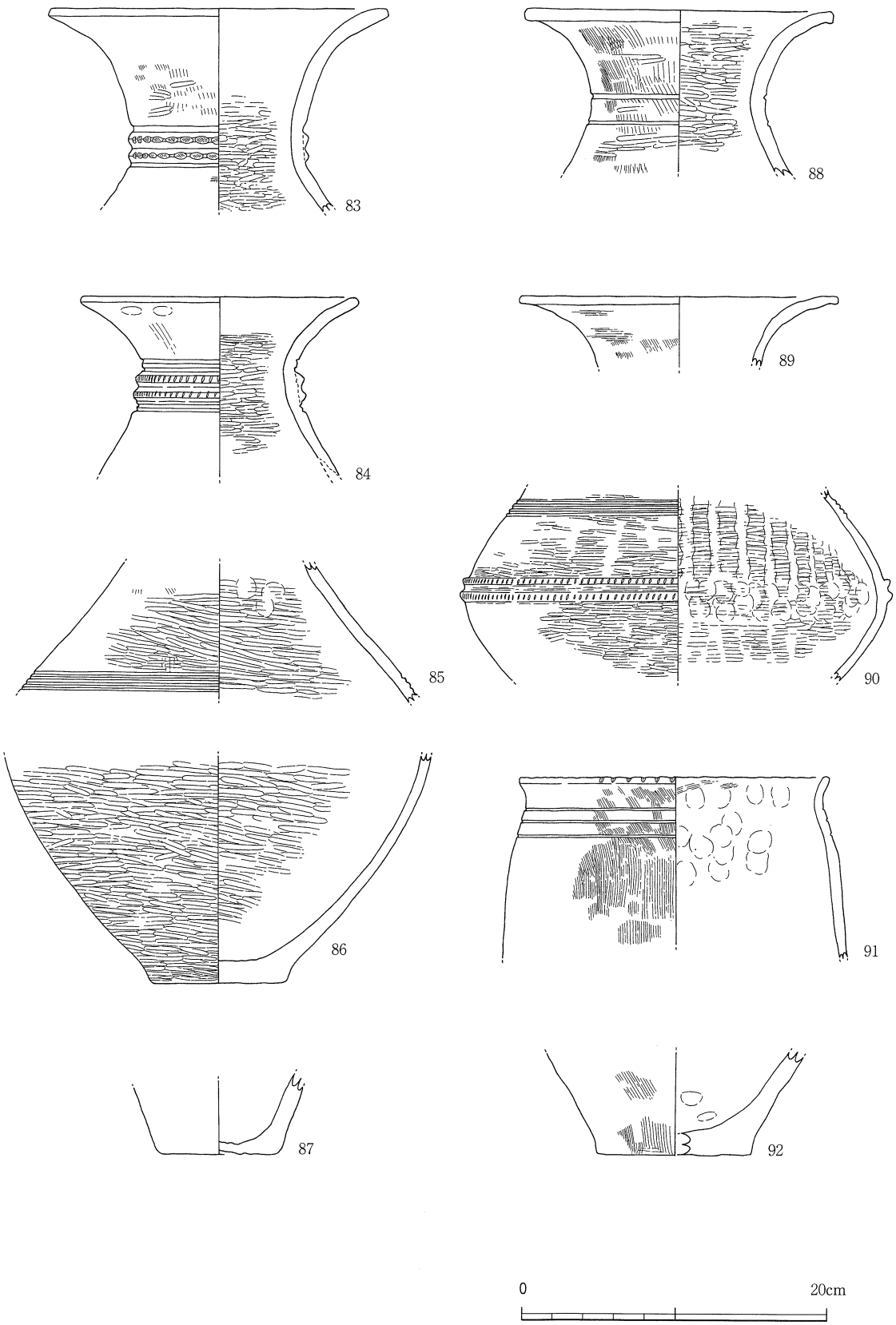


土坑304（63～76）出土土器

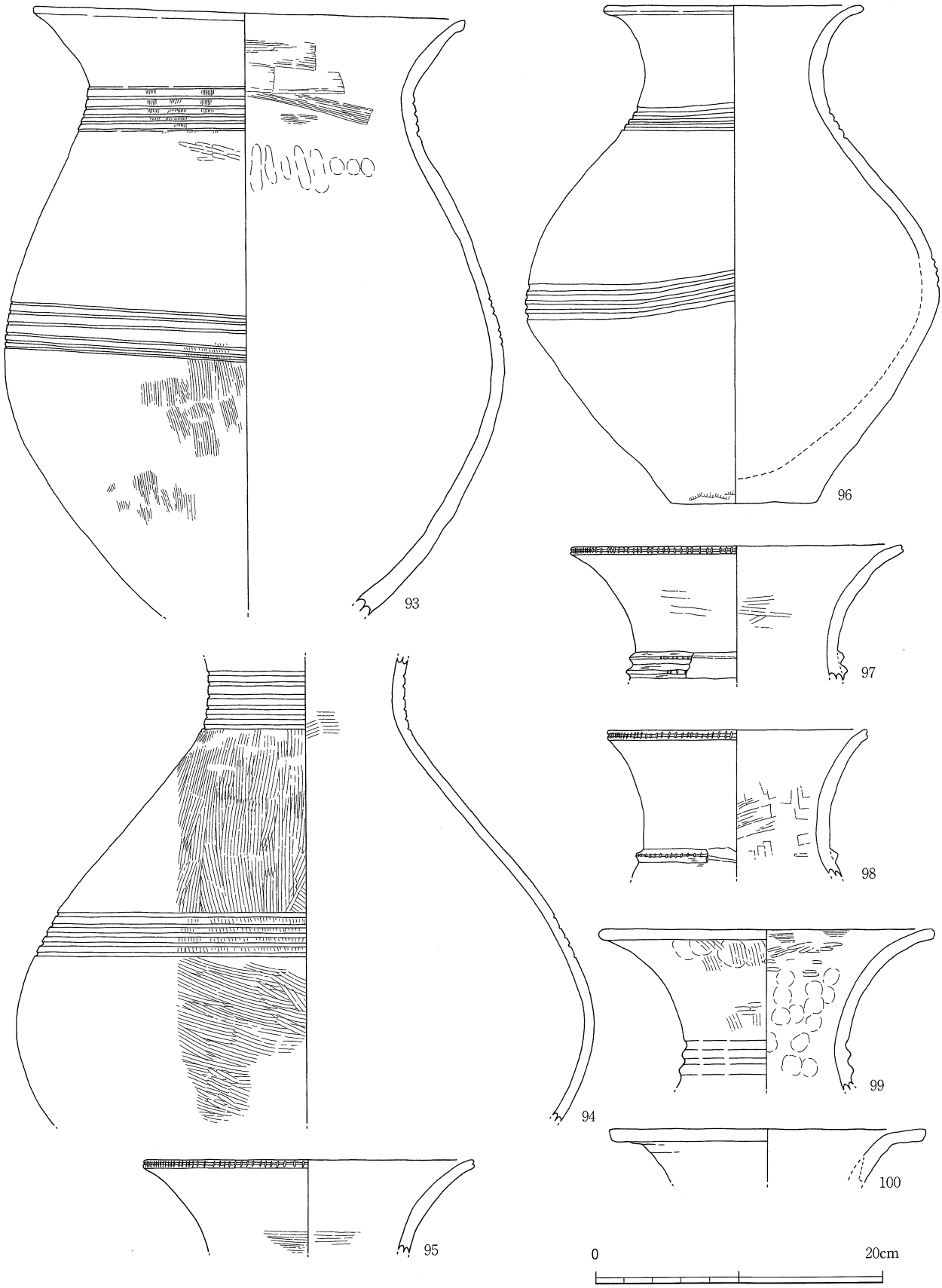
図版 34



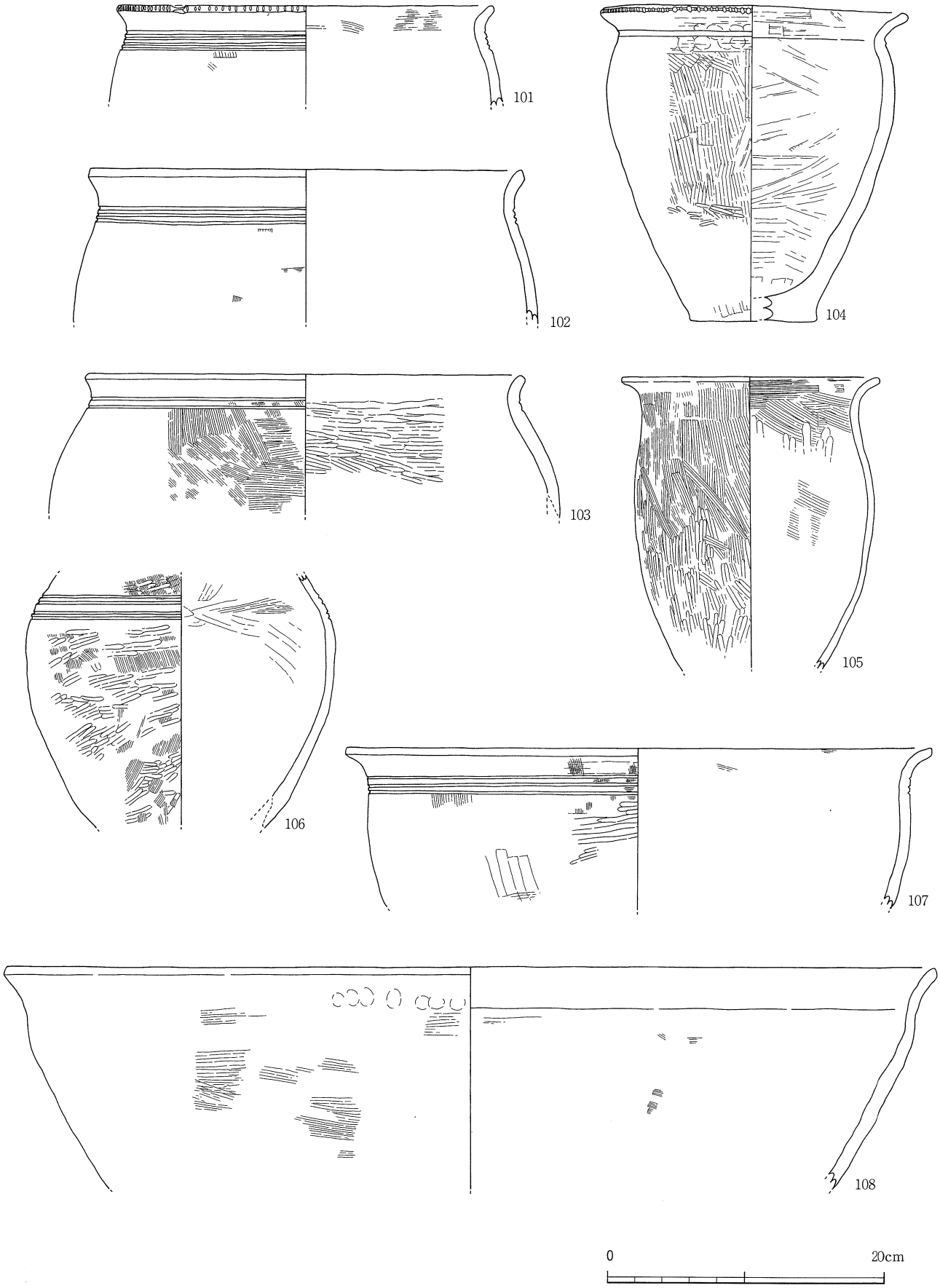
土坑304（77～81）、土坑305（82）出土土器



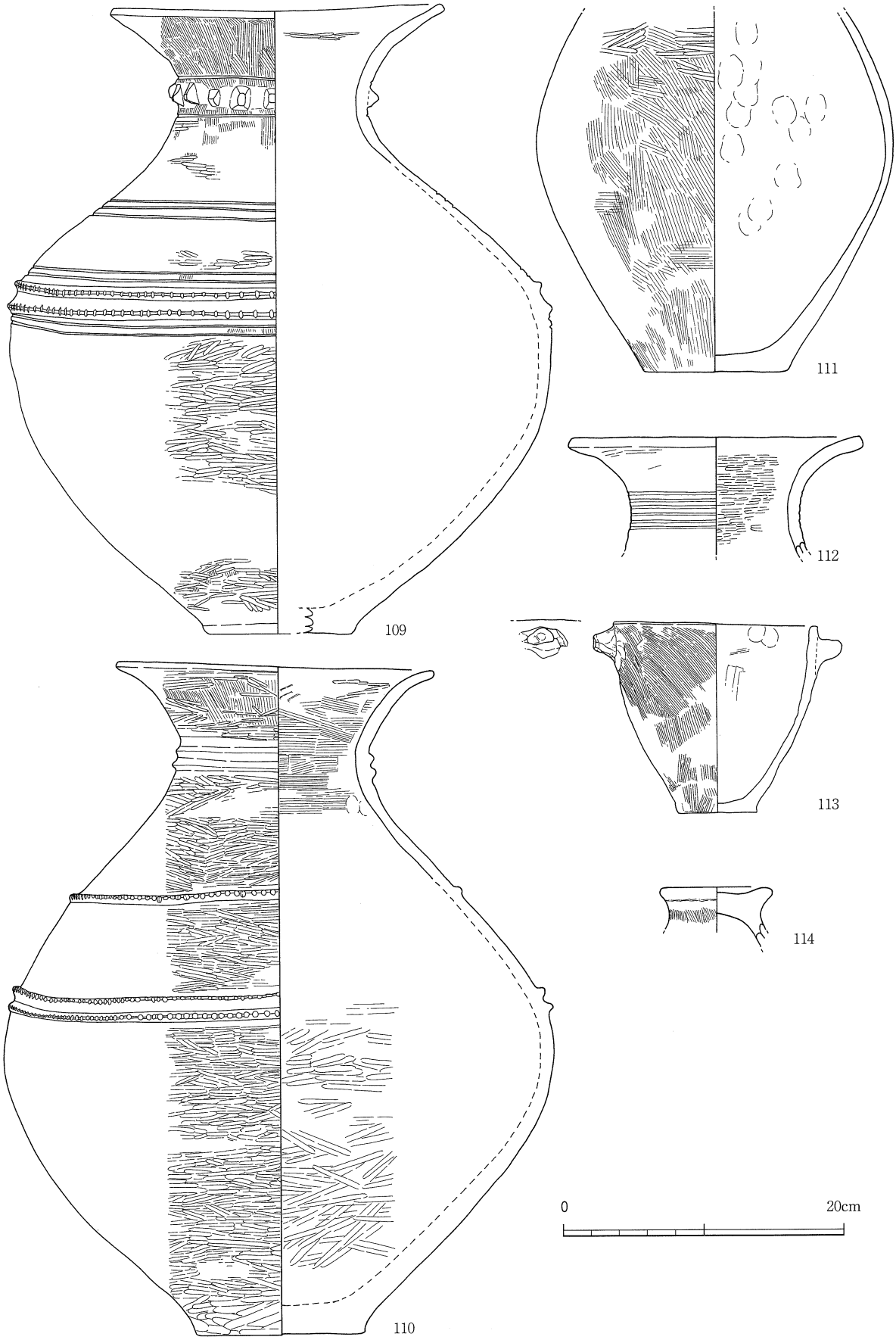
土坑305（83～92）出土土器



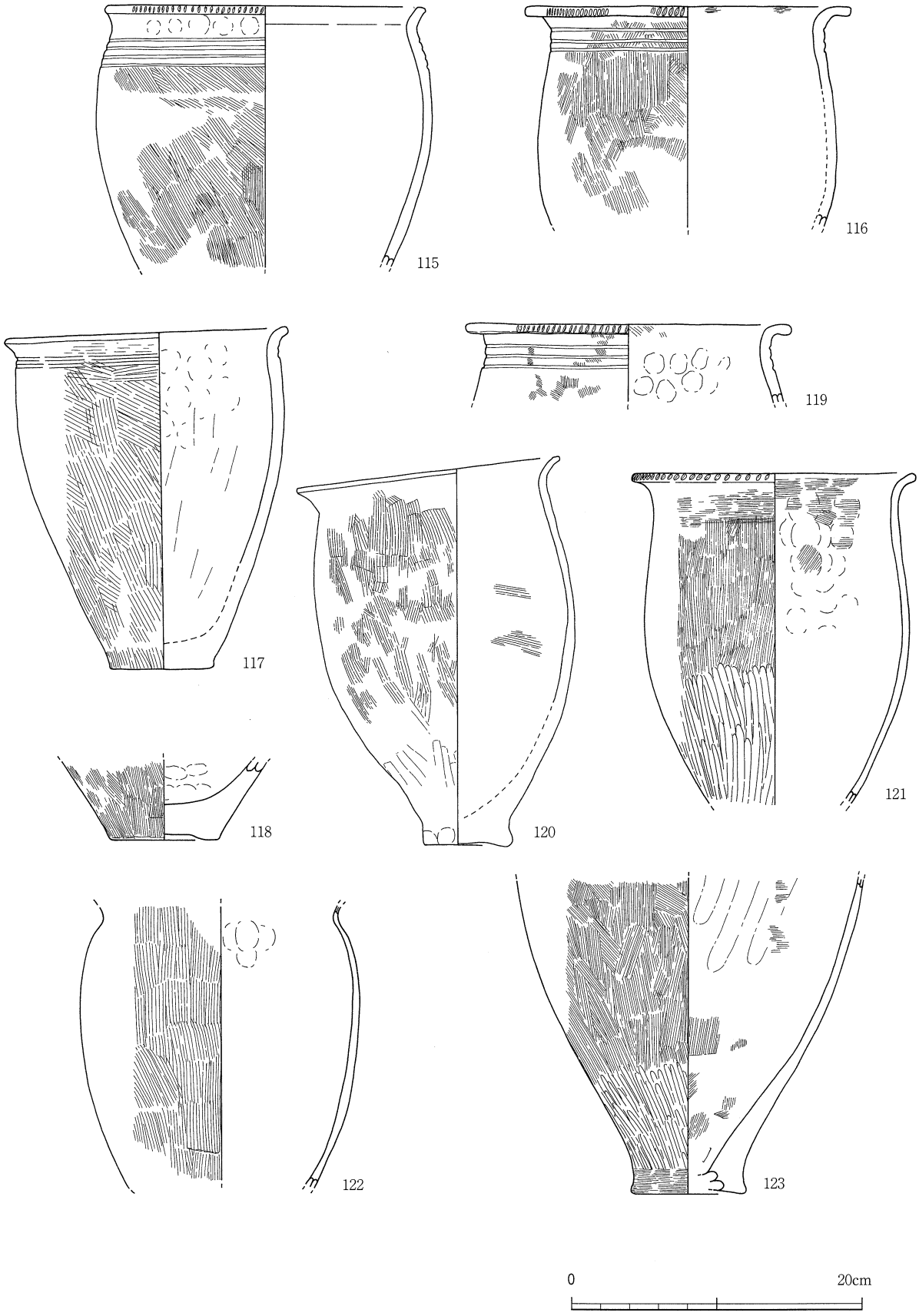
土坑306（93～100）出土土器



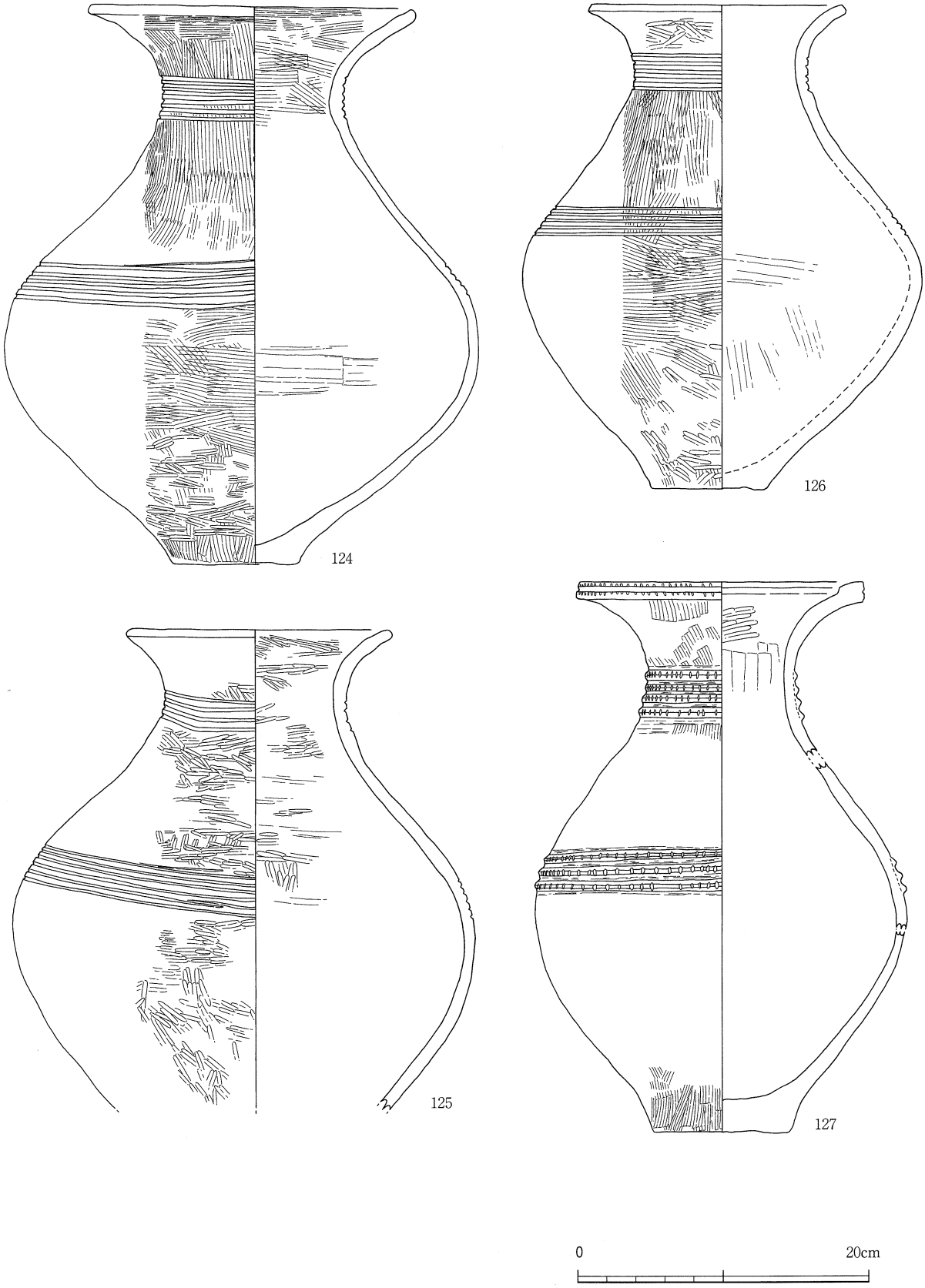
土坑306（101～105）、土坑307（106～108）出土土器



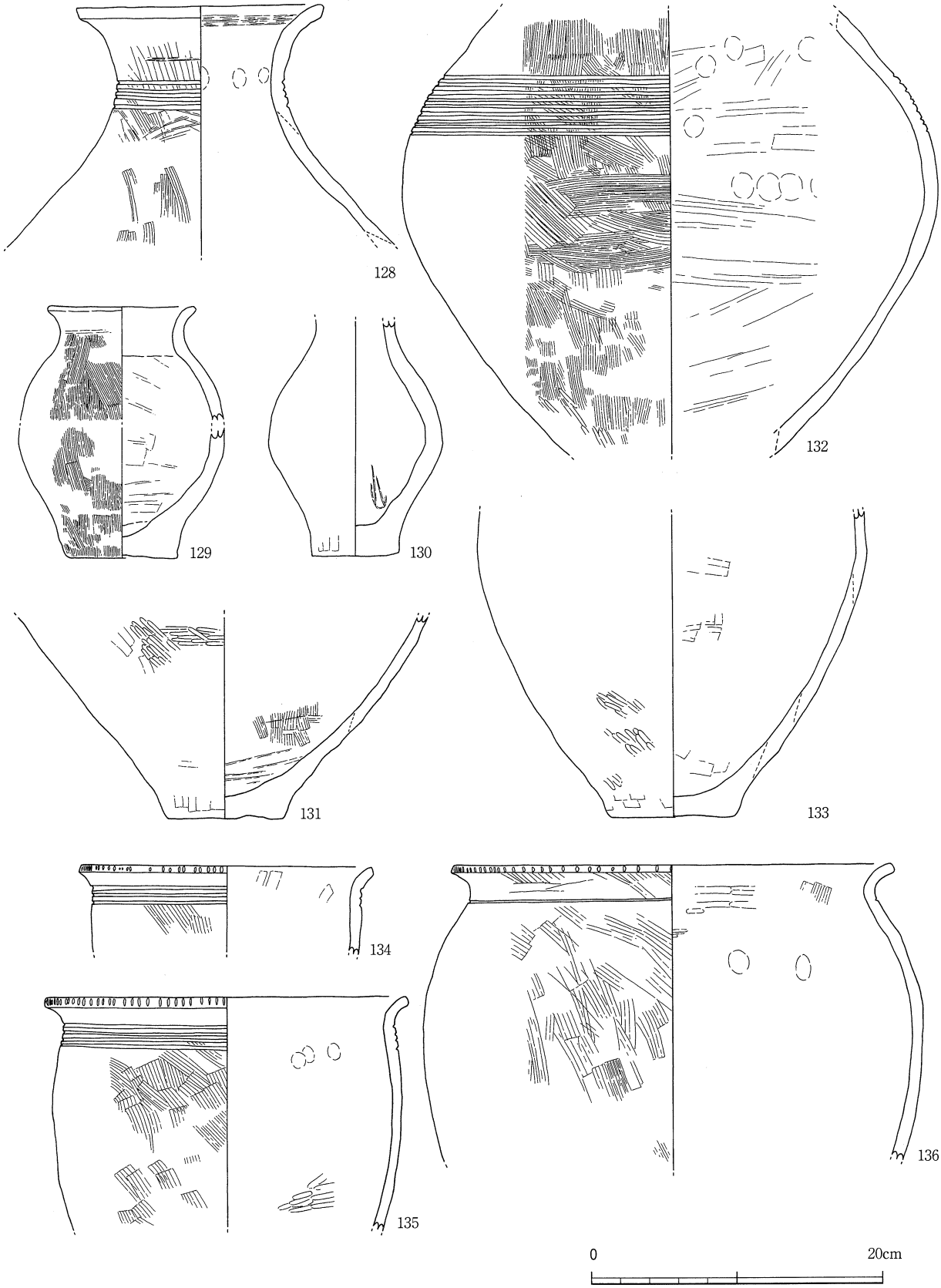
土坑308（109～114）出土土器



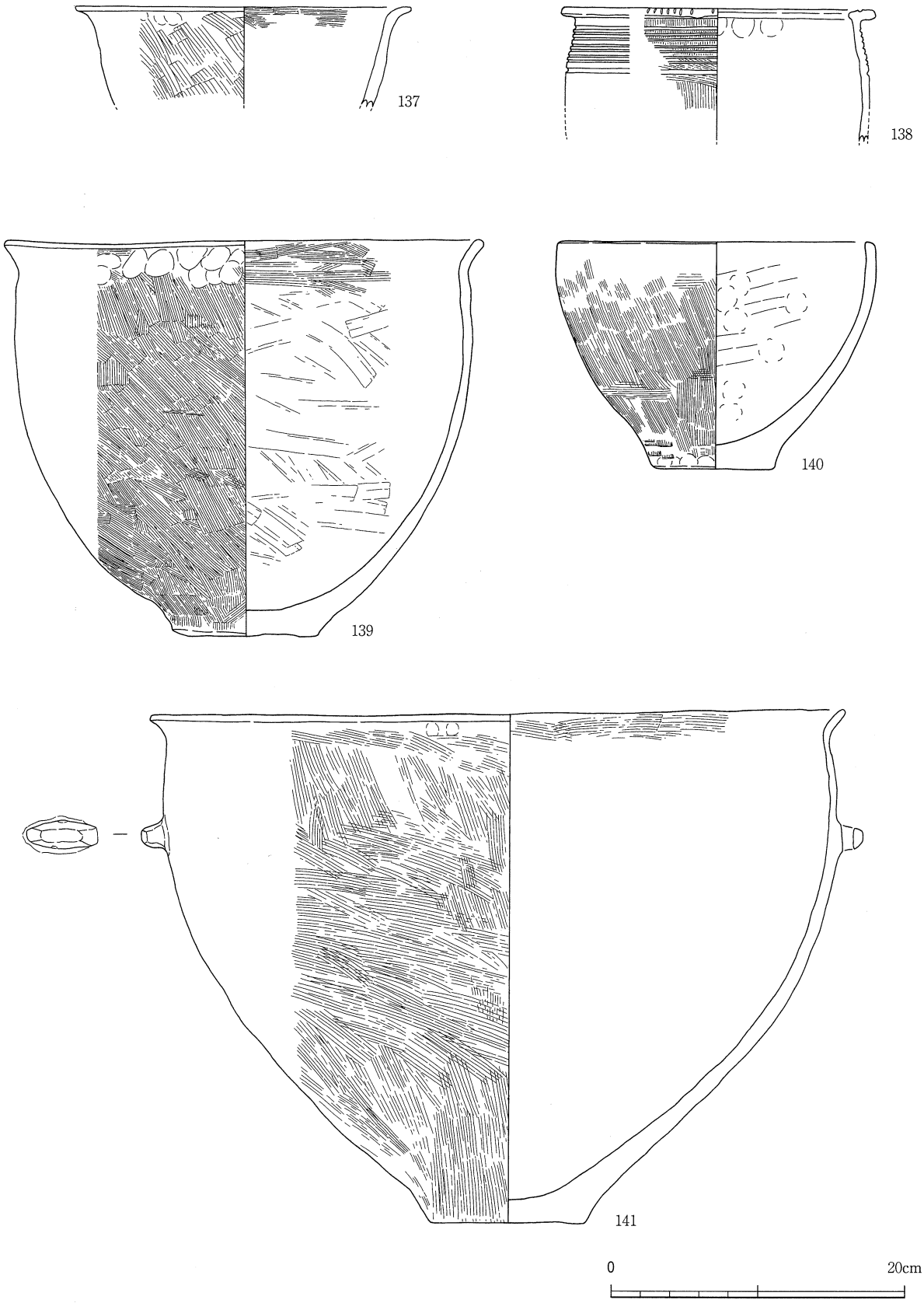
土坑308（115～119）、土坑309（120～123）出土土器



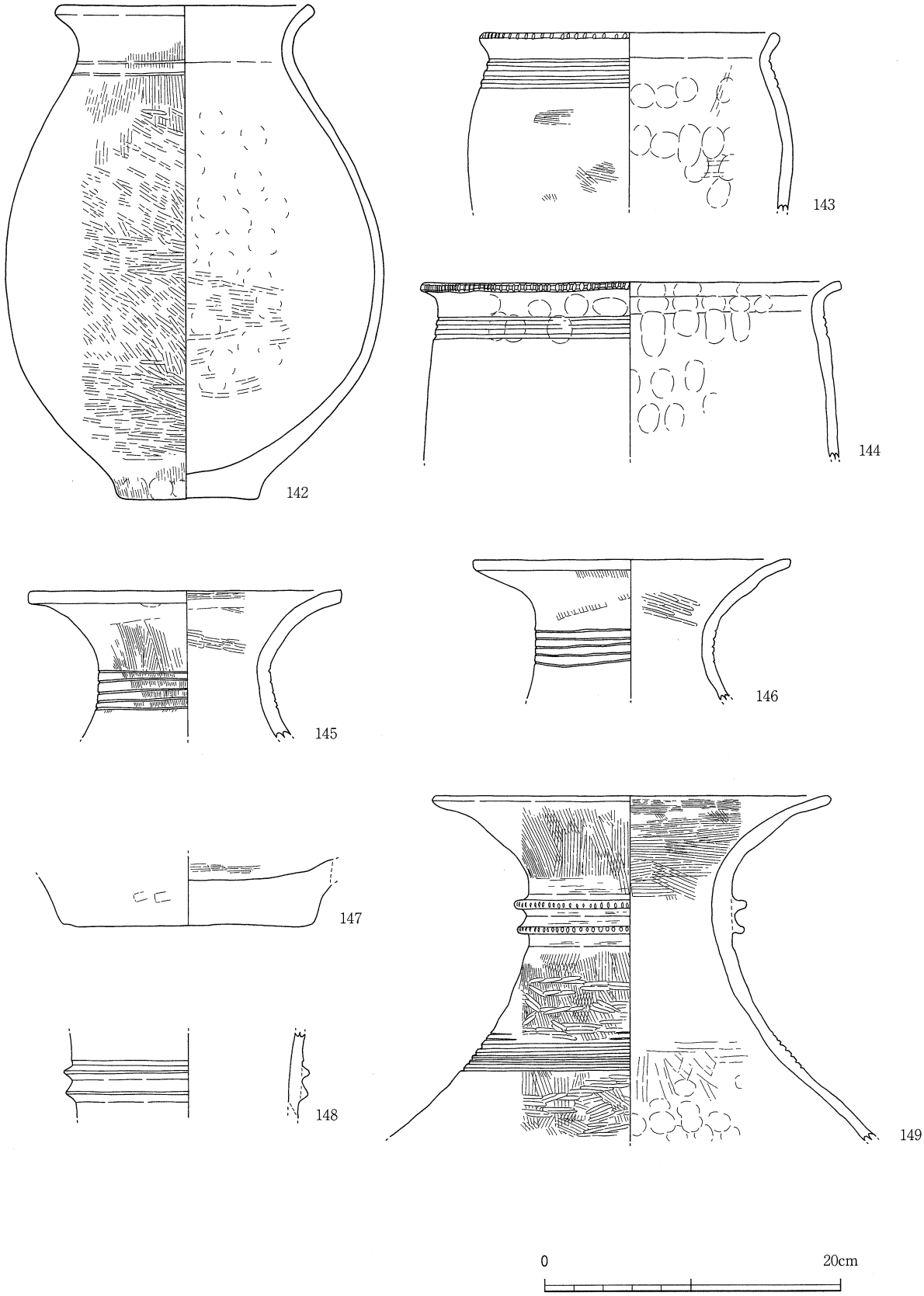
土坑310（124～127）出土土器



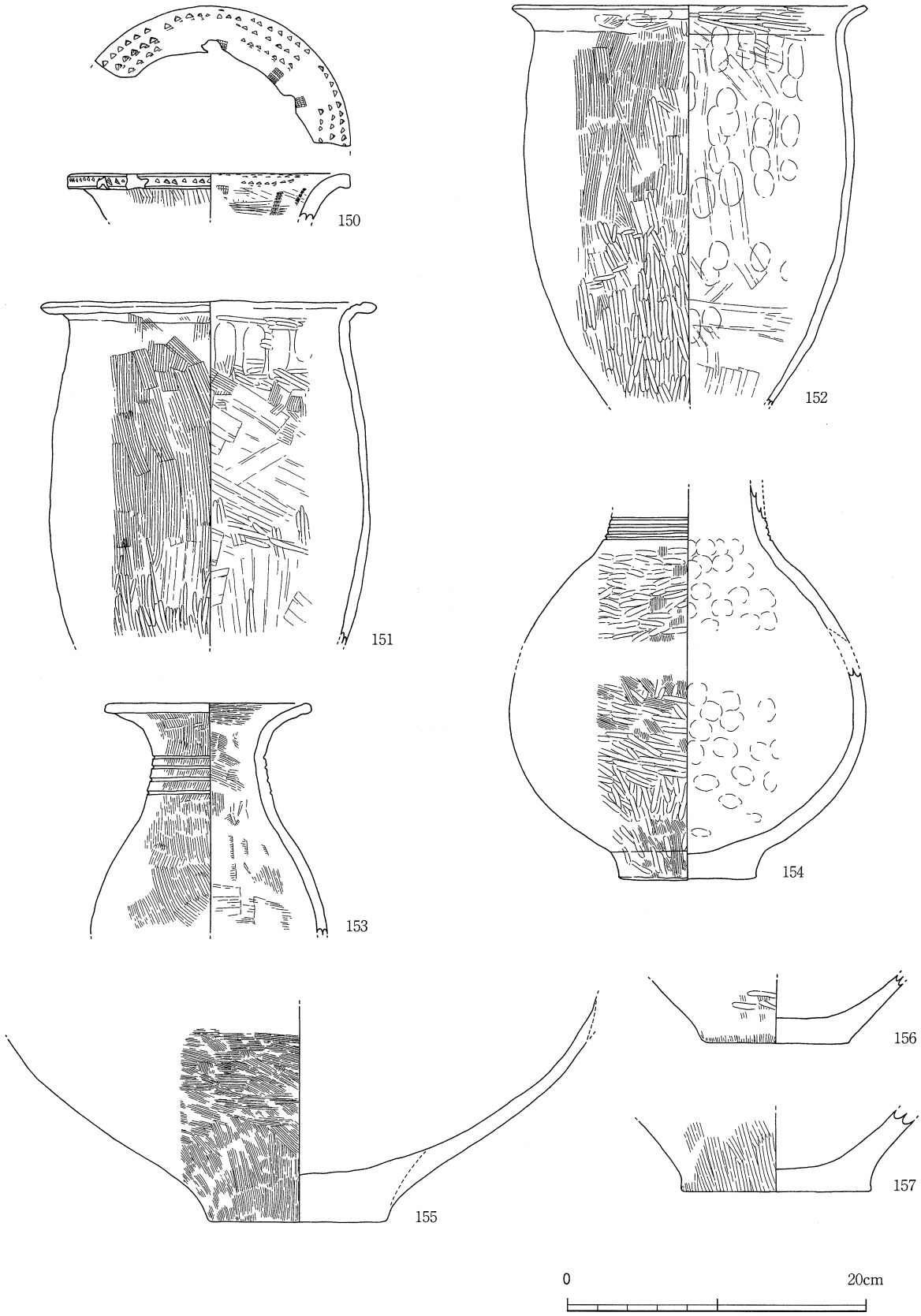
土坑310（128～136）出土土器



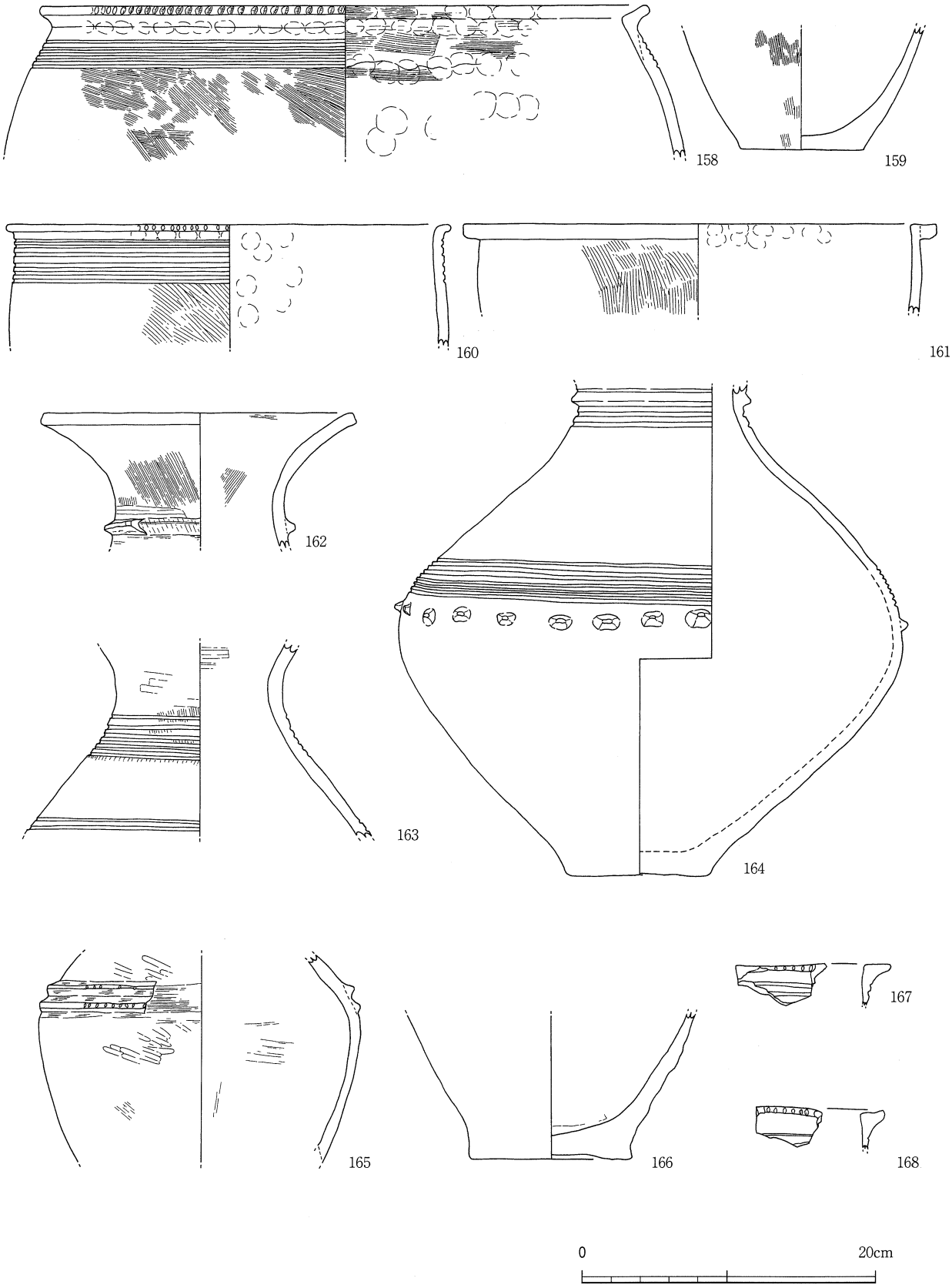
土坑310（137～139）、土坑311（140・141）出土土器



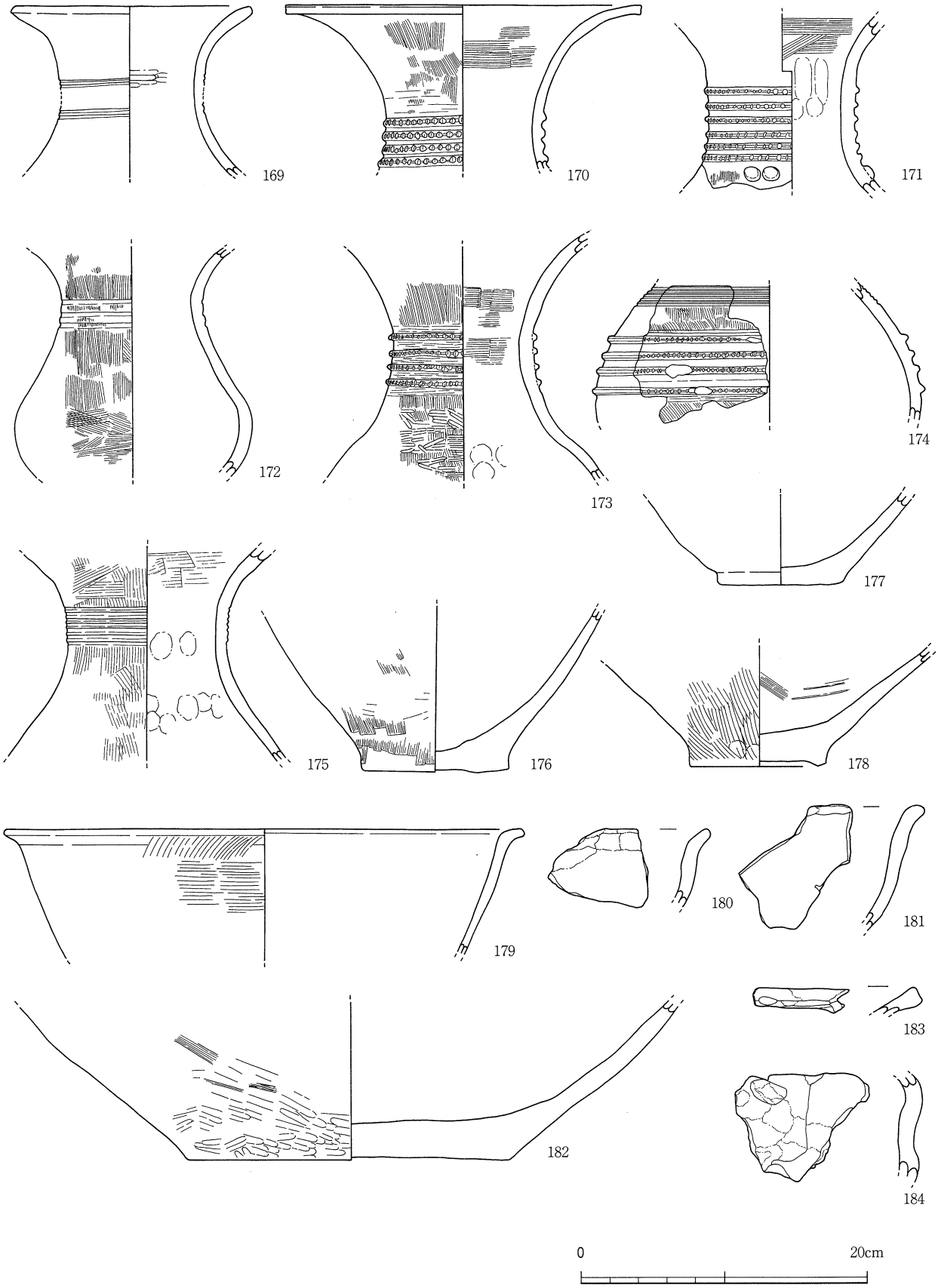
土坑312（142・143）、土坑313（144～147）、土坑314（148・149）出土土器



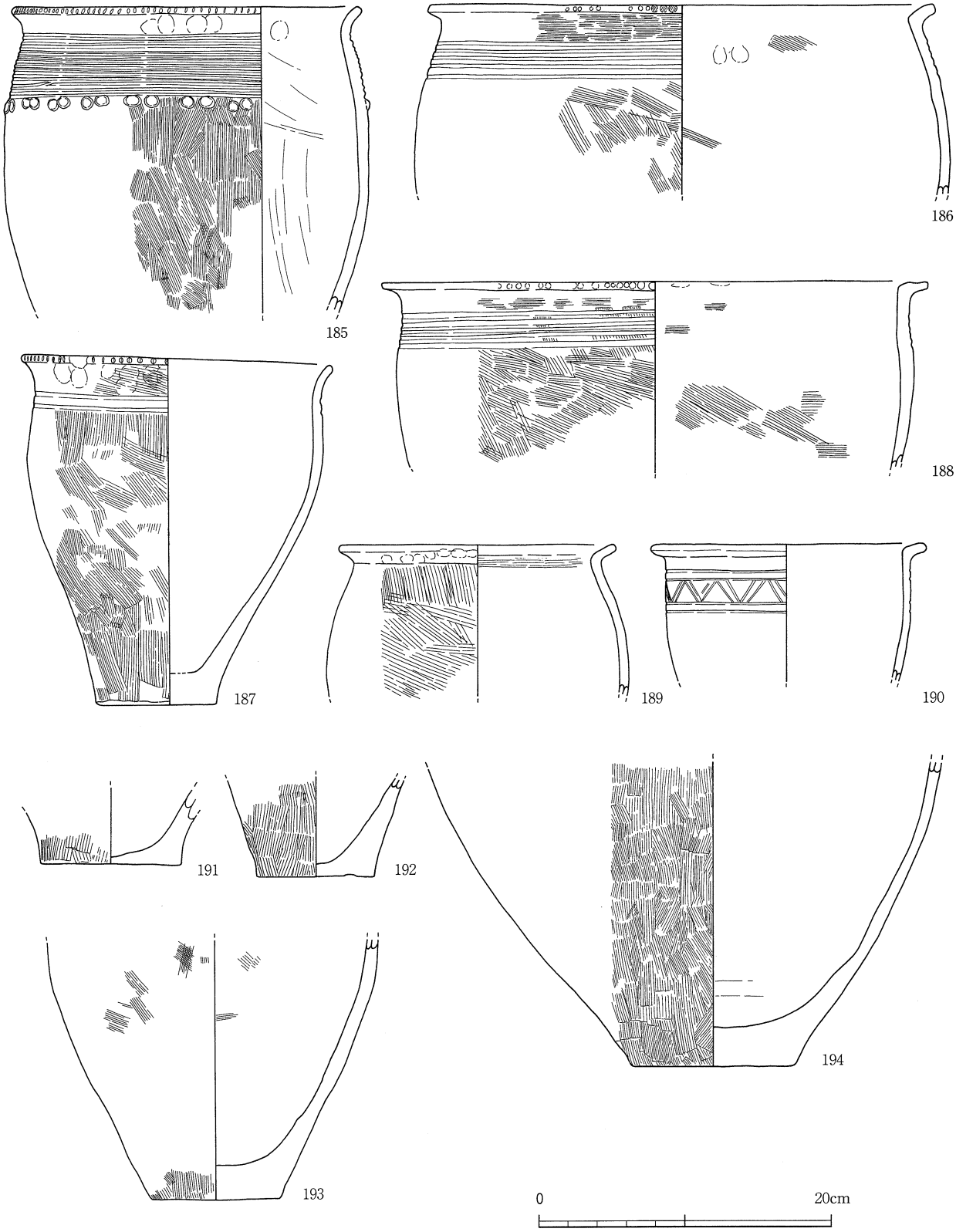
土坑 315（150～152）、土器だまり301（153～157）出土土器



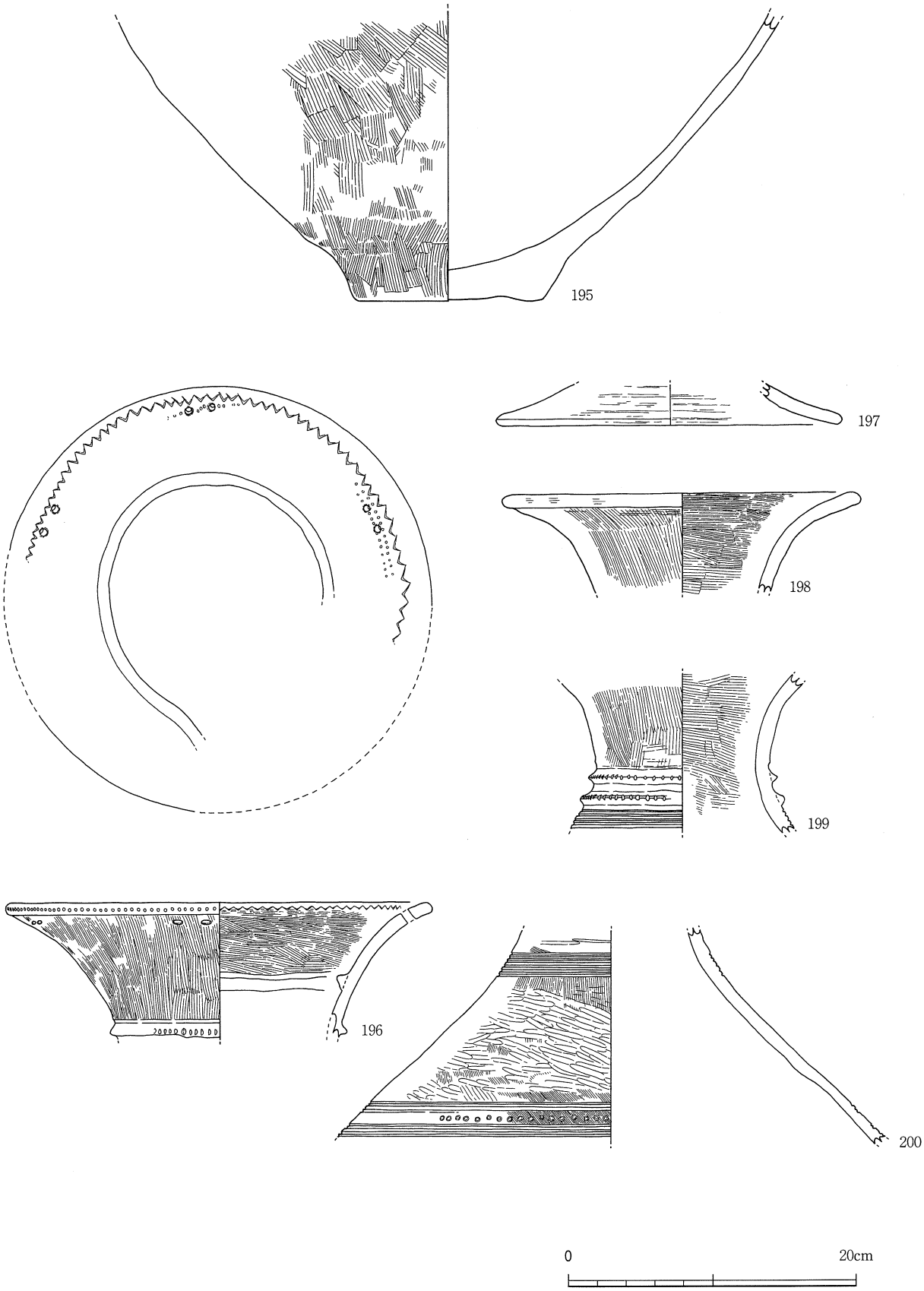
土器だまり301（158～161）、土器だまり302（162～168）出土土器



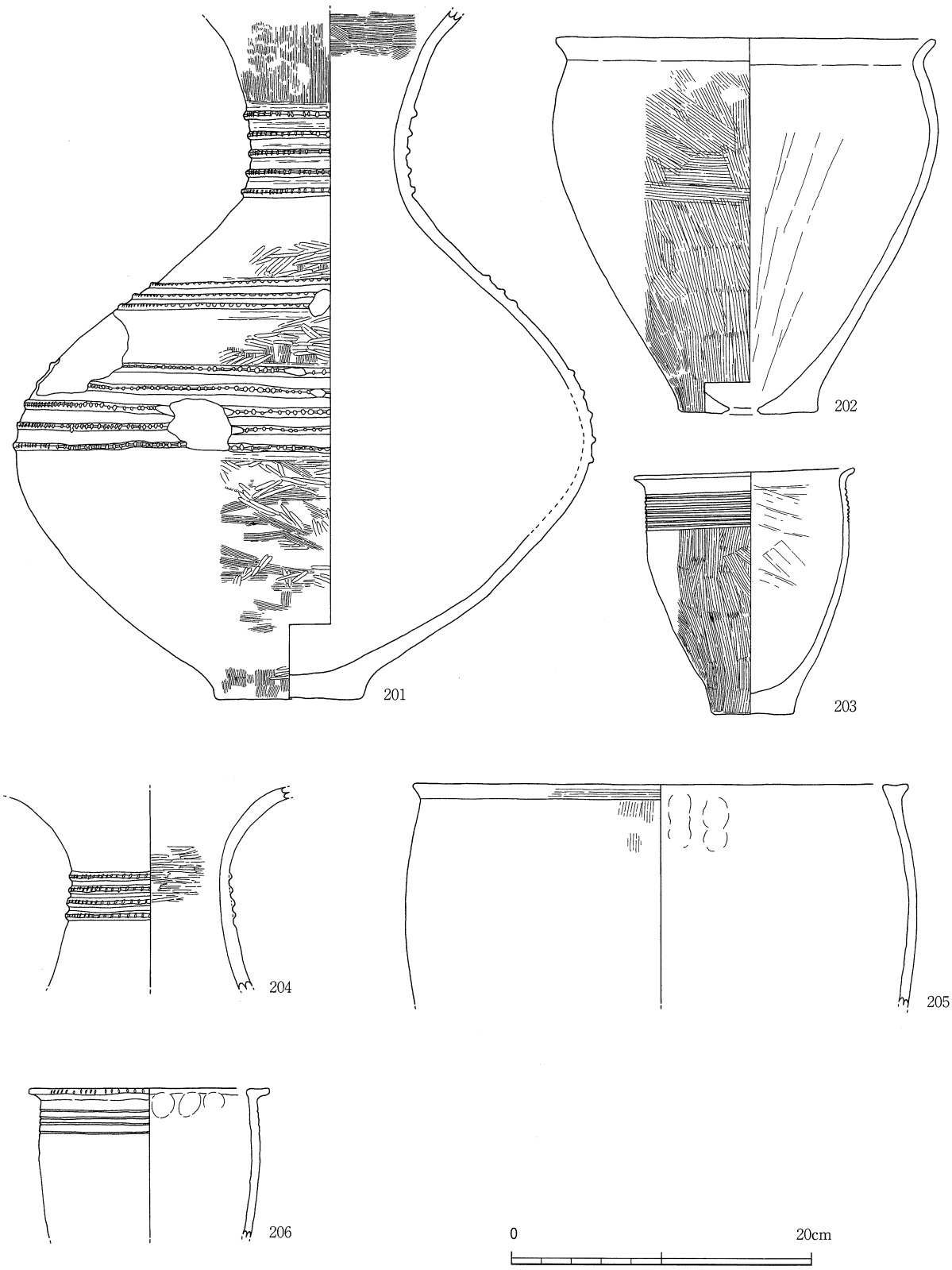
土器だまり303（169～184）出土土器



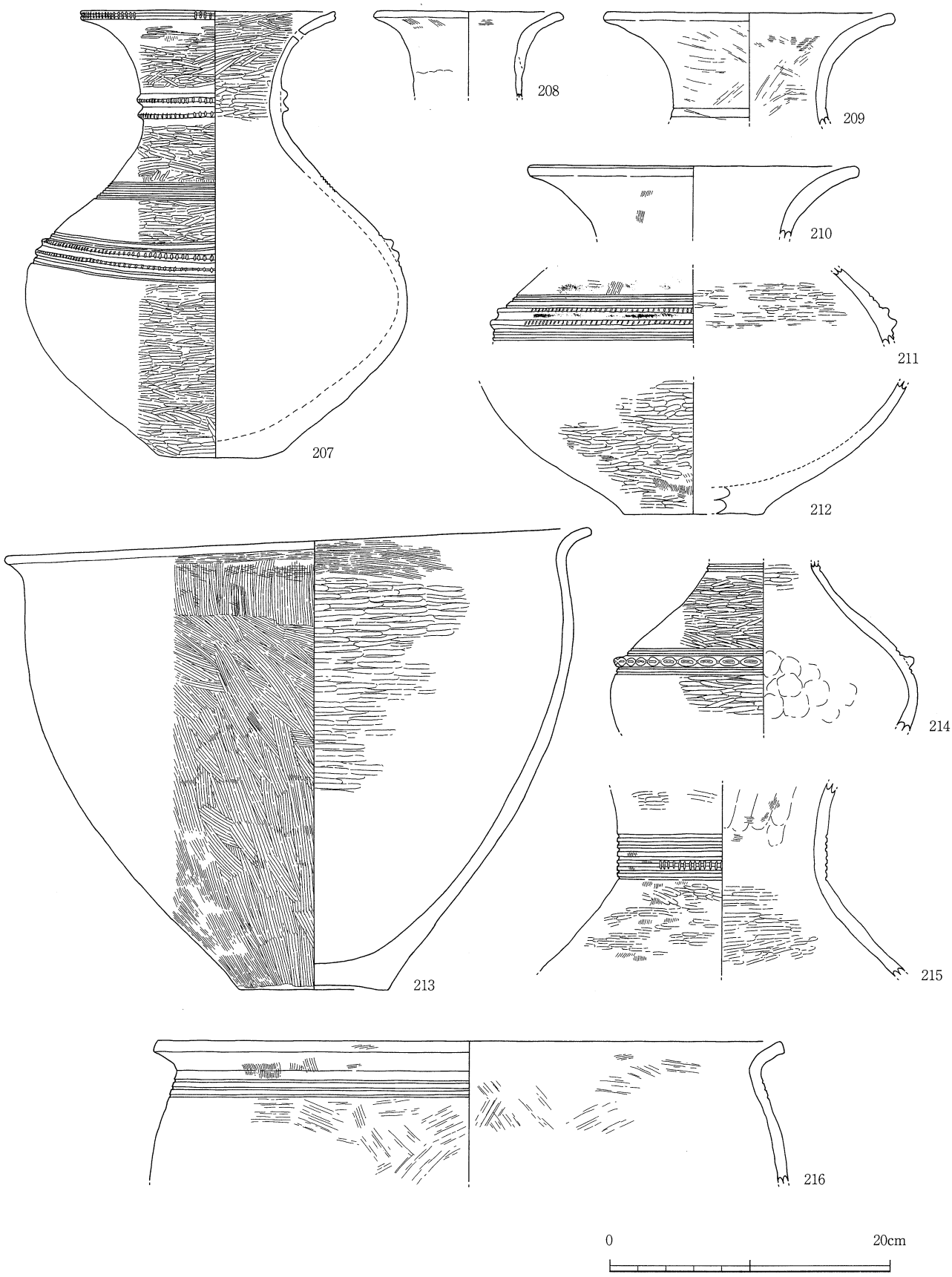
土器だまり303（185～194）出土土器



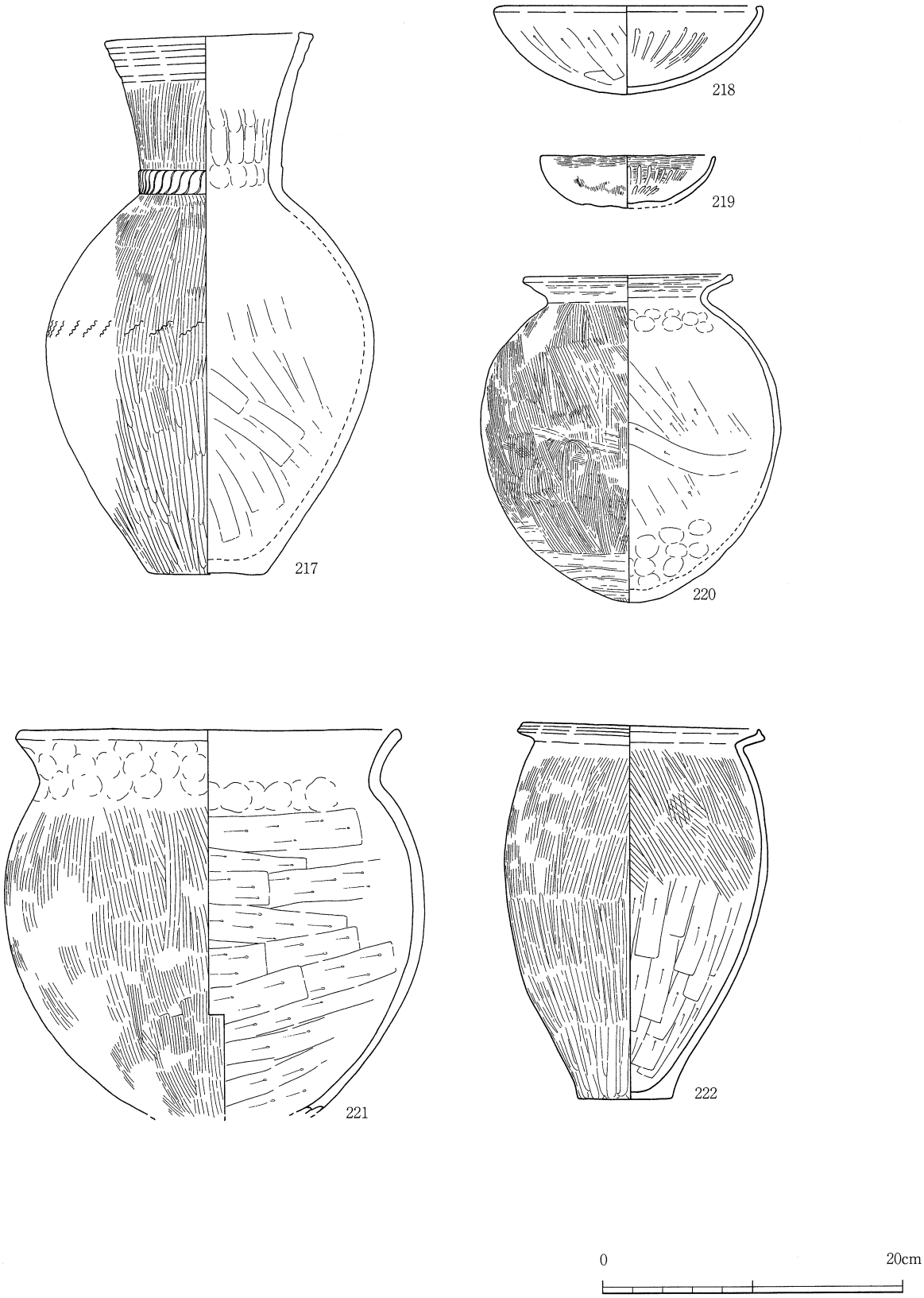
土器だまり303（195）、土器だまり304（196～200）出土土器



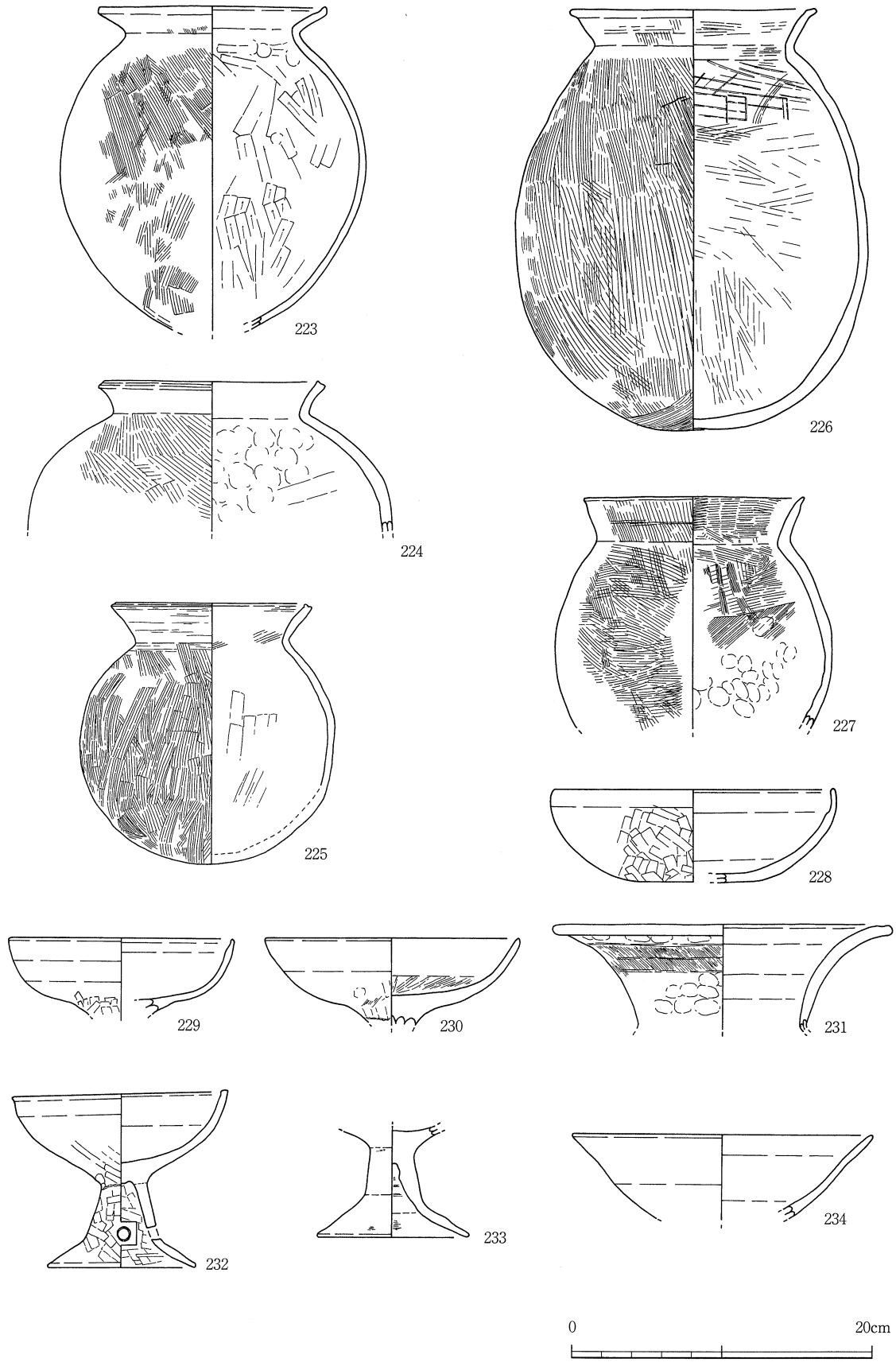
土器だまり305（201～206）出土土器



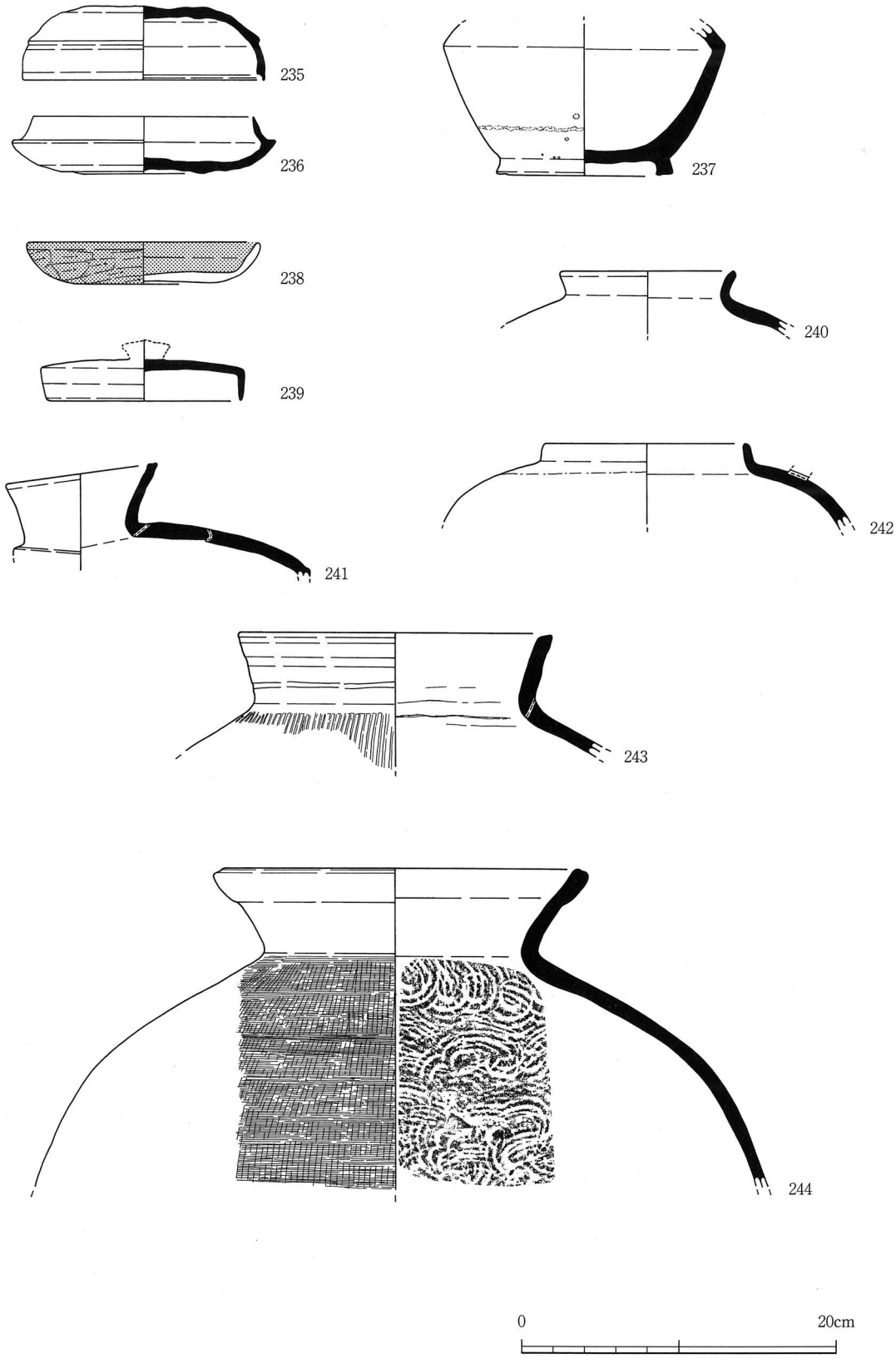
土器だまり306（207～216）出土土器



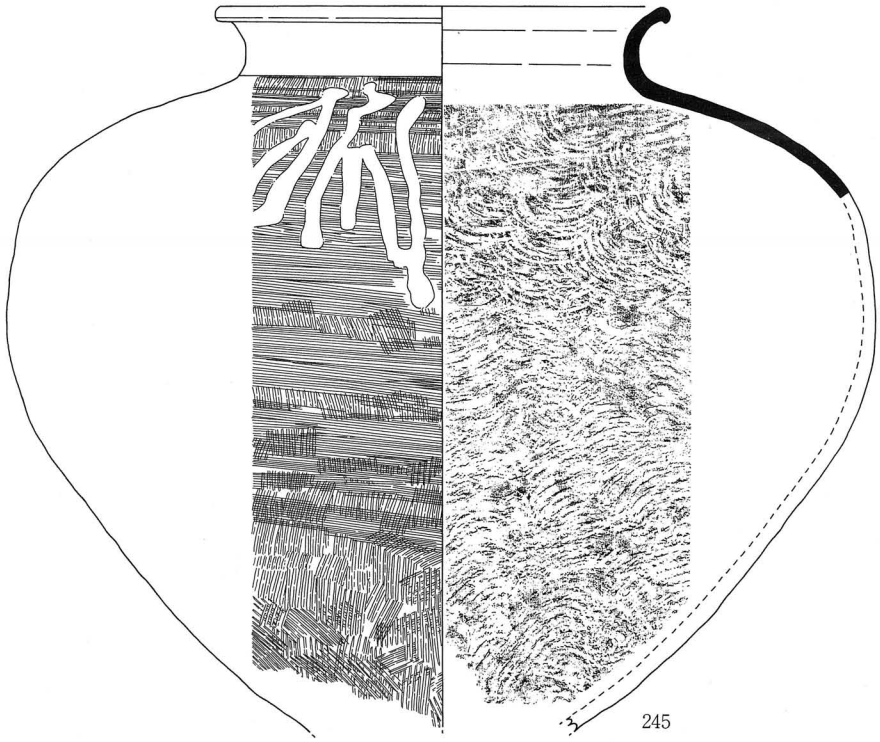
方形周溝墓201（217）、竪穴住居201（218・219）、井戸201（220）、井戸202（221・222）出土土器

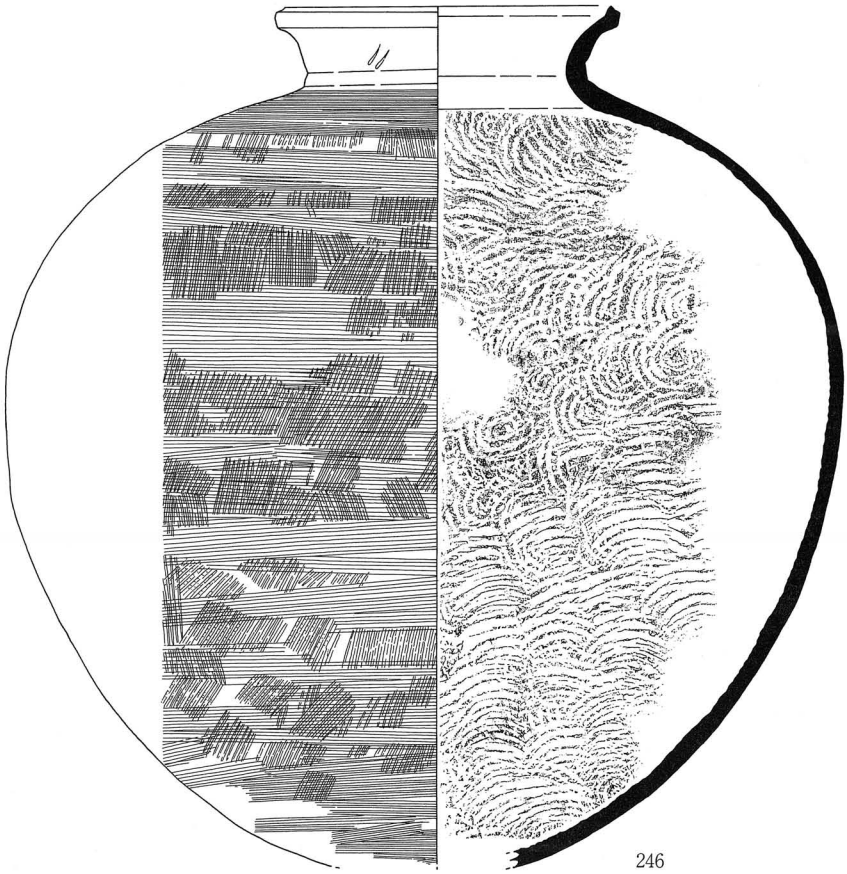


井戸203（223～234）出土土器

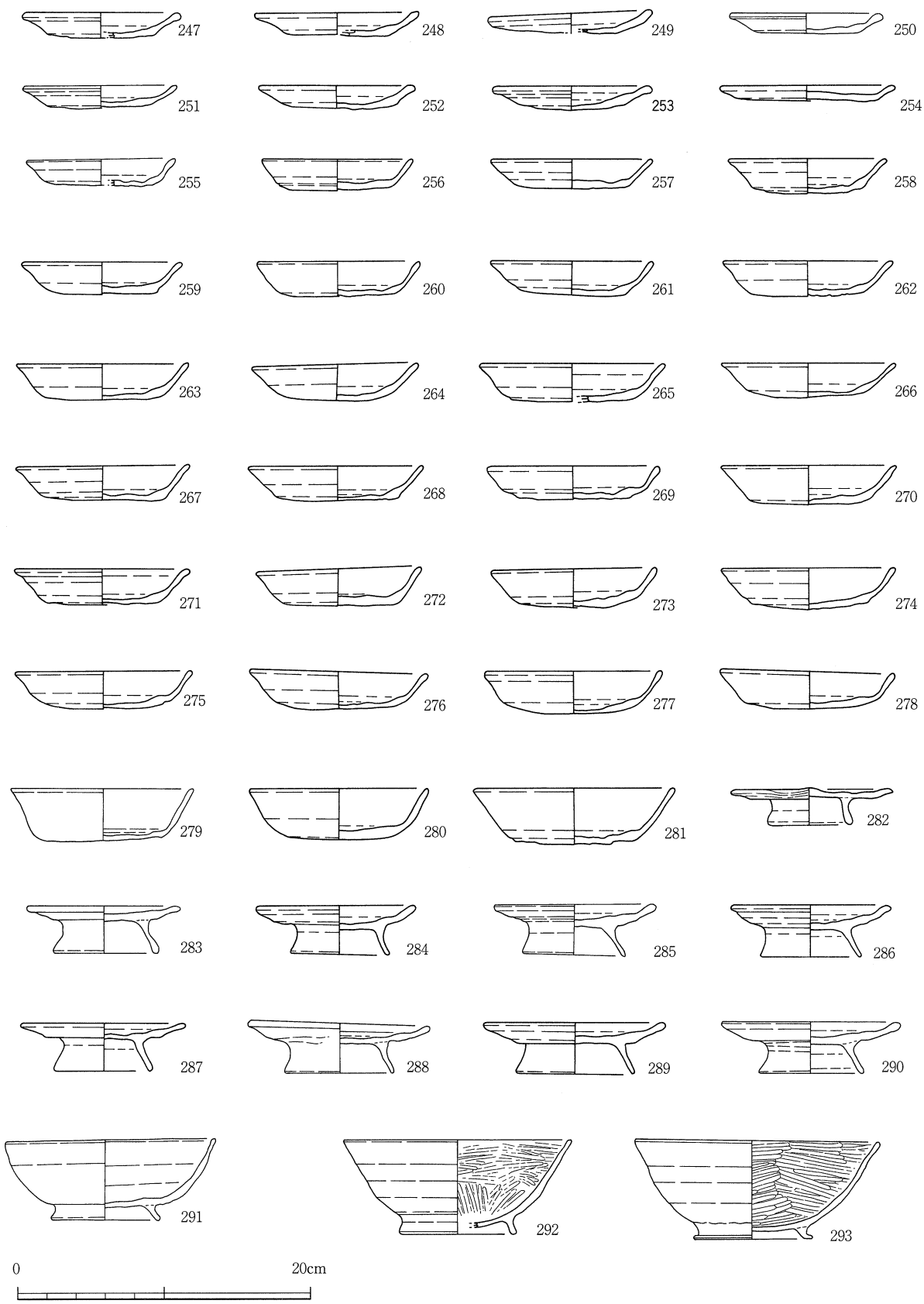


不明遺構201（235・236）、須恵器だまり201（237～244）出土土器

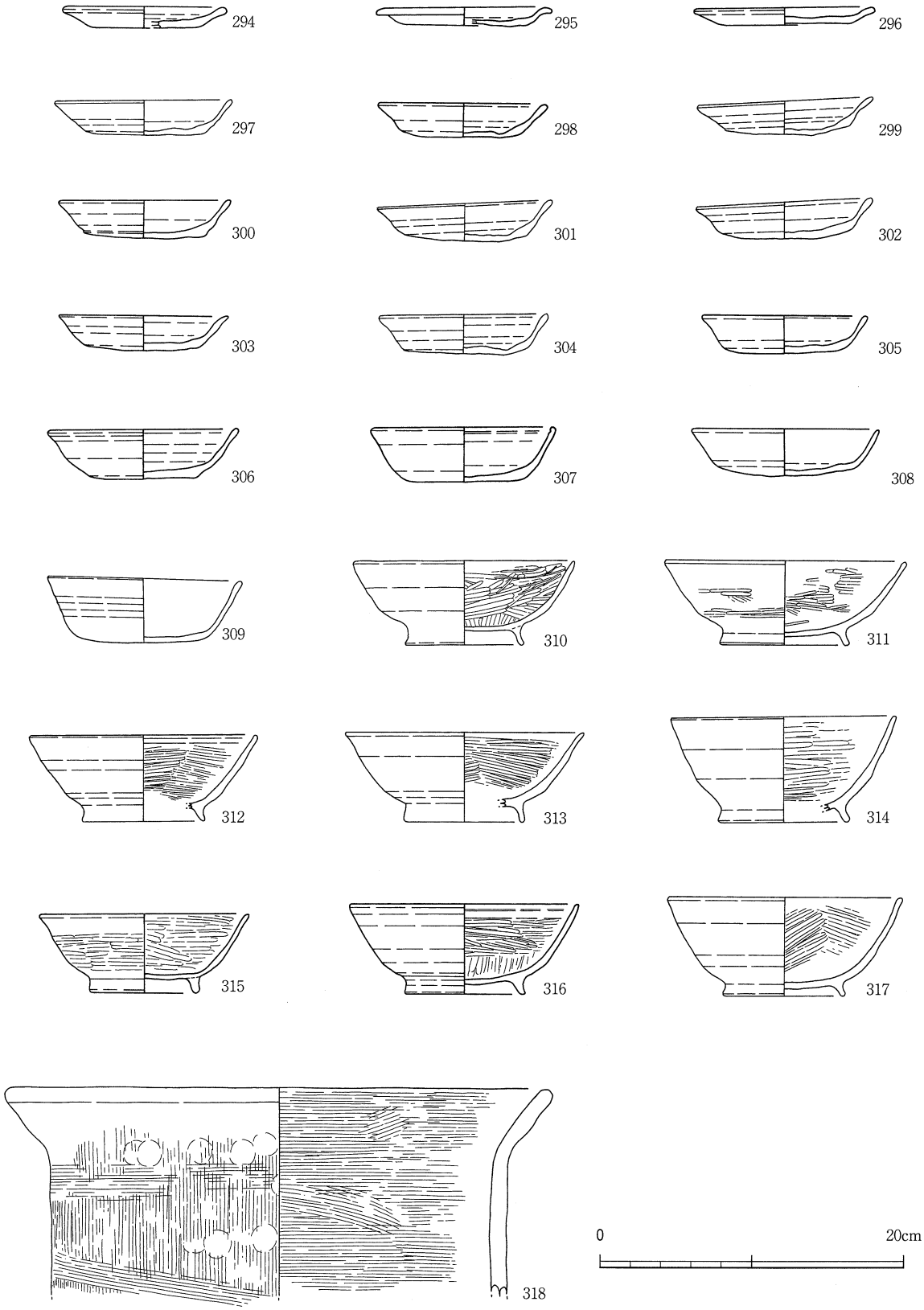




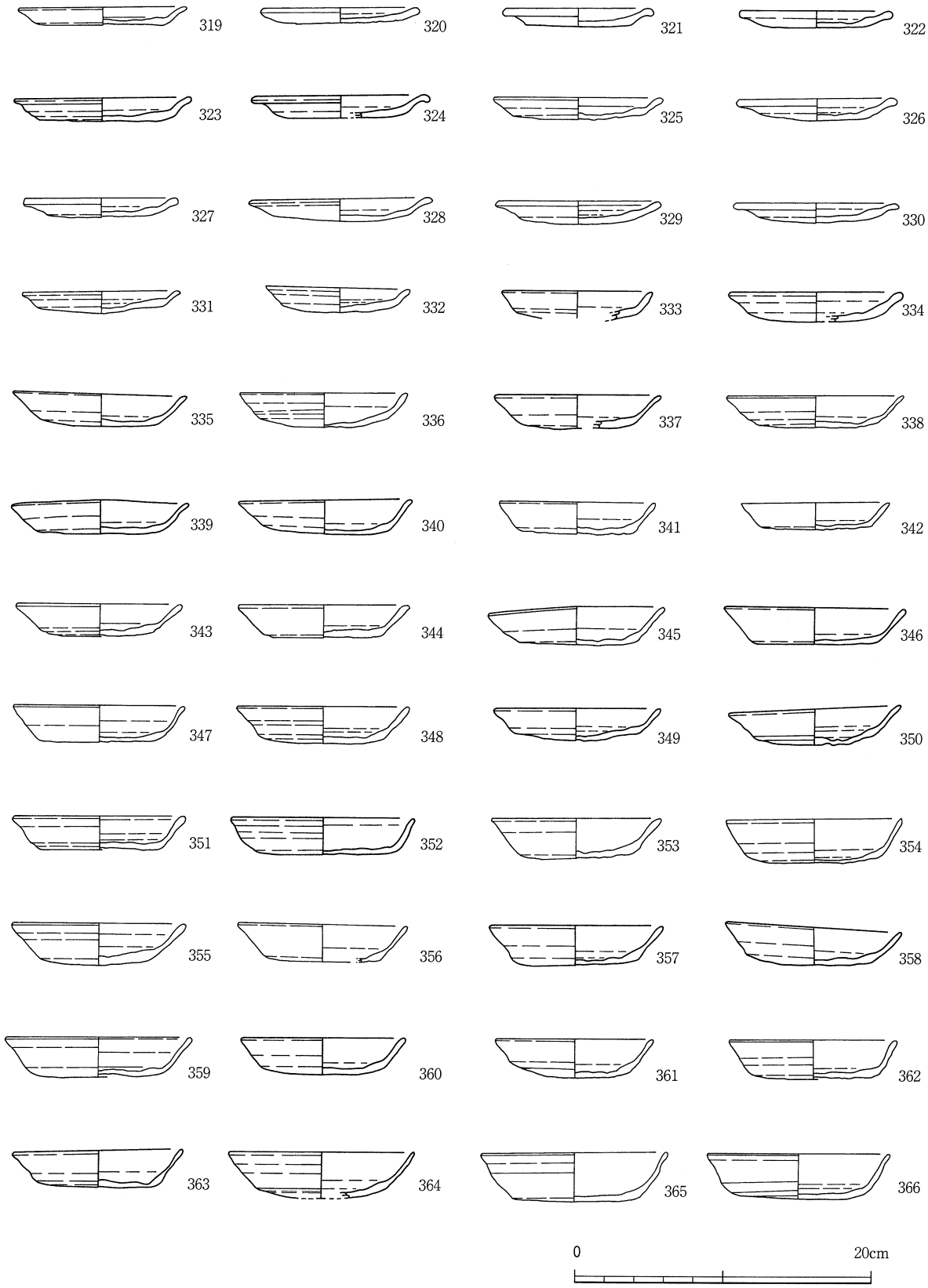
須恵器だまり201（245・246）出土土器



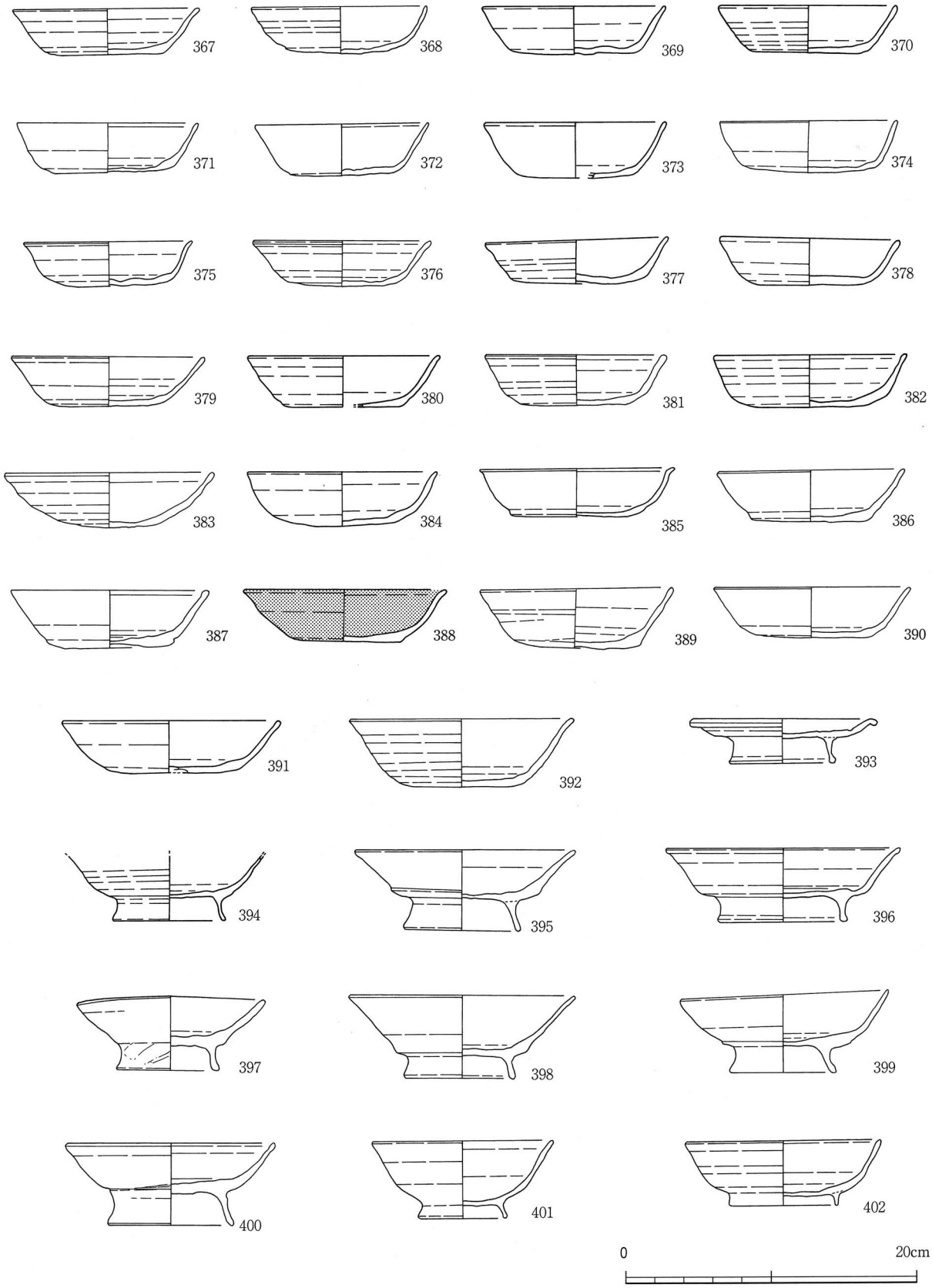
水路201土器だまり（247～293）出土土器



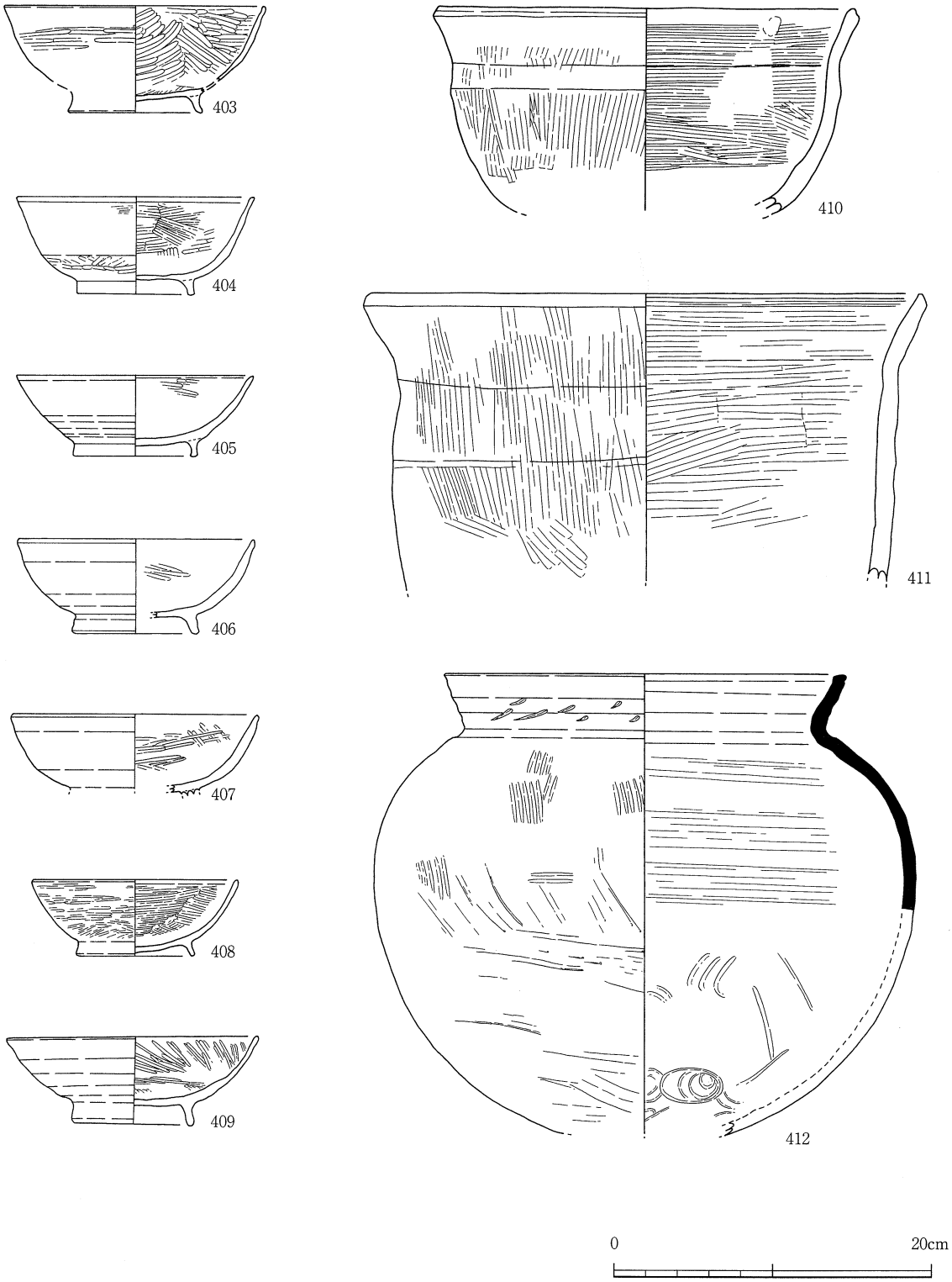
水路201貝層（294～318）出土土器



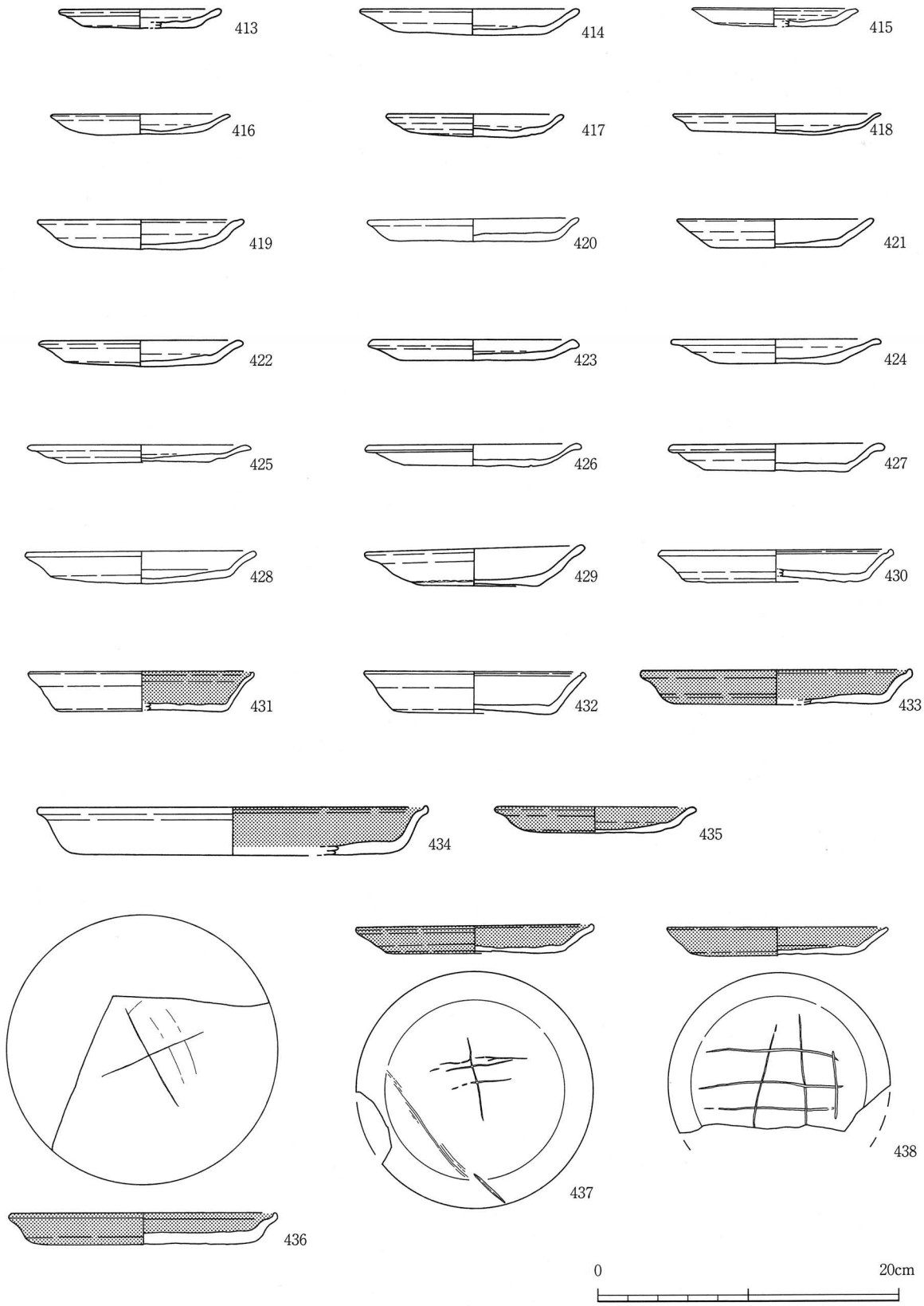
水路201上層（319～366）出土土器



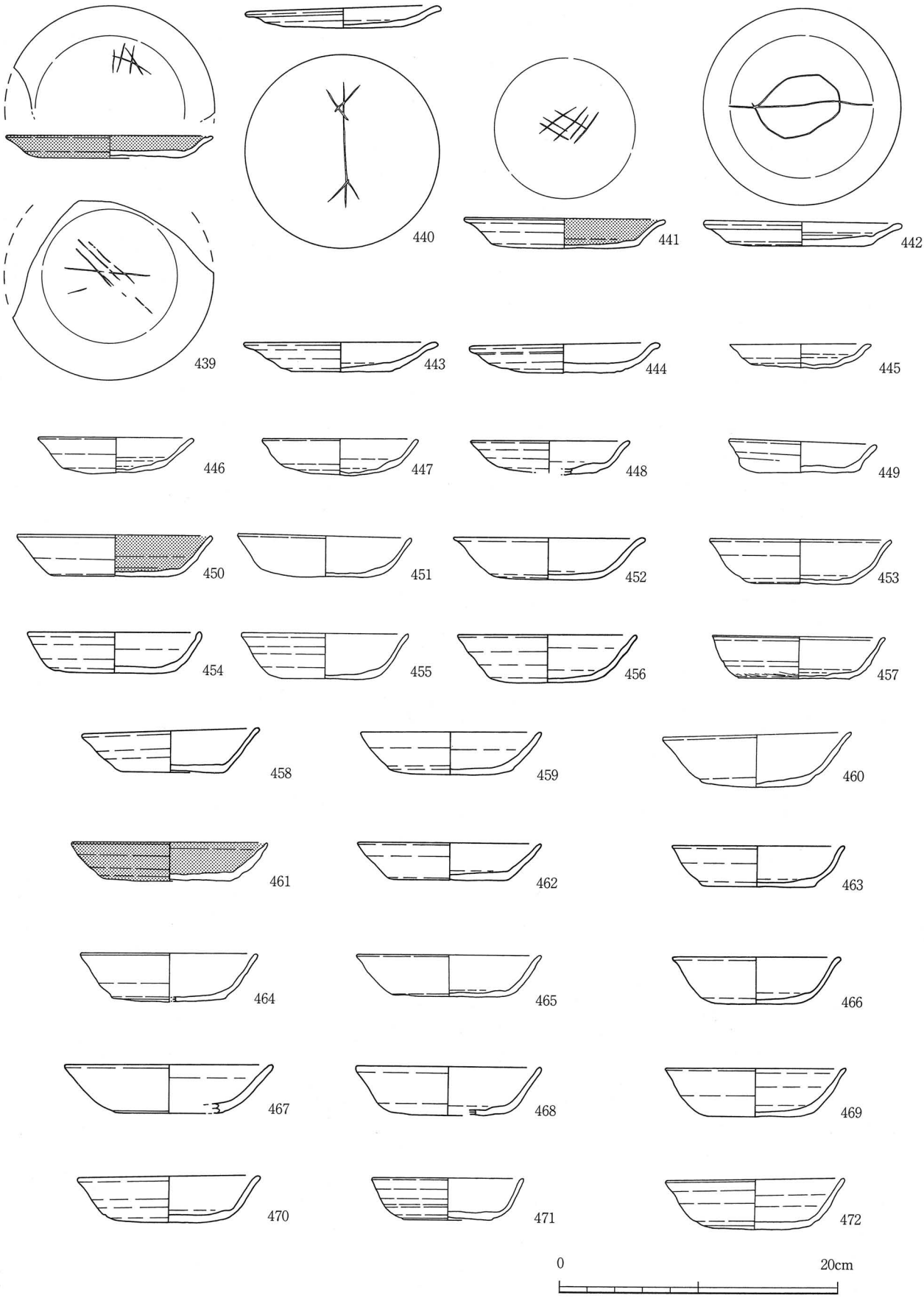
水路201上層（367～402）出土土器



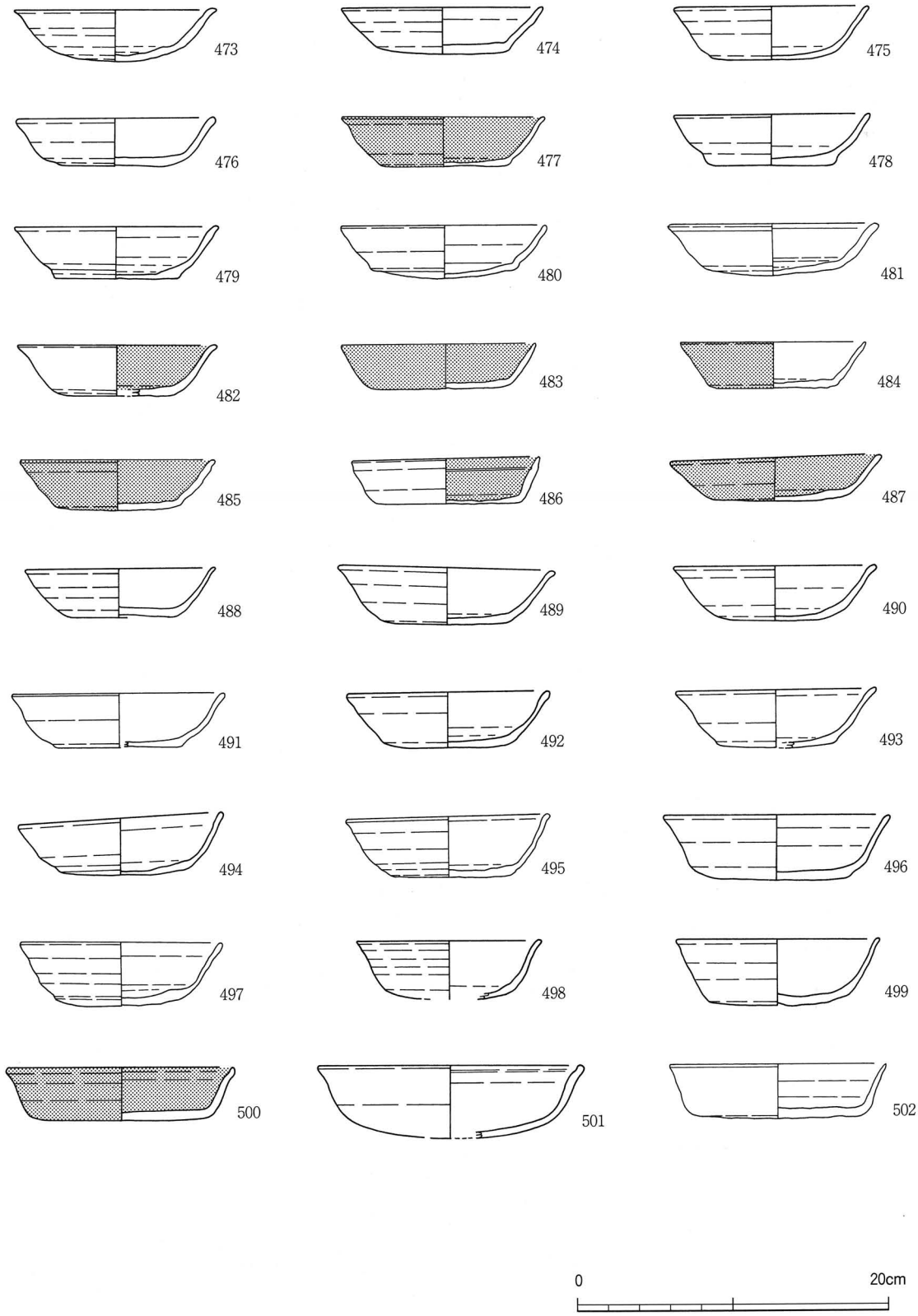
水路201上層（403～412）出土土器



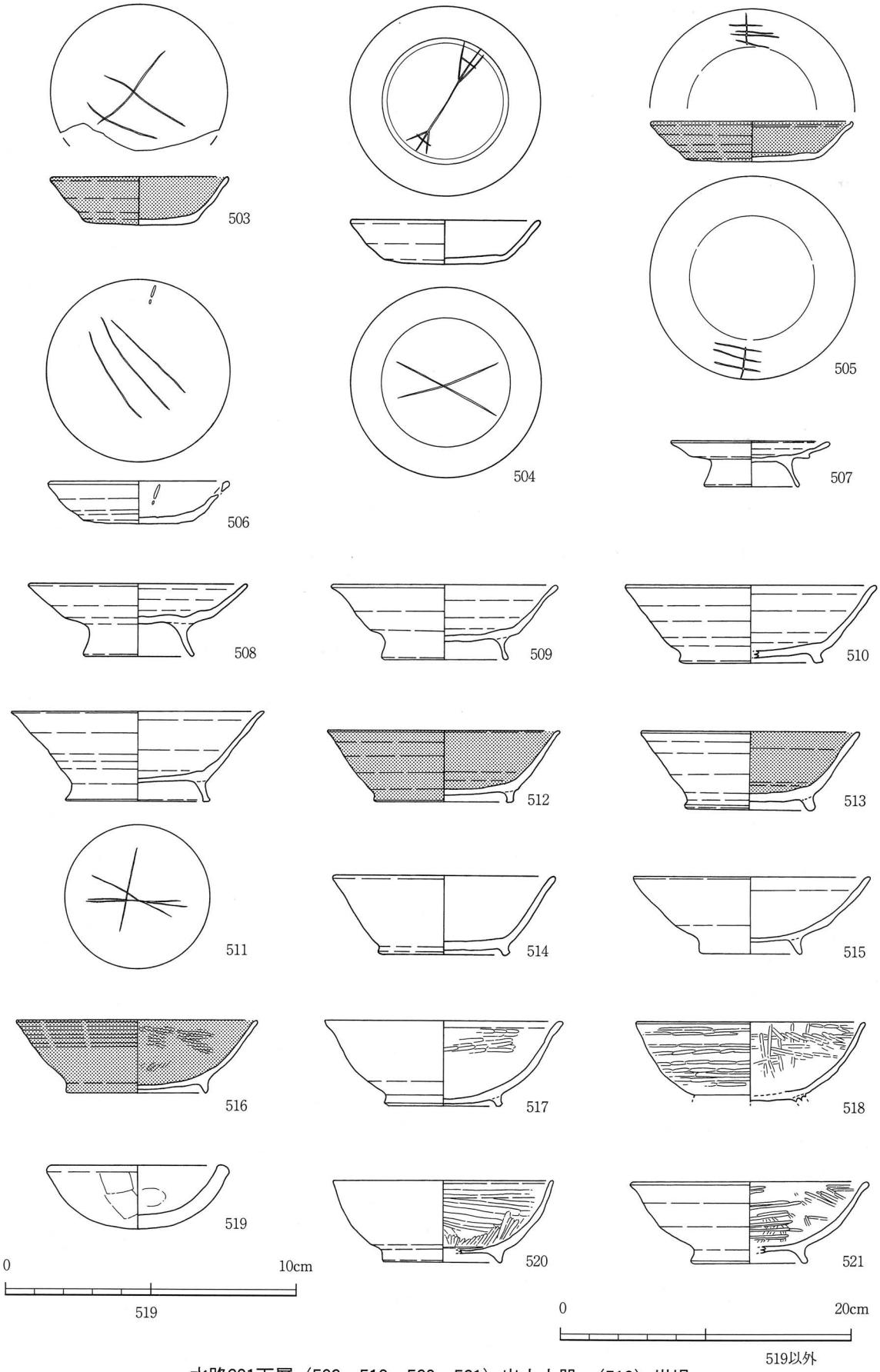
水路201下層（413～438）出土土器



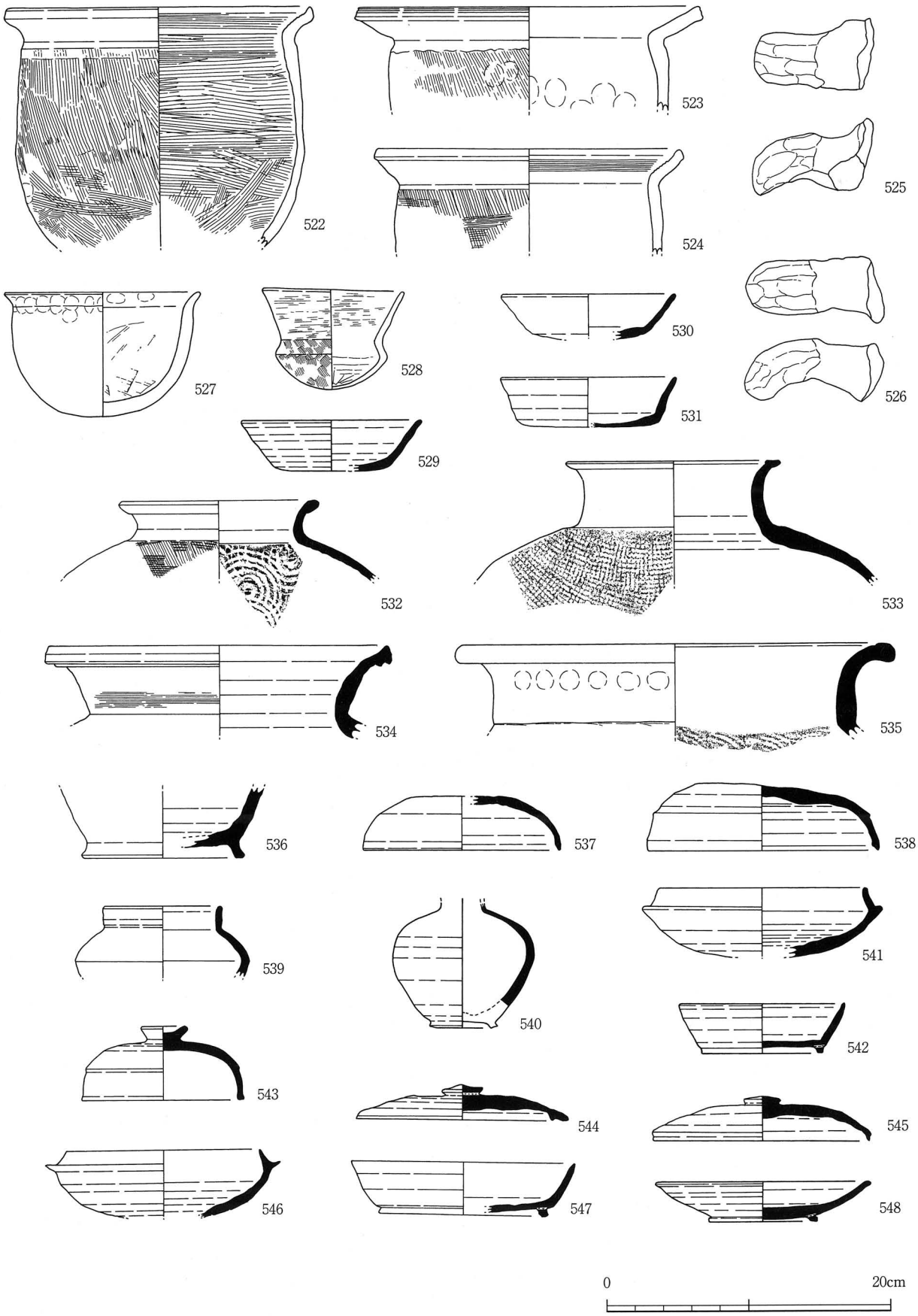
水路201下層（439～472）出土土器



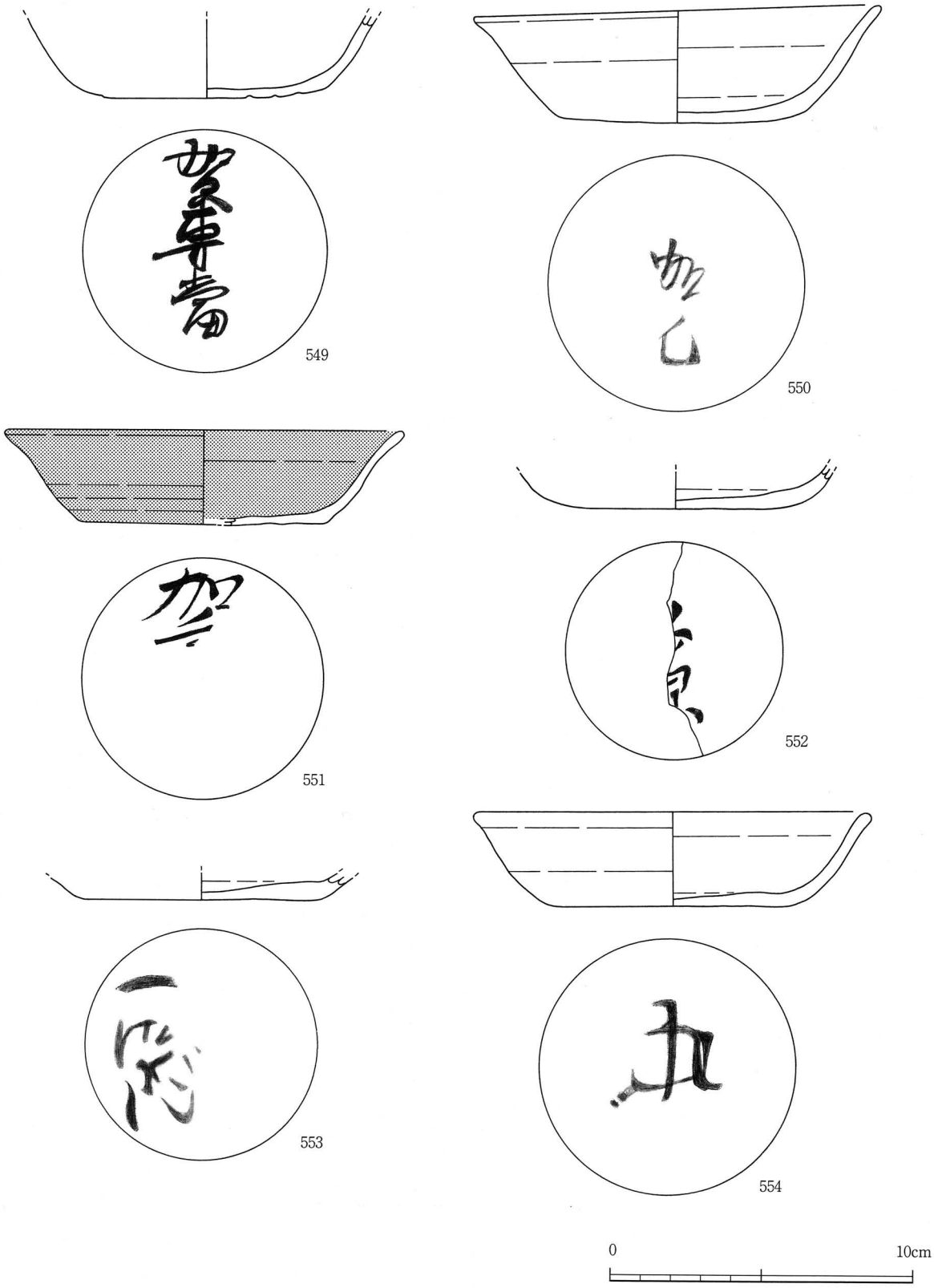
水路201下層（473～502）出土土器



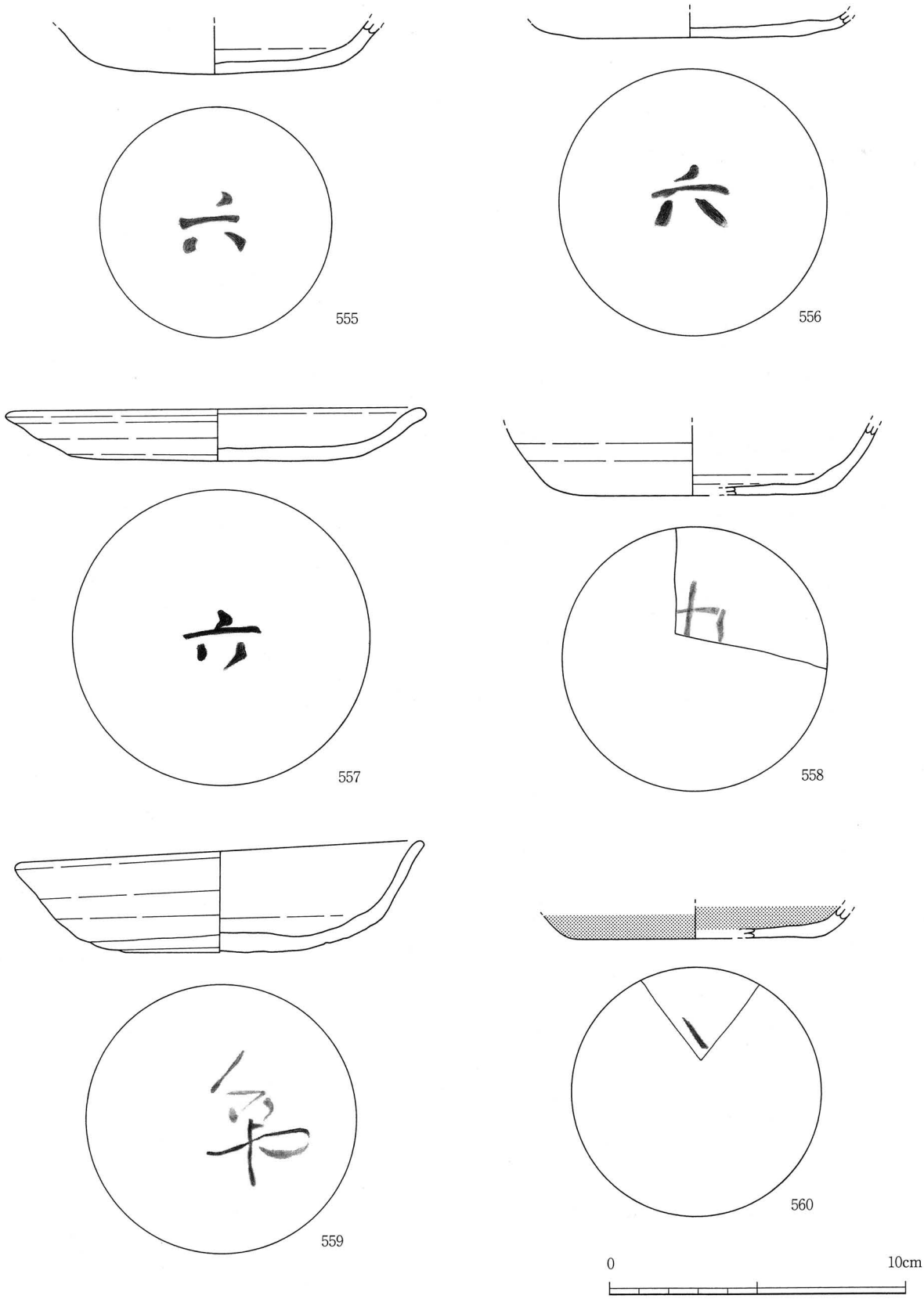
水路201下層（503～518・520・521）出土土器・（519）坩堝



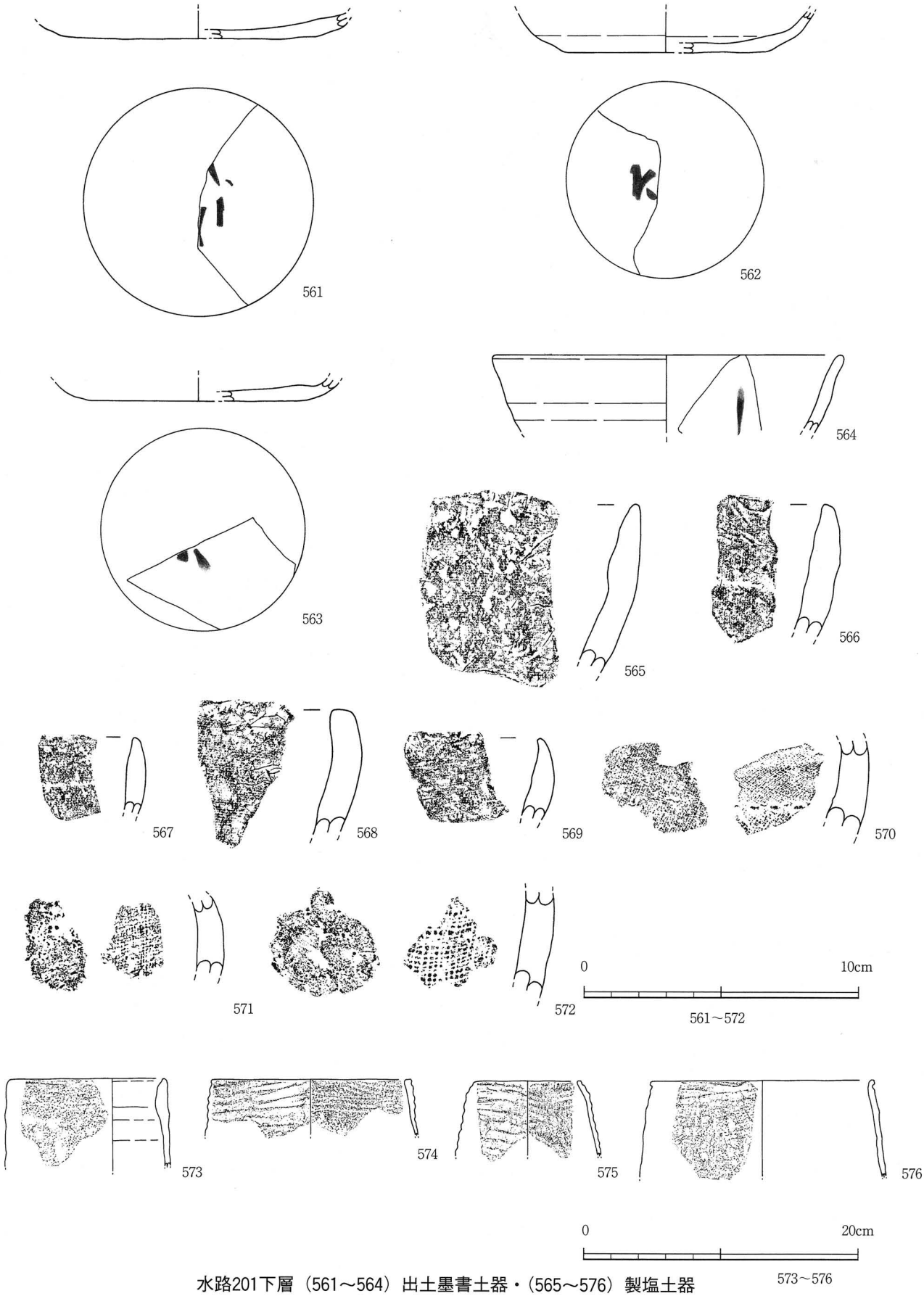
水路201下層（522～548）出土土器



水路201下層（549～554）出土墨書土器



水路201下層（555～560）出土墨書土器



水路201下層（561～564）出土墨書土器・（565～576）製塩土器